TENRA BAN-SHOW

天羅万象

ソースブック

TENRA BAN-SHOW SOURCE BOOK

TENRA BAN-SHOW

天羅万象 ソースブック

TENRA BAN-SHOW SOURCE BOOK

渡辺ヒロシ／井上純弌／天羅万象制作チーム

《天羅万象》の世界へようこそ。

この本を手にした君たちは、すでに『天羅万象ビジュアルブック』を読み、この世界の概要をつかんでいるだろう。本書はよりいっそう《天羅世界》を楽しむため資料集と追加ルールを兼ね備えたものだ。

本書の内容は、大きく3つに分けられている。

第1部「天羅戦国伝」では、天羅世界の一つの国の敗北と復活の物語を“天羅万象”のプレイを通じて描き出してある。

第2部「天羅創成」では、いわば《天羅世界》の創作ノートである。天羅世界を創造する過程はRPGマガジン誌上で逐次発表していたのだが、そこで使用したイラストやテキストは『ビジュアルブック』では残念ながらほとんど紹介できなかった。この機会に書き下ろしを加えて収録した。

そして、第3部「天羅万象サプリメント」では、新しい設定である《妖》とその作製ルール、そのほか天羅に関して寄せられた質問に対する回答集、正誤表、ルールサマリーの最新版を収録している。

さらに深く、さらに広く天羅世界を楽しむためにぜひ読んでいただきたい。

第1部 天羅戦国伝—天羅万象リプレイ 9
第2部 天羅創成 — 天羅万象資料 77
第3部 妖—天羅万象サプリメント 109

イラスト：小川雅史

天羅戦国伝

キャラクター紹介

（本文は9ページから）

HYPER ORIENTAL FANTASY

キャラクター名：虎堂須波／地皇

性別：男

年齢：12

アーキタイプ：ヨロイ乗り

プレイヤー名：MEGANE

活力　霊力　気合　業　宿業

そはいかなるものか？（因縁・過去を記入せよ）

所持品

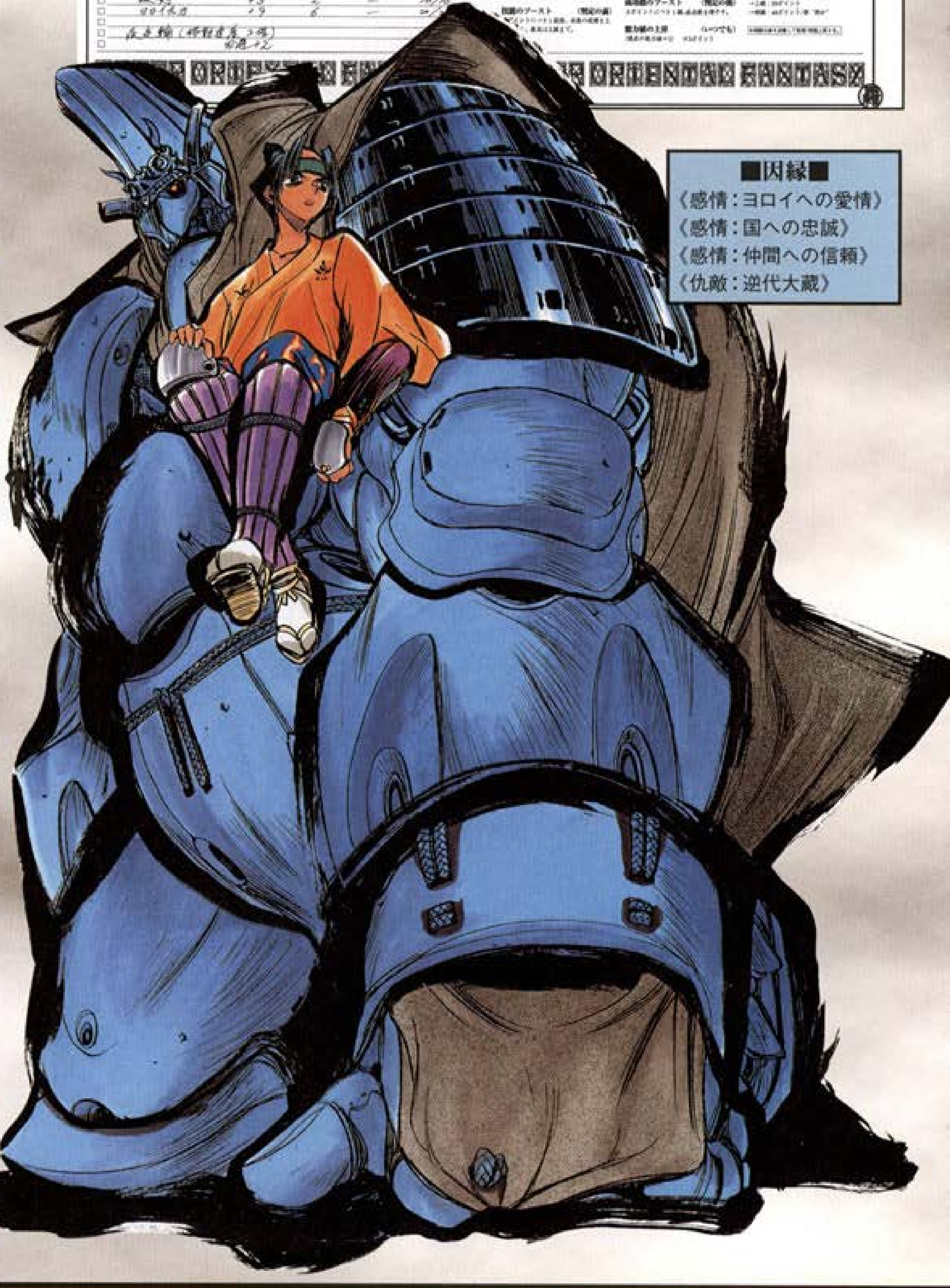
メモ

気合の使用法

虎堂須波

SUNAMI

ヨロイ乗り



■因縁■

《感情：ヨロイへの愛情》
《感情：国への忠誠》
《感情：仲間への信頼》
《仇敵：逆代大蔵》

亡国のヨロイ乗り。ヨロイ『地皇』を手に入れ、虎堂家再興を胸に旅立つが……？
「い、今はまだ無理かもしれませんけど、いつか必ず、それが成し遂げられるほどに強くなってみせます！
だから……だから！」

HYPER ORIENTAL FANTASY

そはいかなるものか？（因縁・過去を記入せよ）

活力　霊力　気合　業　宿業

所持品

気合の使用法

深影

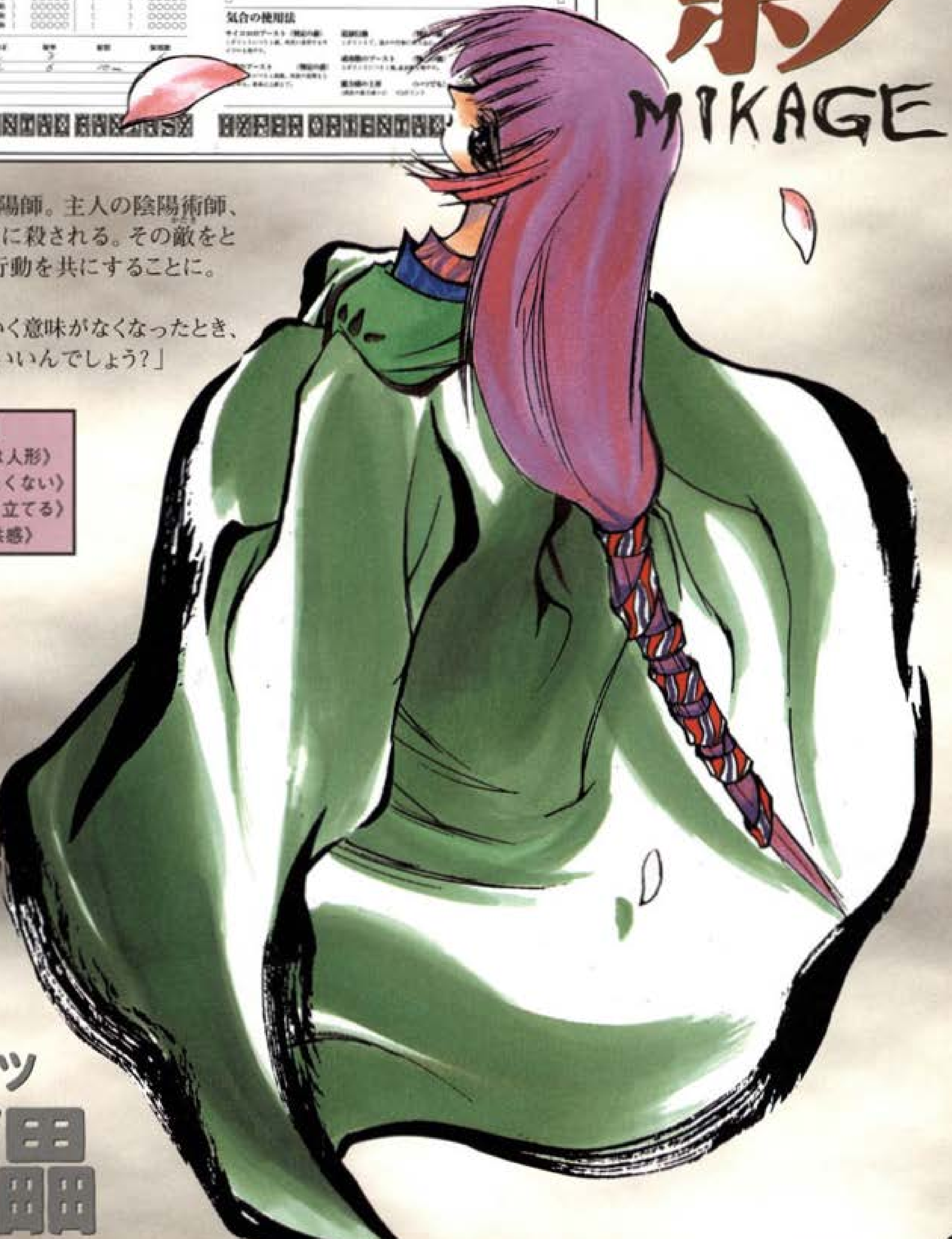
MIKAGE

傀儡にして陰陽師。主人の陰陽術師、深神香弦を逆代に殺される。その敵をとるため、須波と行動を共にすることに。

「………生きていく意味がなくなったとき、人はどうすればいいんでしょう？」

■因縁■

《その他：わたしは人形》
《感情：誰も失いたくない》
《目的：存在の証を立てる》
《感情：須波への共感》



クグツ
傀儡

■因縁■
《感情：弱いものへの嫌悪》
《不幸：一番大事なものの死》
《仇敵：斬鬼丸》

強さを求めるサムライ。須波のお家再興に手を貸す。女と酒が大好き。
「見ろよ！　この町、この炎を！　お前ェの弱さが、お前ェの迷いが呼んだ炎だ。お前ェの弱さはまわりのヤツを不幸にするのさ！」

サムライ
烈堂
RETSUDO

雷螺

RAIRA

ヨロイ狩り

ヨロイ狩りにして、元ヨロイ乗り。須波が気になるのは、昔の自分に重なるから？

「ウチは……まわりのせいで、無理矢理大人にされたんや。だから……だから、須波には同じ思いはしてほしくない。だから……！」

■因縁■

《不幸：ヨロイを失ったときに起こったこと》
《感情：自分が無用の存在だと感じる》
《感情：烈堂への興味》

天羅万象

アーキタイプ解説
ARCHETYPES

《天羅》の魅力は何といっても個性的なアーキタイプをどう演じて（ロールプレイ）ゆくかだろう。ここでは『ビジュアルブック』に紹介できなかったイラストを使って改めて解説する。

陰陽師

陰を転じて陽とする——陰陽術を操り、世界の成り立ちそのものに素手で触れることのできる存在、彼らを人は、陰陽師と呼ぶ。
虚空より召還した〈式〉を、意のままに操る陰陽師は、しかし、「術師」と言うよりは「芸術家」と呼ぶ方がふさわしいのだろう。
なぜなら、彼らにとって「陰陽道」は芸術の一表現形態であり、彼らの〈式〉は、用途よりも美しさに重きを置いて作られるからである。

人間の体を〈式札〉に見立て、〈式〉を打ち込むことで人間をはるかに凌駕する戦闘力を得る——それが、サムライである。
しかし、サムライになるためには、人は自らが人であるということを捨てねばならない。
サムライは人間ではないのだ。
人を捨てることを決意してまでも、得なければならなかった「強さ」——彼をサムライにした、その「理由」とは何か？

サムライ

万
忍
傀儡
年月を経た大樹より削り出された人形に、「木霊」と呼ばれる自然霊を憑依させ、長い年月を掛けて徐々に人間であると「錯覚」させる——そのようにして作られる「傀儡」は、人と見まごうところはないけれども、それでもやはり、人間以外の「モノ」であることに代わりはない。
血を流し、汗を流し、人と同じく考え、話し、泣く人形。「傀儡」は決して人間にはなれない。哀しいけれども。
鎧乗り
戦国の陰に潜み、領主たちのために諜報、暗殺などと、さまざまな働きをする忍者たち。
その中でも、一握りのエリートだけが、仲間たちからの尊敬と羨望を込めて、「シノビ」と呼ばれる。
彼ら独特のさまざまな道具や薬物、一流の者が操れば絶大な威力を発揮する「忍術」、そして、彼ら自身の鍛え上げられた肉体——シノビにとって、そのすべてが目的達成のための道具たりえるのである。
人をはるかに越える巨体を持つ鉄巨人、戦場の花形、「ヨロイ」その中に乗り込み、ヨロイを操るのは、「ヨロイ乗り」と呼ばれる子供たちだ。「業」浅くなければ、ヨロイには乗れない。ヨロイ乗りは皆、純真無垢であれと育てられる。
無垢ゆえの残酷——ヨロイ乗りの中には、その両方が矛盾なく存在している。
からくりの詰まった鉄の体に、修羅——業深きゆえに狂気の淵に堕ちたる者——の魂を宿した戦闘機械、それが金剛機だ。修羅の魂は、所有者が扱いやすいようにとその記憶を封印されつつも、呪詛の声を発し続けるだろう。
最強の機械体を得た狂気の魂が、自らを押さえつける封印を破るとき、周囲には「死」が振りまかれることになる。
金剛機

天　万

蟲使い

物の体内に寄生して生きる「蟲」の中には、さまざまな能力を持ったものもいる。自らもその体内にさまざまな蟲を住まわせ、その能力を自在に引き出すのが「蟲使い」だ。
いくつもの蟲を体内に飼うことで、蟲使いはしだいに人間と言うよりは蟲に近づいてゆく。
やがて——蟲使いは人間であることを捨て、蟲そのものになってしまうのかも知れない。

鎧狩り

ヨロイと戦う——
ただそれだけを考え、体を鍛え、武器を選ぶ。それが、ヨロイ狩りになるための条件だ。
ヨロイを倒すことだけを考え、生きるヨロイ狩り。
彼らの多くは、元ヨロイ乗りだという。
愛情が憎しみに転変したとき、それは他のどのような形の憎しみよりも、深く、拭いがたいものになる。

銃槍使い

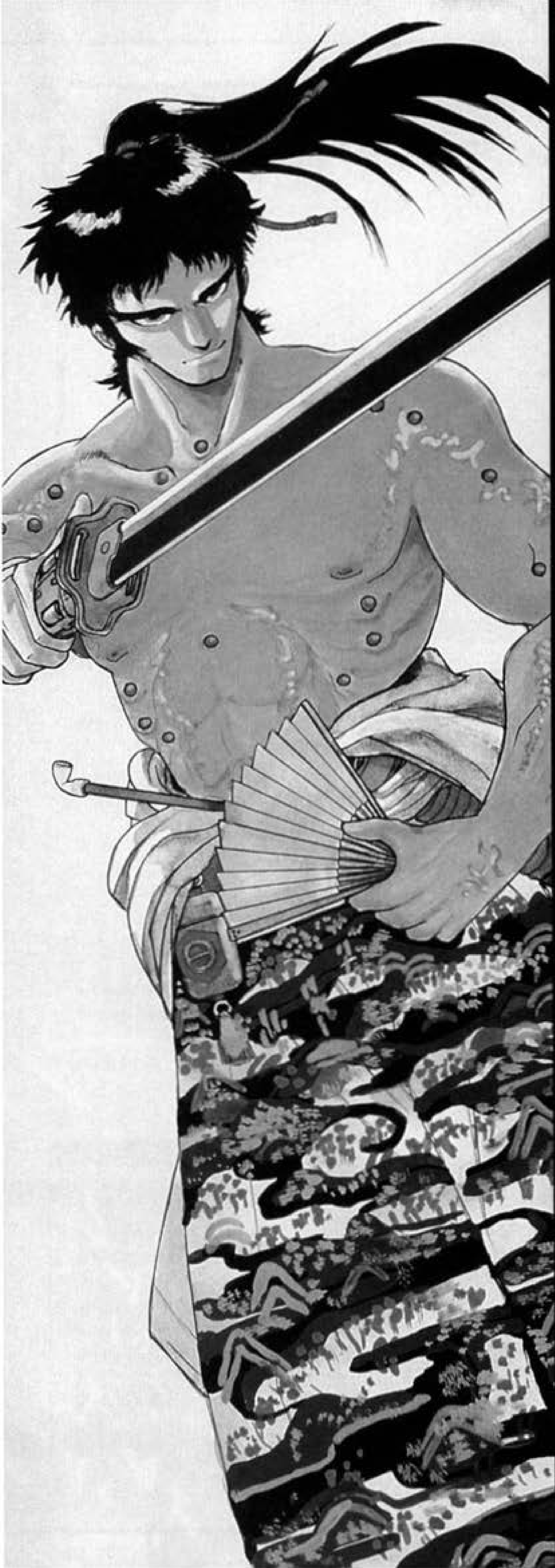
火薬の存在しない天羅世界においては、銃弾には気のこもった宝玉〈珠〉が使用される。
〈珠〉は非常に高価なため、銃手は足軽の身分でありながら一目置かれる存在となる。それが普通の鉄砲ではなく、銃槍であるならなおさらのことだ。
遠距離からの射撃だけではなく、白兵戦でも絶大な威力を発揮する銃槍は、それを使いこなすのに多大な努力と才能を必要とするのだ。

鬼法師

山中には「鬼」が潜む。角を持ち、神通力を使い、人を惑わすと言われる彼らアヤカシの一種は、見つかれば退治される運命を持っている。
人は自分と違うものを排除しようとする。同じでないから、恐怖する。
そうやって人は「山中に鬼あり」の報を聞くと兵を送り、女、子供の区別なく、額に角の生えた「バケモノ」を皆殺しにするのだ。
滅びゆく種族——それが、鬼だ。

仏法とは、悟りを開くための法、真理を発見するための法である。
しかし、実際には宗派ごとの対立や、寺内政治、権力との癒着など、腐敗した側面を見せることも多い。それを嫌った僧が、旅をする。
仏の教えの元、理想的な世界を——「しあわせ」を求める。法師の旅は、探求の旅だ。

羅　象



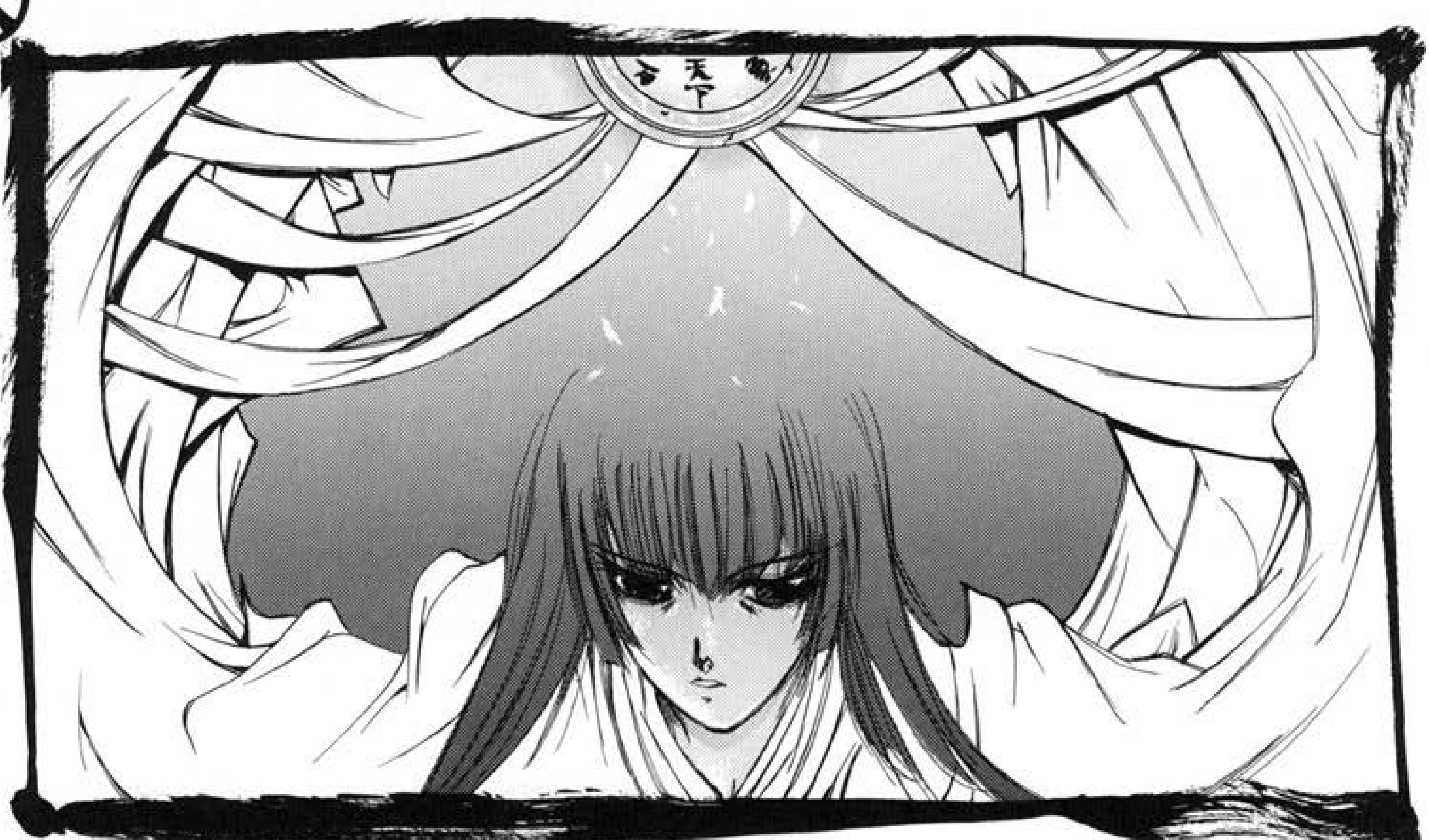
第1部 天羅戦国伝

TENRA BAN-SHOW REPLAY

文：渡辺ヒロシ／イラスト：小川雅史

《天羅万象》の紹介も兼ねてRPGマガジンに発表され好評をいただいたリプレイ「天羅戦国伝」。システム出版に先駆けての連載だったため、システムに深く言及することができなかったが、収録に際してはその分加筆修正を行なった。《天羅》の制作に深くかかわったスタッフのみによるリプレイである。新しいRPGのスタイルを十分堪能していただきたい。

第1章　地皇……10
第2章　正義……21
第3章　宝剣……32
第4章　生命……42
第5章　海妖……54
第6章　領主……65



天羅万象リプレイ

天羅戦国伝　地皇

第1章

発端

始まりはいつだってほんのささいなこと。

名代がいなくなった今、龍鱗州扇牙国は統率する者のいない混乱のさなかにあった。

名代の下で領地を治めていた領主たちは、その後釜をねらおうとそれぞれ画策を始めていた。名代の存命中より何かと因縁浅からぬ間柄であった逆代家と虎堂家、二人の領主の間に戦端が開かれたのは、もはや歴史の必然と言うべきであったかもしれない。

「国」という名の巨大な生き物が一頭、今まさにその命を終えようとしていた。

その断末魔のうねりに、幾百、幾千の生命を巻き込みつつ……

GM：さて、始める前にだいたいの説明を。龍鱗州の扇牙国が舞台だ。ここは数年前に名代が死んで以来、その下に十三人いる領主たちが虎視眈々、頂点に立つ機会をねらっている。

雷蝶：ま、よくある話しやな。

GM：その扇牙という国の中の、虎堂という領主の治める領地……

須波：虎堂というと、うちのお父様のことですか？

GM：そう。君の父親にして領主、虎堂宗親の治める白沼の地が、隣地、松谷の領主、逆代という男によって攻め入られているトコだ。

須波：あ、はい。わかりましたです。

GM：えーと、須波は兄と、姉がいるという話だったよね？　君の姉も君と同じヨロイ乗りなんだけど、先日の出撃でお姉様はヨロイが大破してしまっている。で、ヨロイ乗りとしての経験や、熟練は君よりもはるかに上なので、きょうの戦は君は戦陣で待機。君のヨロイにはお姉様が乗っていることになる。

須波：なるほど。了解。

GM：でだな、烈堂と雷蝶の2人。

烈堂：おう。

雷蝶：うちもかい。

GM：君たち2人は、そこで雇われ兵士として虎堂側に参戦している。

烈堂：勝ってるほうか、負けてるほうか？

GM：負けぎみ。

雷蝶：あちゃー、こら悪いほうに付いてまったようやなぁ。こら逆代のほうに付いとったほうがよかったかもなぁ。

GM：始まったときには五分五分に見えたからねェ。

烈堂：で、今は最前列で戦っていると？

GM：というか、遊撃兵って感じだね。

雷蝶：で、何かい？　あすあさってには負けそうなんかい？

GM：えー、【知覚】の＜戦闘系技能＞でロールしてくれ。戦闘にかかわる＜白兵戦闘＞＜格闘戦闘＞＜射撃戦闘＞＜回避＞のうちだったらどれ使ってもいいからね。

雷蝶：【知覚】の能力値の個数分だけサイコロを振るんやな。

烈堂：で、戦闘系技能……おれの場合は＜白兵戦闘＞が一番高くて“中級”だから、1から3が出たサイコロの数を……（コロコロ）3成功。

雷蝶：うちは＜白兵戦闘＞を“上級”で持っとるさかい、1から4が成功や。ほれ！……5個も成功したわ。大成功やな。

GM：2人とも結構成功してるね。ならわかる。今と変わらない調子で戦が続くなら……あと十日ほどで虎堂は陥ちる。

雷蝶：あらー、こらしゃれにならんでほんま。

烈堂：……潮時かな、こりゃあ。

天羅万象の基本システム

“天羅万象”の基本判定システムは、非常に単純なものだ。

判定に使用する能力値と技能を決めたら、能力値の数だけの6面ダイスを振って、ひとつひとつの出目を見る。

使用した技能の段階（技能なし、初級、中級、上級、特級とある）と同じか、それ以下の数値の出たサイコロの数がそのまま成功値となる。

難易度が決められていた場合は、そのまま成功値から難易度を引く。

腕相撲

GM：でなぁ、夕方になって君たちは、お勤めを終えて戦場近くに作られた陣の中に戻って来ている。昨日の戦でこちらに二騎いたヨロイのうちの一騎が大破してしまっているので、きょうはかなりきつい戦いだった。それにもかかわらず、陣の中は意気を上げようとするにぎわいに満ちている。あちこちのかがり火の下から酒盛りの声や、だみ声の歌なんかが聞こえてくるわけだ。君らの近くでも力比べかなんかやっていて、たった今十人目を抜いた大男が「わあっはっはあ！　おれ様に勝てるやつぁいねェのかぁ！」とか言って高笑いしていて、こいつがサムライ。

烈堂：え、サムライなんすか。

GM：うん、ちょっとサムライ。《珠(オウブ)》が一個眉間に埋まっているだけだったりするのだ(笑)

雷蝶：ちょっとやな、それは(笑)

大男(GM)：「サムライのオレ様にかなうやつなんざいねぇのさぁ！」とか言ってますけど(笑)

烈堂：よっしゃ、ここは一発……おれがそいつを止めてやろうじゃねぇか。ずいとそいつの前へ……

大男(GM)：「なんだぁ？　今度ぁお前ェが相手かぁ」

烈堂：「ああ(ニヤリ)」

大男(GM)：「ま～たおれに小遣いをくれ……

烈堂：(さえぎって)ばさっ、ともろ肌を脱いでみせる。

雷蝶：アンタまさか、サムライ化する気か？

烈堂：いやまさか。見せるだけよ。

烈堂は一流のサムライ。その体には数多くの《珠》が埋め込まれ、サムライを起動させるための《式》が組まれた刺青が縦横に走っているのだ。

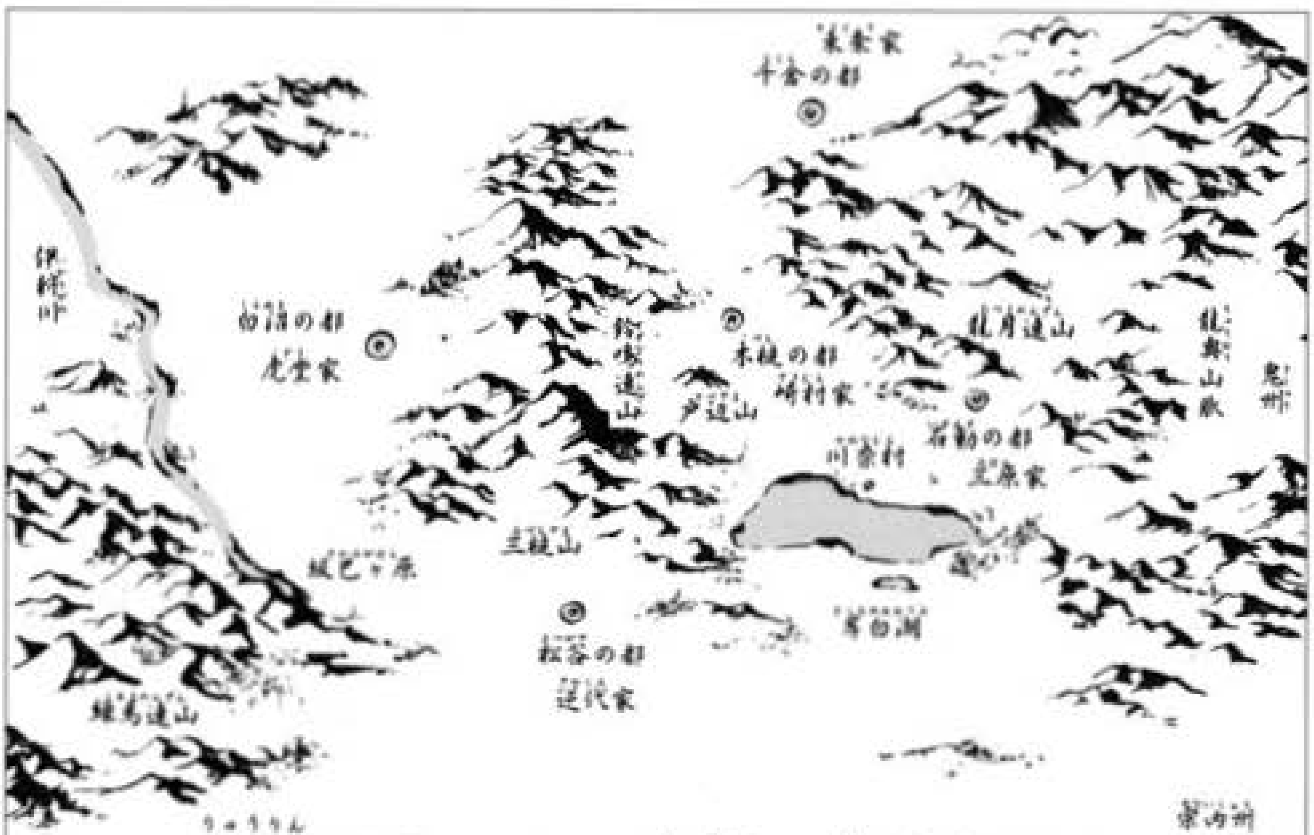
大男(GM)：(世にも情けない顔をしてから)「……ち、ちくしょう！　そんなことくれェでこのおれ様がッ!!　見てやがれ、おれ様の「サムライ変化(へんげ)」!!　ふんがあああああぁぁッ!!!!」

額の《珠》がピカっと光り！　……肩のあたりがちょっとだけ変形する(笑)

烈堂：しまらないなァ(笑)　じゃ、行きます。腕相撲ってことは、【体力】で＜格闘戦闘＞かね。8個の、中級……成功度は5。

GM：こっちは5の初級だったんだが……全部失敗してしまったのだ(笑)　だむ！　とか大きな音を立てて、大男の腕がねじ伏せられる。

烈堂：ぶら下げていた酒瓶をあおって、「なァんだ、その程度かい。サムライを使うまでも、なかったなァ」



龍鱗(りゅうりん)州扇牙国　中部～東南部地図

雷蝶：「待ちいや！」大男をけとばして向こうにやってから、烈堂の前に腰を降ろすで。

全員：おお。

雷蝶：「あんな雑魚に勝ったからって、でかい顔されても困るで」

大男(GM)：「雑魚！　おれが雑魚!!」

雷蝶：「(GMの方を向いて)黙っとき」、「(烈堂に指を突きつけて)今度はあたいが相手や」

自信満々。不敵な笑みを浮かべる雷蝶。だが！　そのキャラクターシートに目を落とすと、みるみるうちに顔が青ざめてゆく。

雷蝶：えーと、＜格闘戦闘＞使うんやったな？

GM：そうね。どうかしたか？

雷蝶：＜格闘戦闘＞……持ってへん……

全員：それじゃあだめだァ!!(笑)

技能は持っていなくても雷蝶とてPC。そこいらの雑魚とは格が違う。

地力の強さで一瞬にしてつぶされることはあるまいと、それでも勝負を挑んだ。

しかし……やはり力及ばず、数分の攻防のすえ、雷蝶のこぶしが樽(たる)のへりに打ちつけられる。

烈堂：賭け金をかき集めながら「それじゃ、こいつぁおれのもんだ」

雷蝶：「イ、イカサマや！　合図よりも先に力ぁ入れよった！(立ち上がり、八連斬甲刀(はちれんざんこうとう)を突きつけて)こッ……今度はこいつで勝負や！」

烈堂：(片手で眼前に突きつけられた刀を払いつつ)「ヘッ、しょうがねぇ嬢ちゃんだぜ」と言って、雷蝶をにらむ。「こッから先は洒落になんねぇぞ……」

GM：本当にやるのか？

雷蝶：やる。

GM：なら、1ラウンド目だ。

天羅万象の戦闘

“天羅万象”の判定システムは、非常に単純だと先にコラムで説明した。

戦闘のときにも基本は変わらず、攻撃側、防御側の戦闘系技能での成功度の比べ合いになるだけだ。

このとき、防御側が勝っていた場合には、“斬り返し”と呼ばれる現象が起きる。攻撃された側が、攻撃を受け止め、反撃に成功したと見なされるのだ。

雷蝶：【敏捷】8の＜白兵戦＞上級やさかい、結構成功するでェ。ほれ！……6成功や。

烈堂：【敏捷】は同じ8なんだけど、＜白兵戦闘＞が中級なんだよなァ、おれ……うう、5成功しかない！

雷蝶：コッチの勝ちや！　差額は1やな。うちの持っとる「八連斬甲刀」の武器修正は＋6やから、ダメージは1＋6の7点や！

烈堂：「がはッ！」けっこういてェ！　ようし、7ダメのうち1点を“致命傷”に、残り全部を“活力”へのダメージとする。

雷蝶：ち、致命傷かい。「見たかい！　その傷じゃあもうそこまでやろ。うちの勝ちや！」

GM：と、言ってますけど？

烈堂：血の流れる口もとをゆがめて、ニヤリと笑うぜ。「甘ェ、甘ェな。こおんな簡単に終わりにするわきゃねえだろうが……」マスター、1

ラウンド目おれの行動だけど……
GM：うん。
烈堂：サムライ化。「こっからが本チャンさ……！」
雷蝶：ぐッ！　し、しかし、ここまで来てもうたら引くわけにはいかん（笑）

演出自由?のダメージシステム

“天羅万象”には、ダメージを表すものが大きく分けて2つ存在する。“活力”と“負傷度”だ。
“活力”はスタミナのようなもので、これが0以下になると気絶してしまうが、戦闘が終了すると全快する。
“負傷度”には軽傷、重傷、致命傷、死亡とあり、こちらはなかなか回復しない。
プレイヤーは、受けたダメージをこれらの数値に自由に振り分けることができる。
ちなみに、けがをするとPCは強くなる。上の戦闘で、烈堂はいきなり“致命傷”を受けて、そのボーナスを得るという戦法を取ったのだ。

一瞬前までの力のバランスは逆転した。
烈堂がサムライ化、加えて負傷によるボーナスを得たことで、技能的に勝る雷蝶の戦闘力を凌駕したのだ。

GM：（いかん、これ以上やらせるとどちらかが死ぬ（笑））

まわりで見ていた野次馬の誰もが血のにおいを予感したその瞬間、男の声が二人の間に割って入った！

GM：「そこまで！」と言って君たちを止めたのは、三十半ばの胴丸姿の男。「飯綱竜角」だ。領主の下で君らみたいな雇われ者を束ねる役をやっている。本人もなかなかの使い手だぜ。「苦しい戦のさなかだ。わざわざ仲間割れでもあるまい」だとさ。
雷蝶：「（烈堂に指を突きつけて）こいつがイカサマしよったんや！」
飯綱（GM）：「わたしも見ていたが……あれがイカサマだったとは思えんな」
雷蝶：「何や、アンタもグルかい！」
飯綱（GM）：「やめんか！」（せきばらい一つして）
「サムライの烈堂、ヨロイ狩りの雷蝶。おぬしらを呼びに来たのだ。こたびの戦で一二を争う活躍を見せているおぬしらにしかできない頼みが、ある」

二　依頼

二人が連れてこられたのは、陣中でももっとも奥に設けられた、領主のいる本陣だった。小姓や守護の者に囲まれて座している男こそ、領主、虎堂白沼守宗親。

GM：君たちが一礼すると、おもむろに領主は口を開く。「こたびの戦……おぬしらはどう見る？」
雷蝶：（両手を広げて見せて）十日や。
宗親（GM）：「烈堂は？」
烈堂：「わたしゃあ……刀の届く範囲のことしかわかりませんのでね」
宗親（GM）：「それでかまわぬよ。前に出て闘う者の意見が聞きたい。もしも……ヨロイが一騎、ここに加わったとすれば？」
雷蝶：「ヨロイなんぞおっても、戦いにくくなるだけや」
烈堂：「無傷で殺せるのは……兵の五百ってところがせいぜいですかね」
宗親（GM）：「それが、深神春弦の造りしヨロイだとしても、かね？」
雷蝶：フカガミ？　誰やそいつ。
GM：【知力】の<事情通>で2人とも判定して。難易度は2。つまり、3個成功したらオッケー。

<事情通>技能は、雑学一般の知識を表している。この技能が高いと、今いる土地のことをよく知っていたり、有名人のうわさを聞いたことがあったり、謎の武術の素性をぴたりと言い当てたりできる。

GM：で、成功度はいかほど？
2人：全然知らん。(0)
GM：ああッ、なんてコトだ（笑）　だが、こーゆーときのために飯綱がここにいるのだッ！

GM：君らが首を横に振るとだな、領主の隣に立っていた飯綱が説明するわけだ。「深神春弦。国境を越え、山を二つ行った所にひとりで住む陰陽師だ。《式》を打つ、ヨロイを組む、傀儡を削る。およそ陰陽師のできることすべてを手掛ける、天才陰陽師よ」
雷蝶：「で、そのフカガミなんたらがどーしたねん」
宗親（GM）：「数年前から手掛けていたヨロイがあるのだが、完成を予告した期日をあと三日ほどで迎えることになる」
烈堂：「つまり、そのヨロイを取って来いってコトですかい？」
宗親（GM）：「うむ、そういうことだ。加えて、深神どのをわが軍へ迎えるべく書状をしたためた。これを渡してほしい」
烈堂：「なるほど。承知いたしました」
宗親（GM）：「受け取ることができたヨロイを持ち帰るために、ヨロイ乗りを一人連れて行ってもらう。須波、こちらへ」
須波：「はい、お父様」
宗親（GM）：「ヨロイ乗り、虎堂須波。わが息子だ」
雷蝶：あからさまに嫌そうな顔をする。「ガキのお守りまでする気はあらへんで」
宗親（GM）：「ヨロイに乗せる」
須波：「え？　号破は今、お姉様が乗っているんじゃあ……？」

ついて来るように言って立ち上がった領主のあとを烈堂、雷蝶、そして須波は追いかけてゆく。

GM：君たちが向かっているのは、少し離れた所にある、ヨロイが止めてあるヨロイ陣なんだけど、近づくにつれて金属のぶつかり合い、こすれ合う音が響いてくる。

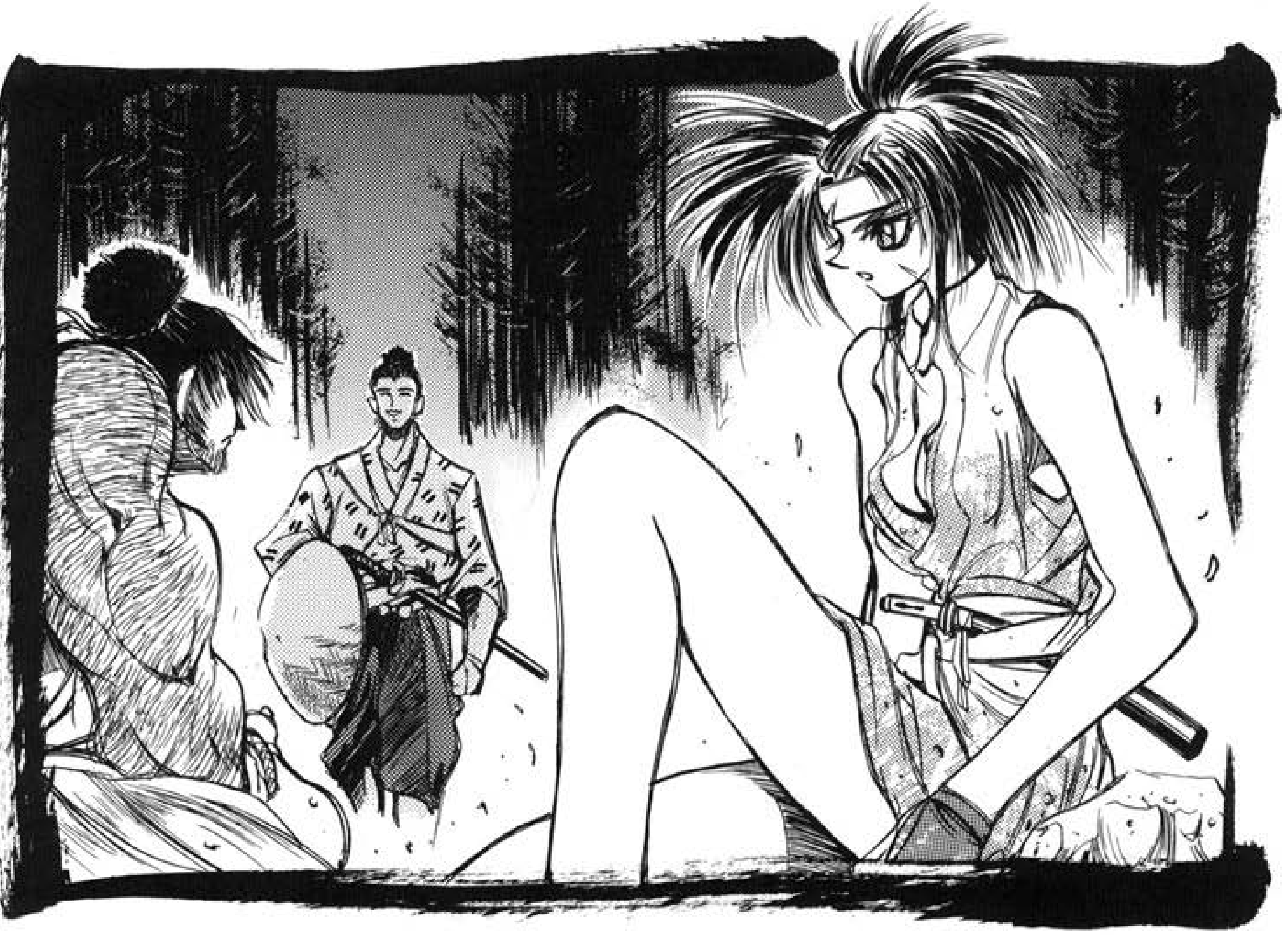
須波：「？　何の音？」

音の主はヨロイだった。
須波のヨロイ、号破が腕ほどもある鎖でがんじがらめに縛りつけられているのだ。縛めを解こうとヨロイは暴れ、今にも鎖が引きちぎられそうに見える。
鎖を造り出しているのは四人の陰陽師。《式》を固定するために一心不乱に霊力を傾けている。

須波：「あっ、号破！」
烈堂：「こりゃあ……何だってんだ!?」
雷蝶：「ヨロイが暴れとる!?」

そしてもうひとり、ヨロイの眼前で念仏を叫ぶ仏法僧。真言はいよいよ最高潮になり、僧の気合一閃！
ヨロイは糸が切れたようにその動きを止め、地面にひざをつく。
陰陽師たちが気を抜き、鎖が宙にほどけてゆく。

GM：動きを止めた号破に数人駆け寄って、胸の扉を開いて君の姉を引きずり出す。
須波：「お姉様！」
宗親（GM）：「案ずるでない、気を失っておるだけじゃ」
雷蝶：誰にも聞こえないほどの声でつぶやく



て。「……ちゃう、そうやない……」
宗親（GM）：「須波、号破に乗ってゆくがよい」
須波：「は、はい」
宗親（GM）：「で、いつ出発していただける？」
烈堂：「それはもう、明朝でも、今すぐにでも。しかし領主どの、敵方に押されている今、ヨロイを戦線からはずして平気なんですかい？」
雷蝶：（宗親が何か言おうとするのを遮って）
「このヨロイはもう使い物にならへん」
須波：「ええ!?　ど、どういうことです？」
雷蝶：（須波に向き直り）「いいか、よくおぼえとくんやで、坊主。こうやってヨロイ乗りは使い捨てにされるんや！」

烈堂：マスター、おれ＜法術＞持ってるんすけど。
GM：あ、そうか。それじゃあな、うら若い娘さんがゆらゆら成仏してゆくのが見える（笑）
烈堂：ああっ、やはり（笑）

戦場の重圧に耐え切れずに、ヨロイに乗っていた須波の姉は「修羅」と化したのだった。
修羅になってしまった者はもはや人に戻ることはできない。

それがヨロイや金剛機ならば、《明鏡》に染み込んだ“業”を払うという手もあるが、それは同時に、明鏡の中の魂を成仏させてしまうという意味でもある。
加えて、明鏡に染み入った“業”は、すなわちヨロイや金剛機の強さ。業を払うということは、ヨロイや金剛機を大幅に弱体化させてしまうのだ。

GM：雷蝶の言っていることを領主は特に否定しよう、説明しようとはしない。「ぬしらが戻って来るまで、何とか持ちこたえるよう頑張ってみよう。では、吉報を待っておりますぞ」
烈堂：天を見上げて小声で「成仏せいよ……」とつぶやいてから、その場を退散しよう。
GM：で、須波よ。君は号破に乗るわけだがな……
須波：はい？
GM：“業”がまったくない。修正の分の＋3がなくなるので、能力値から引いとくように。
須波：!!　ああっ、弱い〜。「しゅ、出力が全然上がらないッ!?」とか叫んでみるです〜。
雷蝶：どんくらい弱くなってんの？
烈堂：おれらが楽々勝てちゃうくらい（笑）
雷蝶：あ、弱ァ（笑）

GM：でなぁ、いつ出るんだ？
雷蝶：向こうまでどれくらいかかるんや？
GM：四日。
雷蝶：ぶピ（笑）
烈堂：もって十日。行き帰りで八日。交渉に一日で……まぁ、ギリギリってとこかね。
雷蝶：うー、逃げたほうがよかったかもしらんなァ……

四　暗殺

結局、少しでも早く到着するようにと、一行はその日のうちに出発した。
四日の道程のうち、三日目まではたいしたこともなく過ぎ、いよいよ明日には陰陽師の屋敷に到着するという三日目の晩、峠道の途中で一行は火をおこして休息している。

GM：くつろいでるところすまんが、向こうから誰か来るぞ。

雷螺：飛び起きて「誰や！」
烈堂：「……お客さんかねェ？」
男（GM）：（にっこり）「あいすみません、旅の者でございます。夜も更け、泊まる所一つなく難儀していたところに焚き火を見つけたもので」まじめそうな男だ。帯刀しているところを見るに、武士だな。
雷螺：「こんな夜中に一人旅かい、しかもこんなへんぴな所を？」
男（GM）：（頭をかいて）「いや、それが実は、道に迷ってしまいまして」
烈堂：「そりゃあ難儀なこって。ま、火にでも当たりなせえよ」
男（GM）：「いやぁ、正しい道を歩いているのかすらわからず、ほとほと困り果てていたところでございまして。助かります」
雷螺：「あんた、なんでこんな所歩いてるンや？」
男（GM）：「いやまぁ、ちょっとした用事でございまして。とある陰陽師殿の所へ行く途中なのでございます」
雷螺：「へー、どういった用で？」
烈堂：（さえぎって）「ま、他人の用事をわざわざせんさくするこたァねえだろうさ」
男（GM）：「あ、申し遅れました。わたくし、名を井ノ口助次郎と申します」
須波：えらくすご味に欠ける名前ですね（笑）
雷螺：「うちは雷螺や。こっちのダンナが烈堂」
井ノ口（GM）：「あ、こりゃごていねいにどうも……ところで、深神様という陰陽師殿の屋敷に行くのは、この道で良いのですよね？」
烈堂：「なんだ、目的は一緒のようだな」
雷螺：「ばか！」……あ（笑）
井ノ口（GM）：「へ？」
烈堂：立ち上がって「そして、おれたちはほかのやつが屋敷へ向かってるなんて聞いちゃいねェ」と言ってから……刀を抜く。
GM：君が刀を抜くのを見て、真っ青になった彼は「ななな、ナニするつもりなんですか!?　ぼ、ぼ、暴力はいけませんよ、ね、ね、ね、ね」
烈堂：「すまねェな。よそからの使者を陰陽師に会わせるわけにゃいかねぇンだ」
井ノ口（GM）：（泣きそう）「そそ、その物騒なモノをしまって、話せばわかりますよきっと！」
雷螺：なんや情けないやっちゃな（笑）
烈堂：「じゃあ、下山してもらおうか」
井ノ口（GM）：（急に冷静に）「いや、そういうわけにも行かないんですよねェ」
須波：恐る恐る聞くです。「お兄さん、逆代の人なの？」
井ノ口（GM）：「？　……あなたがたは……違うんですか？」
全員：うなずく。
　井ノ口（GM）：（みるみる泣き顔に）「わッ……わたしをだましたんですねええエエェッッ!!」
雷螺：うちらは別に何も言うとらんで（笑）
須波：勝手に早とちりしたくせに（笑）
GM：井ノ口は刀を抜くんだけどさ、手もとどころか体中が震えておぼつかない。「わっわわ、わたしだって武士の端くれ！　それ以上近づいたらただじゃおきませんよッ！」
烈堂：「まぁ、運が悪かったと思って……あきらめてくれや」と言ってからやつを斬るぞ。【敏捷】の＜白兵戦闘＞で6成功。
GM：井ノ口は「ひゃあああ！」とかなんとか叫びながら、目をつぶって刀を振り回す。おいさ！こっちも6成功したんで、振り回した刀は偶然烈堂の刀に当たって、それを止める形になった。そのまま井ノ口はシリモチをついてしまう。
烈堂：「へェ、止めるか」
雷螺：「偶然やろ？」
烈堂：にやりと口もとをゆがめて「あいにく、偶然で受けられちまうほど、手を抜いてるつもりはねェな」
GM：井ノ口は、そのまま四つんばいで向こうに逃げようとする。「ひッ、人殺しぃぃぃ！」とか叫びながらだ（笑）
烈堂：当然、背中を斬る。コロコロ、5個成功。
GM：斬られた。斬り返しはなし。ダメージいくつ？
烈堂：5＋3で8ダメ。
GM：おーらい。"致命傷"にダメージを入れたんで、傷口からものすごい血しぶきを上げて、ばったり倒れて動かなくなる。
烈堂：じゃ、トドメを。「すまねェな。こいつも役目だ」ざくり。
GM：死んだね。死んださ（笑）
雷螺：「ちょっとやりすぎなんとちゃうか？」
須波：「しかたないですね、これも虎堂家のためです」と、きっぱり（笑）
烈堂：おいおい（苦笑）

　茂みの奥に死体を埋めて、焚き火のまわりで一行は仮眠を取ることにした。明日の昼には陰陽師の屋敷にたどり着くだろう。

雷螺：「しっかし、あんな弱いやつが使者だったなんて、おかしな話しやなァ」
烈堂：「こんなとこで会ったんじゃなけりゃ、いい友達になったかもしれんけどな」

五　二組の来客

山奥の屋敷に、彼女は独り住んでいた。陰陽師、深神香弦の影である傀儡、深影。あるじたる陰陽師は、もうこの世にはいない。
後悔と、自責と、無力感にさいなまれながら、それでも彼女は影として、陰陽師の遺した仕事をやり遂げようとしていた。

GM：朝方だ。君はいつものように作業場に出向いて、香弦の遺した仕事のうち、一番大きかったやつ。すなわちヨロイの製作を進めているところだ。
深影：とんてんかん、とんてんかん。

GM：そこに、屋敷の方から声が聞こえてくる。「ごめんくださーい、どなたかいらっしゃらないんですかーぁ……」
深影：とんてんかん、とんてんかん。
声（GM）：「いいんですかーぁ、勝手に入っちゃいますよーう……」
深影：……それは困りますね。作業の手を休めて、屋敷の方に向かいます。
GM：屋敷の入り口に行くと、男が一人、今まさに屋敷に上がり込もうとしていたトコ（笑）　武士様の格好をしていて、にこにこ笑ってる男なんだけど、その着物から顔から泥だらけだ。「あ、いや、人がおりましたか。良かった良かった。返事がないので勝手に上がり込んでしまおうかと思っていたところでございまして」
深影：じろじろ見ます。
男（GM）：「あ、えーと……陰陽師の深神様でございましょうか？」
深影：「香弦様はおりませぬ」
男（GM）：「？　というと、外出中なので？」
深影：「香弦様は……おりませぬ」
男：（困ったふうに頭をかいて）「おっと、申し遅れました。わたくし、松谷の領主、逆代様より遣わされました、井ノ口助次郎と申す者でございます」深々と頭を下げてから「深神様のお造りになっていたヨロイを、松谷に譲っていただきたいと、領主である逆代大蔵どのがお望みでして、このわたくしめが深神様にその意向を伝えに参ったと、そういうわけでございます」
深影：「ヨロイはまだ出来上がってはおりません」
井ノ口（GM）：「出来上がって……いない？もうそろそろ、完成という話を聞いていたのですが？」
深影：「事情があって、少々遅れております。あのヨロイが欲しいというなら、あと三日待ってくださいませ」
井ノ口（GM）：（腕を組んでうなずきながら）「ほうほう、三日かかると。なるほど。では、待たせていただきたいのでございますが、よろしい？」
深影：「どうぞご随意に」
GM：それを聞いて安心したような顔をしてから、

井ノ口は泥だらけの着物をつまんで「実は、道中獣に襲われまして、このように着物が泥だらけになってしまっておりましてな。そこでそのう……できれば体を洗わせていただきたいのですが……」
深影：「奥へ行った所に湯殿がある。勝手にどうぞ」
井ノ口(GM)：「いやいや、かたじけない、本当にありがとうございます」もう一度頭を下げてから屋敷の中に上がり込む。ばたばたばたばた……
深影：……慌ただしい人。作業の続きのために仕事場に戻りましょうか。

一方、野宿で夜を越した烈堂、雷蝶、須波の三人(ちなみに須波は、一晩じゅうヨロイから出なかった)は、夜明けとほぼ同時に出発し、陰陽師の屋敷を目指した。

GM：昼前には陰陽師の屋敷にたどりつくことができた。小高い丘を背に、右手に大きな屋敷、左手にちょっと小さな建物がある。左の方からは何やら騒がしい音が聞こえてくる。
深影：とんてんかん、とんてんかん。
須波：ヨロイは降ります。人の家にまで来てヨロイでもないでしょうし。
雷蝶：「なんや音がするで、向こうに誰かおるようやな。くだんの陰陽師か？」
烈堂：「ま、行ってみりゃあわかるってことさ」
須波：「もしもーし、どなたかいらっしゃいませんかぁ」とか叫んでみるです。
深影：とんてんかん、とんてんかん。
須波：「もしもーし、勝手に入っちゃいますよーう」
深影：「あああもう、きょうの客は礼儀を知らない人ばっかり(笑)」作業の手を止めて顔を出します。
GM：てなわけで、女性が一人、君たちの前に姿を現す。
須波：「あの、えええと、深神さんはいらっしゃいませんか？」
深影：「きょうは来客の多い日だこと。で、今度のお客様は、どちらからいらしたのでしょう？」
須波：「ええと、白沼の領主、虎堂宗親の二子、須波と申します。深神様……で、ございましょうか？」
深影：「香弦様はおりませぬ」
須波：「？　と、言いますと？」
深影：「香弦様は……先だって亡くなられました」
須波：「え、あ……し、失礼いたしました！」
深影：背を向けて、製作中のヨロイの方を見ながら「さておき、あなたがたもこの地皇(じおう)が欲しいのでございましょう？」
須波：「地皇、そう言う名のヨロイなのですか……」
GM：巨大なヨロイだ。大小一対ずつ、二対の腕が付いている。武装はまだ施されていない。
須波：ヨロイを見上げて……見ほれてため息を吐きます。ということで、《因縁：ヨロイへの愛情》で気合を稼ぎましょう。コロコロ。
烈堂：決めるとこ決めるなァ(笑)

> **ロールプレイの指針、業システム“因縁”**
>
> 各キャラクターの持つ“因縁”は、プレイ中に関係するロールプレイをすることによって、ヒーローポイントでもあり、経験値でもある“気合”の元になる。ロールプレイをすればするほど強くなれるのである。
> そして、プレイを重ねるごとに、“因縁”は新しく、深くなっていく。
> 紙の上のデータでしかないPCに、命が通ってゆくことをプレイヤーが実感できるシステム、それが“業システム”なのだ。

須波：「ぜひ、このヨロイをわれわれにお譲りください！」
深影：「しかし、まだ完成してはおりませぬので。あと三日、お待ちいただきたく」
雷蝶：「三日ァ!?」
烈堂：「三日か……間に合わんな」
須波：「うう……で、でも、ここで出来上がるまで待たせていただきます」
烈堂：ま、最後の一瞬まであきらめねえのはいいことさね。
深影：「ああそう、もう一人先客が来ておられます。あなたがたと目的も同じようですが……」
雷蝶：「ああ？」
烈堂：「ふうん、そいつとの話は、おれがつけようじゃねぇか」
雷蝶：「アンタまた昨夜みたいな物騒な話し合いするつもりかい(笑)」
烈堂：「へへ(笑)」
雷蝶：「それはそうとして……お姉ちゃん、どうやってもあと三日、かかるンやな？」
深影：「作業がはかどれば二日で終わるかもしれませんが……」
雷蝶：二日ねぇ、ひの、ふの、み……「聞いたか坊主。やっぱりダメや。アンタの国、陥ちるで」
須波：「そ、そんなこと……！」
深影：「あのう、ところで……」
雷蝶：「はぁ？」
深影：アンタら作業場で立ち話してるんだよね？(笑)「作業の邪魔になるので、騒ぐのであれば屋敷の方へ行っていてもらいたいのですけれど……」

六　死者との再会

あまりの騒々しさに怒られてしまった三人は屋敷の方へ退散することにした。

須波：「ごめんくださいませ」
雷蝶：「はいるでー」
GM：君たちが入って行くとだなァ、廊下を右から左に、さっき彼女が言っていた先客ってやつが歩いて行く。そいつ、着ているもんが泥だらけなの。「いやぁ、さっぱりしたのはいいんですけれど、着物がないのが困ったもんですねぇ……」
須波：何か聞き覚えのある話し方ですね(笑)
雷蝶：「ほれ、だんな。あれが先客や。はよ話しに行かんかい」
GM：そんなこと言っていていいのか？(にやにや)
雷蝶：ナニが？
GM：君らの目の前を通って行ったのは、誰あろう昨日の男、井ノ口助次郎だ(笑)
雷蝶：……何ィ!?
須波：ゆ、指差して叫ぶッ！「あああっ!!」
烈堂：にぃッと笑って「道理で……手応えがねェと思ったぜ……」
雷蝶：「あ、あ、あんた！　生きとったんか!!」
井ノ口(GM)：「は？　……おや皆さん」
雷蝶：「おや皆さんやないで！　あんた……！確かにとどめ刺されたはずやのに！」
烈堂：「迷った……てぇわけじゃあねぇよな」
須波：烈堂の後ろに隠れながら「あ、足も付いてますし……」と言います(笑)
井ノ口(GM)：「？　そりゃまぁ」とか言って片足を上げて見せよう。

三人は井ノ口について、廊下沿いの一室に入った。畳の上に腰を降ろした井ノ口に、恐る恐る須波が問いかける。

須波：「い、いったい何者なんですか……？」
井ノ口：「だから言ったじゃないですか。逆代大蔵様の命を受け、ヨロイをいただきに参った、井ノ口助次郎。千人斬りの斬鬼丸、とも呼ばれております」
雷蝶：「刺客、か……」生き返ったわけはどうした(笑)
烈堂：「ヘッ、斬って死ななかったやつを見るのは、初めてだぜ」
斬鬼丸(GM)：「これはこれで不都合はあるんですよ。例えばほら」着物の前をつまんで

「着物は切られたらそれっきりですからねェ」(笑)
雷蝶：「まいったな、烈堂のだんな。こいつぁやっかいやで」
烈堂：そうだなぁ、「まぁ、手始めに……」
雷蝶：「手始めに？」
烈堂：とっくりを取り出して、「酒でも飲むか」(笑)
斬鬼丸(GM)：目を細めて「いいですねえ。何ですか、ここ三日四日ほど、酒にもありついておりませんので」(笑)
雷蝶：小声で須波に忠告しとこう。「坊主！　ヨロイの中にでも行っとき！」
須波：「わ、わかりました！」とか言って、号破の所に走ります。行ける？
GM：別に邪魔はされないよ。部屋を抜け出て行く須波を見て「なるほどねぇ。ヨロイ乗りを連れてくれば帰りは楽だ。うん、なるほど」とか(笑)
雷蝶：どうやって持って帰るつもりやったんや(笑)
GM：いや、戦に勝つには虎堂にヨロイが行かなけりゃいいわけだから。
烈堂：ま、いいや。「さ、飲みねェ。」
斬鬼丸(GM)：「や、こりゃどうも……とととと」
烈堂：「くはあっ、うめぇ……」
斬鬼丸(GM)：「くうッ、久しぶりだと効きますねぇ……旨いっ！」
雷蝶：「あ、あんたら……酒なんか酌み交わしとる場合じゃ……！」
烈堂：「かといって、お屋敷の中でちゃんばらじゃあもらえるヨロイももらえなくなっちまう」
雷蝶：「そ、そらそうやけど、この男は……！ええい、わかったわ、もうええ！」うちも開き直って畳の上にあぐらをかく(笑)　「だんな、うちにも一杯！」
烈堂：やれやれ、最初ッからそう言えばいいもんを。
雷蝶：で、実はすっごい酒に弱いねん(笑)
GM：あ、そりゃおかしいや(笑)　一口飲むと真っ赤になるわけだ(笑)
烈堂：「おお、こりゃおもしれェ(笑)」
雷蝶：「なんや、うちの顔に何かついとるンか!?」
烈堂：「いや別に。さ、もう一杯飲みねェ(笑)」
雷蝶：ああッ、そんなにたくさん(笑)
烈堂：「ん？　何か言ったかい？」
雷蝶：「な、なんでもあらへん！(くいっ)」
烈堂：「まるでホオズキみてェだ、こいつあいい(笑)。ほれほれ、飲め飲め(笑)」
雷蝶：「なんや！　うちは酔っぱらっとらんで！」

須波：GM、そろそろ号破に乗り込んでますよね？　ほかに刺客がいるとアレなので、ヨロイの探知装置で生体反応を探ります。
GM：号破の【知覚】は6なんで、60m半径な。えーと、敷地内は全部入るかな。屋敷の方に三名、固まって反応がある。それだけ。
須波：それだけ？　作業場のほうの深影さんは？
GM：反応しない。いねぇんじゃねえの？
須波：いない？　どこか行っちゃったんでしょうか？

実は、深影は傀儡なので、範囲内の作業場にいるにもかかわらずヨロイの生体探知には反応しないのだ。

GM：ところで、ヨロイはあと何が残っているんだ？
深影：武器類。あと一日でヨロイを仕上げて、それから武器を造る予定なわけ。砲とか、刀とかね。
GM：なるほど。了解。

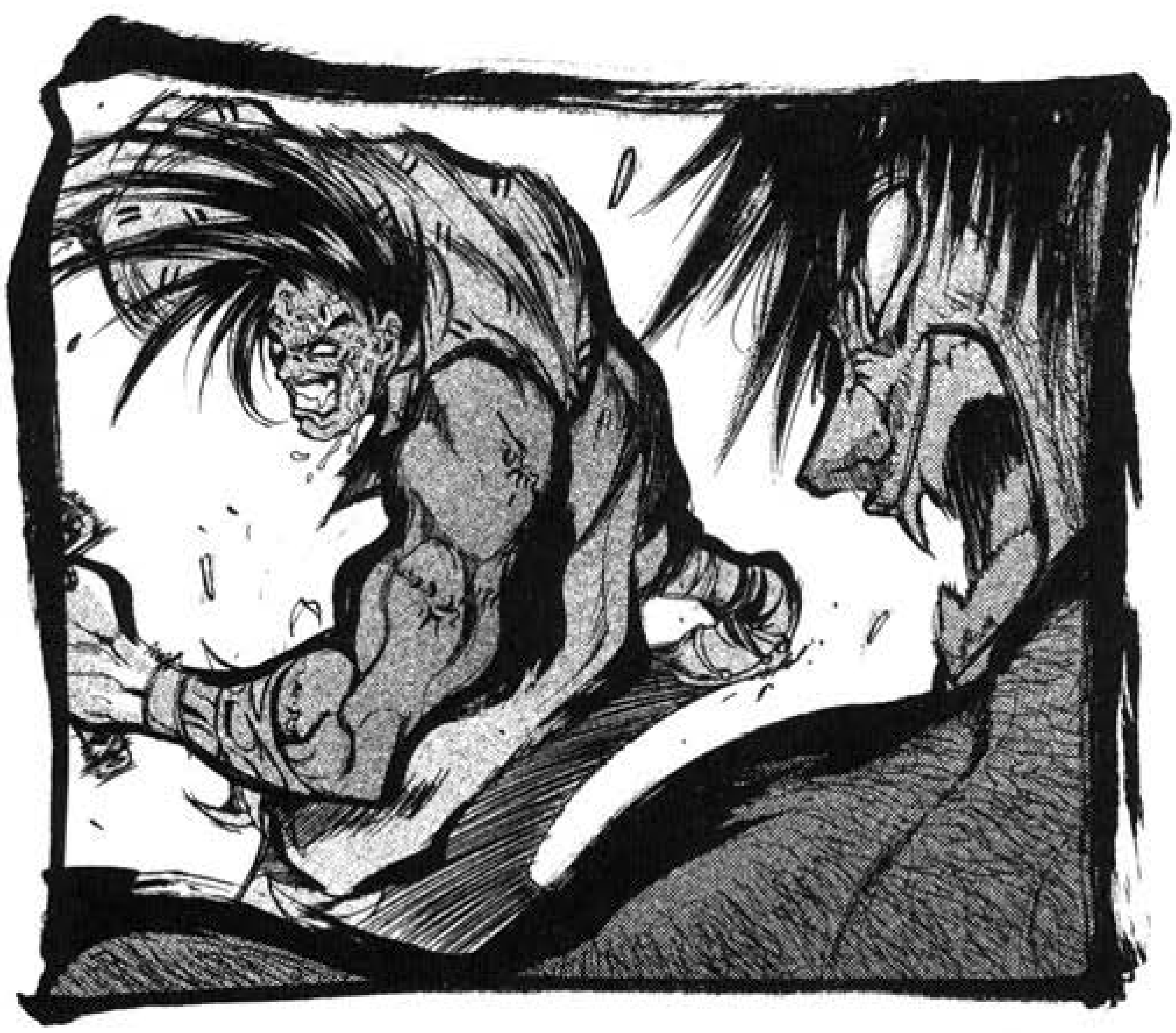
ところで三人のほうは、さらに酒が進んでいるようである。GMも見ていておもしろいので止めない。少々暴走ぎみである(笑)

雷蝶：真っ赤。「井ノ口のだんな！」
斬鬼丸(GM)：「はい？」
雷蝶：「はっきりしいや。アンタぁ結局、うちらを斬りに来てるンやろ？」
斬鬼丸(GM)：にこやかに返答。「いやぁ、そんなことにならなければいいな、とは思っておりますよ。もちろん」
雷蝶：「いーや！　その目はうちらを斬りたくてうずうずしとる目や！　うちにはわかる！」
烈堂：にやにやしながら見てるだけ(笑)　ま、こういう酒もたまにゃあいいやね。

七　斬鬼丸、牙を剥く

いつの間にか日も暮れかけ、作業に一段落ついた深影が部屋の中へと入って来る。同じころ、ヨロイの中にいるのではどうにも退屈だと言うので、須波も部屋に戻って来ることになった。

烈堂：「すいません、勝手にやってますわ」
GM：子供を除いた三人が酒を飲んでる。何か、一人だけ非常に出来上がってますけど(笑)
雷蝶：「姉ちゃん、ここに座って酌しいや！」
深影：無視して聞く。「で？」
烈堂：「しかし、さすがは山ン中、いい月ですなぁ」
深影：無視して聞く。「そちらで、話はついたのですか？」
烈堂：「モノがなけりゃあ話にならねェってことで、まぁ話はついてますがね」
斬鬼丸(GM)：「わたしは、三日待ってからでもかまいませんので」
雷蝶：「それじゃ遅いってさっきから言っとるやろうがァ！」と叫ぶ。明らかにまだ酔ってる(笑)
須波：ああ、忘れてました。父上から書状を預かっていたんですよね。「これを」
深影：開けて見ます。
GM：「陰陽師、深神香弦どのへ」
深影：む
GM：「あなた様の影を害した東条家、われらが相対する逆代と縁深きものなれば、われらの敵同じものと信ず。なればこそ、われら虎堂に力を貸していただきたく思うものなり」ま、だいたいこんなところか。
雷蝶：「なんや、姉ちゃんの手ぇが震えとるで？」
深影：書状を折り畳んで立ち上がる。「どうやら、状況が変わったようですね。どちらが地皇を持ってゆこうが関係ないと思っていたのですが……地皇は、虎堂のものです。逆代の使者どのは早々にお引き取り願いましょうか」
須波：え、マジ!?「あ、ありがとうございます！」
深影：「それに、このわたしも同行いたしましょう」
烈堂：へぇ、どういった心境の変化だい？
斬鬼丸(GM)：(目を細めて)「理由を……お聞かせ願えますかな？」
深影：「帰って、逆代どのに尋ねればよかろう？」
斬鬼丸(GM)：「ま、そりゃそうなんですけどね」
深影：「とはいえ、あなたとしては、虎堂にヨロイが渡らなければよいこと。ここでわたしたちを殺していけば、あなたの仕事は終わりというわけですね」
斬鬼丸(GM)：「よくお気づきで」にいっと笑う。
烈堂：刀を抜くぞ！
雷蝶：八連斬甲刀を構える！
須波：烈堂の後ろに隠れます(笑)
斬鬼丸(GM)：立ち上がって、「今……そうしようと思っていたところですよ」……ゆっくりと刀を抜く。で、流れるように深影に一太刀！　えーっと、7つ成功！
烈堂：気合を1点使って“追加行動”でサムライ化して、もう1点使って「“割り込み”(追加行動)！」　深影を斬ろうとした刀をねらうぞ！　あぁっ、目が悪い！　3つしか成功しねぇ(笑)　ちいっ！早ええ!!
深影：《式》を早打ちして目の前に現出させる。自分にそっくりの姿をしたやつです。さらに気合を使ってそいつが「“割り込み”」を！
GM：《式》が斬られて宙に霧散する。で、その



まま戦闘に入る。次から第1ラウンドだ。

ヒーローシステム、業システム“気合”

“因縁”にかかわるプレイをすることで得られる“気合”を使うと、この“追加行動”のほか、能力値や技能の一時的なブーストアップ、成長といったような、さまざまな恩恵にあずかることができる。しかし、気合を使えば使うほど、今度は“業”が増えてゆく。業が限界を超したPCは、修羅になる。NPC化。実質死亡と同じだ。

最初の一分

烈堂：<法術>の気弾攻撃。こいつでやつの目をつぶしてやる！　……ありゃ？　成功が低い。4成功。

GM：<回避>で避けるんだろ？　<回避>なんか持ってねェよ(笑)　ほれ、1個しか成功しねぇ。

烈堂：じゃ、3ダメージ。急所ねらいなんで、致命傷にダメージ入れてな。

斬鬼丸(GM)：「があッ！」と叫んで目を押さえる。

烈堂：今がチャーンス！　さらに追加行動して斬りかかる！　……あ全然だめだ！　3つだって。

斬鬼丸(GM)：8つ。

烈堂：5負け!?　痛ってェ！

雷蝶：「だ、ダンナ！」

GM：刀の武器修正が＋5なんで、5＋5の10ダメージな。

烈堂：「げはあっ！」……致命傷1と、活力9ダメージ入れる。

GM：斬鬼丸は焼けただれた両目を押さえるんだけど、下向いて、顔を上げると傷は治っている。「いやぁ、やられましたよ」だってさ。

雷蝶：「む、蟲!?　再生蟲入りかい？」

烈堂：「……相打ちってとこか」

斬鬼丸(GM)：「いやいや、ほら、わたしは無傷ですから」にやりと笑いながら、ゆっくりとサムライ化するぞ。

深影が《式》を書いて、このラウンドは終了する。《式》の具現は次ラウンドである。

二分目の出来事

雷蝶：「烈堂のダンナァ！　加勢はいるかい!?」

烈堂：「今ァ楽しいところなんだ。邪魔しねぇでくれるかい？」

斬鬼丸(GM)：「あなたに頂いたお酒、おいしかったですよ。ごちそうさまでした」

烈堂：「なぁに、お前の墓に、もう一杯かけてやるさ……行くぜ！」

さらなる攻防。気合を入れた渾身(こんしん)の一撃も天が味方せず、烈堂はさらに傷を負う。致命傷まで食らった烈堂は誰が見ても劣勢であった。

雷蝶：「烈堂のダンナァ！」

烈堂：額から流れる血をなめながら、「ちいっ、しくじったかァ……」

斬鬼丸(GM)：「なんだ。思ったより太刀筋が遅いですね。これはわたしの買いかぶりすぎでしたかな？」

烈堂：「なぁに、最後に立っているやつが一番強いのさ。そうだろ？」

斬鬼丸(GM)：「いーぃことばです。さぁ、どちらが最後まで立っていられるのか、続けましょうか」言った瞬間に斬りかかる！　6個成功ッす。

烈堂：斬り返しッ！　6個ぉ！

ぎぃんと、刃の打ち合う音がして、斬鬼丸の一撃は烈堂の刃で受け止められた！

斬鬼丸(GM)：「へぇ、言うだけのことはある。やりますね」

烈堂：「あんたァ強いなァ……斬鬼丸。名はおぼえとくぜ」因縁の新規設定だ。《仇敵：斬鬼丸(中級)》としよう。

ラウンドの最後に深影の打った《式》が斬鬼丸に向かって飛ぶ。それがどのような効力を持っているのかは皆知らないが、その攻撃に妨害を入れた者がいた。

雷蝶：気合を1点使って“追加行動”！　《式》を斬る！

深影：ああっ、わたしの《式》が～。

雷蝶：「真剣勝負を邪魔するつもりかい!?　勝負がつくまで手ェ出したらあかん！」

深影：「なら、あの男が死ぬのを黙って見ていろとでも？」

雷蝶：「弱いやつが死ぬのは定めや。ダンナもそう言っとったやンか」

深影：「だったら、見せていただこうじゃないですか」

そのころ、もう一度逃げ出して、ヨロイに乗り込んだ須波。

須波：ヨロイに乗り込んで、「頼むぞ、号破！」とかつぶやいて《感情：ヨロイへの愛情(中級)》で気合を(笑)

GM：やるなぁ(笑)

須波：で、今技能を上げるだけの気合がたまったので、<接合>を中級から上級に上げるです。

気合のもう一つの使いみちに“成長”がある。

このように技能を上げたり、能力値を上げたりできるのだ。

使えば業が増えてゆくのは、この場合も変わらないのだが。

三分目の出来事

烈堂：「そろそろ決めてやる！」7成功！
斬鬼丸(GM)：うあっ！　6！　1点抜けた！
烈堂：切り込んだ瞬間に柄の引き金を絞って《珠》を使う！　成功度1＋武器修正5＋《珠》3発で9ダメージ！
雷蝶：「見ぃや！　ダンナはやったやろうが！」……ああ、解説くらいしかでけへん(笑)

しかし、今度は斬鬼丸の攻撃をわずかにしのぎきれず、烈堂もダメージを受けてしまう。

GM：こっちの刀は珠剣じゃあないから、武器修正はそんなに高くないんだよな。
烈堂：そういや、死体を調べたとき、どうしてサムライだってわかんなかったんだ？
GM：そりゃ、《珠》を埋め込んでないからさ。
雷蝶：なんやて！　じゃ、じゃあ、自分の霊力だけでサムライ化しとんのか、このオッサンは！
斬鬼丸(GM)：そのとおり。「楽しいですねぇ」
烈堂：「まったくだ」、と言ってにぃっと歯を見せる。……気合をとろう。

このあと壁を壊して乱入しようとした須波のヨロイが、深影によって止められたりもしているのだが、まぁ瑣末事(さまつじ)ではある。

最後の一分間

斬鬼丸(GM)：「こんなに楽しいのは久しぶりですよ。他人と剣を交えていてね」
烈堂：「そろそろ、菜ッ葉を斬るのにゃあ飽きてたところさ、おれもな」
斬鬼丸(GM)：「いつまでも、続けていたいですよねぇ」
烈堂：「同感だ。だがな、芝居にァ幕引きがあるもんさね」
斬鬼丸(GM)：うれしそうな、悲しそうな表情で、「……続けましょうか」

斬鬼丸が刀を振り下ろす！　気合で烈堂は斬鬼丸の刀を受け流そうとしたが失敗。7点のダメージを受けてしまう。だが、その瞬間こそ烈堂のねらった好機だったのだった。

烈堂：「食らえやぁ！」　＜法術＞の気弾で刀をねらう！　少ねーえ！　4成功しかねぇよ。
GM：でも、＜回避＞技能使うしかねェんだよな。……あちゃ！　全部失敗。

烈堂の手のひらから放たれた気弾が斬鬼丸の刀をたたき折った！　折れた剣先は、宙高く飛んでから畳に突き刺さる。斬鬼丸は中ほどまでしかなくなった刀を見つめて、頭をかきながら烈堂に言った。

斬鬼丸(GM)：「あらら、まいりましたねぇ……ここらでやめません？」
雷蝶：あ、あそこまでやっておきながら(笑)
斬鬼丸(GM)：「刀がなくちゃつまんないですし」
烈堂：畳に刀を突き刺して
深影：もしもし？(笑)　誰の屋敷だと？(笑)
烈堂：「おれはこぶしでもいいんだが……あんたはそこまでの根性はあるかい？」
斬鬼丸(GM)：「わたしは、刃物が好きなんですよ」と言って笑う。
烈堂：おもしれェなァ(笑)　おれもひとしきり笑ってから、もう一度聞くぞ。「どうする？」
雷蝶：「ダンナの勝ちや。早よとどめ刺したり」
烈堂：……にやっと笑って、太刀を収める。「じゃあ、またな」
雷蝶：あら、「なんや、斬らへんのかいな」
烈堂：「こんなおもしれえやつ、今斬っちまっちゃもったいねぇ。今度、縁があったときにやらせてもらうさ。斬鬼丸、そういうわけだ。今は引いてくれや。それくらいは勝ったやつの言うことを聞いてもらうぜ」
斬鬼丸(GM)：「変わった人ですねぇ。九十六年生きてきても、あなたみたいな人は珍しいですよ」
須波：きゅうじゅうろくねん？
雷蝶：(ピン)　GM！　＜蟲術＞の《知識》で判定してええか？
GM：OK。2個成功すれば君の思ったとおりだ(笑)
雷蝶：出た……ちーぃッ。そういうことかァ！
GM：で、斬鬼丸は、もう一度烈堂に「また会いたいもんですねぇ。いつになるのかはわかりませんが、もう一度遊びたいものですよ。あなたみたいな人とはね。では、お先に失礼……」と言い残してから出て行く。

「強さ」と言うもの

烈堂：ぶはあッ！　と息を吐いて座り込んで、

傷の手当てを始めるぞ。ちとキツいい。
雷蝶：「ダンナ」、と烈堂に話しかける。「ダンナ、あいつはヤバいで。アイツは……絶対に負けへんよ」
烈堂：「ああ、今のおれじゃあ勝てねェ」
雷蝶：「そうやない……やつは、不死蟲飼いや。死なへん。何やってもあいつは死なないんや。勝つことはあっても、負けることはあらへん」
烈堂：「死が負けだなんて誰が言った？」
雷蝶：「え？　だ、だって、死んでも負けないなんてことがあるンか？」
烈堂：「け、まだまだ青いな嬢チャン。いいか、大事なのは生き死にじゃあねェ、心だ！　手前ェが負けだと思わねぇかぎり、それは負けじゃあねえのさ！」
雷蝶：「……わからんな」
烈堂：「弱さに心を食われねェかぎり、おれは強いままでいられる。おれは負けねぇ！　……死んだっていいさ、そいつに負けさえしなけりゃあな」
雷蝶：「サムライの言うことはよくわからんな」
深影：「この男の言うことは理解できない（理解できないのはわたしが人形だから？）」外に出る。
雷蝶：「うちも風に当たって来るわ」とか言ってから、もう一度振り向く。「あんな、ダンナの言うことはよくわからへんけど……さっきの果たし合いは格好よかったて」（《感情：烈堂への興味》取得）
須波：あー、僕もヨロイから降りて雷蝶サンたちの方に行くですー。
烈堂：おれは座って酒飲みながら休んでるよ（笑）　正直なところ、もうそれくらいしかできねェほど消耗しててよ。

須波が歩いてゆくと、作業場の方から人の声。近づいて見れば、深影がヨロイに向かって一人、語りかけているところであった。

深影：「これで……やっと、敵が討てるかもしれません……」
須波：えーとね、砂利踏んで音たてちゃう（笑）
深影：イカニモな展開（笑）　「誰？」
須波：「あ、そのう……きょうはお騒がせいたしました。ここで……地皇を見ていていいですか？」
深影：「このヨロイが今晩のうちに仕上がらなければ、困るのでしょう？」
須波：「邪魔は……いたしませんから」

夜は更けてゆく。

これからのこと。

GM：で、夜が明けて出発するわけだな？
須波：号破のほうは置いとくしかないんですよね？　しょうがないから明鏡と心珠だけ抜いておくです。
GM：了解。で、帰りの道中だが、半分まで来たあたりで、道の真ん中に倒れている男を見つける。須波、君の国の胴丸を着けた兵士だ。
烈堂：抱え起こす。治療できるか？
GM：もう虫の息で、たとえ治療したとしても間に合わないだろう。
烈堂：首を振って、せめて上を向かせてやろう。

「死亡ダメージ」と治療

“天羅万象”は変わったゲームで、“死亡”ダメージを受けてもすぐに死ぬことはない。そのキャラクターが本当に死ぬのは、

1. 活力が全快するタイミング
2. 気絶したとき

である。「活力が全快する～」というのは、つまりは「戦闘が終了したとき」と、「治療を受けたとき」、それに、「マスターが支持したとき」のこと。

従って、すでに“死亡”ダメージを受けているキャラクターを治療しようとすると、（活力が全快するので）死んでしまうのだ（笑）

烈堂のように「首を振って、せめて上を向かせてやる」くらいしかできないのもうなずけるだろう（笑）

GM：男は君らも会ったことがあるはずだ。あの、飯綱竜角だ。虎堂の陣にいた男だな。「おお、ぬしらか……」
須波：ヨロイから降りて駆け寄ります！
雷蝶：「どうしたんや、飯綱はん！　何があった！　虎堂はどうなった!?」
飯綱（GM）：「少々……遅かったようだ……もう……戻ってもむだぞ……」
須波：「ええっ、ど、どういうことですか？」
飯綱（GM）：「虎堂は……すでに……ない！」と絞り出すように言ってから、血の塊を吐く。
須波：!!
飯綱（GM）：「坊ちゃま……お逃げください……！　宗親様が、最後に頼まれたものです……！」懐刀を須波に手渡そうとするのだけど、手から滑り落ちてしまう。
須波：何も言えずに、涙を流しています。
深影：じゃあ代わりに男の胸倉をつかんで問いかける！
「虎堂、虎堂宗親はどうなったのです!?」
飯綱（GM）：「宗親どのは……戦死なされた……」
全員：あちゃあ！
飯綱（GM）：「お願いでございまする……どうか、どうか宗親どのの敵を、坊ちゃまと共に討ってくださいませ……!!」
深影：さらに揺さぶりをかけ、「誰だ、教えなさい！」
GM：答えません。
深影：叫ぶ！「答えなさい！　香弦様の敵は誰なのですッ!!　答えよッ!!」死体をいつまでも揺さぶっています。
雷蝶：地に落ちた懐刀を手にとって眺めながら「……国一つ落ちて、残ったのが懐刀一本か。勝手やなァ。勝手すぎるで」
烈堂：「言ったじゃねぇか。弱いやつは死ぬんだよ」
雷蝶：「（頭を激しく振って）だめや……だめや！」須波の肩をつかむ。「うちはなぁ、割り切れへんよ。そこまで割り切れへん！」

しばらくの沈黙。口を開いたのは、須波だった。

須波：「み、皆さん。虎堂家で無事なのは、わたしだけみたいです。わたしはこれから家を再興しなくちゃなりません。けど、わたしの手の中にあるのは地皇だけ。いくら地皇が強くても、それだけじゃ無理なんです。お願いです。皆さんの手を貸してください！」
雷蝶：「うちはやるで。手伝ったる」
烈堂：「坊っちゃん、アンタは弱い。国を作る、支えるなんてェことが、アンタにできるのかい？」
須波：そ、それは……「い、今はまだ無理かもしれませんけど、いつか必ず、それが成し遂げられるほどに強くなってみせます！　だから……だから！」
烈堂：「強くならなきゃなァ……」とぼそりとつぶやく。「強くなりてェんだったら、鍛えてやってもいいぜ」
須波：「ぜ、是非とも、是が非でも！」
雷蝶：「烈堂のだんな、ついて来てくれるンか？」
烈堂：「……まぁな。おれァ、ああいう子供に弱いんだよ」と言って苦笑い。
須波：「ありがとうございますゥ……」と言って、下向いて泣くです。（《感情：仲間への信頼》取得）
雷蝶：「で、深影はんはどないするンや？」
深影：立ち上がりながらきっぱりと「手を貸します」
須波：「ありがとうございます……」
深影：「ただ、条件があります。逆代の領主

を殺すこと」(《感情：須波への共感》取得)
須波：「望むところです、逆代大蔵はわが敵でもありますから」(《仇敵：逆代大蔵》取得)
烈堂：「おれも……強くならなきゃあなァ……」

そして帰るべき場所は失われる

虎堂の国に戻ることがかなわぬと知った一行は、そのままきびすを返して深神香弦邸へと戻ることにした。時間はたっぷりある。地皇も完成へ近づけることができるはずだ。とりあえず落ち着いて、それから今後の策を決めようというのが、一行の一致した結論だった。

GM：悪ぃ、まだつらい話がある。山のふもとに近づいて来ると、屋敷のあたりから黒い筋が立ち昇っている。
深影：何で!?　《式》を打って、屋敷まで運ばせます！
烈堂：「やべぇ！　若！　ちょいと乗っけてもらいますぜ！」ヨロイの肩に飛び乗る！
須波：了解！　ダーッシュ！
雷螺：「わたた、待ちぃやッ！」何とかしがみつく！

ひどいありさまだった。屋敷はほとんど焼かれ、残っている部分などないように見える。あとから追いついた三人が深影を探すと、深神香弦の墓の前で茫然(ぼうぜん)とひざをついていた。墓は暴かれ、中の遺体や、副葬品のすべてが引きずり出されていたのだ。

雷螺：「深影はん……」
深影：何も言わずに……墓を直し始めます……
須波：「て、手伝いますよ」
GM：数時間かかって、墓の修復が終わる。
深影：「須波さん、号破に入っていた、心珠を頂いては、いけないでしょうか……？」
須波：「え、かまいませんけれども……」

深影は受け取った心珠に《式》を打ち始めた。通常なら一定の時間で分解してしまう《式》だが、こうやって心珠から得られる霊力を利用することによって、半永久的に活動させることができるのである。

深影：で、《式》に墓の守りを命じます。
烈堂：誰かが墓を荒らそうとすると化け物が襲って来ると(笑)
深影：「それじゃあ、行きましょうか」
雷螺：「そういやぁ、これからの当てはあるンかい、坊主？」
須波：「そうですねぇ、隣国におばが嫁いでいるはずですから、まずはそこを頼ってみるのがいいかと」
雷螺：「なるほどな。じゃ、行こかいい」
深影：もう一度、墓の方に目をやって、「香弦様、さようなら……」もう振り返りません。

そして、四人は山を降りる。
道ははるかに険しく……遠い。

*次回、天羅戦国伝「**正義**」を刮目して待て！*

GM回想録「地皇」の頃

リプレイ第1回。連載なのか、単発なのかいまいちハッキリしないままだったので、いちおうここで終わってもいいように、あまり強い引きは作っていないつもり。
シナリオ的にも「新しいヨロイを受け取りに行ったら敵方の刺客がいて戦闘になってさあたいへん」という程度のものでしかなかった。
まあ、シナリオ準備をほとんどしないのはいつものことで、あまり決めないでおいてプレイヤーのしたいことをやらせてやろうというもくろみゆえである。
ちなみに、元ネタになったシナリオでは、ヨロイ乗り(須波)と陰陽師(御影)はNPC。PCの役目は護衛だけのものだったのだが、プレイヤーの技量を信じてその役割をPCに振ってみた。そのせいで須波と御影はスタートを固定された形になり、その後のロールプレイを型にはめてしまう結果になったかも知れない。
不死蟲を入れたのほほんサムライ、斬鬼丸はこの後しばらくGMのお気に入りNPCとなり、あちこちに登場することになる。

天羅万象リプレイ

天羅戦国伝

第2章

正義

村

三日後、一行は虎堂の領地を出て、木槌の領地へと向かうべく、歩みを東へと向けていた。木槌の領主は虎堂と縁続きゆえ、取り合えず身を寄せようと考えたのだった。

GM：……というわけ。
雷蝶：なるほどなァ。しかし、もう三日やろ？　食いもんとかは残っとるんかいな？
須波：ワタクシはヨロイに接合している間はお腹が減ることはありませんからヘイキ。
雷蝶：ち。
GM：じゃあ、近くの村の所在を知ってるか、<事情通>を【知力】でやってみて。

深影が近くに村の所在を知っていた。とりあえずそこに向かってみようという話になる。

須波：怪しまれるとアレなので、近くまで言った所でヨロイを降りて、歩いて行きます。
GM：村につくと、いくらかの家からは夕餉の支度か、煙が細く立ち上っている。外を出歩いている者の姿は見えないけどさ。
須波：「ごめんくださ〜い」
GM：返事はありません。
雷蝶：ん？　だって、飯炊きの煙も上がっとるんやろ？
烈堂：「怪しいものではない……」ッてわけにはいかねぇか(笑)
GM：戸は開けずに声が聞こえる。「……お前らにくれてやるものはなにもないよ！」
烈堂：あら。
須波：「ちゃんとお礼はいたしますからァ」
深影：「それに、乱暴なことをする気もございませんし」
GM：「ふン、あんたたちのそんな言い訳は聞き飽きたね」
深影：「あんたたちと言われましても」
烈堂：「まァ、こないだまで近くで戦があったんだ。どこぞの将兵が悪さァしてるってことは考えられるわな」
須波：「そんな！　わが虎堂の者たちに限って、そんなことをするわけがありません」
雷蝶：「なに甘っちょろいコト言うとんねん」
深影：とりあえず、家の方との話を続けましょう。「……何があったかは知りませんが、食べるものを分けていただければ十分なお礼はいたします」
GM：「食い物を分けろ、だって？　何言ってんだい、アンタたちが持って行ったせいで、自分らの食い扶持にも苦労してるんだ。とにかく帰っとくれ！」
須波：なにもしてないのにー(泣)
雷蝶：「……どする？」
烈堂：「なァに、人間、一日二日食わなかったからって死にゃあしねぇさね」
須波：「ぐぅ」(笑)
烈堂：「とりあえず、だ。なんにせよメシは食いてェが、盗みは性に合わねェ。山に入ってキノコやら、山菜やらでも食うさ」
須波：「へえ。キノコや山菜って、山で採れるんですか」
雷蝶：「なんや、食ったことないんか」
須波：「いえ、キノコや山菜っていうのは、目の前に料理として出て来るものしか見たことがなかったもので」
雷蝶：あきれる。「アンタなァ……」

山にもぐり、山菜をとる一行。

山菜を摘んで、その日の糧にすることを決めた4人は、山の中でさっそく山菜を探し始めた。なにしろ、急がないと日が暮れてしまう。

雷蝶：どういう技能を使えばいいんや、山菜探しなんて（笑）
GM：えー、＜事情通＞だとか、＜観察＞だとか、＜蠱術＞だとか、まぁなんでもいいよ、それらしい技能なら。能力値は【知覚】ね。

> **技能と能力値の組み合わせ**
>
> 判定において、技能と能力値を組み合わせて使うわけだが、この時に使用する技能と能力値は、関係のある技能と、関係のある能力値であれば、何でも使用して構わない。逆に、そここそがプレイヤーの想像力の見せ所だとも言えるだろう。

烈堂：うーん、＜観察＞技能はやはり高い方がいいな。今のうちに“気合”を10点使って、＜観察＞を初級から中級に上げとこう。
GM：“業”が10点上がること、忘れないようにな。

各人、そこそこ山菜を集めて来て、火でも起こして山菜を食べようかと言うところで、GMの声がかかった。

GM：振ってみて。
全員：え？

結果、烈堂と雷蝶、それに深影が成功する。がさり、という物音、人の気配、胴丸のこすれるがちゃがちゃという音を確かに森の方に聞いたのだ。やがて、音は再び闇の中へと消えてゆく。

雷蝶：「……なんや怪しいな。ちと見て来る」つーて、八連斬甲刀を構えて立ち上がる。
烈堂：「そんなでっかい獲物担いでちゃあ、見つけてくれって言ってるようなもんだぜ？」
雷蝶：「だからと言って……コイツを手離す気はあらへん」
深影：無言で、《式》を組みます。＜飛行能力＞と＜索敵能力＞を組んだ、小さなやつです。で、それを飛ばして探りに行かせましょう。

森に入った雷蝶は気づかれずに物音の主に近づくことができた。切り立った崖の所に、胴丸を着た、薄汚れた足軽様の男が二人。眼下に広がるのは先ほどの村か。

GM：二人の会話が聞こえて来るかな。「見ろよ、あいつら、飯の支度なんざしてやがるぜ」「おれたちに一粒残らず差し出したって言ったのによ、まだ残してやがった」「この様子だと、まだまだため込んでるな、あいつら」「よし、帰って報告だ」……てね。
雷蝶：こら、ついて行ったほうがよさそうやな。二人のあとを尾けるで。

GM：そろそろ時間かな。その様子を見ていた深影の《式》は、時間切れで分解してしまうよ。
深影：「盗賊のようですね……雷蝶さんがその盗賊を追って……」
須波：「ひ、一人だけで、ですか？」
深影：「……あ」（笑）

GM：雷蝶？　少し行った所でだな、二人は繋いであった馬に乗ってしまう。
雷蝶：「あら」
GM：で、馬に乗った二人は、すぐに見えなくなる。残念でした。
雷蝶：「（頭をぽりぽり掻いて）しゃあないなァ、戻るしかなさそうや……」みんなの所に帰るとするで。

烈堂：「どうした、まかれっちまったかい？」
雷蝶：「馬なんぞ持っとったわ、ヤツラ。さすがに追いつかれへん」
烈堂：「で、どうだったい？」
雷蝶：「あの村を襲うつもりや」
烈堂：「へェ、それで？」
雷蝶：あ、そのことばを聞いて、すごいびっくりした顔するで。「それで、やて!?　村が襲われたら、罪もない村人たちが犠牲になるんやで!?」
烈堂：「弱いヤツが死ぬのはアタリマエさ」
雷蝶：「それを守る力もないのに!?」
烈堂：「なら、奪われるまでだ」……《因縁：弱さに対する憎しみ》で、気合を取るぞ。
雷蝶：「ダンナ……アンタがそんな人だとは、思わんかったわ！」……《因縁：烈堂への興味》で気合を取ることにするで。
烈堂：「だがなぁ、こっから先の道中、いつまでも草ァ食って生きてくわけにもいかねぇ」
雷蝶：背中向けて立ち去ろうとしてたんやけど……足を止めて、振り向く。「……同情で言うとんのか？」
烈堂：「……そうじゃあねぇよ。生きてくためには飯が必要、それだけのことさ。それとも……同情してほしいのか？」
雷蝶：「（顔を真っ赤にしてわめく）だッ、誰がや!!」
深影：「むだなことにかかわっている間に、前へ進んだほうがよいのでは？」
烈堂：「ヤツラ、馬を持っていたと言ったな。長旅には馬は必要さね」
須波：目を輝かせて、言います。「と、言うことは野盗退治をやるんですね！　罪もない農民たちを脅かす野盗を、がんばってみんなで退治してやりましょう！」
雷蝶：（……須波にはつらいことに、ならなきゃええけどな……）

探索

動機、経緯はともかく、山に現れた野盗の本拠を探し出し、攻撃を仕掛けると言うことで合意した彼らは、さっそく相手の隠れ家を探すために動き始めた。

雷蝶：「で、見失ってもうた野盗の居場所を、どうやって見つけだすんや？」
深影：「わたしが」

ついと前に出た深影が、竹の墨入れと筆で、小さな紙の上に器用に模様を書き込む。
《式》だ。
深影の手の中で小さくはじけた紙片が、一つ目のカラスに生まれ変わる。カラスは羽ばたいて、闇の中へと飛んで行った。

雷蝶：「烈堂のだんな、野盗を退治するのには乗り気でなかったンとちゃうのか？」
烈堂：「おれが乗り気じゃなかったのは、村を守ることさ。一文にもなりゃしねぇ」
雷蝶：「アンタまさか、野盗の上前をピンはねする気か？」
烈堂：「悪いか？」
雷蝶：立ち上がって言うで。「そ、それじゃあアンタ、野盗と同じやんか！」
烈堂：「そうさ、おれぁ人を斬って飯を食う人間だからな。お前だってそうだろ？　その大層な刀は、いったい何のために持ってる？」
雷蝶：「義のない戦いは、タダの人殺しだ！」って叫ぶ！　んで、叫んだあとで、しまった、て顔になる。
烈堂：にやりと笑って、「なんだ……いい顔すんじゃねェか。ま、お前の好きなようにすればいいさ」
雷蝶：ブスッとした顔で、「結局は同じコトやろ」
烈堂：「おれァ自分の懐がいっぱいになる程度、いただければ十分さ。野盗みてェに根こそぎ持って行ったりはしねぇ」
雷蝶：うー、うまくあしらわれてる感じやなァ…

…「アンタ見てると、むかむかするで」
烈堂：「くくッ、怖いねぇ……いいかい？　弱いやつは奪われて、殺されるんだよ。それに文句を言うこともできねェのさ」
須波：「て、でも」
烈堂：「(須波をにらんで)そうさ、お前の父ちゃんだって、弱かったから殺された。国を守ることもできずにな」
深影：「烈堂さん」

今まで無言で、中空に視線を飛ばしていた深影が、口を挟んだ。野盗の隠れ家を探るために飛ばした《式》が、目当てのものを見つけたので、精神を集中させる必要がなくなったのだ。

深影：「……あなたの考えがどうだかは知りませんが、それを人に押しつけるものではありません」
烈堂：「ああ、そうだな。ま、こいつらがあんまり甘ェもんでよ」
雷螺：「甘いやて!?　大事なことや！」
須波：「そうですよ！」
雷螺：う、須波と息が合ってもうた、嫌な気分やなァ(笑)
烈堂：「優しいなァ……ま、それが命取りにならないことを祈るぜ。お前ェが倒れちゃあ、おれが苦労するんでな」
雷螺：「うちは……アンタみたいには絶対ならん！」向こうに歩いて行っちゃうで。

烈堂：「(雷螺の背中を見ながら)ま……頑張って見ろよ」

雷螺：一連の流れで、うちは“気合”を取れるわけやな。この場合、関係している“因縁”は《烈堂への興味》と、《自分は無用の存在だ》やから、その2つに関して、【共感】を使って判定して……成功度が気合になる、と。ああ、その前に気合使って【共感】を3から4に上げとこ。その方がたくさん気合が入るし(笑)
烈堂：おれは《弱さに対する憎しみ》で気合を取る。【共感】は高いから、結構気合入るぜ。
GM：【共感】高いから、ああいうコト言うんだよな？(笑)
烈堂：本当に低けりゃあ、最初っから村のヤツラ殺して食い物奪ってるさ(笑)

“気合”を取る

“天羅万象”をプレイする上で、いちばん大事なことが、“気合”を取ることだといっても過言ではないだろう。“気合”は、ヒーローポイントであり、経験値であり、ロールプレイの評価でもある。“因縁”に書かれたことに関するロールプレイを行なえば“気合”が得られるわけだが、それだけでは一人よがりなプレイになってしまいがちだ。自分の“因縁”を利用し、なおかつ他人の“因縁”を刺激するようなロールプレイを心掛けて見よう。

須波：お、追いかけて行って、雷螺さんに話しかけるです。「烈堂さん、どうしてあんな乱暴なことを言うんでしょうね」
雷螺：「アイツのことを言うんやない！」そっぽを向いて「あんなヤツ……」

四　深影が見たもの

天高く飛び上がった《式》はいったん旋回し、山全体を見渡す。《式》に“感覚結合”している深影にも、その《式》の見ている光景が見える。

やがて、山の奥に小さな光を発見した《式》は、ゆっくりと滑空して、そこへ近づいて行く。

GM：山の、君らとは反対側の方だ。岩壁に洞窟が口を開けている。その洞窟の入り口の両脇にたいまつが置かれているわけだ。
深影：見張りは？
GM：岩に腰掛けて、こっくりこっくりしているのが二人。
深影：《式》を、洞窟の中に送り込みます。

カラスが中に入って行く。その場にいたのならすえたにおいがしてきそうな、ぼろ切れと、酒と、脱ぎ捨てられた汚い胴丸があちこちに転がっている。

深影：おかしいですね？　盗賊と言うわりには人の数が少ない……もっと奥に行けますか？
GM：残念ながら時間切れだ。《式》が分解して、君の意識は急激に引き戻される。

五　襲撃前

深影：「……と言うわけです」
烈堂：「ふゥン、夜のうちに……やるか」
雷螺：「今すぐかい？」
烈堂：「もうちっと遅いほうがいいだろ。やるのは、夜明け近くだ。少し寝とくさ」

深夜。
どうしても寝つけない須波が、同様に起きている深影に話しかけた。

須波：「深影サン……ちょっと、いいでしょうか……？」
深影：「何です？」
須波：「あの人たちは……これから夜襲をするっていうのに、どうしてああやって寝ていられる

んでしょう？」
深影：「あの人たちは、それが仕事ですから」
須波：「そう……ですよね……。僕もいつか、ああいう風になれるのでしょうか……？」
深影：「人間は、自分が必要とするものになれば、それでいいんですよ。ほとんどの人間は、何が必要か、自分で決めることができます。そうでない者も、いるわけですけれどね……」
須波：「……」火を見つめて無言。

深影：《わたしは人形》の因縁で、"気合"を取ります。この場合、自分の事を語ったわけですから、【心力】の能力値を使うわけですね。
須波：僕は……ああッ！　自分の"因縁"に関係する行動や発言を何一つしていませんッ！　あのう、この場合は"気合"は……
GM：この場で新しい"因縁"を設定しないかぎり、取れない(笑)
須波：うう、ロールプレイを間違えましたァ〜

"気合"が取れない！

"因縁"に書かれた事でないかぎり、"気合"は稼ぐことができない。須波は自分の"因縁"をよく見ていなかったせいか、深影の気合を稼ぐのに協力しただけ、という結果になってしまった。まぁ、よくあることだ(笑)

むっくりと、酒瓶を抱いて寝ていた烈堂が目を覚まして起き上がった。無精ひげをぼりぼりとかきながら、須波に話しかける。

烈堂：「む、ン、そろそろか……どうしたい、若？　怖ェのかい？」
須波：「烈堂さんは、怖くないんですか？」
烈堂：「怖くねェよ。おれァ強いからな」
須波：「どうして、そんなに自信たっぷりなんですか？」
烈堂：「自信、か……自信て言うか、確信、かな。おれはこんな所じゃあ死なねぇっていうな。だって、そうだろ？　死にそうになったら逃げりゃあいいのさ。別に死ぬほどじゃあねェ。逃げたお前を、誰かが笑うだけさ」
須波：「強くなれば……怖くなくなるんですか……？」
烈堂：「そうさ」
深影：ぼそりと、会話に割り込みます。「烈堂さん」
烈堂：「何だい？」
深影：「なぜ……あなたは強くなろうと思ったのです？」
烈堂：「……弱いのがいやだったからさ」
深影：「理由のない強さなど、むなしいだけです……」
烈堂：「(深影をにらんで)アンタに知ってもらうような理由じゃあねェンだよ……」
須波：下を向いたまま、「それでも……僕は、強くなりたい……」とつぶやきます。

六　襲撃

須波：「雷螺さんを起こして来ます……雷螺さん？」
雷螺：「起きとるよ」
須波：「そろそろ……」
雷螺：「起きとる。アレだけまわりで騒がれちゃあ、目ェも覚めてまうわ」
須波：「あ、ご、ごめんなさい」
雷螺：「それでな、烈堂のだんなが夕方に言うとったこと……悔しいけれど、いくらかはあれも当たっとる。自分を守るときには、やっぱり力は必要なんや。自分を守れへんようやったら、死んでも文句は言えん。悔しいけれど、それはホンマや……悔しいけどな……」

夜明けまであと数刻。
山をぐるりと回った四人は、今、茂みの中に隠れて洞窟の見張りの様子をうかがっている。

烈堂：「見張りは二人か……軽いな」
雷螺：「ああ」
須波：そんな二人を見て、頼もしいなァと思います(笑)
雷螺：「アンタ今、頼もしいなァ、とか思うたやろ？(笑)」
須波：「え(笑)」
烈堂：「行くぜ」

茂みの中から、深影がクナイを投げた。クナイは二人の見張りに吸い込まれるようにして飛び、声もなく二人の見張りが倒れる。

GM：洞窟にはいるのは雷螺と烈堂だな。中は薄汚れた洞窟で、ぼろ切れ、食い物、酒、槍や刀、胴丸、そういったモノが無造作に転がっている。
雷螺：見た感じ、盗賊の隠れ家ってトコかい？
GM：ていうか、中継地点だな。人が住むには物がなさすぎる。そこで、【知覚】＜観察＞して見て。
雷螺：やーな予感やなァ……3個。
烈堂：5個。
GM：二人とも結構成功してるなァ。きっと、あちこちにあるんだろ。寝床らしいぼろ布の集まりの中に、気になる物を見つけるわけだ。
雷螺：気になる？　なんや？
GM：戦の時に足軽なんかが背負う旗印。
烈堂：つまみ上げて見るぜ。
GM：虎堂の旗印だな。
烈堂：「けッ、虎堂の残党か……やっぱりな」ニヤリと口もとをゆがめる。

雷蝶：それ見て「須波に……言うんか？」
烈堂：「言ってほしいのか？」
雷蝶：「ダンナ……それは、それだけはやめてくれ……！」
烈堂：「（あざけるような顔）ふぅん、優しいなァ」意地を張る理由もねェ、捨ててやるよ。
雷蝶：「優しいんやない、つらいだけや」
烈堂：「若が、手前ェに似てるから、かい？」
雷蝶：「それは……ッ!!」
烈堂：にやにや笑う。「気に障ったかい？　悪ィなぁ、年ィ取ってくると、口ばっかりが達者になっていけねぇや」
雷蝶：ダンナをにらんで、言うで。「……アンタ、気づいとんのか……？」
烈堂：「何を？　傭兵上りにしちゃあ、やけに育ちが良さそうだってことかい？」
雷蝶：「（烈堂の台詞が終わる前に）もうええもうええもうええ!!」

一瞬にらみ合う二人。

深影：「……どうしたんですか、騒いで」
烈堂：入って来たのか？
深影：二人とも遅いんだもの。
GM：須波は？
深影：置き去り（笑）
須波：「一人じゃ心細いですよう……（笑）」
雷蝶：「（顔を赤くして、そっぽを向く）……何でもない」
烈堂：「何でもねェとよ」
深影：「で、ここは……野盗の本拠ではなさそうですね？」あたりを見渡してそう言います。で、烈堂さんの足もとに落ちていた旗印を見つけてしまう。「虎堂の敗残兵が、野盗に、と言うことですか」
雷蝶：「深影はん、それ……須波には言わんといてくれるか……？」
深影：「なぜ？」
雷蝶：「……聞かんでくれ。アンタも人間ならわかるやろ……？」
深影：「あの子はこれから、国一つ相手に戦うという目的があります。こんなことからも逃げているようでは、その夢はいつまでも果たすことはできません」
雷蝶：「だからって……ほかにもやり方があるやろうが……！」
須波：「烈堂さ～ん、雷蝶さ～ん、それに深影さ～ん」
雷蝶：旗印を隠そうとする！　えーと、技能は何使えばええ？
GM：＜早業＞か、＜隠身＞か、その辺じゃないかな？　能力値は当然【敏捷】だね。
須波：あ、それは僕に【知覚】＜観察＞を判定しろということですね（笑）　コロコロ、3個成功しました。雷蝶さんは？
雷蝶：う……2個……。
須波：「そ、その旗印はっ！」と言うわけですね。
雷蝶：「こ、コレは……何でもないで！」
深影：「ここにいた盗賊は、虎堂の国の敗残兵でした」
雷蝶：ばっと振り返って、深影に食って掛かるで！「なんで言うンや!!」
深影：「まぁ、もしかしたら、野盗が落ち武者の旗印を奪ったのかも知れませんけれど」
須波：「そ、そうですよね！　きっとそうですよ、虎堂の者が、そんな、野盗なんて下卑た真似をするわけがありませんよ！」
深影：「そういうことにしておいてもよろしいですけれど、ね」
雷蝶：ちょっと驚いた顔をして、深影を見る。

洞窟の中にはほかには目新しい物はなく、一行は洞窟を出ることにした。

深影：「しかし、おかしいですね？　見張りが二人だけだというのは。それに、洞窟自体もそんなに大きくないし……」
GM：洞窟を出た時点で、全員【知覚】の＜戦闘系技能＞でロールして。
全員：コロコロ
GM：4つ以上成功した人は、山の下、村の方から風に乗って、火の爆ぜる音、ときの声、悲鳴、そのほかいろいろ聞こえてくるのがわかる。
須波：「む、村が！」
雷蝶：「しまった！」つって、駆け出す！
深影：「（烈堂に向かって）ついて行くんですか？」
烈堂：「まぁ、つきあってやるさ」

野盗、あるいは、敗残兵

村が襲われている。
家には火がかけられ、倉が破られ、手向かう者はみな斬り殺され、村は襲われている。

須波：叫びます「やめろおっ！」
雷蝶：手近な野盗を斬る！
GM：須波の声を聞いて振り返った瞬間に、そいつは雷蝶に首を切られて絶命する。

PC対雑魚

死亡ゲージを持っていないうえに、能力値も1～3ほどしか持っていない雑魚は、PCを相手にすればほぼ一撃で死に至ることになる。

例えば、ここで雷蝶が斬りつけた野盗は、雷蝶の攻撃が、野盗の成功度を2点上回れば（そして、ほとんどの場合はそうなる）、一撃で死んでしまうわけだ。

それが明らかだったので、この場面、GMはサイコロを振っていない。わざわざ雑魚を殺すためにサイコロを振るというのは、それなりの意味のあるときくらいだ。

須波：さらにヨロイを奥に進めて、手当たりしだいに盗賊たちを退治します！
GM：君が前に出ようとしたときだ。ヨロイの前に一人の武士が立ちふさがる。ヒゲも伸び放題で、ぎらぎらした眼をした中年だ。
須波：「そッ、そこを退け！　罪もない村人たちにこんなひどい仕打ち、許されると思っているのか!?」
武士(GM)：「応さ！　弱い者から奪うは当然！」須波はヨロイ乗り換えてるからね、そうでなけりゃあ展開も違ったかもしれないけど。
雷蝶：「待ちィ」前に出て、「うちがやる」
烈堂：おれと深影は、雑魚の始末をやってる。
雷蝶：「行くで！」振りかぶって……！
須波：あ、そこで武士の胴丸に付いた虎堂の紋に気がつきます。「ら、雷蝶さん、待って！」
雷蝶：腕を止める。「何や!?」
須波：「そ、その武者……虎堂の紋を付けています！」

敗残兵、あるいは、野盗

須波のことばを認めたくなくて、雷蝶は後ろを振り向かずに、目の前の武士をにらんだまま大声で叫ぶ。

雷蝶：「どうせ……盗んだ胴丸でも着込んでるンやろ！」
GM：じゃあ、ヨロイから聞こえる声に、武者のほうが目を見開く。「もしや、若？　須波様か!?」
須波：「ど、どうして僕の名を？」
武者(GM)：「この私、若様の兄上とも旧知であれば、陣中にては須波どののお顔も、お声も拝見したことがございます」
雷蝶：「ウソや！」斬りかかる！
GM：受けきれない！　ダメージを受ける。
雷蝶：《珠》は使わんで9ダメージ。「なぜ野盗なんぞに堕ちた！」
GM：当然まだ立ってる。「悪いのう、この橘周吾郎、共に戦った将兵を守らねばならぬ。小娘、ぬしに殺されるわけにはいかんのよ」
雷蝶：「弱いもんを泣かして、何の武士や！」
須波：「二人ともやめてッ！」と叫びながらヨロイから降りて、割って入ります。必要なら"気合"使って「割り込み("追加行動")」かけますが。
雷蝶：「何でヨロイを降りるんやァ!?」半泣き(笑)
須波：橘に向かって「な、何でこんな……？」
橘(GM)：「若。こたびの戦、虎堂の軍は大敗を喫し申した。そのことはご存じでございますな……しかし、われわれとて、ここで野たれ死ぬわけにはいき申さぬ」
須波：「そうだよ、虎堂再建のために……」
橘(GM)：「いいえ！　われわれが、生きていかねばならぬのでござる」
須波：「だから、僕が！」
橘(GM)：「須波どの、あなたが……それをできると申すのか？」
須波：「い、今は無理かもしれないけど……きっと、いつか！」
橘(GM)：悲しげに頭を振って、「いつか、でございますか。今でなければ、無理。われら、十年先まで、土のみを食らうて生き延びることなどできませぬ……ご免」刀を収め、背を向けて立ち去ろうとします。
雷蝶：背中に向かって「この先、ほかんトコでもおんなじことを繰り返すつもりかい？」
GM：無言で、そのまま彼は行こうとします。
雷蝶：なら、背中に斬りかかろうとするで。「待てや、答えを聞かせてもろうとらんでッ！」……あらら、低いわ。3成功。
GM：お、こっちも3個成功。振り向きざまに刀で止めることになるな。
雷蝶：「こッから先、ほかんトコでもおんなじことを繰り返えすっちゅうンやったら、うちはアンタを斬らなあかん」
橘(GM)：「部下を、仲間を飢えさせぬためにも、しかたのないことでござる」
雷蝶：「うちは、うちみたいな人間を増やすわけにはいかんのや」
橘(GM)：「わしがここで倒れれば、そのような人間が増える一因にもなろう」
雷蝶：「……どこまで行っても平行線やな。うちはあんたを斬らなあかん……」
橘(GM)：「楽に斬られはせぬぞ。わしとしても、仲間を路頭に迷わせたくははないのだ」
雷蝶：柄を握った手に力を込めながら、もう一度だけ、「昔、あたしを裏切った武将が同じことを言ってた……だから、お願いします。あの時と同じことを、もう……これ以上繰り返さないで……！」頭を激しく振りながら、「わかってるンや、本当はわかっとる。アンタの言うのも正しいってこともな。でも！　……うちはあんたを斬らなあかん」やるで、本気でや。せーのぉ！
須波：もう一度、二人の間に割って入ります！
GM＆雷蝶：なにィ？(ここで割り込まれるというのは予想外だったらしい(笑))
雷蝶：「どきや、須波ィ！」
須波：どきません、当然。そして、橘に向かってこう語りかけます。「た、橘。もし僕が虎堂を再興できたとしたら……その時は、僕のもとに参じてくれるか？」
雷蝶：「な、なに言うとんのや！　こいつら、自分の飯のためには、農民たちから奪い取ってでもっちゅうヤツラやで!?　それを、そんなことを許すッちゅうンか!?」
須波：「それでも……国というのは……存続させなくちゃならないものなんです……ッ！」

無言の時ののち、橘周吾郎は重々しく、口を開いた。

橘(GM)：背を向けて、顔を見せずに言う。「それがし、どのようなことがございましても、虎堂の殿に仕えようというこの気持ちは変わりませぬ」

橘のことば、須波のことばを聞いて、バカにしたような笑い声を上げた者がいた。振り返ると深影が、彼らを軽蔑したような目つきを見せて立っている。

深影：「須波さん、あなたはどんな国を作るつもりなんです？　あなたの作る国は山賊を集めてできるようなものなんですか？」
須波：「そ、そんな、義がわれわれにあれば、民もきっとわかってくれます！」
深影：「盗賊を集めて作った国に、民が従おうはずもありませんよ」
須波：「そんなことを、言わないでください！」
深影：「しかし、本当のことですよ？　目を背けてどうするんです。あなたは……逃げているだけじゃないんですか？」
須波：「りょ、領主としてしかたがない……」
深影：「そこで死んでいる村人にも、同じことが言えますか？　あなたがそれをできると言うのなら、あなたは盗賊と同じです」

一瞬、ことばに詰まる須波。
雷蝶が、その背中に向かって叫んだ。

雷蝶：「須波、もう一度だけ聞くで。この男、斬らんでええんやな、斬らんでええんやな!?」
須波：「僕が決めなきゃ、いけないんですか？僕はもう、何が正しくて、何が正しくないかわからない……」
雷蝶：「アンタが決めるンや。アンタが決めなきゃ誰が決めるンや!?」

救いを求めるようにまわりを見回す須波に、雷蝶が静かに語りかける。

雷蝶：「もう一度言うで。アンタが、領主なんや。アンタが決めな、あかん」
須波：下を向いて、歯を食いしばって「お……お願い、します……野盗を、征伐して……く、くだ、さい……！」

決断の結果

背を向けたままの橘周吾郎が、須波のことばを聞き、サムライを再び発動させた！

そして、その背中に向けて刀を構えるのは、口もとをゆがめて事の成り行きを見守っていた、サムライ、烈堂。

雷蝶：「何や」
烈堂：「お前ェ見てェな甘チャンじゃあ、切れやしねぇよ」マスター、おれもサムライ化な。
橘(GM)：「斬り合わねばならぬ、というわけか」
烈堂：「おれは別にかまわねぇぜ、お前ェがこのまま帰りゃあ、おれたちはお前ェのあとを追っかけて野盗の根城を探し出すだけさ」
橘(GM)：「そうはいかんから、斬り合わねばならぬ、と言うておる！」攻撃、8成功！
烈堂：こっちは7成功。斬り返せずか！
GM：ダメージは4点。
烈堂：重傷1点と、活力3点。橘の切り込みをかわせずに、血しぶきが舞うってところか。「やるね！」つぶやいて、今度はこっちから切りつける！　6成功！
橘(GM)：こっちも6成功！　がちんと、刃と刃が当たって火花を散らす！　「守らねばならぬ仲間もいるのでな！」次のラウンドに入って、こっちからの攻撃で4個成功。少ないッ！
烈堂：「負け犬は勝ちに回れねェんだよ！」6個成功！　2個勝ってるから、ダメージは7点だ！　「どうしたい、息が上がってねェか？」
橘(GM)：「なァに、まだまだこれからよ」
烈堂：言うね。じゃ、今度はこっちからの攻撃で、8成功！
GM：……6個。ダメージは？　7点？　《珠》を1個使って8点、そうですか、はぁ。

橘の刀の背を滑らせるようにして、肩口に烈堂の刃がたたき込まれる！　その瞬間、さらに引き金を絞り、烈堂は《珠》を爆発させた！

橘周吾郎の肩が砕け、左の腕が肩からちぎれ飛ぶ。

《珠》の中に封じ込まれていた《気》を刀身にかよわせ、絶大な破壊力を生む《珠刀》の威力である。

GM：この時点で"活力"3点以外は残っていないんだけど……最後の手段を使わせてもらおう。"死亡"ゲージにダメージを入れる。

手負いのほうが強いんだ！

活力1点、負傷度1マスが1ダメージに相当する"天羅万象"のダメージルールだが、ひとつだけ例外がある。"死亡"ゲージの存在だ。

何点のダメージであろうと、"死亡"に入れることで打ち消すことが可能なのである。

"死亡"ゲージにダメージの入ったキャラクターは、その後、戦闘が終了するか、活力が全快するタイミングで本当に"死亡"することになる。基本的にこれを逃れるすべはない。

しかし、すべての判定にサイコロを＋3できるというのが魅力なのも確か。君は死の誘惑から逃れることができるか？(笑)

通常の人間ならばすでに死に至っていてもおかしくないほどの深手を負いながら、ゆっくりと橘周吾郎は立ち上がった。残った右の腕だけでもう一度刀を構え、烈堂を見据える。

烈堂：「まぁだ立つか」
橘(GM)：「ぬしを足留めして……できるだけの仲間を逃がさねばならんのだよ」
烈堂：「むだだね！」とどめだ！　8個成功！
GM：うわ、あれだけサイコロ振ったのにまだ負けるかね、おれは(笑)　5個成功です。ダメージは8点でしたっけ？　えーと……ダメか。

烈堂の斬撃を受け止めようとした周吾郎の刀が、打ち込みの激しさに耐えきれずに折れた！

多量の血しぶきを上げ、橘周吾郎が今、ゆっくりと倒れる。

雷蝶：須波に向かって「見ときや。これがアンタの選んだ、結果や」
須波：ゆっくりと橘周吾郎のもとに歩み寄りながら「これで……良かったんでしょうか？」
雷蝶：「それと」と言って、須波を振り向かせてから、ほおを思いッ切りはたくで。
GM：サイコロを持つかね、君は(笑)
雷蝶：うちはマジに判定するで(笑)
須波：避けません、それは(笑)
雷蝶：コロコロ、2個成功や。素手のダメージやから、そのまま2ダメージやな。
須波：活力に1点と軽傷に1点入れます(笑)
GM：軽傷は「ほんの少しの傷や服が破れる程度」。　唇を切って血が流れるってことか(笑)

ダメージによる演出

"活力"も、"軽傷"も"重傷"も、結局のところ同じ「ダメージを受け止めるマス」でしかない。それなら、なぜそのように分かれているのか？　その答えが今、須波の取った行動に表れている。

この場合、須波は戦闘が終了すればすぐに回復するはずの"活力"にダメージを入れさえすれば、今は戦闘中ではないので、ダメージは結局無視できるはずだ。

それなのに須波が"軽傷"にダメージを入れたのは、ひとえに「唇を切って血を流す」という情景を演出したかったからにすぎない。

傷を負う→セリフを言う→気合を取る

一見、損をしているように見える須波の行動も、長い目で見れば得になっているのだ。

須波：「な、なにをするんですか……」
雷蝶：「決めるのが一歩遅かった。こいつはうちの気持ち分や」
須波：「ら、雷蝶さん……」
雷蝶：「アンタが斬るな言うたから斬らなかったンや。ホンマはうちが斬りたかったわ」
深影：「どうやら、山をぐるりと回った向こうに、根城があるようです」
雷蝶：どこで知ったンや、ンなこと（笑）
深影：先ほど、野盗を片づけていたときに（笑）
雷蝶：「どうする？　須波。行くンか？」
須波：「……」

炎に食われてゆく村と、目の前に倒れる橘周吾郎の体を交互に眺めてから、須波はゆっくりと、しかし確かに首を縦に振った。

村を眺める

一日後、夕刻。
野盗が根城にしていたのは、捨てられ、寂れた村であった。須波たち四人は村の様子を離れたところから探っている。

烈堂：「ふン、どうも様子がおかしいな……」
須波：「何がです？」
雷蝶：「見張りはおるし、胴丸を着込んだ足軽やらもおるけどな。子供やら、女やら……兵隊にゃならんヤツラも多すぎるってコトや」
烈堂：「ま、何にせよ、頭目だけを殺して、それで決まりさ」
須波：「ほかは？」
烈堂：「突っかかって来るやつなら死んでもらうだけ。そうでなけりゃあ、頭目がいなくなるんだ、雲散霧消さね」
須波：「雲散霧消して、そのあと……その人たちはどうなるんです？」
烈堂：「野たれ死ぬか、またどこかで盗賊をやるかだろうさ」
須波：「何も変わらないってことですか……そんなのってないと思う……」
烈堂：「じゃあ、どうするって言うんだい？　どうにもできねェだろ？」
雷蝶：「それでも……今よりはマシなはずや」
須波：「全員が幸せになるっていうのは、無理なんでしょうか……？」
烈堂：「幸せってのはな、不幸の向こう側にあるんだよ」
須波：「……？」
烈堂：「どっかに不幸なやつがいるから、誰かが幸せでいられるってことさ」
雷蝶：「誰かが気持ちよくなっとる向こう側には、誰かが犠牲になってるもんや」
須波：「そんな……」
雷蝶：「でもな、それをわかった振りして、何もせんのは悪いことや。だからうちら、今ここにおるンやろ？」
烈堂：「そこまでわかってるんなら、行くぜ」

須波の、因縁

《式》を飛ばして村の様子を探っていた深影が、ざっと見取り図を描いて、そのうちの一軒を指さした。

深影：「この家にいた男に向かって、足軽が敬語を使っていました。指導者かどうかはともかく、かなりの地位の男であることは間違いありませんね」
烈堂：「めんどックセェのは好みじゃねぇ。一気に片ァつけるぜ。若のヨロイで砲撃をかけてくれ。ヤツラが混乱しているすきに、一気に潜り込む」
深影：「砲撃をかけるなら、ここですね。武器のたぐいが山ほど集められていました」
雷蝶：「さ、始めるで！」

あとから突入する手はずの須波を残して、三人は村へと近づいて行った。村の縁で案の定見張りに見つかり、誰何される。

見張り（GM）：「おう、手前ェら、こんなところでなにをやっている？」
須波：「ひるるる……どっかーん！」
深影：うわ、早い（笑）
烈堂：「しょうがねェなァ！」と言って、目の前の見張りを一刀のもとに切り捨てる！
雷蝶：「ああもう、人の話を聞いとッたんかいまったく！」

連係がうまくいっていなかったのか、そういうロールプレイなのか、はたまたただ単に須波のプレイヤーが間違えただけなのか（笑）、予定よりも早く砲撃が始まってしまった！
予定は狂ってしまったが、だからといって初めからやり直しというわけにはいかない。腹をくくった三人は、爆発のせいでにわかに騒がしくなった村の奥へと駆け込んで行った。

雷蝶：「ッとにかく、強行突破かい？」
烈堂：「ンなことより、もっと楽な方法があるんだよ」そう言って、近くにいる足軽をとッ捕まえて叫ぶ。「おい、早いトコ報告に行かねぇと！　武器倉が一つ吹っ飛びやがった、こいつぁヨロイの仕業だぜ！」
足軽（GM）：「おお、すぐに行かねぇとたいへんだ！」駆け出す（笑）　たったったったった……
烈堂：ついてく（笑）　たったったったった……
雷蝶：あぜんとして見てる（笑）　「はッ、ついていかんと」（笑）
深影：さっき《式》でのぞいたとき、気になることがあったんで……烈堂とは違う方向に行きます。
GM：足軽は一軒の家……さっき深影が示したところだな、恐らく……に駆け寄って行って、その戸口をたたく。「たいへんです、飯綱どの、敵襲ですッ！」木戸が開けられると、中から出てきたのは壮年の男だな。「何事だ、騒々しい！」「何者かはわかりませんが、急に攻め込んできやがって……ヨロイまで連れてやがるんです！」

烈堂：そこで、案内してくれたこいつにゃあ悪ィが、背中から斬り殺させてもらう。
GM：「ぎゃ」とか何とか短く叫んで足軽が倒れる。それを見下ろしてから、男が今度は烈堂のほうをにらみつける。
烈堂：「というわけで、そいつらは今、アンタの目の前にいるってェことだ（にやり）」
GM：男は顔色一つ変えずに、「おぬしら……どこかで会ったか？」と言う。
雷蝶：会ってるンか？
GM：【知覚】の《事情通》で振ろう。難易度は0。成功すりゃいいよ。
雷蝶：なんや、簡単やな……あらら!?　し、失敗してもうた（笑）
烈堂：こっちは成功した。おれは知ってるってわけだ。「飯綱って言ったかい。なるほどね……」
GM：こないだ会った、飯綱竜角。あいつにそっくりか……？　少し、あいつよりも若いかなって感じ。
烈堂：「飯綱龍角どのの弟君か」

村のはずれの方から声が響いてくる。砲撃を終え、地皇に乗って村に突入した須波が、名のりを上げているのだ。

須波：「やあやあわれこそは、地皇駆る虎堂の須波なるぞ！」
飯綱（GM）：「須波？　若君は生きておられたのか!?」
烈堂：「そうだ。そして、この辺りを荒らす野盗どもを退治しに来た」
須波：そっちのほうに向かってずんずん進んで行くです。
雷蝶：ヨロイがこっちに近づいて来るの見て、「あの坊主、人の言うこと全ッ然聞いとらへんな（ため息）」
飯綱：同じく、ヨロイを見て、「号破（ごうは）ではない……？　ということは、須波どのは深神香弦のヨロイを手に入れることができたのか？」
烈堂：「間に合わなかったな。そいつぁすまなかったと思ってる」
雷蝶：あ、今やっと気づいたて（笑）「もしかして、あン時うちらにヨロイ取って来い言うた……」
烈堂：人の、弟。
雷蝶：「じゃ、何でこんなことしとるンや？」
飯綱（GM）：無言。
雷蝶：「昨日……村を襲いに来たやつにも言うたんやけど……アンタを斬らんで済む方法が一つだけあるンや……今すぐ……」
飯綱（GM）：割り込んで、「確かに、ぬしらと争わんで済む方法は、確かにある。おぬしらが、われらの仲間に加わるのだ」
雷蝶：「はぁ!?」

そのころ、別行動をとった深影は、村の中心近くにある家の一つに近づいていた。中をのぞくと、女、子供が集められているのだが、皆薄汚れてはいるが上等な着物を着ていて、どう見ても野盗が自らの欲望を処理するために近隣の村からさらってきた女とは思えない。

深影：木戸を開けて見ます。
GM：何の抵抗もなく、戸は開きます。中にいた女たちはおびえて壁にくっついていたけれど、中に入って来たのが若い女だったということで少し安心したようだ。
深影：「安心してください、あなたたちをどうこうしようというつもりはありませんから」
女（GM）：それを聞いて、顔がぱあッと明るくなる。「じゃ、じゃあ、虎堂の若様が呼びに行っていた味方が、ようやっと到着したと？」
深影：「え……」

飯綱のことばは続く。

飯綱（GM）：「そして、虎堂の家を再び興すのだ。頭首、虎堂貴親（たかちか）様のもとでな」
烈堂：「確ッかに、若の兄上の生死はおれたちにァわからなかったがな……」
雷蝶：「い、生きとったッちゅうことか？」
深影：二人のところに戻って来ます。「こっちはどうです？」
雷蝶：うつむいたままで、「……ヒドイやないか。須波はあんなに頑張ッとるのに……それが全部むだかい、ヒドイやないか！」
飯綱（GM）：「お家再興のためには不可欠なヨロイを一騎、持ち帰ってくださったのだ。若君の行ないはむだではないぞ」深影を見て「そちらはどなたかな？」
深影：「香弦様に仕えていた者でございます」
飯綱（GM）：「ほう、で、深神どのは？」
深影：「香弦様は、亡くなられました……」
飯綱（GM）：「そうであったか……われら落ち延びる途中、須波様の無事を心配なさっておられた貴親様と共に、深神どのの屋敷を訪れたのだが……その時は誰もおらなんだのでな」
雷蝶：屋敷って……荒らされとらんかったか？
烈堂：つまり、そういうことだろ。
深影：「屋敷を荒らしたのは……あなたがただと？」
飯綱：「……貴親どのの命じゃ。再興のためにはどのような汚いことでもしろとな……」
須波：破壊活動にも飽きてきたんで（笑）、みんなのところに行きます。
烈堂：じゃ、近づいて来た地皇に向かって「よぉ、おもしろェ話だ。お前ェの兄さん、どうやら生きてるぜ」
須波：「ええッ、た、貴親兄さんが!?」ヨロイから出て来ます！「兄上はどこに!?」
飯綱（GM）：「再興のための手駒を集めております。さ、須波どの。兄上の帰りを待ち、これよりは兄上を助け、虎堂を再興するのです」
雷蝶：叫ぶで、「ちょっと待てやァ！　須波、アンタそれでいいんか!?　こないだの決心はどうしたんやァ！　こいつらやッとることは泥棒と変わらん！　アンタ、泥棒の統領になるつもりかい!?」
飯綱（GM）：「若、若の連れは皆、無礼な者ばかりのようですな」
須波：「でも！　みんないい人たちです……！」

つまらなそうにしていた烈堂が、くるりと背を向けて、つぶやいた。

烈堂：「……仕事は終わりだ」
雷蝶：その背中に向かって、「それでいいんかい!?」
烈堂：「ああ、コッから先、虎堂のお家再興とやらにゃあ興味はねェ。おれァ降りるぜ」
雷蝶：「ちょ、ちょっと……！」
深影：「わたしも降ろさせてもらいます」
雷蝶：「ア、アンタら、須波見て何とも思わんのかい!?」
烈堂：「おれが手を貸すって約束したのァ……若が作る国だ。虎堂じゃあねェや。じゃあな」
雷蝶：「ダンナあああぁ!!」
須波：「ま、待ってください、烈堂さん……！」
烈堂：須波の声を聞いたなら、足を止める。
須波：飯綱に向かって、震える声でこう言います。「た、貴親兄さんがいない以上、ど、どこからどこまでを信じていいのかはわからない。だから、飯綱、お前のいうことを認めるわけにはいかない……！」
飯綱（GM）：「須波どの、そのようなもの言いでは、貴親どのに、虎堂の国に対して反旗を翻したと見られてもしかたありませんぞ？」
須波：「誰かの犠牲がなければ存続できないような国なら、ないほうがマシだと思います！」

“因縁”の減少

須波が今回のリプレイの頭のほうで言ったことと、逆のことを言っているのに気がついただろうか。一連のロールプレイによって、彼の心の中に生まれた「国」というモノに対する疑念がこの台詞を生んだ。

ここで、須波のプレイヤーは、彼の持っている《感情：国への忠誠》という因縁を、中級から初級に落としている。

“因縁”として特記されるほどに大事だったことが、軽くなり、なくなっていくところをロールプレイしようとしているのだ。

飯綱（GM）：「しかし、何百年もの間、国というものはそうやって続いてきたのですぞ」
須波：「だから……僕がそうじゃない国を作って……！」
深影：「御託は結構。香弦様の墓を荒らした罪は償っていただきます。須波どのの仲間であろうとなかろうと、関係ない」刀を懐から抜きます。
須波：「待ってください、深影さん！」
深影：「？」
須波：「僕が……やります……！」

雷蝶：「す、須波!? 何言うとんのや！ アンタ、死んでまうで!?」
烈堂：彼女を止めて、「やらせてやれよ」
雷蝶：「ダンナ、見殺しにするつもりかい!?」
烈堂：「そんなんじゃねェよ。ただ……若を、吹っ切らせてやりたくて、な……」
雷蝶：「ダ、ダンナ……」ちょっとびっくりしたように、烈堂の顔を見上げる。

飯綱（GM）：「若、無理でございます。それがしとしても若を切りとうはござらん。おあきらめくださいませ」
須波：刀を持ってよたよたしながら、「逆賊、飯綱！ おとなしく斬られろ！」と叫んで……コロコロ、1個しか成功しませんでした（笑）
GM：えー、こちらは6個も成功しておりまして、5個の差＋刀の武器修正5点で、10ダメージです。
須波：えー、重傷に1点、残りは全部全部活力に入れて、活力が－3まで下がって気絶しちゃいます。「きゅう」
雷蝶：「アンタ！ こんな子供を……！」
飯綱（GM）：「手加減はしたつもりでござるが……」
深影：倒れた須波と飯綱との間に、ずいと出ます。「次はわたしの相手をしていただきますよ」香幻様の墓を荒らした償いをしてもらいます……！

十二　武士として

……須波が再び目覚めたときには、すべては終わっていた。目が覚めた彼をのぞき込んでいる二つの顔、心配そうな雷蝶と、いつもの口もとをゆがめた表情の烈堂。

GM：飯綱が死んだせいで、今ここには兵たちを指導する者がいなくなっている。で、須波、君が目覚めて立ち上がると、それを認めた兵たちがみな、一斉に平伏する。
雷蝶：「なんや、何のつもりや」
兵（GM）：「われらを、導いてくださいませ、須波様！ どうか、ここにおとどまりください！」
須波：「……え」
兵（GM）：「わしらだけじゃあどうすればいいのかわからんのですっ！」
烈堂：「……すがることしか知らねェのかよ。この負け犬どもがあッ！」そこいらのやつを思いッきりけり飛ばす。
雷蝶：だめや、こいつら。楽なほうに楽なほうに、流れてくだけなんや……！ 「アンタら、刀ァ持っとるンやろ、頭かて付いとるやろ!?」
GM：「導いてくださる方がおらなんだら誰に向

かって刀を振ればいいのかもわかりませぬッ！どうか、どうかァ！」と言って何人もの兵たちが君らにすがり付いてくる。
烈堂：ムカつくぜ！　寄って来るヤツラを斬り倒す！
GM：烈堂に斬られたやつが血まみれになって地面に倒れると、それを見た残りが腰を抜かしてあとずさる。
烈堂：「行こうぜ、若。こんな腰抜けどもと遊んでるだけ、時間のむださ」
須波：「え、でも……」
雷蝶：「しゃあないんや……しゃあない……」

このまま彼らをほうっておけば、食料が尽きるか、落ち武者狩りの手にかかるか、いずれ死はまぬがれないであろう。それを知りながら、須波には、ほかの誰にも、彼らを救う手はなかった。
山を降りる道すがら、深影がぽつりと烈堂に向かってつぶやく。

深影：「烈堂さん、生きていく意味がなくなったとき、人はどうすればいいんでしょう？」
烈堂：「生きていくのに理由が必要かい？　くだらねェな。ま……どうしてもってんなら、新しい『意味』ってやつを探せよ」
GM：……で、皆さん山を降りて、さらに旅を続けるわけです。

国を興すということは、いったいどういうことなのだろうか？
答えはいまだ見つからないまま、彼らの旅はいつまで続くのか。

*次回、天羅戦国伝**「宝剣」**を括目して待て！*

GM回想録「正義」の頃

「立ち寄った村を襲っている野盗は須波の国の敗残兵だった」というコトだけが決まっていた。まあいつものコトではあるが。
今回のテーマは「須波君にイヤな気分を味合わせてやること」だった。その点に関しては、まあ成功ではないだろうか。
今回のプレイで、須波の目的「自分の国を興す」がはっきりと意識された。おかげでキャンペーンの方向付けもハッキリできるようになって、GMとしては胸をなで下ろしたのをおぼえている。
プレイをする際、「気合を取る部分と、因縁が上下する部分を重点的にやろう」と思っていたのだが、意識するというコトは、意識していないときはおろそかになっているということでもある。案の定、これ以後のプレイ、因縁の上下はプレイ中ほとんど忘れられ、プレイが終了した時点でまとめて行なわれるようになってしまう。
やれやれ（笑）

天羅万象リプレイ

天羅戦国伝 宝剣

第3章

束の間の休息

須波の母方の叔母が嫁いだ領地、木槌。

これから何を行なうにしろ、まずは木槌の領主、崎村階蔵のもとへ身を寄せようと考えてのことである。

GM：と、いうわけで、皆さんは現在、木槌の都入りを果たしたところです。
須波：えー、ヨロイには乗ったままなんでしょうか？
GM：そのとおり。戦から一週間、騒動もかなり収まってはいるものの、両国の雇われ兵として働いていた腕におぼえあるやつらが今でもこの辺をうろうろしているので、君たちもまァ、珍しいわけではない。
烈堂：ヨロイは……あ、虎堂のヨロイってわけじゃないのか。なるほどね。
須波：「それじゃ、さっそく叔母のところへ行きましょう」
烈堂：「悪いが、おれァ城に上がる気はないんでね。ちょっくら一杯引っ掛けて来るわ」
雷蝶：「うちも城なんかはまっぴらごめんや」
須波：「え」悲しそうなひとみで深影さんを見つめます（笑）
深影：「しょうがないですね、わたしはついていってあげましょう（笑）」

GM：それじゃ、城に行かないほうから。何するんだ？
烈堂：そりゃ、まずは酒場で一杯（笑）
雷蝶：うちも一緒に行くでェ（笑）
GM：それじゃあ、二人は『用心棒』（黒沢明監督、必見！）の冒頭に出てきた酒場みたいなところに入るわけだ（笑）　「へィらっしぇい！」とか。
烈堂：どっかと腰を降ろして「オヤジ、とりあえず飯と、酒だ！」
GM：「あいよ」

久しぶりの食事らしい食事に、しばし無言で取り組む二人。あらかた片づいたあたりで、雷蝶が口を開く。

雷蝶：「須波ら、大丈夫やろか……？」
烈堂：「さあな」
雷蝶：「なんや、ダンナはいつもそんなやなぁ……ま、ええわ。宿でも押さえとこか」
烈堂：「おれァちょっくら寄り道してくわ」
雷蝶：「？　どこに行くねん？」
烈堂：「なァに、これだけでッけェ都となりゃあ……へへ」
雷蝶：「なんや、そのいやらしい笑いは」
烈堂：「男にはイロイロあるのさ。じゃあな」と言って、酒場を出て行く。
雷蝶：あ、呼び止めるで。「ちょお待ち、ダンナ！」
烈堂：聞かない（笑）　とっとっと……走っていっちゃう（笑）

残された雷蝶。しばらく烈堂の消えていった方を見つめていたが、不意に悔しそうな表情になって、傍らの柱を思いっきりけりつける。

雷蝶：「そらアカンで、ダンナ……」

同時刻、須波はヨロイ《地皇》に乗り、深影と共に木槌の城の城門へとたどり着いた。

須波：「ごめんくださ〜い」
GM：見たこともないヨロイが城門に迫って来るんだ。かなり泡を食った様子の見張りが二人飛び出して来て、君の行く手を阻む。「待て待て待て待て一い！」
須波：「あー、虎堂家の須波と申す……」
GM：それを聞いて、見張りがざわと色めき立つわけだ。
深影：そりゃあねェ。あたりまえだわ（笑）
須波：「ご領主にお目通り願いたいのですが……」
GM：「し、しばし待たれよ！」とか叫んで、見張りはすっ飛んで行く。

しばらくの間、城門前に立ち尽くす二人。

GM：すっ飛んで戻って来た見張りが、息を整えてからこう尋ねる。「先の逆代めとの戦において、白沼守どのの二子、須波どのは討ち死になされたと聞き及んでおりますが？」
須波：ヨロイから出て来て、答えます。「信頼できる家臣たちの助けによって、何とか無事生き延びることができました」そこまで言ってから懐剣を取り出して、「これがそのしるし。虎堂家の家宝たる懐剣でございます」
GM：うーん、彼みたいな下っ端に見せてもなァ（笑）　ま、いいや。「では、中へ。領主、木槌守様にお会いになればすべてはっきりすること」だそうです。

中へ招かれた二人は、城内の中庭に地皇を止め、兵に導かれ天守へと向かう。

須波：いやぁ、これで安心ですね。
GM：すっかり安心してやがるな？（笑）　天守には、すでに二人が座している。中年の男のほうは領主、崎村階蔵。その横の女のほうは、その正妻、ゆう。
深影：え、正妻!?　すごーい。
須波：かなり近い親類ですよね。親兄弟も同じですか。
崎村（GM）：「虎堂家の次男、須波が、あの戦の中生きてこの城までたどり着いたと聞いたが、そちがそうか？」
須波：平伏したまま。「はい、そうでございます」懐剣を掲げて、「これが証。父上の持っておられた家宝の懐剣でございます」
崎村（GM）：身を乗り出して懐剣をよおく見てから、「おう、なるほど。その懐剣、確かに宗親殿の持っておられた物に相違ない。あの戦の中、よくぞ生き延びこの城までたどり着いた、須波よ！　さ、面を上げい」
須波：顔を上げて、二人を見据えます。
GM：君の顔を見て、叔母、ゆうが、うれしそうな顔をする。「よくぞ、無事ここまでたどり着けましたね、須波……」そうして、初めて横合いの深影に気がついたような顔をするわけだ。「須波、隣のお方は、どなたなのです？」
須波：「わたくしの旅を助けてくれました、かの陰陽師、深神香弦様の弟子、深影殿でございます」
ゆう（GM）：「須波を助けていただいて、ありがとうございます。わが夫、階蔵と共に、礼を言いますわ」
深影：もう一度軽く会釈します。
崎村（GM）：ごほんとせきばらい一つしてから、「さて、須波よ？　これから先、どうするつもりじゃ？」
須波：「はい、虎堂の国を再興せしめることこそが、私の使命であると思っております」
崎村（GM）：「再興。どのように？」
須波：う、みんなそう聞くんですよねェ（笑）「ち、力を蓄え、えーと、そのう……頑張ります（笑）」

プレイヤー一同大笑い。

須波：「いずれは……一国の領主として、恥ずかしくないほどの力量を身につけ……」われながらしどろもどろですねェ（笑）

しばしの間、何やら考え込むようなそぶりを見せた領主、崎村階蔵であったが、やがてゆっくりと口を開く。

崎村(GM)：「須波よ。ぬしの連れは、陰陽師どのだけなのか？」

須波：「いいえ。サムライの烈堂、それに、ヨロイ狩りの雷蝶と言う二人の者が、ほかにございます」

崎村(GM)：「なるほどなるほど……実はな、この城には、ぬしらのほかに一人、客人がおる。なかなかおもしろい客人でな、ぜひぬしにも会ってもらおうと思うのだが……連れがほかにもおるのであれば、その者たちにも引き合わせてみたいと思うておる」

須波：「はい」

崎村(GM)：「とはいえ、きょうはもう日も遅い。今より支度をするとなれば、かなりの時間もかかる。明日の夕刻、うたげを設けることとしようぞ。その場にて客人の話を聞かせてやろう。それで良いか？」

須波：「わかりました」

崎村(GM)：「ああ、それと、ぬしを無事に都まで連れて来てくれた恩人じゃ、あだやおろそかにはできぬ。連れの者たちの部屋の用意もさせてやろう」

深影：深々と一礼。「ありがとうございます。それでは、都で待っている二人を呼んで来ることとしましょう」

二　女を抱く

柔らかな夜風が、遊郭の窓枠に腰掛けた烈堂の体を覆う汗を飛ばす。足もとにしなだれかかった女が、彼の体に埋め込まれた《珠》の一つを指でなぞりながら、ささやきかけた。

遊女(GM)：「サムライってのは、みんなこんなにすごいのかい……？　ほれぼれしちゃうよ、ほんと……」

烈堂：それには口もとをゆがめて答えるだけ。「それよりも姐さん、このあたりは最近どうなんだい？」

遊女(GM)：「どこだったかじゃ、戦だなんだって物騒らしいけど、このあたりは静かなもんさ……流れモンの数が少し、増えた程度かしら……？」

烈堂：「この辺の殿様は、こないだまで戦ァやってた虎堂ンとこと仲が良かったってェ話じゃないか。このあたりも戦に巻き込まれるッかもしれねぇぜ？」

遊女(GM)：「それで頭を悩ませるのは殿様の仕事だよ。あたしらみたいな仕事のもんにとっては、戦は願ったりってトコだね」

烈堂：「……かもな」

須波：「すいませんが、もッのすごくでっかい刀を持った女の人がここにいると聞いたんですけれど……」

女中(GM)：「ああ、あの方。確かにお部屋に上がっておられますよ」

須波と深影は、烈堂と雷蝶が別れ際に入っ

ていった酒屋で教えられた旅篭に二人を探しに来ていた。階段を上り、部屋の中をのぞくと、険しい顔で外をにらんでいる雷蝶が一人。

深影：「烈堂さんは？」
雷蝶：「……知らヘンよ」
須波：「なんか……怒ってません？」
雷蝶：（見るからに不機嫌）「そんなことあらへん」

訳もわからずびくびくしながら、領主が城に部屋を用意してくれることを伝える須波。

雷蝶：「そうか。じゃ、行こか」
須波：「え？　でも、烈堂さんは？」
雷蝶：「あんなやつどうでもええ。来たけりゃ勝手に来るやろ」つーて、すたすた部屋を出て行く。「どうした、城に行くんやろ？」
深影：せめて烈堂さんには言づけを残していきましょうね（笑）「こういうどでかい人が来たら……」（笑）

須波：「わーい、ふかふかのお布団ー」（笑）

久々に屋根と布団のある所で寝られるということで、須波は大はしゃぎだった。ちなみに、この広い部屋は、彼のためだけに用意された部屋で、残りの三人は別室をあてがわれている。そちらはといえば、烈堂はまだ現れず、部屋には雷蝶と深影の二人きり。

深影：「気をつけたほうがいいかもしれません」
雷蝶：「何がや？」
深影：「この城には、わたしたちのほかにも客人がいるとか。もしかしたら逆代家の使者が来ている……ということも考えられますから」
雷蝶：「両天秤か。ない話やないな」
烈堂：そろそろそっちに到着ってころだな。ばらりと襖を開けて……
雷蝶：襖の方を向かないままで、「女ァ抱いて楽しかったか、ダンナ」
烈堂：（口もとをゆがめて）「まァね」
雷蝶：「ふーん……なァ、ダンナ。好きこのんで体売る女なんて、おらへんのやで。男のほうはそれでええかも知らんけど、女のほうは……つらいだけや」
烈堂：にやにや。
雷蝶：「今度、そんなまねしたら……許さへんで」
烈堂：「どうして？」
雷蝶：「うちの前で、そないなまねはしてほしくないんや」
烈堂：「だが、おれァ男だからねェ」
雷蝶：「それじゃあケダモノと変わらへんやんか！」
深影：「でも、烈堂さんは雷蝶さんのいい人ってわけでもないんですから……」と、冷静に（笑）
雷蝶：う（笑）「そ、そらそうやけど！」
烈堂：「ふうん……潔癖性だねェ。ま、お前のそういうところが、いいところなのかもしンねぇけどな」
雷蝶：「からかうんやない！（真っ赤）う、うちは、ただ……！」
烈堂：手のひらをひらひらさせて、「ま、いいや。せいぜい嬢ちゃんからは見えないようにするさ」
深影：一段落ついたようですんで、烈堂さんにもさっき雷蝶さんに話したことを説明しておきます。もう一人客がいるということをね。「名代が死に、領主たちが争い始めてから半年。この木槌の国は戦を経験していません。どういうつもりかは知りませんが、動き出すのならば遅いと言うことはありませんね」
雷蝶：まだ機嫌は悪いままなんやけど……「須波が裏切られる可能性もないわけやないってことやな……」
須波：お風呂上がりに三人のところに寄って見ます。がら。「ああ、烈堂さんも帰ってこられてたんですね」
烈堂：さっきまでの話は打ち切りな（笑）「おう、ついさっきな」
須波：「湯の用意ができてますから、皆さんも旅の疲れを落とされては？」
烈堂：「おお、いいね」
須波：「明日の夕方には、崎村様がうたげを設けてくださるそうですから、楽しみにしてましょう」

二　湯殿にて

きぬずれの音と共に、解かれた帯が床をはう。
城内の湯殿である。
見渡すほどというのが誇張ではないほどに広い湯殿に、人影はわずかに二つ。
雷蝶と、深影である。
ほこりまみれの着物を脱ぎながら、ふんまんやるかたないといった調子で雷蝶は吐き捨てた。

雷蝶：「アイツ……金で女を抱くなんて、信じられへん……！」
深影：「でも、それは烈堂さんの問題で、わたしや雷蝶さんが口を挟むようなことではないでしょう？」
雷蝶：「冷静やなァ。深影はんも女やったら、好きでもない男に抱かれるっちゅうのは死ぬよりつらいことやってわかるやろ？」
深影：湯の中に体を沈めながら、「……あいにく、わたしにはよくわかりません、そういうたぐいのことはね」
雷蝶：隣に乱暴に入って、「深影はんって、本ッ当にいつも冷静やなァ。深影はんが笑ろたり怒ったりしたとこって見たことないわ……あ、一度、あったか。あの時、お屋敷で須波の持って来た手紙見た時や。あれ……何が書いてあったンや？」
深影：しばらく間を置いてから、「……知りたいですか？」
雷蝶：「知りたいね」ニヤリ。
深影：「別に、たいしたことは書いてありませんでしたよ……わたしの主人を殺したのは誰だか、書いてあっただけです」
雷蝶：「深影はんは、自分のことなんにもしゃべらへんからなァ。そういうこと聞くの、初めてのような気がするわ」
深影：「雷蝶さんだって、自分のことなんかしゃべったことがないくせに」
雷蝶：「うちはタダの流れもんやから」
深影：「わたしだって、タダの陰陽師の弟子ですよ。留守のうちに主人を殺されてしまった、間抜けな、ね」
雷蝶：「……深影はんって、いつも淡々と話すなァ……」

二人ともが口をつぐみ、静寂のにおいにあたりが包まれた。
さらさらと手の上で湯をもてあそびながら、今度は深影のほうから問いかける。

深影：「雷蝶さんこそ……流れ者だって言うのなら、烈堂さんが女を買うことくらいにどうして目くじらを立てるんです？　よくある話じゃないですか」
雷蝶：「ああいう勝手な男をいっぱい見てきたからな、腹が立つンや」
深影：「どうして？」
雷蝶：「……言いたくあらへん……」
深影：さて、湯当たりしないうちに上がっちゃいましょうか。ざば。
雷蝶：うちも湯から上がりながら「深影はんは真っ白やし、肌もきれいやし……うちの傷だらけの体とは大違いやなァ。まるで……人形みたいや」
深影：立ち止まって「本当に人形だったら……どうします？」
雷蝶：くすりと笑いながら「どうするっちゅうても、深影はんは人間なんやし、どうもこうもないわ」

GM：二人があったまって帰って来ると、食事の膳が用意されていて、烈堂が先につまみ

で一杯引っ掛けている。
須波：僕も一緒にご飯していいですか？
GM：いいけど。
烈堂：「山菜やらなんやらが続いたからな、こういう飯がありがてェや」
雷蝶：「うちは山菜のほうが好きやね」
烈堂：……「ま、なんにせよ料理ってェのはいいもんだ。てめェで苦労しないでも誰かが作ってくれるってンなら、なおさらさ」
雷蝶：「うちは自分でこさえるほうがええと思うね」
須波：深影に小声で「……なんか雷蝶さん、機嫌悪いですか？」（笑）
深影：「少しね」（笑）

四 消えない、記憶

深夜。
ひどい悪夢にうなされて目が覚めてしまった雷蝶は、布団から跳ね起きた。
部屋を飛び出し、かわやへと駆け込み、胃を絞られる感覚に身をよじる。
吐き気が治まり、口もとをぬぐった雷蝶は、小さくぽつりとつぶやいた。

雷蝶：「……嫌な夢……」

五 超・一流

須波：「いやぁ、久しぶりのお布団でぐっすり眠れましたよ」
雷蝶：「……うちはやっぱり野宿のほうが性に合っとるなァ。なんや、落ち着かへんわ」
烈堂：「うたげを設けてくれるてェ話だが……夕方までは好きにしていていいんだろ？」
雷蝶：「……また女ァ買いに行くつもりかい」
烈堂：「呑む、買うと来りゃあ、次は打つしかねェだろ、へへ」

朝食を終え、四人はめいめい解散した。夕方までは自由なので、烈堂は須波を連れて（！）日も高いうちから博打を打ちに行ってしまい、深影は部屋に閉じこもって何やら考えている様子。そして、雷蝶はというと……

雷蝶：うちは中庭の隅ッちょで素振りや。
GM：そうしていると、声をかける男がいる。「剣の鍛錬か、娘」
雷蝶：そっちの方は向かないで、「……なんや、冷やかしかい？」
男（GM）：（薄く笑って）「いや、懐かしいな、と思ってな。そうやって強くなろうと努力することが、さ」
雷蝶：「ふぅーん」つって、そっちの方を向くで。
GM：30代半ば……ってトコかな。背が高くがっしりした、精かんな感じの武士……いや、サムライか。肩に届かない程度に長い髪の毛を後ろになでつけている。
雷蝶：「サムライか……」にぃッと笑ろて、いきなり斬りかかる！　サイコロは……3つか！
GM：じゃ、こっちもサイコロ振るよー。
雷蝶：ちょ、ちょっと待て！　マスター、いったい何個振るンや！
GM：10個。（ゴロロ）ひぃ、ふぅ、みぃ……
雷蝶：待てィ！　マスター、いったいサイの目いくつまで成功なんや！
GM：5まで。
雷蝶：と……特級ッ!?
GM：結局成功度は6。【知覚】を使った武器ねらいで、彼はやすやすと君の刀を止めるわけだ。

技能段階“特級”

技能段階は全部で５種類。“技能なし”“初級”“中級”“上級”そして“特級”がある。
ただし、ほとんどの場合（絶対、と言ってもいいくらいだ）、PCの技能は“上級”までしか上がることはない。
この広大な天羅にほんの一握りしか存在しない、一流を超えた超一流。それが“特級”の意味なのである。

雷蝶：「アンタ……タダモンやないな……？」
男（GM）：「いや、そんなことはないさ」
雷蝶：「じゃ、今のはマグレや……！　もう一度、手合わせしてくれんか？」
男（GM）：「いや、遠慮しておくよ。おれもこの城の客だ。騒動を起こしたくはないんでね」
雷蝶：「客……？　どこから来たンや」
男（GM）：「それはちょっと言えないなァ……まぁ、お前もこの城の兵ってわけじゃなさそうだ。なら、また会うこともあるだろうし、説明する機会もあるさ」くるりと背を向けて、城に戻ろうと……
雷蝶：うー、じゃ、背を向けた瞬間にもう一度振りかぶって……
男（GM）：「ああ、やめたほうがいい」
雷蝶：!!　うちはまだ何もしてへんでェ!?

男が消えたあと、しばらくあっただろうか。立ち尽くすだけであった雷蝶がつぶやく。

雷蝶：「一歩も、動けへんかった……うちより強いやつなんて、ぎょうさんおるンやなァ……くそッ!!」

六 領主の客人

そんなこんなで日も暮れ、城ではうたげの支度も整ったようだ。四人はすでに座につき、領主たちの到着を待っている。

雷蝶：「しっかし、うちが歯ァが立たんとは……うー、腹立つで」
須波：(小声で)「……なんか雷蝶さん、まだ機嫌悪くありません？」(笑)
烈堂：(小声で)「なんだい、まァだ怒ってんのか。……ふくれた女ァ扱いづらいっていうが……」
雷蝶：「聞こえとるで」
烈堂：首をすくめる(笑)
雷蝶：「……もう一人の客人ッていうのは、かなりできるやつやな」
須波：「あ、会ったんですか？」
雷蝶：「……まぁな」
GM：はい、その辺にしときな。領主様たちが入って来るよ。

領主、崎村階蔵のあとについて一人の男が入って来る。

烈堂：雷蝶に「アイツかい？」
雷蝶：「……ああ」
烈堂：「……なるほどね」
GM：男は、雷蝶の顔を認めて、笑いかける。「さっきは失礼したな」
雷蝶：仏頂面のまま、何も答えへんで。
崎村(GM)：「むむ、お二人は顔見知りであったかな？」
雷蝶：「いや、顔見知りッちゅうか……」
男(GM)：「彼女の剣の稽古につきあっただけでございますよ、ご領主」
雷蝶：「つきあった、ねぇ……」
須波：とりあえず、もう一度領主様に紹介するです。「こちらの者たちが、この旅を助けてくれた、サムライの烈堂、ヨロイ狩りの雷蝶でございます。陰陽師の深影は昨日紹介したかと」
崎村(GM)：「陰陽師どのとは昨日もお会いいたしたな。木槌の領主、崎村階蔵と申す。見知りおかれよ」
深影＆烈堂：頭を下げる。
雷蝶：うちは下げへんで。
崎村(GM)：「ああ、こちらからも紹介させていただこう。この方——一緒に入って来た男を指し示して——神来よりの使者……」
一同：じ、神来ィ!?
崎村(GM)：「弧焔どのと、申す」
一同：こここ、こ、弧焔!?

七 神宮家よりの提案

うたげが始まり、皆の前に上等な酒や山海の珍味があとからあとから並べられてゆく。(元)領主の息子がいるからなのか、神来＝神宮家からの使者を迎えているからなのか。

GM：うたげも盛り上がっているころだ。烈堂と並んでちびりちびりとやっていた弧焔が尋ねてくる。「戦は、激しかったのか？」
烈堂：「いやぁ……最初のほうこそ五分五分だったがね、最後は向こうの力押しさ」
弧焔(GM)：「……嫌なモノだな、国が亡びるというのは……」
雷蝶：アンタのせいで稲尾は今でも名代不在なんやで(笑)
烈堂：「でもまぁ、この国は……平和に見えますがね」
弧焔(GM)：「平和……平和か」
烈堂：へェ、「それとも……？」
GM：そこまで君が言ったときだ。弧焔は領主の方に向かって、こう言う。「ご領主、わたしがここにやって来た用向きを、そろそろ話すころではないですかな？」と言うと、領主が「おう、そうでございますな。では、われわれに話したのと同じことを、彼らにもお話しいただけるかな、弧焔どの？」
雷蝶：「それや、そいつを聞くために、うちらここにおるわけなんやし」
弧焔(GM)：「……では、始めさせてもらおうか」と、前置きをしてから、ゆっくりと話し始める。「この龍麟州扇牙国、名代不在のまま半年が過ぎている。長きにわたる戦により、民の命は失われ、国土は疲弊し……早急に国をまとめる者を必要としているこの時期、ただ、誰が一番であるかを決めるためだけの争いが続くばかり。ここに至って、神宮より、扇牙国の各領主に向けて一つの提案がなされた」
雷蝶：「提案？」
弧焔(GM)：「六十と余年前、時の名代であった奥祇松兵衛が神宮より授かった五ツ振りの宝剣、さまざまな理由により今は各地に散ら

なぜ彼らは驚くのか(笑)

広大な天羅の中央に位置し、全土を束ねる謎の存在、神宮家。彼らが居を構える地こそ神来であり、神来よりやって来たということは、それすなわち神宮家よりの使者であるという意味である。これが一つ目の理由。

そして、この男、弧焔。

彼は「天羅最強のサムライ」であると言われている。数年前のこと、当時稲尾の国のサムライ大将であった彼は、昨日までの仲間であるサムライ百人を殺し、稲尾の国を離れた。次に彼が現れた時には、彼は神来において、神宮家の食客という身分であった。

しかし、神来に現れて以来、彼が刀を抜いたところを見た者はいないし、彼がサムライ化したところを見た者もいない。

それなのに、最強とうたわれるということの意味を理解していただけるであろうか。

ばっているそれらを、再びひとまとめにすることができた者——その者を神宮家が、正式に名代と認めようと言うのだ」
一同：!!

提案を呑む

誰もが、ことばを失ってしまっていた。神来よりの使者、弧焔を除いて。弧焔のことばはなおも続く。

弧焔(GM)：「集める、と言うだけなら簡単にできるが、先の名代に宝刀が授けられてより六十年余り。この間に五本の宝刀は散り散りになり、そのうちには行方の知れぬものとてあるという……」
雷蝶：「しっかしなぁ、それって、当然ほかの領主のところにも知らされとるんやろ？　逆に、平地に波乱を起こすことにもならへんか？」
烈堂：「けっ、今のこの国が、平地かよ(笑)」
弧焔(GM)：「少なくとも、これで終わりが見えた」
烈堂：「宝探しか、おもしれェ。五つ集めりゃ誰でも、名代か」
弧焔(GM)：「まぁ、そういうことだ」

にやりと口もとをゆがめた烈堂が、不意に領主、崎村階蔵の方へと向き直り、尋ねた。

烈堂：「して、ご領主。この提言を受けて、どうなさるおつもりで？」
崎村(GM)：「もちろん、この扇牙国中を覆う戦乱を払底するために、一刻も早く宝刀を集めることこそが民のため、国土のため、亡くなった名代のためであると思うておる」
須波：「そのとおりです！」
烈堂：「(須波の方に顔を巡らせて)で、若はどうなさる？」
須波：「もちろん、この機会を逃すわけにはいきません！　そして、僕の理想としている戦のない国を造るんです！」
一同：(笑)
須波：笑うなよう(笑)「崎村様、ぜひ、そのために力をお貸しください！」
崎村(GM)：「いや、須波よ。わしのほうこそ、ぬしの力を借りたいと思うておったところよ。わしが五振りの宝剣を探す手伝いを、してはくれまいか？」
雷蝶：「？」
須波：「と、申しますと……」
崎村：「ぬしが言うとおりよ。戦のない国を造る、そのために宝剣を集めたい。だから、ぬしの協力を必要としておるのだ」
烈堂：「確かに。何の力も、後ろ盾もない若が名代になるってェより、新しい名代様より領地を御下賜いただくってェほうが現実的だァな」
深影：「でも、それでいいんですか？　宝刀のすべてを集めたあとに、それを持って自分が神宮家に走るとは考えない？」
烈堂：「そうして若が名代になっても、維持していけるたァ思えねぇだろ？　兵も、力もない子供がよ」
弧焔(GM)：「五振り集まったそれを、もっと強い者が奪い去り、名代となる。その男から、さらに強い男が奪ってゆく……そうすれば、そのうち戦は止まる……最強の男が名代となることでな」
雷蝶：「宝剣を持って須波が逃げ出す可能性は低いっちゅうことかい？」
深影：「宝剣を持って逃げ出してもすぐに追い殺されるということですね」
烈堂：「それに、意味もねェ。虎堂の領地を再び取り戻すのには、崎村どのが名代になるってのがいちばん確実なのさ」
崎村：「どうかね、須波よ。悪い話ではないと思うが？」

ほんのちょっとの逡巡。のち、須波は意を決して、応と答えた。

須波：「わかりました。尽力いたしましょう……崎村さまが名代になりました暁には……」
崎村(GM)：「心得ておる」

刀の行方

雷蝶：「(小声で)……なんか、だまされとる気もするんやけどなぁ……」

須波の答えを聞いて、相好を崩した領主が、話を次の段階に進める。

崎村(GM)：「さて、宝剣に関して、わかっておるかぎりの事柄を教えねばなるまい」
須波：居ずまいを正します(笑)
崎村(GM)：「虎堂の、宗親どのの先代の領主……おぬしにとっては祖父に当たる人物は、名代のおぼえもめでたく、時の名代より二本の宝剣を下賜されるに至ったと言われておる……おぬしがそのうちの一振りを携えてきたときには、正直驚いたぞ」
須波：「え？」も、もしかして……コレ？(笑)
GM：それです(笑)　さらに、領主のことばは続きます。「聞き及んだところによると、城に攻め入った逆代の兵は、二振りの刀のどちらも発見できなかったそうじゃ。そのうちの片方をぬしが持っているとすれば、もう一方を持っているのは、恐らく……」
烈堂：「若の兄上、貴親どのか」
崎村(GM)：「ほう、貴親の居場所を知っておるのか？」
須波：「え、ええ、手がかり程度ではございますが……」
雷蝶：「ほかの三本のありかもわかっとるんやったら教えてほしいもんやね」
崎村(GM)：「二本まではわかっておる」
烈堂：「ほほう」
崎村(GM)：「北の千倉領の領主、東条英乃信が一振りを」
深影：「む」

須波の仇敵である逆代家と縁が深い東条家は、この混乱する扇牙国の中でかなりの力を有するに至っている。
そして、深影の主人、陰陽師、深神香弦を殺害した、深影の直接の仇敵でもある。

崎村(GM)：「そしてもう一振りは、恐らくは水の底……」
一同：「はァ？」
崎村(GM)：「三十年ほど前のことか。先代の名代が時の石動領主に宝剣の一本を授けたそうじゃ。そして、その帰り……荷を乗せた船が海賊に襲われた」
須波：「海……賊？」
深影：「東の岸白湖ですか」
崎村(GM)：「湖の底だと言われておる」

烈堂が、不精ひげをなでながら、言った。

烈堂：「で、最後の一本は行方知れずってコトか。さて、若。どこから始める？」

兄のもとへ

その後、四人が相談をした結果、まずはいちばん近いところ——須波の兄、貴親がいるであろうと思われる野盗の隠れ里へと向かおうということになった。ヨロイのある須波以外の三人は、領主に借りた馬に乗っている。

雷蝶：(須波に向かって)「そういや宴会のあと、領主様のところに頼み事に行ってたようやけど、何だったんや？」
須波：「ええ……野盗に身を落として、このままでは征伐されるだけの元虎堂の将兵たちを、崎村様のもとで召し抱えてはくれぬかとお願いしに行ったのですが……」
烈堂：「ダメだったろ？」

須波：「……はい。『昨日まで守るべき領民だった者から、食い扶持を奪って生き延びようとするようなやからを信用はできぬ』と……」
烈堂：「ま、それが正しい判断ってとこさね。で、覚悟はできてるんだろ？」
須波：「は、はい……もし、お兄様が話してもわかってくださらないのでしたら……」
深影：「だったら？」
須波：「僕が……僕が、この手で……」
雷蝶：(割り込んで)「ま、それは向こうに行ってからで、ええやろ」
烈堂：「さてさて、どうなるかねェ……」

一日の野営ののち、やがて前方に山が見えてくる。虎堂の敗残兵がこもる隠れ里が、この山の奥にある。一週間前にも彼らはここに訪れ、そして、野盗に身をやつした先日までの同胞を切り捨てたのだった。

須波：「戻って……来ましたね……」
雷蝶：「あいつら、まだアソコにおるんやろか……？」
烈堂：「いるさ」
深影：「ずいぶん自信たっぷりですね」
烈堂：「新しい生活が始められるんだったら、最初ッからあんなところで野盗なんざやりゃしねぇよ」

はたして、烈堂のせりふどおりだった。深影が《式》を飛ばして偵察してみれば、兵たちはまだその場にとどまっていた。深影の《式》が飛び、村を歩く兵の一人に憑依する。

GM：《式》が憑依したと同時に、兵の記憶が深影に流れ込んでくる。それによると、君たちがここを離れてから二日したところで、須波の兄、虎堂貴親が戻ってきたらしい。すでに逆代の野盗狩りが、この地を突き止めているらしいという話を携えてね。で、貴親の号令一下、立ち向かう準備を進めているところだ。
深影：では、そのことを三人にも伝えましょう。
須波：「では、僕が出ていって、お兄様に話を……」
烈堂：「ま、いいんじゃねぇの？」
須波：「では、行きます！」

十　再会

突然現れたヨロイの姿を見て、当然ながら里は大騒ぎになる。刀や槍を構えて牽制する見張りの者たちに囲まれて、ヨロイに接合したまま、須波が叫んだ。

須波：「虎堂家の須波、貴親兄様に会いに来ました！　兄上を出してください！」

声に応じて、人垣が割れ、二十前後のやせた男が現れた。須波の兄、虎堂貴親その人である。護衛だろうか、銃槍使いが一人、脇に従っている。

須波：「兄上！」
貴親(GM)：「何をしに戻ってきた」
雷蝶：「ごあいさつやね。久しぶりに会った弟に向かって」
貴親(GM)：「僕がいない間におまえがここでやったことは、聞き及んでいるぞ」

再び、貴親が鋭い視線を須波のヨロイ、地皇に向ける。

貴親(GM)：「もう一度聞こう、須波。なぜここに戻ってきた？」
須波：「兄上をご説得しに参りました。兄上、このようなところで、野盗の頭目などなさらず……！」
貴親(GM)：「僕を……この兄を、野盗と呼ぶか」
須波：「野盗以外の何だと言うのです！」
貴親(GM)：「ここからこそ、虎堂の領地を再建するのだ。この地こそが、虎堂の国よ」
雷蝶：「村人から食いもん奪いながら、なァにが再建や」
貴親(GM)：「領主というものは、民衆の協力なくしてはいられないものなのだよ」
須波：「領民たちを苦しめずに済む方法が……あります」
貴親(GM)：「ほう、そんなモノがあるのだったら、ぜひ教えてほしいものだな」
須波：「兄上の持っておられる刀――この、僕の持っている懐剣と対になったそれを持って、ご同道いただきたいところがございます」
貴親(GM)：「この……刀だと？　父上の形見のこれが、どうした？」
須波：「それさえあれば、この国の名代となれるという話なのです」
貴親(GM)：「名代？　これと……おまえの持っているそれとで、か？」
雷蝶：「二本だけやあらへんけどな」
貴親(GM)：「ならば！　須波、おまえの持つ刀を、僕によこせ」
須波：「……それはできません」
貴親(GM)：「僕はおまえの兄だぞ」
須波：「しかし、兄上……今のあなたは……野盗の頭目ではありませんか！」
一同：言った！
貴親(GM)：「違う！　今はここが虎堂。僕は虎堂の領主だ」
須波：「こんなものを虎堂の国だとは、僕は認めません」
雷蝶：「ふン、野盗の集団が虎堂か。落ちたモンやな」
貴親(GM)：「落ちたからこそ、再びはい上がろうとしているのだ！」
雷蝶：「それにしたって、やりようがあるやろ。正式な手順を踏んで……」

雷蝶のせりふにかぶさるように、傍らにいた銃槍使いが口を開いた。

銃槍使い(GM)：「手順か。ならば若、話は早い。さきほど弟君が言ったではないですか。あの刀を手にすれば、よいのでしょう?」
雷蝶：あ、やば。誘われた(笑)
貴親(GM)：(須波の方へ手を伸ばして)「さァ、須波……その刀を僕に渡すんだ……」
須波：(懐剣を胸にかき抱いて)「い、いやです！ 野盗の頭目に成り下がったあなたを……僕は兄だとは認めません！」
貴親(GM)：「それほどまで拒むか……残念だが、おまえはもう、僕の弟ではないと言うことだな」
須波：「……」
貴親(GM)：「でも、僕はこの刀を渡すつもりはないぞ」
須波：「それは僕とて同じ……」
貴親(GM)：「どうすればいいと思う?」
須波：「こうなるのが……怖かったんです、本当は……」
貴親(GM)：「?」
須波：「でも、みんなが励ましてくれたから……だから、言えます。逆賊、虎堂……貴親。お前を……征伐する！」

十二 別離

ヨロイ、地皇が刀を構える。それと同時に、貴親が叫んだ。

貴親(GM)：「お前の力は、そのヨロイか。僕の力は、僕に付き従う兵たち。ものども！ 相手はたかがヨロイ一騎、かかれぃ！」

槍を、刀を構えた兵士たちが、ヨロイに襲いかかろうとする！

雷蝶：「バッ……！ むだな人死にが出るだけやぞ！」
烈堂：「全員殺すつもりで来たンじゃねぇのか? ……おれァそのつもりだぜ」

次々と兵がヨロイに向かって刀を振り上げ、そして斬り倒されてゆく。

GM：7人目の攻撃……あ、成功しないや。
須波：こちらは……8個成功しました。8成功＋武器修正9で、17ダメージです。
GM：はい、胴体が真っ二つ。次のやつが……今度は1個成功。
須波：こっちは7個成功で……15ダメージ。
GM：はい、8人目も一太刀で肉の塊になりました、と。
深影：……一方的な、殺戮ね。
雷蝶：叫ぶ！ 「貴親ァ！ アンタかてわかったやろうが！ ヨロイ一騎に何百人束になったかて、勝てへんちゅうことが！」

たった一分で、襲いかかった兵たちはみな、物言わぬ骸に成り果ててしまっていた。ずいと雷蝶が前に進み出て、貴親に向かって叫ぶ。

雷蝶：「わかっとるやろ? ヨロイ相手に何百人ぶつけても、むだなだけや。一騎打ちといこうやないか。アンタんトコで一番強いやつと、うちで果たし合いや」
貴親(GM)：(非常に狼狽しながら)「つッ、次はどうした！ おい、お前行け！ は、早く僕を守れ!!」と、銃槍使いに。男の方は「いただくモンさえいただけるんなら、ま、なんでもしやすがね」と言って、ずいと前に出る。
須波：「兄上……堕ちたり！」

十三 二本の宝剣

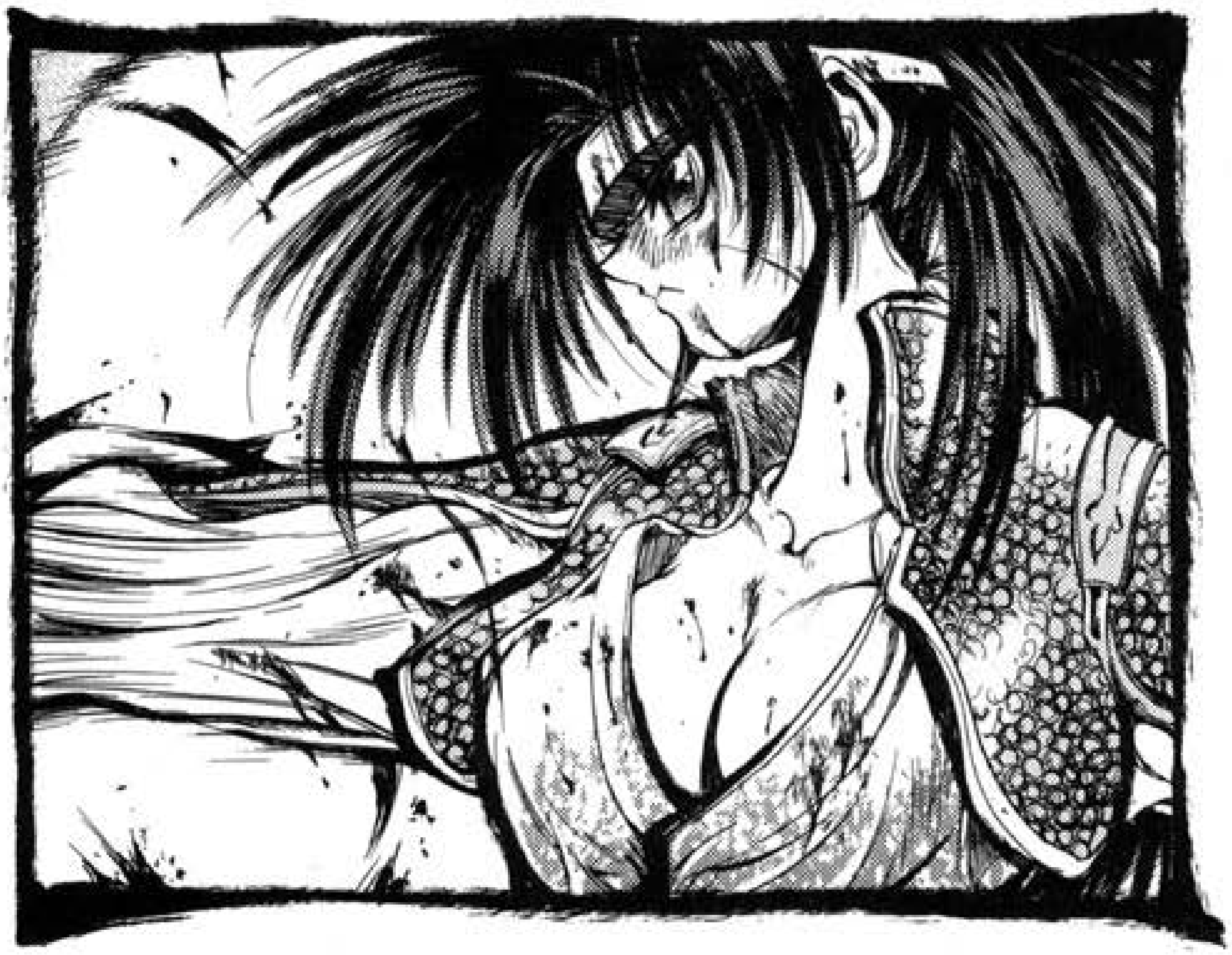
雷蝶：いやー、うち、キャンペーン始まって以来初めて、本格的な戦闘やねん(笑)
GM：第1ラウンドの行動。「ま、ちゃちゃっといこうじゃねぇか！」サムライ化します。
雷蝶：“気合”10点使ってサイコロ10個増やして、19個振るでー。おら！ ……13個成功や。
GM：んだと!? ……こっちは10個成功。
雷蝶：[3成功度＋武器修正6＋《珠》8発]で、ダメージ17点！
GM：うわー、死ぬかと思った……
烈堂：「へぇ、まだ立ってるか。さすがに……やるね」
GM：次のラウンド入って、こっちから。男が「行くぜ！」つって攻撃……13個成功！
雷蝶：うちは7つ成功や。
GM：[成功度6＋武器修正4]で、ダメージ10点！
雷蝶：全部負傷に回したけど、まだ立ッとる！
GM：うわ、サイコロそんなに振りますか(笑)
雷蝶：モトモトの能力値に加えて、今のダメージを“致命傷”に入れた分のボーナスと、“気合”を10点使って、サイコロを10個増やした分があるさかいな(笑)
GM：お、多い～(笑) 恐るべし、“気合”(笑)
雷蝶：「今度はこっちからや！ いっくでえええッ！」(ゴロゴロゴロゴロ)19成功や！
GM：あ、受けきれねぇよそれ、さすがに！ こっちは15個成功だったから……
烈堂：15個ォ!? 人間かよ、ソイツ……
雷蝶：ダメージは18ダメージ！
GM：あー、そら当然保たねぇや。“致命傷”までの負傷度が全部埋まって、“活力”が－14まで下がって、昏睡状態ってヤツですか。ばた。
雷蝶：あらら、二撃で倒れてもうた。
深影：そりゃ、2回も連続で“気合”10点も使えばねェ(笑)
雷蝶：だーって、ここまでぜんぜん“気合”使っとらへんかったから、“業”も全然たまっとらんのやもん(笑)
GM：お、おれのNPCが～(笑)
雷蝶：とりあえず……ぐい、と貴親の方をにらむで。
GM：貴親が後ずさりながら、腰の刀を押さえる。
須波：ヨロイから降りて、「兄上、刀をお渡しください」
貴親(GM)：「わッ、渡さないぞ！ 僕が虎堂の領主なんだ！」
須波：「……兄上……誰が、それを認めるでしょうか……?」
貴親(GM)：「みなが認めているに決まっている！ そうだろう!?」と、振り向くと──

貴親を見返すは、冷ややかな視線ばかり。

須波：「おわかりでしょう、兄上……お願いいたします。刀さえ渡していただければ、お命までとは申しませんから」
貴親(GM)：「そ、そんなことを言って、刀を渡したが最後、こいつら──烈堂や雷蝶を指して──に命じて、僕を斬らせるんだろう?」
須波：「そのようなこと……！」と、手を差し伸べます。
貴親(GM)：「ちッ、近寄るなあッ！」刀を抜いて、振り回します。
須波：「兄上……！」わたしもくだんの懐剣を手にして……能力値【知覚】を使って「武器ねらい(武器に対する“ねらい撃ち”)」をしたいんですけど。
GM：はい、了解。それでは、戦闘として扱いましょう。コロコロ。
須波：「でやー」コロコロ……い、1個成功です(笑)
GM：じ、実は……全部失敗です(笑)
須波：やった、勝った！(笑) 刀を宙に飛ばすです！ かきぃん。
深影：……さっきのアレを見たあとだと、限りなく情けない戦いですね(笑)

宙をくるくると飛んだ貴親の刀を、烈堂がその手にはっしと収める。

GM：貴親はしびれる右手を押さえて、須波をにらみつけている。



須波：「いつまでもここにいては逆代めの追っ手も来ましょう。どうぞ、どちらなりへとお逃げください」
烈堂：「それとも、武家の息子らしく、腹をお召しにでもなりますか」と言って、嘲笑。
貴親（GM）：「須波、よくも兄に向かって、手を上げたな……許さない、許さないぞ。いつかお前に償いをさせてやる……！」言ってから、肩を落として、森の中へと消えていく。
GM：一段落だね。"致命傷"にダメージが入っていた雷蝶は、そろそろ活力がなくなったころだろうから、気絶。
雷蝶：ばた。
烈堂：しゃあねぇなぁ。<法術>で《癒し》をかけてやろう。成功度足りるか不安だから、5点ばかし"気合"を使って、サイコロを5個増やして……7つ成功。"致命傷"の難易度は3だから、4マス分の負傷度を消せるわけだな。
GM：同時に"活力"も全快するから、目覚めていいよ、雷蝶。
雷蝶：目が覚めるとダンナがおるわけやな？「……なんや、ダンナか」
烈堂：「せっかく治してやりゃあソレかよ」
雷蝶：「誰も治してくれとは言うてへん」
烈堂：「ここで死なれちゃあ迷惑なんだよ」
須波：「あ、ところで、普通の兵隊さんはまだ結構いるんですよね？（笑）」
GM：いる（笑）　君たちを遠巻きに取り囲んで、どうするか迷っているところだ（笑）
烈堂：じゃ、そいつらに向かって、「どうする？ここにとどまって、野盗狩りに殺されるか、ここを離れてどうにかするか、それとも、今すぐおれに殺されるか……選びな」

烈堂の声に一拍遅れて、人垣の中から若い武者が進み出る。

武者（GM）：「の、農民たちに交じって……やっていけるかのう？」
須波：「へ、平気ですよ！」
烈堂：「生きようと思えば、どうしたって生きてはいけるさ。くだらねぇモンが邪魔しなきゃ、大丈夫」
須波：「今からだって遅くはありません、刀を鋤に持ち替えて、農民たちと力を合わせて、生きていけるはずです！」

前に出た若武者は、少し悩んだような顔を見せたのち、すらりと腰の刀を抜き、叫んだ！

GM：彼は、「わしは……決めたぞ！　山を降りて……農民たちに、交じる！」そう言ってから、刀を折ります。彼の叫びに呼応して、人垣の中からさらに何人かが進み出て、刀を捨てていくわけだ。不満そうな顔、納得しかねる顔をしている者も、かなりの数いるわけだけれど。
烈堂：納得してないやつらに向かって、「ま、確かにおれはあんたたちの仲間を、斬った。ソレが納得できねェってンなら……いいぜ、いつでも斬りに来いよ」
雷蝶：「なんにせよ、生きていかなきゃ、しゃあないわけやし……恨むにせよ、あだ討ちにせよ、ソレからのことやないかい？」

これからのことを声高に語り合う武士たちを見て、雷蝶がぽつりとつぶやく。

雷蝶：「なあ、ダンナ。あれも……刀を捨てる勇気も、強さやなぁ……」
烈堂：「……ああ、そうだな……」
須波：「僕は吹っ切れました。僕が造る国は、虎堂じゃありません。武士も、農民も、共に手を取り合って生きていけるような……そういう国を、僕は創るつもりです」

すでに野盗ではない、落ち武者たちの声を背中に聞きながら、四人は山を降りる。須波の手の中には、二本の刀。

GM：じゃ、みんなは山を降りていくわけだ。農民たちに混ざることを決意した彼らだけれど、農民たちのほうが受け入れてくれないとか、畑を耕すつらさに耐えられずに野盗に逆戻りとか、はたまた農民たちの密告によって逆代の落ち武者狩りにやられるとか、いろいろな結末が待ってることになる。でもまぁ、ソレは君たちには関係ないこと。
烈堂：ひと冬目を越せるかどうか、怪しいとこだよなあ。
雷蝶：ヤな話やなぁ……

残る刀は、三本！　次の目的地と定めた、領主、東条氏の千倉領で彼らは何を見るのか？

次回、天羅戦国伝「生命」を括目して待て！

GM回想録「宝剣」のころ

今回のテーマは神宮家の使者を出して、今後の方向付けを行うことと、兄貴と再会させること。兄貴と再会させるためにはこないだの山に戻らなきゃならなくて、おかげで前回と展開が似てしまっている。反省。

また、前回のプレイで、雷蝶を活躍させることができなかったという点が今回大きな影響を及ぼしている。雷蝶にはここまで大きな戦闘を経験する機会がなかったため、"気合"がたまりまくっていた。そのせいで、キャンペーン全体を通して雷蝶の敵役として登場させようと思っていた銃槍使いがあっと言う間に倒されてしまい、今後のプランの修正を余儀なくされてしまうのである（笑）　教訓。キャンペーンプレイの際には、PCの"気合"を削るための小戦闘をこまめに起こしましょう（笑）

また、このころ、RPGマガジンの「天羅創成」では、「ちちしり論争」とゆーのが盛んだった。井上純弌と読者の激論を横目に見ながら、「やっぱちちしりでしょー」とばかりに女キャラを風呂に入れたり、烈堂は女買いに行ったり、やりたい放題である（笑）

天羅万象リプレイ

天羅戦国伝

第4章

生命（いのち）

千倉の都へ

野盗を征伐して、二本目の宝刀を手に入れた一行は、三本目の刀を所持していると言われる東条英乃信が治める千倉領へと向かっていた。

深影：「須波さん、なにか仕掛けがないか調べてみたいので、宝剣を貸してはいただけませんか？」
須波：「あ、はい」
GM：ヒイロ金の純度が結構高い、上等な刀ではあるけれど……別段仕掛けなんかはないね。

コラム・特殊金属・ヒイロ金

《気》の伝導率が高い特殊な金属、それがヒイロ金である。その特性ゆえ、珠刀の刀身にはこの金属が使われる。
ちなみに、くだんの宝刀には珠機構は設けられていない。つまりは「ただ単に上等な刀」である……らしい。

須波：「千倉の都へは、ヨロイに乗っていっちゃマズイですかねェ……」
雷蝶：「うーん、都の大通りを目立つデカブツで歩くのはなぁ……」
烈堂：「へへ、自分がデカブツ担いで歩いてるクセに、よく言うぜ」
雷蝶：「なんか言ったかァ!? ……とにかく、都にたどりつく前に、どっかに隠しておいたほうがよさそうやな」

雷蝶のことばに従い、街外れの茂みの中にヨロイを隠した一行は、やがて千倉の都へ入った。
大きな都であるというのに、不思議なことに人通りはまばらで、道行く人も足早に、うつむきながらである。

須波：「ずいぶんと……殺風景ですねぇ」
GM：首をひねりながら先へ進んでゆくと、都大路の中辻にたどりつく。えー、その真ん中にだね、腰くらいの高さの台が置かれている。その上にはひとつ、ふたつ……みっつのスイカが置かれている。
雷蝶：スイカ？
烈堂：「……晒し台か」
GM：ご名答。上に乗せられた首はどれも損傷が激しく、ずいぶんとひどく責められたようだね。高札には『この者ども、城内へ忍び入り、盗みを働こうとした不届き者により、討ち首獄門の上晒し首にする者なり』だとさ。
烈堂：「盗人か、なるほどね。着物ににおいが付く前にさっさと行こうぜ」
深影：「まずは宿屋ですね。何をするにもとりあえず一息ついてからでしょう」
GM：宿ならすぐに見つかる。どこもがらがらで、繁盛しているとは言い難い感じだ。
烈堂：「ずいぶん殺風景だな、女将？」
女将(GM)：「なんですか、ここ半月ほどですかねェ。お城に盗人が入っただの、戦が近いっていううわさだの、急に物騒になりましてねェ。最近じゃあご領主様の命を受けた自警団とやらが出来ましてね」
烈堂：「ほう」
女将(GM)：「ほら、この間の虎堂の乱でこのあたりに集まったサムライの残りを雇って、夜なんかは怪しいやつらがいたら問答無用の切り捨て御免！ ってなモンですよ」
深影：虎堂の乱からどれくらいたっているんでしたっけ？
GM：一か月前後。
烈堂：食い詰め者がうろつくにはちょうどいいってとこか。とにかく、部屋に上がって作戦会議といこうや。

深影の事情

須波：「盗賊っていうことは……ねらいは僕たちと同じと考えるべきでしょうか……？」
烈堂：「だろうな。この間の六郎とやらもそうだったんだろ？ 驚くほどじゃねぇさ」
雷蝶：「うーん、やっぱし城に忍び込むしかあらへんかなぁ……」
烈堂：「なに、わざわざ忍び込まなくても……おれたちには陰陽師様もいるしな」と言って深影の方を(笑)
深影：「……わざわざ《式》を打って、城の内側を探る必要はありませんね」
雷蝶：「なんでや？？」
深影：「あの城には、一度入ったことがありますから」
一同(除く深影)：「……はぁ!?」
深影：「客人として、ね。招かれたことがありまして」
烈堂：「そいつぁ……楽だ」
須波：「そ、それよりもですね、なんで……ですか？」(笑)
深影：「半年くらい前ですか……私はここ、千倉に、東城氏に招かれてやってきたんです」
烈堂：「深神春弦と一緒に、かい？」
深影：「いえ、私一人で」
雷蝶：「はァ？ さっぱりわからんわ」
深影：「ヨロイを作ってくれと頼まれたのですが……話が合いませんで。結局は帰ってきてしまったんですよ」
須波：「そんなことがあったんですか……」
深影：「ただ、私が招かれたときには、もうすでに私が影武者であるということは、ばれていたようでしたけど、ね」
烈堂：「へェ、影武者ね……そいつぁ初耳だ」
深影：……ああッ!!
一同(除く深影)：(爆笑)

口が滑るのはよくあることですが(笑)

ここでなぜ深影の言動にみなが笑ったのかというと、話は簡単、深影はせっかく秘密にしていた事柄を、いとも簡単に口を滑らせ、暴露してしまったからだ。
影武者＝クグツと短絡するほどではないが、ただの弟子ではなく、今は亡き天才陰陽師の影武者であったということは、PCたちにとって重要な情報である。
深影のプレイヤーも、今回は師匠を殺した国に行くということで、ある程度の覚悟や予定はあったらしいが、このような形でバラすことになるとは思わなかったらしい(笑)

雷蝶：「深影はんが影武者？　初耳やなぁ」
深影：「そ、それはそれとして」(笑)　うー、しまったなぁ(笑)
雷蝶：「とにかく、深影はんはあの城に入ったことがあるンやな？」
烈堂：「領主はどんなやつだったい？」
深影：(GMに聞いて)「頭の良さそうな男でしたよ。かなりの老齢でしたが、目は生きていました。あの男、切れますね。なにしろ、私が影武者であることを見抜いたうえで、香弦様の方へと刺客を送り、その命を奪ったような男ですからね……」
雷蝶：「それ、うちらが行く……」
深影：「半年前です」
雷蝶：なんで深影はんのお師匠は殺されなあかんかったんや？
GM：その直後に虎堂の乱が起きてる。
烈堂：東条に通じる逆代の依頼か。
深影：たぶんね。
深影：「……つまり、東条英乃信は、私にとってはかたきということになるんですよ」
須波：「仇討ちを手助けさせてください！」
雷蝶：「しかし、深影はんの仇討ちなんやったら、深影はん自身が……」

その時、階下の扉を乱暴にたたく音がした。次いで荒々しい声。

声(GM)：「この宿にィ、よそから来た流れ者が逗留していると聞いたのだがァ？」
須波：「し、しまった！」

客人が宿を訪れる

雷蝶：「……逃げるか？」
深影：「いえ、下手に事を荒だてないほうがいいでしょう」立ち上がって、「私が」
須波：「ぼ、僕もついていきます！」
深影：押しとどめて、「一人で十分、では」

深影が階下へ降りてゆけば、宿の入り口のところには三人ほどの男の姿。どうやら、昼間に女将が言っていた自警団の者らしい。

深影：「……私に、なにか御用ですか？」
男(GM)：「お前が、よそから来た流れ者というやつか？」
深影：「流れ者と言われるのはいささか不本意ですね」
男(GM)：「最近都が物騒なのでな。外から来る者にはちと厳しくさせてもらっている。上がって中を改めさせてもらうぞ」
深影：「ご領主に仕えているとおっしゃるのなら、こちらとしても都合が良いですね。ご領主に、伝えていただけますか？」
男(GM)：「ああん？」
深影：「──深神香弦が、やり残した仕事を終えにやってきた、と」

見張りを残して、男は城までいったん戻って行った。深影のことばを領主に確認するためである。帰って行く男を二階より見て、烈堂が口もとをゆがめる。

烈堂：「へへ……宮仕えは悲しいねぇ……と」
雷蝶：「今なら逃げられるかもしらへんで」
烈堂：「そんなコトしても意味はねェ。まぁ、深影にゃ考えがあるらしい、ソイツに乗らせてもらうさ」

待つこと半刻ほどで、男は宿に戻って来た。

男(GM)：「待たせたな」
深影：「いえ。で、なんと？」
男(GM)：居ずまいを正して、「深神香弦殿、ご領主、東条英乃信様がお会いになりたいと申しておられる」
深影：「城へ出向けということですか。今すぐに？」
男(GM)：「ご随意に」
深影：「……では、明日出向くと、ご領主にお伝えください」
男(GM)：「承知」見張りをやっていた男たちに向かって、「お前ら、帰るぞ」

雷蝶：「うまく行ったようやけど、大丈夫なんか……？」
深影：「死んだはずの──いえ、殺したはずの深神香弦が戻ってくると言うのです。怪しみはするでしょうが、同時に興味もあるはずです」

日もすでに暮れ、夜半過ぎである。四人は宿の一室で、明日の予定を話している。

雷蝶：「うちらはどうすればええ？」
深影：「道中に雇った護衛とでもしましょう」
須波：「ぼ、僕は……？」(笑)
深影：「そ、そうですね……私の陰陽術の弟子とでも言うことにしましょうか」(笑)

言いながら、深影は懐から取り出した短冊に墨と筆でさらさらと《式》を組み始める。
数枚の《式札》を書き上げると、深影はそれを須波に渡した。

須波：「これは？」
深影：「ヨロイがありませんし、何があるかわかりませんからね。札を作っておきましたから、いちおう持っておいてください」

誰でも使える陰陽術《式札》

陰陽道を修めた者にしか使用できない陰陽術だが、それを誰にでも使用できるようにする方法がある。それが《式札》《呪符》と呼ばれるものだ。
「何者かに憑依させることによって待機状態にしてある《式》」であるそれは、陰陽師以外にも使用することはできるが、あらかじめ作っておかねばならないので、陰陽術の一番の利点である臨機応変さに欠けることになる。

烈堂：「で、いつごろ行くんだい？」
深影：「早朝というわけにもいかないでしょうし、昼ごろでよろしいのでは」
烈堂：「何があるかわからねぇ。おれと雷蝶で一晩見張りをしておこうじゃねぇか」
雷蝶：「うちが先に起きとくわ」

城門での再会

日が明け、翌日の昼。
一行は予定どおり城へ向かう支度をしていた。

GM：そこにだね、昨日の男たちがまたやってくる。迎えに来たようだね。
深影：「出迎えですか、ご苦労なことですね」
男(GM)：深影以外の三人に一瞥をくれて、「ところで……そっちはお仲間ですかい？」
深影：「私の陰陽術の弟子と、途中で雇った護衛の者たちです」
須波：「弟子のすな……砂吉です」(笑)

GM：誰だそれ（笑）　須波はともかく、残りの二人に向かって、男はにやにや笑いながらこう言う。「用心棒とはご苦労だったな。あとはおれらが引き継ぐ。お前ェさんたちはお役御免だぜ」
烈堂：「おいおい、勝手に決めんじゃねぇよ。こいつぁおれの仕事なんだ。きちっと用心棒はやらしてもらうぜ」
男（GM）：「悪ィが、城まで入れるわけにゃあいかねぇぜ。門前まで来てェんだったら、それくらいは許してやるさ、好きにしな」
烈堂：「……ま、しゃあねぇか」
男（GM）：「おい、女将、こちらァご領主の客人だ。金はいつものとおりってことでなァ」
雷蝶：払わへんってことか？
GM：そういうこと。
深影：「お代はあとで渡しに来ます。では」

男に付いて都大路を進み、城門の前である。

GM：長槍を持った足軽が見張りをしている。男がそいつらに向かって、「ご領主の客人を連れてきた。通してもらうぜェ」
深影：須波さんの持っている宝刀の、長い方を受け取って烈堂さんに渡します。「これを、持っていてください」
烈堂：「……ああ」
深影：「それでは、行ってきます」

門内に消えていった二人を見送っていた烈堂と雷蝶の後ろで、何者かが足軽に話し掛ける声が聞こえた。

？？（GM）：「いやいやいやいや、きょうもいい天気ですなぁ。うん、実にいい天気だ」
烈堂：振り向くと？
GM：にこにこ顔の武士が一人、足軽に話し掛けている。ひょろりとしていて、まじめそうな感じの男だ。君たちの知っている男だよ。彼を見た足軽は、「なんだ、唐兵衛どのではないか。見回りはせんでよいのですか？」とか。
烈堂：知ってるやつ？
？？（GM）：二人に気がついて、にっこりと笑いかける。「おやおや、お二人ではありませんか。お屋敷以来ですかな、お久しい」
烈堂：「……お前か！」
雷蝶：「ざっ、斬鬼丸ッ!?」

二人の前に現れたのは、誰あろう「千人斬りの斬鬼丸（ざんきまる）」と呼ばれた男。
不死蟲を体に飼い、生半（なまなか）なことでは死なないこの男と、ちょうどひと月ほど前、深神香弦の屋敷で彼らは出会い、そして戦ったのであった。

斬鬼丸（GM）：「お二人だけですか？」
烈堂：「あと二人は、中さ」
斬鬼丸（GM）：たもとから小さな徳利を取り出して、「実はですね、向こうに行ったところに、いい酒を出す店があるんですよ。そこでちょいと分けていただいてきた物なんですが……こないだの礼です、ごちそうしますよ」
烈堂：にぃっと笑って、ちょいと離れたあたりの柳の木の下かなんかに腰を下ろそう。
雷蝶：「だっ、ダンナ……！」
斬鬼丸（GM）：「今はね、茅薙唐兵衛（かやなぎとうべえ）と、名のっているんですよ……ま、どうぞ」
烈堂：「へぇ、おぼえとくぜ……旨（うま）いな」
斬鬼丸（GM）：「自警団とやらに潜り込みましてね……で、ねらいはあれですか、やっぱり。ここのご領主が一本持っているってことは有名ですもんねぇ」
烈堂：「それでこの、警護の厳しさかい」
斬鬼丸（GM）：「ついでに言えば、これなら黙っていてもほかの刀が寄ってきますからね」
烈堂：「……エサってワケか」
斬鬼丸（GM）：「中に入ったという方……付いていかなくて平気だったんですか？」
烈堂：「ああ。何しろ、この国で一番のやつなら、おれの目の前にいるからな」（ニヤリ）
斬鬼丸（GM）：「それはどうも」間を置いて、「……自分でも気づかないうちに、首を斬られていたこと、ありますか？」
烈堂：「ああん？」
斬鬼丸（GM）：「城内に、いますよ……それができるやつが、ね」
烈堂：「……」
斬鬼丸（GM）：もう一度聞こう。「中に入ったと言う方……付いていかなくて平気だったんですか……？」薄く笑う。

五　陰陽師、深神香弦

かなり高くまで登らされた二人は、豪奢（ごうしゃ）な茶室で相手を待っていた。

GM：やがて、二人の人間が入ってくる。深影の知っている領主、東条英乃信と、もう一人は知らない老人。白髪、長いひげのじいさまだ。
東条（GM）：「あの深神香弦殿が、再びわが城を訪れたと聞いては会わないわけにはいくまい。お久しゅうございますな、深神殿」
深影：「以前訪れたときには、急に屋敷に戻らねばならないことになりまして、失礼いたしました。この子供は私の弟子で、砂吉と申します。そちらのご老人は？」
東条（GM）：「ああ、先日より城付きの陰陽博士を務めており申す、龍涎（りゅうぜん）という者でござる……しかし、おもしろいですなぁ」
深影：「……何が、でございますか？」
東条（GM）：「再びこの城へ訪れる気になられるとは、ということでございますよ」
深影：「……さて、どのような意味でございましょう？」
東条（GM）：「そうでは……ありませんか……？」

しばし双方とも無言の沈黙。

深影：「……陰陽師といえども、腹の探り合いが好きな者ばかりではございませぬ」
東条（GM）：「なるほど……しかも、本物の陰陽師ではないとくれば、なおさらでございますかな……？」
深影：「この深神香弦が、陰陽師ではないとでも言いますか？」
東条（GM）：「あなたが、深神香弦ではないと言っております」
深影：「……ふン、これは異なことをおっしゃる。私以外に深神香弦がこの世にいるとでも？」
東条（GM）：「深神香弦という名の陰陽師は……毒も受けず、《式》も受けず、死ねば木の人形になると、申すか……？」
深影：「……何のことやら、さっぱりですね……何かを勘違いなされているのでは、ないですか……？」
東条（GM）：「はっはっはっ、勘違いか。そうかも知れませんな。しかし、勘違いされているのは、もしかしたら此方（こなた）の方ではないのかもしれませんぞ。自分が深神香弦その人であるとでも、勘違いなされているのではござらんかな……？」
深影：「言いたいことがございますなら、はっきりとどうぞ」
東条（GM）：「同じ顔姿の両人がおって、その片側が死しても木偶人形とはならず、もう片側は《式》を受けないとあれば……これはもう

人と傀儡（クグツ）を分け隔てるもの

人間に似せて作られ、かりそめのものとは言え魂を宿し、涙や汗、血までも流すクグツは、それでもいくつかの点をもって人間とは確実に異なる。その中でも代表的なものが、死ねば木に戻ってしまう点と、《式》が憑依できないという点だろう。
後者に関して言えば、サムライなども同じなので一概にそうとは言えないのだが、それでもクグツを見分ける有力な証拠の一つであると言うことは間違いない。

東条（GM）：「逆代の大蔵どのから伝え聞くところによると、虎堂の忘れ形見と手を組んだという話」須波のほうをちらりと見て、「最後に作っていたヨロイも、そちらに渡ったと聞き及んでおります」
深影：「東条の情報網もあてにはなりませぬな。ご領主に、そのようなその情報を伝えるとは」
東条（GM）：「わが手のものが、間違っていたと？」
深影：「……ええ。そもそも、同じ顔をした人間が二人いたとして、おかしなこともございますまい？　それに、深神香弦ともあろう者が、そう簡単に刺客に命を奪われるとお思いで？」

深影のことばに、意地悪そうに口もとをゆがめた領主が、問いを発する。

東条（GM）：「ならお聞きいたすが……」はい、須波君、【心力】《意志力》で判定を行なってください、難易度は３！
須波：え、は、はい……失敗！
東条（GM）：「足もとに組まれた《式》を受け付けない……どういうことですかな？　深神……香弦どの」須波君は指一本動かせません。
須波：「かッ……体がッ!!」
深影：あくまで冷静なまま、逆に問いかけましょう。「これはこれは……では、もう一度尋ねましょう。主人を殺された影武者が、わざわざもう一度舞い戻ってきた……その意味をお考えになったことは？」
東条（GM）：「そうですな、例えば……仇討ちですかな？」
深影：「その敵自らが、のこのこと目の前に現れてくださるとはどういうわけですか？　それとも、その隣の陰陽師どのに、それほどまでに信頼を置いていらっしゃる？」
東条（GM）：「ふふ、この龍涎、確かに……木偶人形よりは役に立ち申す」
深影：「……深神香弦は希代の陰陽師。その影もまた……そこらの陰陽師には負けぬほどの腕前の持ち主！」

深影が宙に指を走らせ、《式》を組む！
空中に現れたバケモノ＝《式》は、東条英乃信の脇に立つ陰陽師、龍涎へと襲いかかる！
深影は龍涎に《式》を憑依させ、自らの意のままに操ろうとしているのだ。
しかし！
その体に《式》がぶつかるが、老陰陽師の体の中へは吸い込まれていかない、憑依できない！

深影：「何ッ!?」な、なんで!?
東条（GM）：「ふン、馬脚を現しましたな。つまり、そのような目的でこの城までやってきたというわけだ」
深影：「……くッ！」
東条（GM）：「よろしい。その子供と一緒に、この城から出て行きなさい。ただし……それができるのなら、ですがな」

六　脱出！

深影：「《式》が動かぬとして……ほかにも手は！」

再び深影が宙に《式》を描くと、今度の《式》は須波のほうへと飛んでゆく。
須波にぶつかり、《式》が弾けると同時に、その体を縛っていた戒めがほどけた！
「《式》を破壊する」《式》を、須波に金縛りをかけていた《式》にぶつけたのである。

深影：同時に、東条英乃信に向かって懐から取り出したクナイを投げる！

深影の放ったクナイを受けて、東条英乃信の形をした《式》が分解する！

深影：「ちぃッ、やはり！」龍涎とかいう老人のほうは!?
龍涎（GM）：にぃッと笑って、「……そのようなことをしている暇があるのか？　すぐにでも逃げたほうが、良いのではないかな？」
深影：陰陽師に向かって、「邪魔の芽は早めに摘んでおいたほうが良い！」
龍涎（GM）：「思慮が足りんのう……それとも、教育が足りんのか？」
深影：ムカ（笑）、「黙れッ！」斬りかかる！

結果は東条と同じであった。刀で斬り裂かれた老人の体は、空中に散り散りに消えてゆき、あとには何も残らない。

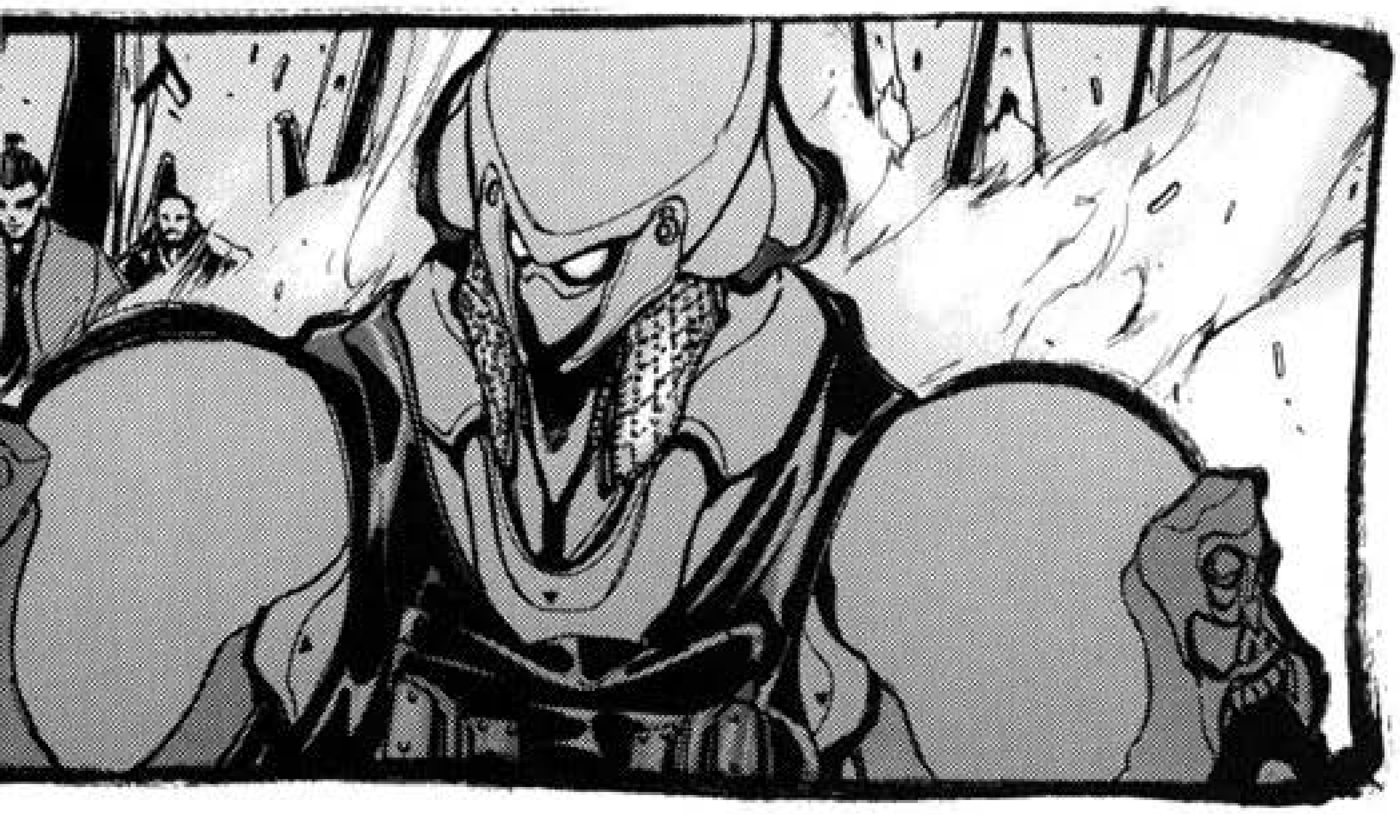
深影：「こちらも……《式》、ですか……」ここは霊力を温存しておくのが得策でしょうかね……では、須波さんに向かって、「昨夜渡した《式札》を。そちらの赤いほうを使ってください」
須波：「は、はい」

須波が懐から出した《式札》を宙にほおって《式》を実体化させる。現れたのは巨大な虎に似た生物である。

深影：「とりあえず、空の見えるところに！」

号令一下、《式》が襖を破って隣の部屋へと飛び出す。襖の向こうで飛び込む機会をうかがっていた兵の数人をなぎ倒して、《式》が一声、吠えた。

GM：一方、酒を飲んでいる烈堂と斬鬼丸のところへ、小さな鳥が舞い降りて来る。鳥は斬鬼丸の肩に留まり、なにやらさえずっている。
烈堂：「なんだ？」
斬鬼丸（GM）：「ああ、龍涎どの。はあ、はい……そうですか……わかりました……」
烈堂：《式》か……ピン！　城へと駆け出すぜ！
雷螺：「だッ、ダンナ、どうしたんや!?」
烈堂：「一騒動おっぱじまりそうだ！　付いてこい、城内に突っ込むぜ！」
GM：城門のところの足軽が君を止めようとする。「おいおい、許可なく立ち入ることは許さんぞ？」槍で門をふさいで……



烈堂：抜刀して槍をたたき斬る！
雷蝶：「けがァしたくなかったら退きィ！」

二人が城門の奥へと消えてから、斬鬼丸はゆっくりと立ち上がった。いつもの笑みを顔に張り付けたままでつぶやく。

斬鬼丸（GM）：「さてさて、私のほうも持ち場に行きましょうかね……」

死の影

かなり広い中庭を駆け、烈堂たちは城へと向かう。立ち向かう者がいれば切り捨て、あるいは避けながら、彼らは一心不乱に走り続ける。

GM：今朝、君らを迎えに来た男が、目の前に現れる。
烈堂：「退けええぇぇッ!!」
男（GM）：ふらりと脇にどいて、「退かない気はねェぜ。給金以上の仕事ァする気はねェ」
烈堂：「賢明だ。命拾いしたな！」そのまま一瞥もくれずに走る！
男（GM）：背中に向かって叫ぶ。「それになぁ、おれがやんなくてもお前ェらは死ぬんだ！　過幻に殺されてから後悔しなぁ!!」
雷蝶：走りながら、「あいつ、カゲンとか言うとったけど、どういうことや!?」
烈堂：「迷ったか、それとも……どっちにしろ、こいつァ厳しくなりそうだぜ……！」

植え込みを抜けると、城が目の前に見えるところに出た。烈堂、雷蝶が城壁を見上げたその時……城のかなり上のほうで、漆喰の壁が内側から爆発する！

雷蝶：「あそこ、深影はんと須波や！」
深影：「須波さん、最後の札を!!」
須波：「はいッ！」

現れたのは巨大な鳥。二人が背中に乗って十分なほどの大きさである。

深影：「後ろを守っているうちに、早くその上へッ！」

衛兵のサムライが何人も深影に切りかかる。深影も刀を構え、相手の刀を受け流しつつ、最小の動きで敵を止めようとするが、じりじりと押され、ついに一刀を肩に受けてしまう。

須波：「深影さあんッ！」
深影：須波さんのほうを見て、城内を見て……一瞬、迷います。

その瞬間！　深影を囲むサムライの人垣を飛び越えて、何者かが深影に飛び掛かる!!

深影：これ以上受けるとマズイ！　"気合"を使って、"技能のブースト（一時的上昇）"と"サイコロのブースト"を行ないます！

ぎいん、と火花が散る！
かろうじて敵の斬撃を受け止め、相手を見極めようとした深影の瞳が、驚愕に見開かれる。
黒と赤に彩られた鋼の体。
表情を現すことのない鉄仮面。
彼女の目の前にいたのは、一機の金剛機！
そして、その手に握られている刀。
つばの文様、柄の細工……すべてが須波の持つものと同じである。
五振りの宝刀のうちの一刀を、この金剛機が持っているのだ!!

深影：金剛機相手では……！　しかたありませんね、自分と同じ姿の《式》を２体作って、それを囮にして逃げます……！

巨鳥が空を滑空して烈堂たちのもとへ降りてくる。その背中で、深影の放った《式》が爆発した。

烈堂：「へへ、陰陽師ってのァやることが派手だぜ」
深影：「時間稼ぎです。たいした威力ではありません。それよりも……早く、ヨロイのところまで行かないと！」

仇敵、再会

合流した四人は、都の外に隠してあるヨロイめざして駆け出した。あちらこちらから出てきた衛兵を、先頭に出た烈堂と雷蝶がまるで雑草でも払うかのように切り倒してゆく。

雷蝶：「なんやて!?　金剛機がおって、例の刀をそいつが持っとる!?」
烈堂：「金剛機かよ……洒落になんねェな」
深影：「どちらにせよあの金剛機は追ってきます。それまでにヨロイのところへ……！」

城を脱出し、かなりの距離を逃げ、都も外れにさしかかったあたり。家屋の脇からふらりと人影が現れると、一行を追いかけていた衛兵たちの中から声が飛ぶ。「唐兵衛！　そいつらを止めろおッ!!」

烈堂：「……来たか！」
雷蝶：「ちぃッ！　最悪の時に最悪の人間ってわけかい……！」
斬鬼丸（GM）：「世の中ってのは、そういうもんです。さて……」烈堂を見て、「今度はわたしがごちそうしますよ、約束のとおりにね」……すらりと、腰の物を抜きます……！
烈堂：「ヘン、いらねェよ……！」こっちも、抜く……

刀を構えたまま、斬鬼丸を見据えたまま、烈堂が、背後の三人に向かってつぶやいた。

烈堂：「ここはオレが……」いや待て!!　ちょっと考えさせてくれ！（笑）
一同：（笑）

ドラマツルギーの罠

古来より、どのような物語においても「ここはオレが食い止める、お前たちは先に行け！」と言って無事生き残った者はいない（笑）
烈堂のプレイヤーは、危うく自分の死刑執行許可書にサインをするところだったのだ（笑）
ちなみに、この状況であれば、どんなセリフを言ったとしても死の可能性はつきまとう。
烈堂は、ハメられたのだ（笑）

烈堂：（長考のすえ、ついに割り切ったらしい）いや、最終的に勝てばいいんだ！（笑）　後ろのやつらに、「ちと忘れモンが残ってるらしいや。お前ェらは先に行ってな」と言う。
須波：「烈堂さん……死なないで……ッ！」
雷蝶：「ダンナは……大丈夫や！　死なへんよ……絶対に!!」と言って拳を握るンや。
烈堂：お前ェらはオレを殺したいのかァ!?（笑）（深呼吸）　預かってた宝刀を須波に返すぜ。「これァおまえが持ってるんだ」
須波：こくんとうなずいて、受け取ります。
深影：「さ、早く行かないと」

斬鬼丸（GM）：駆け出す三人を追おうとはせずに、その背中を見つめながら、「……いいんですか？　ついていってあげなくて」
烈堂：「……ああ。あいつらだって、弱くはねェ。お前ェさえ足止めしときゃあ、平気さ」
斬鬼丸（GM）：「それはどうも」間を置いて、「さきほども言いましたよね……自分でも気づかないうちに、首を斬られていたこと、ありますか？」
烈堂：「ねェな」
斬鬼丸（GM）：「あの時のわたしは……サムライ化してましたよ」
烈堂：「そうかい、そいつァ手前ェが弱かったんじゃねえのか？」
斬鬼丸（GM）：「それでは……試してみましょうか……？」

越える

GM：戦闘第1ラウンド、入ります！

二人の間に殺気が目に見えるほどに凝縮してゆく。ぎりっと、二人の刀を握る手に力が込められる。

斬鬼丸（GM）：「それでは……これが、あなたが弱くなったと言うわたしです。見ていただきましょうか……！」サムライ化します。
烈堂：無言で、オレもヤツに呼応してサムライを発動させるッ！

GM：第2ラウンドに移ります。

ゆらりと、斬鬼丸が動いた！　目に見えぬほどの動きで烈堂に肉薄し、刀を振るう。受けきれず、烈堂の胸板から赤い血がしぶく。

斬鬼丸（GM）：にいっと笑って、「どうです？　弱くなってますか？」
烈堂：「気づけよ、お前ェは最初から弱ぇんだよ。だって、お前ェ……死体じゃねぇか」歯をむき出して、「成仏させてやるよ……！」

叫びながら烈堂が反撃する。今度は烈堂の勢いを殺しきれなかった斬鬼丸がまともにその体で刀を受け止め、地面に血と、はらわたの一部と、チィチィと鳴く小さな蟲をぶちまける。

烈堂：「オレァな、ガキのころ、坊主だったんだ。その時おぼえたコトッてぇのはそんなに多くはねェが、その一つが、万物はすべて、滅びるようになってるってことさ。死ぬことのねえお前ェは、この世のすべてから切り離されちまってるのさ……オレたちが殺すのはかまわねぇ。オレたちァそうしなきゃ生きていけねぇからな。だがな、お前ェが何かを殺すのは、間違ってる。苦しいだろ？　……止めてやるよ」

GM：第3ラウンド入ります。

烈堂に斬られた傷は深く、通常ならば即死していてもおかしくないほどのものであった。
しかし、意に介さない様子で斬鬼丸は立ち、烈堂に血に染まった歯を見せる。

斬鬼丸（GM）：どくどくと血の流れる口もとをゆがめて、「せっかくですが、ご遠慮願いたいところですね。あなたはわたしを死体だと言ったが、その死体でなければわからぬことというものがある。ここまで来たからこそ、見えるものがある……それを、手放す気はありません……」
烈堂：「お前ェが何を言ったって、無意味なだけだぜ。死体にゃあ何もできねェんだよ」
斬鬼丸（GM）：「あなたを……殺せますよ」
烈堂：「オレァそんなに弱くはねェぜ」
斬鬼丸（GM）：「誰だって、死ぬ瞬間まで、自分が死ぬとは思ってはいないもんです」……ことばの最後と共に、切りつけます！
烈堂：戦闘オプション“必殺の一撃”使用！　刀で受けずに、体で食らって、こっちの一撃を無防備な斬鬼丸本人に入れる！　さらに！　こっちの攻撃番では、小刀の柄に仕込んだ鎖を伸ばして、斬鬼丸の首を絞めにかかる!!

戦闘オプション

戦闘の判定は通常【敏捷】の能力値を使用して行なわれるが、それ以外の能力値を使用した場合、“戦闘オプション”の使用を意味することになる。
詳細な説明は省くことにするが、【体力】を使用した場合の戦闘オプションは“必殺の一撃”と呼ばれ、この場合、相手の全ダメージを受け、耐えきった場合には自分の全ダメージを与えることができるのだ。
肉を斬らせて骨を断つ、まさに捨て身の戦法である。

そうしているうちにも、斬鬼丸の体の中に巣食う『不死蟲』が、刀傷をふさごうとばかりにうごめいている。傷が治る前にとどめを刺さないと、烈堂がやっていることのすべてが無駄に終わってしまうのだ。

烈堂：“気合”も残ってる全部を突っ込むぜ！　「うおおおおおおッ!!」

サムライに増幅された烈堂の腕がぐんと膨れ上がる！　ごきんとおかしな音がして、烈堂に背を合わせる形でのどをかきむしっていた斬鬼丸の首が、不自然に曲がって烈堂の肩に乗る。

斬鬼丸（GM）：完全に折れた首に乗った顔が、ごぼごぼと奇妙な音と血泡と共に声を吐き出す。「……楽しいでしょう……強いというのは、強い相手と戦うというのは……そのために、わたしは生きてきたんです……あなたも……同じハズだ……」
烈堂：「違うな、オレァそんなんじゃあねェ！」
斬鬼丸（GM）：「今のあなたを見た人が、違うと言って信じてくれるとお思いですか？　あなたもわたしも同じ、人殺しの業を背負っているんですよ……」
烈堂：「人が見てどうだって関係ねェよ。オレァな、弱くならねぇために戦ってるンだ。お前ェみてェなヤツに……負けるわけにァいかねぇのさ……！」
斬鬼丸（GM）：「わたしが……あなたより強いからですか……？」
烈堂：「お前ェに負けたら、オレは弱くなっちまう……もう、あのころみてェな思いをするわけにはいかねぇンだ、もう……二度とな……！」

そうさ、オレァあの時弱かった。弱いやつァ何されても文句は言えねぇ。だが、強ければ何をしてもいいのか？　いや、それも違う！　弱くねェヤツだけが、何かできるのさ。弱くないことと強いことは違うのか？　そうじゃねぇ、それはお前ェを見てればよくわかる。だから……お前ェを殺さなければ、いや、滅ぼさなければならねぇ。オレは……もう弱くなるわけにはいかねぇンだよ!!」

最後の一声は絶叫に近いものだった。その声に意識を失いつつあった斬鬼丸は正気を取り戻し、手に持った刀を振り上げ、背中越しの烈堂の脇に突き刺そうとした！

GM：斬鬼丸の攻撃は、戦闘オプション“必殺の一撃”を使用！
烈堂：ここで止められればあっ!!　ダメージは14点ッ!!
GM：斬鬼丸は“活力”残り2点でなんとか耐えきったあッ!!　こっちからのダメージは……11点！
烈堂：11点だとおッ!!　し、死ぬかあッ!?　……よっしゃあッ！　“活力”1点だけ残ったあッ!!　次のラウンドになればこのラウンド与えた“重傷”と“軽傷”がヤツの不死蟲で回復しちまう。今しかねえッ!!　“気合”を使って行動を追加！「最後だ、行くぜえッ!!」

脇腹に刀を刺されたままの烈堂が、さらに錫を持つ手に力を込めた。その力が極限まで達した瞬間……ぶつんと音を立て、斬鬼丸の首がちぎれ落ちた！

烈堂：（荒い息を整えながら）「どうだい……首を落とされる気持ちってぇのは？」
斬鬼丸（GM）：横になった首がにやりと笑みを浮かべて、「一度や二度ではありませんからね、この程度なら……」
烈堂：「そうかい、なら……その先ってェヤツを教えてやるぜ！」頭に片足を乗せて頭を砕いて……！

頭を踏みつぶされた斬鬼丸の「魂」がゆらりと浮き上がる。だが、その業の深さゆえ、魂は宙へ昇っては行けない。
不死蟲が体を再生すれば、魂は再びその体に戻るのだ。

烈堂：法師として修行を積んだオレには魂が見える！　「言ったろ、その先を教えると！」法術の《魂返し》を行なう！　ヤツの魂を現世から消し去ってやるぜ！

真言を唱えられ、斬鬼丸の魂が薄くほどけてゆく。完全に消える一瞬前、烈堂は、斬鬼丸が薄く口もとをゆがめたのを見たような気がした。

烈堂：荒く一息ついて、「念仏ぐらいは唱えてやるぜ……南無！」

逃走

一方、先を急いだ三人は、都に程近い森の中へと入ってゆく。ヨロイの所へ金剛機を案内しているということはわかっているのだが、さりとてヨロイなしで戦える相手とも思えない。
茂みをかき分け、その奥の地皇に須波が乗り込む。
明鏡に魂を落とし込み、須波と地皇は一体となる。
伏していた顔を上げると、深影と雷螺の姿が目に入る。
そして、その背後に――

GM：腕を組んで、すらりと立った金剛機が、君たちを見ている。そいつが……口を、開く！「……なるほど。それが、深影が作ったヨロイというわけか」
雷螺：「な、なんやて!?　金剛機が……口をきくッ!?」

> **しゃべる金剛機**
>
> 修羅の魂を封じた金剛機は、たいていの場合運用の便を考えて、記憶、感情を封印される。結果、主人の命令だけを聞く忠実な機械人形が生まれるわけだ。
> 自意識を持ち、口をきく金剛機は、非常に稀有な例と言えよう。

須波：よッ、ヨロイ太刀を抜いて構えますッ!!
雷螺：ウチも背負った八連斬甲刀を構えて……
深影：ちょっと待ってください。二人を制して、一歩前へ出ます。「なぜ……わたしの名前を知っている？」
雷螺：あ、そうか。深影はんは影武者やさかい、名前が知られてるわけはあらへんのか。
金剛機（GM）：疑問には答えずに、「……どうだ？　深神香弦よりも、巧くヨロイを作れたという自信はあるか？」
深影：「そッ、そんなことは……！」
金剛機（GM）：「殊勝なことを言うものだな、木偶人形」
雷螺：二人の間に割って入るで。「何……何言ってんのや、このガラクタは!?」
深影：雷螺は気にも止めずに、「黙れ！」叫びます。「お前は……何者ッ!?」
金剛機（GM）：「何者に……見える？」
深影：「金剛機以外のなんだと……言うッ!?」
金剛機（GM）：「ずいぶんと……つれない物言いではないか……」
深影：!!
金剛機（GM）：「このわたしに向かって、そのような言い草とはな……」
深影：「そんな……でも……わたしの名前を知っているのは……知っているのはッ!!」

震える拳を握りしめながら、深影は、その人の名前を呼んだ。
二度と呼ぶことのなかったはずの名前を。

深影：「かッ……香弦様……ッ!!」

深神香弦

香弦（GM）：「久しいな……お前に名前を呼ばれるのも……」
雷螺：「カゲンて……深影はんのお師匠の、深神……香弦!?」
深影：「香弦様……あなたは、修羅道に落ちたか……ッ!!」
香弦（GM）：「魂さえ残っていれば、わたしはここにある。この不死の体であればこそ、陰陽の秘術を飽くまで探索できよう……」
深影：二人と、香弦様との間を視線が泳ぎます。「それで……いったいどうなさるおつもりなのです」
香弦（GM）：「陰陽の道を探る以外に、生きてゆく意味などがあろうか。昔、言ったであろう？　わたしは、陰陽術の終わりなき道を、行けるところまでゆくのだと。そのために生きているのだと」
深影：「ならば！　この二人は、どうか見逃して……」
須波：「深影さんッ!?」
雷螺：「うちはアンタを見捨てて逃げるつもりなんかあらへんで」
香弦（GM）：「ふン……そのようなつまらない者たち相手に、仲がいいことだな」
雷螺：「つまらないやて!?　カラクリ人形に言われる筋合いはないわァ!!」
GM：雷螺の声を聞いて、香弦はその鉄の仮面の奥から、くぐもった笑い声を響かせます。
雷螺：「何が……何がおかしいッ!?」
香弦（GM）：「おかしいさ。わたしを人形と呼んだことがな。ならば聞くが、お前たちの隣にい

るそれ……」
深影：「香弦様あッ!!」
香弦(GM)：「ほう、深影。この者たちは知らぬのか」
深影：「……」
香弦(GM)：「それは……おもしろい」
雷蝶：「はァ?」
香弦(GM)：「長年わたしの脇にいても、ついぞそのような感情は無縁だったというのにな。今のお前はそのように感じるというわけか。おもしろい、おもしろいぞ」
深影：「それは……ッ!」

ついと、金剛機がその手を深影の方へと向かって差し出した。つぶやくように、歌うようにことばを紡ぐ。

香弦(GM)：「さあ……来い。調べてやろうではないか」
深影：一歩……前に出ます。
雷蝶：「深影はんッ!!」
深影：雷蝶さんの声が聞こえて、びくんと足を止めます。
須波：「ミッ、深影さん……そんなヤツの言うことに惑わされちゃだめだッ!」
深影：金剛機に向かって、「アンタの言うとることは……うちらにはサッパリや!」
香弦(GM)：「なに……深影が、人並みに恥ずかしいなどと思うているようだからな。調べてやろうと言うているのだよ」
雷蝶：「それがどうしたァ! 深影はんはうちらとちぃとも変わらん、人やんか!」
香弦：「くっくッ……人か。ニセモノの体にニセモノの魂、ソレを人と呼ぶか。これはおもしろい、おもしろい!」
雷蝶：はッとして、深影の方を見る。
深影：力なく……地面にひざをつきます……
香弦(GM)：「うそだと言うのなら、それの耳なり、指なり切り落としてみればよい。そうすればはっきりしよう」
雷蝶：「そんなこと……できるわけないやないか……!」深影はんの方を向いて、「深影はん……ウソやろ? なぁ、アイツの言うとること、全部ウソなんやろ?」
深影：「……」
雷蝶：「ウソやあッ!!」香弦に斬りかかるッ!
須波：待った! “気合”を使って雷蝶さんに「割り込」んで、こっちが先に斬りかかります!
「なんだって関係ないッ! 深影さんは、僕の、僕たちの大事な仲間なんだッ!!」

巨大な刀が金剛機に当たるその瞬間!

深影：「やめてえッ!!」
須波：やめますッ!(笑)
深影：「香弦様に手を出そうと言うのなら……わたしは……あなたたちを、あなたたちを……!」
雷蝶：「ナ、ナニ言うとんのや! どう考えても、アイツ狂っとんで!?」
深影：「それでも! それでも……」

ぱたぱたと深影の目から落ちた涙が、土にしみこんでゆく。

雷蝶：「今度ばかりは、深影はんの言うことを聞くわけにはいかへん! 深影はんはあのガラクタにだまされてるンやッ!!」もう一度、斬りかかるでッ!

雷蝶の持つ大刀——ヨロイ用の小太刀を改造した「八連斬甲刀(はちれんざんこうとう)」——が、金剛機の形をした《式》を切り裂いた。城の中で見たのと同じ手口だ。

雷蝶：「なッ……!!」
GM：香弦は、《式》の後ろに立って、「木偶人形になつくサルが二匹。深影よ、こいつらがいなければ、お前はわたしのもとへ戻ってくるかな?」
須波：「深影さん……いいんですね、いいんですよね……」
深影：答えません。答えられるわけがない……
雷蝶：うちは斬りかかるで! 「でやあッ!」

動いたように見えない金剛機は、それでも雷蝶の斬撃をかわし、切り返した!
血を流し雷蝶が倒れる。

香弦(GM)：雷蝶の攻撃自体なかったかのように、「さあ、来い。深影」と言って、深影に手を差し伸べる。
深影：どうしようもないといったひとみで、雷蝶の方を見てから、香弦様を見上げます。
香弦(GM)：それじゃあ、君が見たものに気が付いて、「ああ、あれが死なないと、お前も納得はしないかな? ならば……今、片づけてやろう」
雷蝶：よろめいて立ち上がりながら、「……誰が殺されるッちゅうねん! 誰が死ぬッちゅうねん! ウチは……絶対に負けへんでッ!! たった一回当てたくらいで天狗になっとったら痛い目見るでッ!!」

「どうかな？」とつぶやいた金剛機が、ゆらりと動いた。目で追いきれないほどのすばやさで雷蝶に肉薄すると、手にした刀を振るい雷蝶を襲う。とっさに持ち上げた刀で致命傷を負うことは避けられたが、それでも切りつけられた肩口から血がしぶく。

須波：「ごめん、深影さん……！　雷蝶さんを見殺しにはできない……ッ！」と言ってから、「てやー！　僕の一撃を受けてみろー!!」

“気合”を入れた一撃に加え、GMのダイス目がとことん悪かった（笑）

須波が、ここぞとばかりにヨロイ太刀の《珠》を連発で炸裂させる！

さすがの金剛機もこの一撃はかなり効いた。

背中に大きく亀裂が走り、装甲の奥の機械がのぞいている。

深影：「かッ……香弦……様……ッ！」

GM：香弦は深影に向かって、「少しそこで待っていなさい。今、片づけてくるから」と言って……ヨロイのほうへ飛びかかる！

須波：止められないッ！　受けたダメージはヨロイに4点、自分に2点入れます。自分のほうは“重傷”に入れてみたり。

GM：“重傷”は「骨折または多量の出血を伴う傷」だ。骨の一本も折れてるね（笑）

須波：痛……くないのか、接合中だから。

ヨロイ乗りの負傷

接合している状態でヨロイがダメージを受けた場合、上記のようにヨロイ乗りがダメージを受けることも可能である。

ヨロイは無傷、だが、中のヨロイ乗りは死亡――そういったシーンも演出可能なわけだ。

ちなみに、中でヨロイ乗りが死んでしまったとしても、接合中はヨロイの明鏡に魂が移されているので、すぐに死亡することはない。

ヨロイから出ようとした魂が、肉体に戻れなくなってしまうだけだ。

十三　生きてゆく意味

雷蝶：傷を押さえて立ち上がりながら、「……深影はん？　あんな、うち、深影はんに最初会うたとき、なんや冷たい人やなあって思とったんや。まるで人形みたいやて、そう思ったンや。でもな、深影はん、今まで付いてきてくれたやろ？　うちな、ホンマ、うれしかったんや。だから、深影はんが……ナニモンだったとしても、うち、それはそれでええと思う。……うちは、ホンマにうれしかったんや。だから、だから……深影はん！　そんなヤツのところに行ったらあかんッ!!」

雷蝶の叫びを横に聞き、香弦が再び、深影に問いかける。

香弦（GM）：「ふむ……山猿めが何か言っているようだが……どうするね、深影？　……わたしからも聞こう。嫌がるお前を無理に連れてゆくようなことはしたくはないからな」もう一度、深影に手を差し伸べて――「さあ、来い。深影……」

深影：「香弦様……あなたは半年前から……ずっとその姿で……？」

香弦（GM）：（うなずく）

深影：「では……どうして、すぐに戻ってきてはくださらなかったのです……？」

香弦（GM）：「その必要がなかったからだ」

深影：「だけど……わたしはもうあなたより大事なものを見つけてしまった……もう……戻れない……」

香弦（GM）：長い沈黙。「……残念だ……おぼえているか？　昔から、失敗作や、出来損ないをわたしがどうしていたか」

深影：（はっと顔を上げて）「お願いです香弦様、聞いてください」

香弦（GM）：（無視して）「残念だったよ。お前は――最高傑作だった」

ゆっくりと、ゆっくりと金剛機が刀を振り上げる。刀の先には涙を流す深影。

その刀が――振り下ろされる！

深影：……懐から抜いた刀で……斬り返しますッ!!　“気合”を20点使ってダイスを振って……!!

飛び込んだ深影が香弦の左胸――金剛機の動力である《心珠》が内蔵されている――を刺し貫いた！　さらに刀の柄の引き金を引き、《珠》を炸裂させる。

金剛機の左の胸から肩口までが吹き飛ばされ、破片と共に左腕が地に落ちる。

GM：香弦は今のダメージを“死亡”ダメージとして受け止めました。もう一撃あるぜえ！　いったんは地面に倒れた香弦ですが、ゆらりと立ち上がり、「……わたしに刃を向けたな、深影……」そして、残った右手で刀を握り、深影に襲いかかるッ！　「深影えええぇぇぇッ!!」

雷蝶：“気合”1点使って“割り込み”や！　「それやああッ!!」

雷蝶の八連斬甲刀が、香弦の胴に深々と突き刺さった！　雷蝶が柄を握り込むと、八発の《珠》が同時に炸裂。そのすさまじい破壊力に、香弦の胴が根こそぎ吹き飛ばされる！

雷蝶：「ぜえッ……ぜえッ……」
須波：接合を解いて、ヨロイを出て雷蝶さんと深影さんのところに駆け寄ります！ 「らッ、雷蝶さんッ!!」
GM：駆け寄ろうとしたんだけど、地面に足を下ろしたとたん、右足に力が入らなくてかくん、とかいって転んじゃいます。
須波：え？ 何で……あ！ "重傷"……今ごろ痛みが襲ってきて……うう。
雷蝶：アグラをかいて地面に座って、「は、はは、ウチ、勝ったで」
須波：「雷蝶さん！ でも、すごい傷ですよう……」
雷蝶：「何言うとんねん、須波かて、ひどいけがやないか……」
須波：「はは、そうですね……」

笑いながら須波が顔を上げると、都の方から人影が近づいてくるのが見えた。烈堂だ。その肩に首のない死体を担いで、遠目にも傷だらけなのがよくわかる。

烈堂：「よお」
須波：「烈堂さん……勝ったよ」
烈堂：「ああ……たいしたもんだ」(ニヤリ)
雷蝶：「うちが……やったんや」
烈堂：「よくやったな。やるじゃねェか」言いながら、破壊された金剛機から刀をもぎ取って、「コイツだ。これで三本目だな」
雷蝶：「ダンナのほうも、終わったンやな……」
烈堂：「ああ、まァな」どさりと斬鬼丸の体を雷蝶の目の前に落とす。
GM：首の切断面では、その先を探して蟲がうごめいている。
烈堂：雷蝶に、「お前ェが前に言ってた、不死蟲ってヤツだ。……どうする？」
雷蝶：ちょっとだけ考えて、「……うちには関係あらへんよ」
烈堂：(満足げに)「よく言った……偉いぜ」

烈堂が印を組み、気合一閃すると、斬鬼丸の死体が燃え上がる。法術を修めた者のみに使用できる気弾の効果だ。

烈堂：金剛機を見て、「こいつがカゲンかい」
深影：その脇に座り込んで、無言です。
雷蝶：深影はんのところに寄っていって、「深影はん……大丈夫か？ 深影はんのおかげで助かったわ」
深影：「……」
須波：「深影さん、これから……どうするんです？」
雷蝶：「何言うとんのや。決まってるわ。ウチらとまた、一緒に来るンやろ？」
須波：「来て……くれますよね？」
深影：下を向いたまま、「わたしは……人間じゃ……ないんですよ。わたしは……」
雷蝶：遮って、「言うたやないか。うちは、深影はんが付いてきてくれたから、うれしかったんや。だから、深影はんがなんであったかて、うちには関係あらへん」
深影：顔を……上げます。
須波：手を差し出します。「行きましょう……一緒に」

おずおずと、しかし確かに、深影の手が須波のそれに重ねられた。

深影：「東の……岸白湖(きしろのおおうみ)でしたね、次は」
須波：「ええ。行きましょう！」
烈堂：「そういや深影、いつか言ってた『生きる意味』ってのは見つかったのかい？」
深影：「……ええ、見つかりました」
烈堂：「良かったじゃあねェか……」

それがたとえかりそめのものであったとして、人であるということは、生きる意味に向かって進むことでもある。それに気が付いたとき、彼女は、人に近づいたのかもしれない。

*次回、天羅戦国伝***「海妖(あやかし)」***を括目して待て！*

GM回想録「生命」のころ

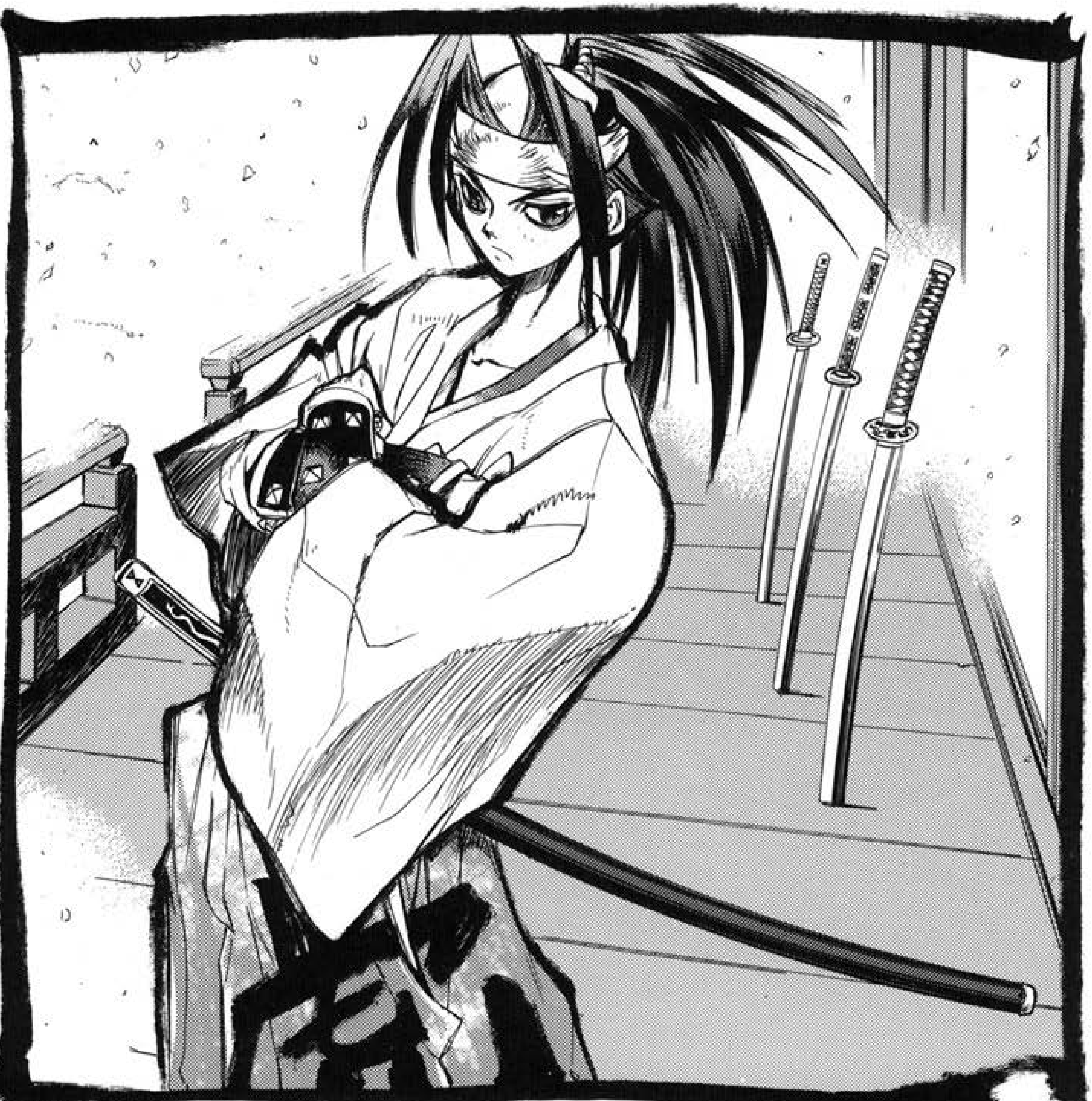
ここまで御影の活躍があまりなく、こりゃやばいというコトで御影のお話にしてみた。しかし、今回で御影の目標が達成されてしまい、これはこれでやばいというコトになる(笑)

金剛機と言えば物言わぬ戦闘マシーンなのだが、それではつまらないってコトと、"気合"が稼げないってコトで、深神香幻の魂が入ってることにしてみた。

金剛機にしゃべらせたい→深神香幻の魂というコトにしよう→香幻は修羅だったと言う風に連想が進み、金剛機『過幻』のロールプレイも固まる。

また、「宿敵」として因縁を作った烈堂にも答えてやらなきゃな、と思い、斬鬼丸再登場ってコトにした。

「陰陽術って何でもできてスゴイなあ(笑)」との考えを新たにした回でもある(笑)



天羅万象リプレイ

天羅戦国伝 海妖(あやかし)

第5章

船の出ない村

峠を抜けると、眼前の森の割れ目から、きらめく水面が見えた。

龍鱗州扇牙国(りゅうりんしゅうおうがのくに)最大の湖、岸白湖(きしろのおおうみ)である。

湖とはいえ、その大きさは相当のもので、はるか水平線の向こうに岸が見えないほど。

雷蝶：「ひゃー、たいした湖やなぁ、まるで海や」
須波：「ここに……この湖の底に、四本目の刀があるんですね……」
烈堂：「ああ。だが、どこいらにあるかってェのは、サッパリだ。ま、山を下れば村があるらしいや。とりあえずはあそこで、話でも聞いてみようじゃねぇか」

近づけば、砂浜には船が並べられ、網が干されている。漁村である。一行は魚を干していた村人に尋ね、小高い丘の上の網元の家を訪ねることにした。

GM：小高い丘の上にあるのが、網元の家ですね。
須波：じゃ、砂浜にヨロイを留めて、歩いて行きますです。
烈堂：「オレァここで、見張りがてらに一杯やってるわ。お前ェらで行ってきな」

にやにや笑う烈堂に不満気な顔の雷蝶だったが、結局文句は言わずに網元の家へと向かう。扉をたたくと老人が顔を出し、中へと招いてくれた。

網元(GM)：「ほう、旅のお方でございますか。たいしたもてなしはできませせぬが……」
雷蝶：「ええよ、あまり気ィは使わんでも」
深影：「それよりも、網元どの。ずいぶんと活気に乏しいようでございますが……？」
網元(GM)：「はァ、それが実は……」

その時だった。どぉん、と、地響きにも似た巨大な音が、空気を震わせる。ついでびりびりと戸板を震わす振動。

須波：「うわっ！」
雷蝶：「な、なんやァ!?」外に出てみるで！
GM：丘からは湖が見える。その水面に、大波……いや、津波だな。浜の方に向かってくる。
須波：「じッ、地皇！」と叫んで、駆け出します！
雷蝶：須波の肩を引っつかんで、「アホッ、危ないやろがッ！」
烈堂：お前ェら、オレの心配はなしかよ（笑）
GM：言ってる間に、波は浜を洗って消えていきます。どざざざざーん……しばらくして、丘を登ってくる烈堂の姿が。
烈堂：「やれやれ、ひでェ目に遭ったぜ」
雷蝶：（網元に）「うちらの連れや」
須波：「じッ、地皇は平気ですか？」
烈堂：「流されちゃいねェよ。安心しな」
GM：中に水入っちゃって、接合するときに砂がじゃりじゃりしたりはするかもしれませんけれどね（笑）
須波：あうー（笑）　あとできれいに掃除してやるから、待っててておくれよ、地皇（笑）
深影：「烈堂さん、何があったのです？」
烈堂：「あんたが網元かい……いったい、あのどでけぇバケモノは、なんだってんだ？」
雷蝶：「ば、バケモノ!?」
烈堂：「ああ。島くれェもあるでっけぇ化けモンが、湖の真ん中で跳ねやがった。おかげでこのザマよ」

説明を求められた網元が、頭を振ってゆっくりと、答えた。

網元（GM）：「主様じゃ……岸白の主様が……お暴れになっとるのじゃ……」
雷蝶：「はァ!?」
深影：「聞いたことがあるわ。岸白湖には主と呼ばれる何者かがいて、良く晴れた日には沖合いに小島のような背中がたゆたっているのを見ることができる。でも、暴れるなんて話は聞いたことが……」
網元（GM）：「はぁ、それもふた月ほど前までの話。ここのところ急に主様が暴れだしましてな、村のものに被害まで出る始末……それゆえ、わしらは漁に出ることもできないのでございます」
雷蝶：「まいったなぁ、あんな調子じゃ湖に潜ることすらできへんやないか」
網元（GM）：「は？　潜る……とは？」
須波：（小声で）「……言っちゃっていいんでしょうかねェ？」
雷蝶：「別にかめへンやろ。マズいことがあるわけでもなし」
深影：「実は、わたしたちは、あの湖の底に沈んでいるという船を、探しに来ているのです。正確には、その船の荷を、ですけど」

網元のけげんそうな顔。

深影：「何か？」
網元：「いやのう、ふた月ほど前にこの村に来た客人も、同じようなことを言うとったもんでなぁ……そういえば、あの客人たちが村を出てからのことじゃったと思うてな、主様が暴れだしたのが……」
一同：「!!」

湖を見る少女

再び家の中へと入った一行は、「ふた月前の客」とやらの話を尋ねた。冷めた茶を一口すすってから、網元は口を開く。

網元（GM）：「わしらも詳しいことを知っておるわけではないのですがな、ふた月前に村へ来て、同じように湖の底に沈んでおる、昔のお殿様の船の話を聞いて回っておった者がおりましてな……そう言えば、あの方たちが村を出て、姿を消したあとに主様が暴れるようになったのだということを、ここしばらくの騒動のせいで気づく間もなかったのですが……」
雷蝶：「それって……」
烈堂：「間違いねぇ。『刀』を探してたに違ェねぇや。当然、ほかの領主も動いてるってコトは予想してたんだ。驚くほどじゃねぇ」
須波：「そ、それと『主』の暴れているのには、やっぱり関係があるんでしょうか？」
深影：「でしょうね」
須波：「じゃあ、刀はもしかしたら、もうほかの誰かの手に渡っているかも……！」
烈堂：「どっちにしろ、いっぺん調べてみねぇことにはな。網元、この村でいちばん、潜りの達者なモンでも……」
？？（GM）：「五十年前の殿様の船でしょ？　無理無理、そんな所まで潜れる人なんて、いやしないわ」

一同が振り向くと、戸口のところには一人の少女が立っていた。長い髪の毛から水を滴らせた少女は、四人に挑戦的な目を向けて、ことばを続ける。

少女（GM）：「村はずれのばば様が言ってたわ。沖合いに船が沈んだばかりのころ、何人もの人たちがせめてお宝だけでも引き上げようって頑張ったんだけれど、船までたどりつくことはおろか、船の姿を見る所まですら潜れなかったんだって」
雷蝶：「？　誰や？」
網元（GM）：「わしの孫娘でしてな、砂夜と申します……これ、砂夜、お前はまた、浜まで降りておったのか。危ないから気をつけろとあれほど……」

網元の小言に対して、砂夜と呼ばれた少女は逆に、怒りすらはらんだ目でにらみ返しつつ、叫んだ。

砂夜(GM)：「何言ってンのよ！　父ちゃんと母ちゃんはアイツに殺されたんだ！　許せるもんか！　あきらめちゃってるじいちゃんもほかのやつらも、だいっきらいだッ!!」……叫び終わる前に、きびすを返して外へ走っていっちゃいます。
須波：「あ……！」
網元(GM)：「主様が暴れ出したときに、波に巻かれて沈んだ船は、わしの息子と息子の嫁……あの子の両親でしてな。それ以来、毎日のように岸に降りて、主様をにらみつける毎日ですじゃ」
須波：みんなに、「かわいそうですよ。何とかしてあげましょうよ！」
烈堂：「しかし、あのでかさだ。どうしろって言われても困っちまうわなぁ」
雷蝶：「釣り上げるてわけにもいかんしなぁ」(笑)
須波：「深影さん？　地皇さえ、深影さんの作ったヨロイさえあればなんとか……！」
深影：「……」
雷蝶：(あきれ顔で)「あんなぁ、いくらヨロイだからって、できるコトとできへんコトがあるンやで？　悪いけど、今回ばかしはできへんコトのほうや」
須波：「そんな……」

三　作戦会議

数刻ののち。

烈堂：「さて、なんにせよ、話に聞いた大船が沈んでるってェ場所を探らねぇことにァ、どうしようもねェってワケか」
雷蝶：「だいたい、ホンマにその船に、くだんの刀があるかどうかすら、わからへんのやろ？」
烈堂：「ああ。今、はっきりしてるのは、その船に宝刀の一本が『あった』コトだけだ。ほかの誰かが宝刀を探しに来て、それ以来湖じゃあの化けモンが暴れるようになった。正直、今もあそこに刀があるっていう保証はねェな」
須波：「深影さんの陰陽術でどうにかするってコトはできないんですか？」
深影：「場所を探る程度ならできるかもしれませんけれども……ま、そこから始めてみましょうか」

がらり。まだ少し怒ったような表情で、網元の家に砂夜が戻ってきた。車座になって相談事をしている四人にけげんな顔を向ける。

砂夜(GM)：君たちのすぐ隣に座り込んで、興味津々って感じで語りかけます。「ねぇ、ほんとにあんたたち、湖に潜るつもりなの？」
烈堂：「面倒ッ臭ぇからなぁ。できれば楽に済ましてェところだがな」
深影：「それに」さらさらと札に《式》を書いて、実体化させます。「探し物だけだったら潜らなくてもできますし、ね」

目を丸くする少女。当然である。小さな村の少女などに、陰陽術を目にする機会などそうあろうはずもないのだから。

砂夜(GM)：「……なに、それ……」
須波：「あれが僕たちの、奥の手さ！」(ものすごく得意げ)

宙に浮かぶエイのような姿をした《式》は外へと飛び出し、湖へと向かった。

四　湖底

術者である深影の精神と《感覚結合》することにより、《式》の見たものは御影の視界に、《式》の感じたことは深影の感覚に、直接流れ込んでくるようになっている。今、《式》は湖底を滑るようにして泳いでいた。

《式》と《感覚結合》

《式》を組む場合、その能力の決定のほかに、《感覚結合》をするか否かの選択がある。

《感覚結合》とは、文字どおり《式》と術者の感覚を結合することで、これにより《式》は命令によってではなく、術者の意志によって動かすことが可能となる。

ただし、《感覚結合》をした《式》が制限時間を迎えて分解したのではなく、何者かによって破壊されてしまった場合、術者はその精神にダメージを受けることになる。

御影：「底は砂が巻いていて、あまり見通しは良くありませんね……」
砂夜(GM)：「ねぇ、あの人、何言ってるの？」
須波：「今、さっきの《式》で、湖底を調べているんですよ！」(ものすごく得意げ)
御影：「今、だいたい湖の中心あたりですか……まだ、なにもおかしなものは見つかりません……」
砂夜(GM)：「《式》？　調べる？　なにそれ、そんなコトができるの？」
須波：「当然ですよ！　なんたって深影さんは、天才陰陽師なんですから！」(ものすごく得意げ)
御影：「船？　……違う、これは漁船か何かで

すね。ずいぶん古いものだけど、関係はなさそうです」
砂夜(GM):「アンタねぇ。さっきからずいぶんと偉そうじゃないのよ。いったいいくつなの?」
須波:「え、か、数えで十四ですけど……」
砂夜(GM):「じゅうしィ? なァんだ、あたしのほうが年上じゃないの。アンタね、年上の人に対してずいぶんな態度じゃ……」
御影:「見つけた! かなり大きな船です!」
須波:「え、み、見つかりましたか!?」(逃げるように御影に寄っていく(笑))

御影の視界には、巨大な船が見えている。近づけば水ごけがその船体を覆い、ところどころに見える木切れはぼろぼろに朽ちてしまっている。

御影:「上に登ってみます……」
烈堂:「気をつけろよ、何があるかわかったもんじゃねぇ」
御影:「船の上に……何か……大きなモノが……あれは……ヨ、ヨロイ!?」
須波:「えっ!」

御影が見ているものは、完全に沈黙したヨロイだった。頭部から胸までを大きくえぐられ、座り込むような形で船の上に動きを止めているそのヨロイは、まるで巨大な仏像のようにも見える。

御影:「これは……? 船と違って、このヨロイはずいぶんと新しいようですけれども……?」
雷蝶:「なんやて?」
須波:「な、中のヨロイ乗りは!?」
御影:「……」

御影が頭を振る。

御影:「完全に……破壊されています」
烈堂:「新しいってコトは……それがふた月前の客人ってヤツか? なぁ、嬢ちゃん。ふた月前の客人の中には、そうだな、嬢ちゃんや、ウチの若様くれェの年ごろのモンは、いたかい?」
砂夜(GM):「うぅん、あたしは見なかったけど……浜に置いてあったでっかいやつ、ヨロイ……って言うの? アレみたいのは……いた」
雷蝶:「……決まり、やな」
須波:「ほかの者たちは、どうしたんでしょう?」
烈堂:「逃げ出したか、一緒に沈んだか、してるんだろ。御影、船の中にお宝がまだ残ってるか、調べてみてくれ」
御影:「もうやってます。今、船倉にたどりついたところ……」

《式》の目で、船倉の中をぐるりと見回す。天井に大きく開いた穴や、床板に穿(うが)たれた人の何倍もの大きさの足跡が見える。

御影:「どうやら、ヨロイはここまで入ってきたらしいですね。これは……千両箱ですか。……どれも手付かずのようですが……」
雷蝶:「お、お宝! な、なぁ、御影はん? それ、持ってこれへんか?」(笑)
御影:「無理ですよ。そういうふうに組んである《式》じゃないんですから……」
烈堂:「刀はねェのか?」
御影:「探してますけど……見つかりませんね……時間が切れる前にいったん戻ります」
雷蝶:「なんでや? 時間が切れたら消えてまうだけやから、戻らなくてもええんとちゃうのん?」
御影:「ここの場所を確認しておきたいんですよ。真上に上がります」

《式》が船を離れ、水面を目指して上昇する。もうすぐ水面というところで、《式》の目の前に、巨大な影が現れた!
「岸白の主」は、その巨大なあぎとにはいささか小さすぎる獲物、すなわち御影の《式》を飲み込み、かみ砕いた。《式》が死に、御影の精神が《式》からはじき出される。

御影:「あ、きゃッ!」
雷蝶:「どしたァ!?」
御影:(苦痛に顔をゆがめながら)「《式》が……食われました……くッ……!」
烈堂:「け、動くものは手当たりしだいってトコかよ? ますますやりにくくなってきやあがったな……」

烈堂のことばを肯定するかのように、雷が束になったかのような轟音と、地を震わせる振動。
主がまた跳ねたのである。

烈堂:「ち、喜んでやがるのか、それとも怒ってやがるのか……?」
雷蝶:「御影はんも休ませなあかんし、こらあしたまでは一時休戦やな」

五 夕焼け

夕焼けに湖面が赤く染まる。
深影を網元の家に休ませたまま、三人は湖畔へと下りてきていた。
向こうの方で地皇をきれいにしようと四苦八苦している須波を眺めながら、砂浜にしゃ

がんだ雷蝶が烈堂に尋ねた。

雷蝶：「烈堂はん、あの『主』とかゆうヤツに挑んでみたら、どうなる？」
烈堂：「死ぬさ」
雷蝶：「なんや、烈堂はんともあろうモンが、ずいぶん弱気やないか」
烈堂：「お前ェな、どうやったらアレと戦おうなんてェコトを思いつくんだ？」
雷蝶：「ただの魚やないか、あんなモン」ほら、うち見てへんし(笑)
烈堂：「……お前ェでもわかりやすいように話してやるよ」と言って、路傍の雑草を引き抜いて、「こいつで人を殺せると思うかい？」
雷蝶：「そらぁ無理や」
烈堂：「あの化けモンにかかっちゃあ、コイツもお前ェの獲物も、同じことよ」
雷蝶：(ぶ然とした顔)「そんなことあらへん。うちの刀とそんな草ッ葉を、一緒くたにせんでほしいわ」
烈堂：「一緒さ。刀じゃあどうにもならねェこともだってある。それァよく知ってンだろ？」
雷蝶：「そんなこたないわ！　剣さえあればたいていのことはできる。できないことのほうが少ないくらいや！」
烈堂：「……じゃあ、刀がお前を癒してくれたか？」
雷蝶：「そ、それは……」
烈堂：「お前ェ、若にさっき言ってたじゃねェか。ヨロイだって万能じゃねェ。できるコトと、できないコトがあるってな。刀だって同じさ。刀にできるのは、命を奪うことだけだ」
雷蝶：「……」

にらみ合う二人。無言のまま、答が出せないまま、時が過ぎてゆく。

須波：「うわー、甲腔の内側まで水浸しだよう……とりあえず、水をかき出さなきゃ……」ざぶざぶ。「あーあ、足首まで砂に埋まっちゃって……」じゃりじゃり。「動かしてやりたいけれど、中がきれいになるまで待っておくれ、地皇……」ごしごし。「……ふぅ、これであらかた……」
？？(GM)：「……なに一人でぶつぶつ言ってるの？」
須波：「うわっ！」ふ、ふ、振り向きますッ！

振り向けば、夕焼けに照らされて少女のいたずらっぽい瞳がきらめく。腰に手をあてて、砂夜が須波を眺めていた。

須波：「ふぅ、砂夜さんか。脅かさないでよ」
砂夜(GM)：「ごめんごめん、そんなに驚くとは思わなかったから」と言いながらにっこり笑います。で、「あっちの方で、二人の人、ケンカしてたみたいだったけど……？」
須波：「ああ、あの二人はいつもああなんです。気にしなくていいですよ」(笑)
砂夜(GM)：須波の答自体には興味がないような感じ。ヨロイの回りをぐるりと回ってから、「ふぅん、確かに、前に来た人たちのとちょっと似てる……ねぇ、須波がこれに乗って動かすの？」
須波：胸を張ります。「そうさ！　僕と地皇が力を合わせれば、無敵なんだ！」
砂夜(GM)：「へぇ……」と言って、目を細めて地皇を見上げます。
須波：「い、今は波をかぶっちゃったせいで砂まみれで汚いけど、本当はもっときれいで、かっこいいンだ」
砂夜(GM)：地皇を見上げたままで、頭を振ります。「うん、わかる。今だって、かっこ悪くなんかないよ」
須波：「ほ、ほんとにそう思う？」すごいうれしいですー(笑)　「ねぇ……動いてるところを見せますよ！」

言うが早いか、須波は地皇の中へと飛び込んだ。眠る時のように丸くなり、魂緒をつないだ明鏡に魂を落とし込む。一瞬の浮遊感ののち、接合が完了し、地皇の目は須波の目、地皇の手は須波の手となる。

須波：「ほら、どうです！」
砂夜(GM)：目を丸くして、「すごーい！　すごいすごーい！」

ちょっといたずら心を出した須波が、ひょいと手を伸ばして、砂夜の体を持ち上げ、地皇の肩に少女を乗せた。

砂夜(GM)：「きゃッ！」と小さく叫んで、地皇の首にしがみつきます。
須波：「ほら、高くて気持ちいいでしょう？」

固く閉じた目を恐る恐る開いてみれば、初めて経験する視点で広がる、夕焼けに照らされた一面の湖。少女の口から思わずため息が漏れる。

砂夜(GM)：「わぁ……いつも見慣れてるはずなのに、初めて見る景色みたい……」

しばし無言。そのうち、砂夜がぽつりと口を開く。

砂夜(GM)：「ねぇ……」
須波：「はい？」
砂夜(GM)：「これ……地皇って、強いんでしょ？」
須波：「う、うん！　もちろん！」
砂夜(GM)：「じゃあ、ぬし様が暴れるのも、止められる……？」
須波：「そ、それは……」

砂夜（GM）：「できないの？」
須波：「雷螺さんが言ってた……ヨロイにもできるコトとできないコトがあって、それはできないほうなんだって……」
砂夜（GM）：「降ろして」
須波：「え？」
砂夜（GM）：「降ろしてって言ってンの！」

地皇の伸ばした腕を足がかりにして、砂夜が砂浜に飛び降りた。くるりと地皇＝須波の方をにらんで、怒った顔。

砂夜（GM）：「なによ！　偉そうなこと言って、結局何もできないんじゃないの！　あんたも村のヤツラと一緒よ、大ッ嫌い!!」

一気に叫んで走っていってしまう砂夜。須波は追いかけることもできず、ただ砂浜に呆然と立ち尽くす。

六　仕合い

翌朝。

烈堂：「ふわわ……お？　こんな朝っぱらからご苦労なこったぜ」

網元の家の裏手で、巨大な「八連斬甲刀」を振るう雷螺。日も昇らないうちから一人で鍛錬していたのである。

烈堂：「よぉ、精が出るな」
雷螺：無視して、素振りを続ける。「せい！　せいッ！」
烈堂：無精髭をこすりながら、「しっかし、よくそんなデカブツ、自在に振り回して戦えるもんだぜ。てぇしたもんだ」
雷螺：あ、ほめられた（笑）　「うちの刀がでかいンやない。ダンナの刀が細ッこいだけやんか」素振りをやめて、「うちに言わせりゃ、そんな針金みたいな刀で戦うとるほうがどうかしとるわ」
烈堂：「そんなにでかくちゃあ、振り回せる場所も限られるだろうに」
雷螺：（得意げに）「そらあ、コイツを使いこなすことのできへんヤツの理屈や」
烈堂：「へェ」

付け加えて、何気なく。

烈堂：「ちょっくら、戦ってみるか」
雷螺：「……虎堂の陣中以来やな」
烈堂：「ああ」

雷螺：「本気で、いくで」
烈堂：「まぁ、それもいいだろうさ」
雷螺：（顔から笑いが引く）「ダンナに見したる、うちの……力！」コロコロ、5個成功！
烈堂：「武器ねらい」するんで、【知覚】使ってサイコロ振るぜ！　よいしょ！　ほら勝った、6個成功!!

斬りかかった雷螺の大剣を、烈堂は右に握った刀で受け止めた。さらに、左に抜いた脇差の小剣の背が雷螺の首筋に押しつけられる。ひやりとした感触。

烈堂：「どうだい、小せェ刀の勝ちだ」（にやり）
雷螺：（真っ赤な顔）「くッ……ひ、卑怯やないか！」
烈堂：「ナニが？」
雷螺：「にッ、二本使うなんて……」
烈堂：（笑）「くくッ……わっはっはぁ！」
雷螺：「ナニがおかしいんや！」
烈堂：「勝ちゃあイイじゃねぇか、死人は文句を言わねェぜ、どんな手で殺されたってな」
雷螺：「う、うちはまだ生きとるで、だから言ったる、ダンナは卑怯もんや！」
烈堂：「おめェは本気だったかも知ンねぇが、おれァ遊びだったからな」
雷螺：「うちはまだ、鋼化結線蟲を使っとらんで」
烈堂：「おれだってサムライは使わなかったんだぜ？」
雷螺：「なら……なら、本気の勝負や!!」
烈堂：「へェ、なら……」首筋に押しつけていた刀の背を返して、「これで、オレの勝ちさ」
雷螺：あッ！
烈堂：「引けば、おめェは死ぬぜ。サムライなんざ、必要ないね。全力を尽くすほどの相手じゃあねェよ」
雷螺：「ううッ……うるさいわあッ!!」首筋が切れるのもかまわず、斬甲刀を持ち上げて刀を跳ね上げるッ！
烈堂：「おおっとっと」言いながら、一歩下がってやるよ。
GM：はい、そこまで！

ざざざ、と、波のざわめく音。動きを止めた二人が丘の下に広がる湖面に視線を向けた、その瞬間。
三度、岸白湖の主が、跳ねた！
宙高く舞い、甲高い叫び声を上げた化物は、くるりと身を翻して、再び湖面へと落ちてゆく。
ついで、周囲を包む轟音と、地震にも似た振動。

雷螺：「あ、あれが……」

烈堂：「そうさ。あれが、主だ。どうだい？　お前ェのデカブツでさえ、アイツにかかっちゃあ爪楊枝みてェなモンだろ？」
雷螺：「……」

宝刀の在りか

同時刻。
とりあえず丘の上まで地皇を連れてこようと、早起きして湖まで出ていた須波。砂夜を怒らせてしまったこと（結局、あのあとは口をきいてもらえていないのである）を考えながら、網元の家まで続く坂道を登っていた。

須波：「……!?　後方に巨大な反応!?　……あ、あれはッ!!」
GM：ヨロイの増幅された知覚能力によって、君には主の姿が、まるで目の前にいるかのようにわかる。巨大なぬらぬらとした体、その体には不釣り合いなほどに小さな目……主がジャンプの頂点で体を翻した瞬間、その小さな目がきらりと金属質のきらめきを発したのを見た！

須波：な、なんですか!?　【知覚】の＜観察＞……じゃないや、今はヨロイに接合しているから、＜観察＞技能の代わりに＜接合＞技能を使って、調べます！

“接合”中の行動

ヨロイに“接合”し、ヨロイと一心同体になっている最中の行動は、一般技能を使用する判定に関しては、通常使用する技能ではなく、代わりにヨロイ乗りの＜接合＞技能を使用できる。
加えて、能力値も【体力】、【敏捷】、【知覚】の3能力値であれば、ヨロイのものを使用できる。
＜接合＞技能はヨロイをどれだけうまく操ることができるかということを表す技能であり、これによって生身ではひ弱な少年少女が、百戦錬磨の戦士となることができるのである。

須波は、地皇の視界を最大にまで拡大し、光の元を探ろうとした。
光っていたものは、はたして、刀であった。
巨大な妖の右の目に、深々と刀が突き立っているのである！

須波：「あ、あれは……もしかしてッ!!」急いで、網元さんの家に戻りますッ!!

さらに同時刻。
意識を取り戻した深影は、起きてからずっと宝刀を調べていた。
五本集めれば、神宮家が名代と認めると言うこの宝刀。はたして、神宮家がこの刀を集めさせる理由は、名代を選び出すためだけなのだろうか？
深影はそのことが気になっていたのである。

GM：今のところ、君たちが持っている刀は三本だよね。刀と、太刀と、それに、脇差だ。どれも鍔細工とつかが同じデザインで出来てる。前にも言ったけれど、珠武器の機構は組まれていない。
深影：「……刀工の銘が刻まれていない以外は、おかしなところもなし、と……」
GM：そゆこと。ちょうど今、主が跳ねた音が響く。ずずうんと、壁や戸板を震わす振動。
烈堂：オレと雷螺は戻ってくるぜ。
須波：じゃ、僕も同じくらいに戻ってくるです。んで、「た、たいへんですッ！」
雷螺：「津波が来るてか？　そんなコトはわかっとるわ」
須波：「そ、そうじゃなくてッ!!」

網元の家の中、須波の説明を聞いて、ほかの三人が目を丸くする。

雷螺：「なんやてぇ!?　あのバケモンの目ン玉に、刀が刺さっとる!?」
須波：「はい、確かに見ました！」
雷螺：「で、でも、それがウチらが探しとる刀やて決まったわけじゃ……」
深影：「あるはずの刀が船倉にはなかった、破壊された新しいヨロイ、最近になって暴れ出した主に刺さった刀。確かに決まったわけじゃありませんけれど、かなり確率は高いんじゃないでしょうか」
烈堂：「で、どうするよ？　釣り上げるってわけにゃあいかねェぜ」
雷螺：「うーん……そうや！　深影はんの《式》を使うて……」
深影：（ため息）「……《式》と言えど、できるコトとできないコトがあります。さすがに無理ですね……」
須波：「そ、それじゃあ……こういうのはどうで

す？」

　議論は続くが、決定的な作戦が出せないまま、時間だけが過ぎてゆき、はや夕刻。三人が意見を出しては却下している間、ずっと黙っていた烈堂がぼそりと、口を開いた。

烈堂：「直接、引っこ抜きに行くしかねェか」
一同：（一斉に烈堂の方を向く三人）「え!?」
烈堂：「囮の船かなんかを出して、主をおびき寄せる。主が跳ねたところで、深影、おめェの《式》の出番だ」
深影：「主のところ……刀のところまで、《式》を飛ばして運んでくれ、と？」
烈堂：「あれこれ仕掛けるよりは、そのほうがよっぽど信頼できるさ」
須波：「あ、危ないですよ！」
烈堂：「どんな手ェを使ったって、危ねェことにゃ変わらねぇんだ。かまわねェよ」
須波：「で、でも……！」
深影：「ほかのどれよりも、それがいちばん可能性が高いかもしれませんね、確かに……」
烈堂：「じゃあ、決まりだ。朝いちで網元から小船を買ったら、すぐに始めるぜ」
雷螺：「……」（ぶ然とした表情）

回想

雷螺：イライライライラ。

　主に刺さった刀を抜くための作戦を日の出とともに始めることになったので、今晩はきちんと休んでおいたほうがいいはずなのに、雷螺は寝つけずにいた。
　それというのも、昨夜の作戦会議のせいだ。

雷螺：「直接つかみに行くンはええけど、誰が行くンや？」
深影：「わたしは別に誰でもかまいませんけど」どーせ自分じゃないしー（笑）
須波：「僕の地皇で行きますよ！」
深影：「ヨロイの重さはさすがに《式》で支えきれませんよ。成功する確率が最も高い人が……」
雷螺：「うちか、ダンナか。うちのほうが身ィも軽いし、うちが行くで」
深影：「そうですね。サムライでない雷螺さんなら、万一のときに《式》で肉体を強化することもできますし……」そう言って、ちらりと烈堂さんを見ます。
烈堂：む。深影と目が合うと、立ち上がって「オレが行くぜ」と。ちくしょう、ハメられた（笑）
雷螺：じゃ、ダメ押しを（笑）「な、なんでや!? ウチのほうが可能性も高いって、深影はんも言うとるやんか！」
烈堂：「だからさ。オレが失敗しても、もう一度あるだろ、それなら」
雷螺：「そ、そらそうやけど……危険すぎや。死ぬかもしれへんのやで!?」（笑）
須波：「そうですよ。ここは雷螺さんに任せましょうよ！」（笑）

深影：「二人とも引っ込みがつかないようですし……ここは、くじ引きでもなんでもいいから、決めてしまいましょう」と言って、こよりを二本手の中に。はい、引いて引いて。
雷螺：「くじ引きやてぇ!?　そんなええかげんなコトで……！」
烈堂：「いいじゃねぇか。こんないいかげんなコトに命を預けるのも、かっこいいぜ」
烈堂：「無地」
雷螺：「印が付いとる」
深影：「……無地の方が当たりですね。雷螺さん、恨みっこなしということで」
烈堂：……ちくしょう、ハメられてるよ、オレ（笑）

トーク13階段

「引っ込みがつかない」。会話だけですべてが構成されているテーブルトークで、しばしばこれは死を招くことすらある。
　今回深影が使ったのは、「烈堂を無視して話を進める」ことによって、逆に烈堂を危険な任務に志願させるという高等テクニック。
　またしても、烈堂は、ハメられたのだ（笑）……みんな烈堂嫌いなのかなぁ（笑）

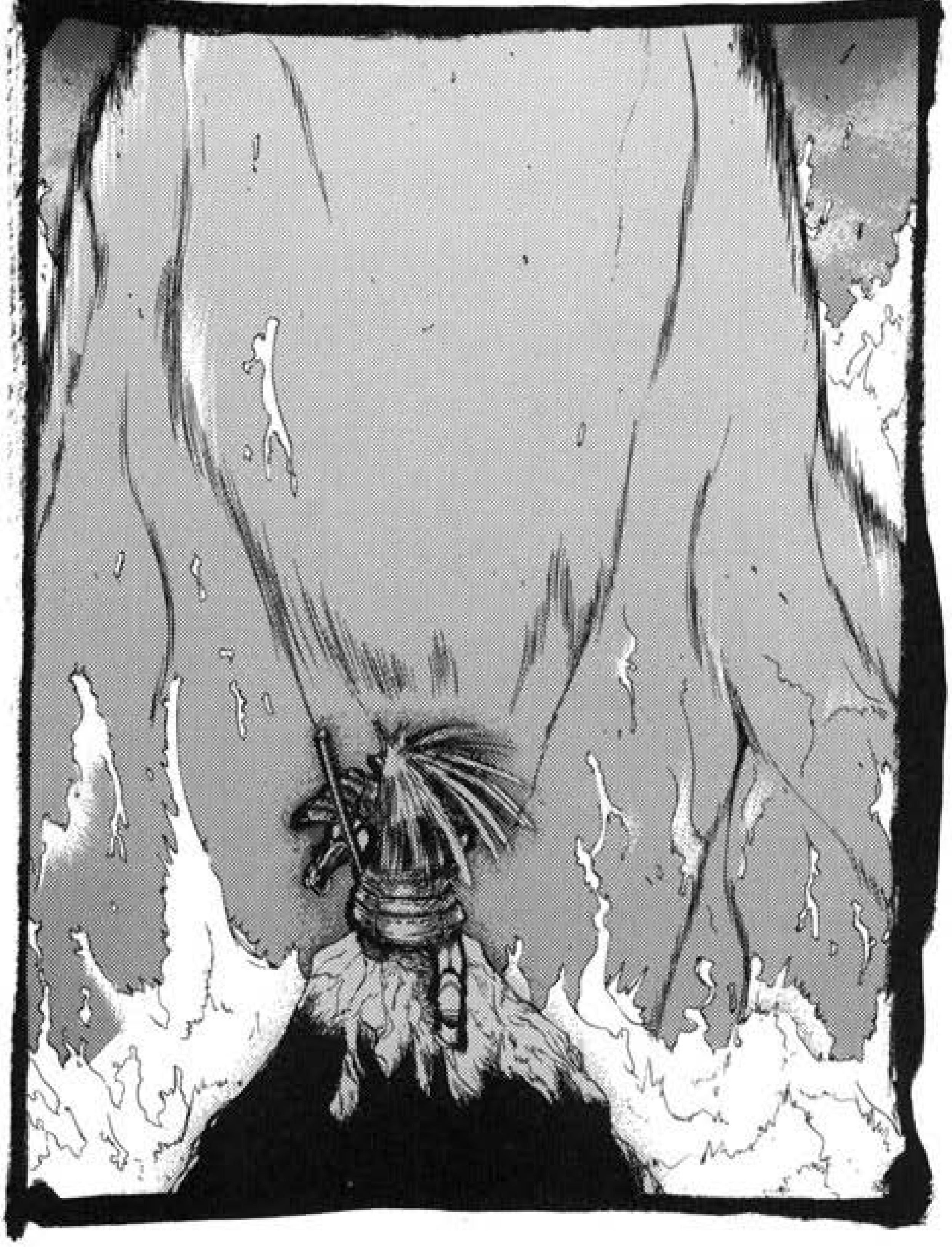
雷螺：「ああもうッ、胸クソが悪い！」

　そんなわけで、雷螺は眠れぬ夜を過ごしていたのである。
　夜が明ければ、作戦が始まる。

刀を抜く

　翌朝。
　囮にするため、古い小舟を買った一行は、湖へと降りていった。
　船は誰も乗せずに湖面を滑ってゆく。主が現れたら、《式》が烈堂を主のところまで運ぶ予定だ。

GM：全員、今どこにいるか教えて。
烈堂：当然、砂浜で湖面をにらんでいる。
深影：式紙を用意して砂浜。
雷螺：腕組みしてその横。
須波：地皇に乗っていつでも動けるようにしてるです。
GM：砂夜も湖に降りて来てる。今は地皇のかかとに腰掛けて、湖をぼおっと見てる。
須波：「砂夜さん。これが成功したら、主が暴れるのも止まるかもしれませんよ」
砂夜（GM）：「うん……うまく……いくかな？」
須波：「大丈夫です。烈堂さんも、深影さん



も一流です。きっとやってくれますよ」
深影：烈堂さんに向かって、小声で「なぜ……自分が行くなどと言い出したんです？」
烈堂：「五本の刀を集めなきゃいけねぇンだ。当然だろ？」
深影：「……答になってませんよ」
烈堂：「それに……全部集まったら、やりたいことがあるのさ……来たぜ！」

湖面が、ざわりと盛り上がった！
ものすごい音とともに、岸白の主は跳ね上がり、小舟を木の葉のように宙に舞わせる。

深影：「行きます！」《式》を呼びますッ！【飛行能力】を重点的に組んだ、飛行専門のヤツです！
烈堂：「さあて、いっちょやったるぜ！」もろ肌を脱ぎ、《サムライ》を発動！

烈堂の肩に鉤爪を食い込ませ、《式》がふわりと宙に浮いた。

深影：「行きますよ、烈堂さん！」

叫ぶと同時に加速。《式》はものすごい勢いで空を切り裂き、主に肉薄する。
ぎょろり。片方しかない妖の眼が、烈堂を見た！
そのまま、宙で体をひねり、妖は烈堂を飲み込もうとする。

烈堂：「ちぃッ、来やあがった！　深影、離せ！」

《式》を破壊され、深影がダメージを受けることにより、今後の選択肢を狭めるのを嫌ったゆえの発言である。
烈堂のことばを受け、《式》が手を離し、烈堂は勢いのままに主に向かって落下してゆく。

GM：頭にうまく乗っかることができるか、主の【敏捷】＜格闘＞と対抗判定しよう。コロコロ。6個。【運動】かなんかで判定してちょうだい。
烈堂：失敗したら？
GM：良くてまっ逆さま。悪くて「パクン！」
烈堂：じゃあ、小さい方の刀を抜いて、ソイツを妖の体に突き刺す！　これなら＜白兵戦闘＞技能使っていいだろ。でや！　ひのふのみ……よっしゃ、7つ成功！
GM：おーらい。主の鼻の頭のあたりに、君は着地することができた。刀を刺された痛みに、主が咆哮（ほうこう）する。湖面をびりびりと震わせる轟音。
雷蝶：「やったんか？　くそッ、こっからじゃ見えへん！」
須波：ヨロイの増幅視覚で見てますよね。「成功です！　主の頭に乗っかりました！」
雷蝶：「だけど……急がないと、主が湖に落ちてまうで！」

能力値と技能ととんち

“天羅”の判定システム下では、能力値や技能は、それがイメージさせる使い方ならほぼすべて可能である。
能力値や技能を「どう使うか」という点において、プレイヤーの想像力がかなり重要となるのだが、そのほかにもこういったような場合、マスターの指定した技能でなくても、それを使用するのに十分な説得力さえあれば使用が許される。
上の例の場合、＜運動＞技能を使っては失敗すると判断した烈堂は、刀を使うことで自分の得意な＜白兵戦闘＞技能での判定ができるようにしたのである。
結果、ギリギリでの成功。もし＜運動＞技能を使っていたなら、今ごろ烈堂は主の腹の中であろう。

じゃらん、と柄から鎖を引き出し、烈堂は手首に巻きつけた。斬鬼丸の首を落とすのにも使われた、あの鎖である。
ぶちぶちと手の皮が裂け、血がしぶくのを意に介さないかのように、烈堂はにやりと笑う。

烈堂：「取りついたぜェ！」ぐるりと見回して、刀を探す！　どこだッ!?
GM：眼は君から程なく離れたところ。思いっきりジャンプすれば、届くか届かないかって距離だな。
烈堂：なら……べろりと唇をなめて、「あれか……行くぜッ！」時間が惜しい！　“気合”を使って、“追加行動”をする！　で、だ。主の表面を……走る!!

鎖の反動を利用して勢いを付けた烈堂は、ぬるぬると滑る主の体の上を走る！

GM：滑って落ちないように判定してくれぃ。難易度は4。

烈堂：うーん、こんどはごまかしも効かねェよなぁ……＜運動＞は技能が低いんで、"気合"使って一時的に段階を上げてから……コロコロ……成功度は5！　うひゃ～、ギリギリだぜ。

烈堂は走る！　どんどん刀が近く、大きくなっていき……

須波：「あれ？」
雷蝶：「なんや、どないした？」
須波：「いえ……錯覚でしょうか……刀と烈堂さんの大きさが合わないような気がして……」
雷蝶：「ダンナもあのずうたいやからな。刀なんて、細っこいつまようじみたいに見えるンやろ」
須波：「いえ、それが……逆なんです」

烈堂の目の前にあるのは、大人の背よりももっと大きな、ヨロイ用の太刀。

烈堂：だからって……手ぶらで帰るわけにゃあいかねぇんだよ！　柄を思いっきりつかんで、背中に背負うようにして引っこ抜く!!
「うおおおおおおぉぉぉッ!!」

烈堂が刀を抜くと、赤黒い空洞となった主の眼から、血とも体液ともつかない液体がごぽりとあふれ出す。
今まで経験したこともないような痛みに、主が身をよじり、狂乱した。
足場を失った烈堂が湖へと落下していく！

須波：「ああっ、落ちるッ！」
雷蝶：「深影はんッ!!」
深影：さっきの主の叫び声を至近距離でまともに聞いたせいで、気を失ってます（笑）
雷蝶：なんやて!?（笑）　気ィを失ッとる深影はんを見て、軽く舌打ち。で、ぐいッと胸倉を引っつかんで、張り手一発！　「深影はんッ！　起きいやッ!!」
深影：ひ、ひどい（笑）
雷蝶：「深影はんッ！　烈堂のダンナが落ちてまうッ……早く、《式》をッ!!」
深影：「は……わかってますッ！」

空中を旋回していた《式》がコントロールを取り戻し、烈堂に向かって飛んでゆく。

GM：烈堂を助けるには、《式》の能力値で判定。難易度は、ちょっと高めに3といきましょ。
深影：《式》の能力じゃあほとんど成功しないじゃないですか（笑）　感覚結合しているから、"気合"を使ってもいいんですよね。能力値と、判定値とを一時的に上げて、コロコロ……成功！

がっしりと、落ちてゆく烈堂の体を、《式》が再びつかんだ。烈堂をつかんだまま、《式》は再び高く舞い上がってゆく。

須波：「やった！」
烈堂：「ありがてェ！」
深影：「う、刀を持っているせいで、かなり重い……」

烈堂の足もとに広がる湖面に向かって主は落ちてゆき、ざばあんと、轟音を立てて水の中に消える。
こうやって、一行はついに、四本目の刀を手に入れるに至ったのである。

雷蝶：烈堂はんが戻ってくる前に……深影はんの方を向かないまま、「深影はん……あのくじ引きやけれど……あれ、イカサマやろ」
深影：「……」
雷蝶：「なんて、ンなマネしたんや……？」
深影：「……以前に、あの人に聞いたことがあったんですよ」
雷蝶：「なんて？」
深影：「『強いって、なんですか。なぜ、強くなろうとするのですか』って、ね。その時はうまくかわされてしまいましたけれど……」
雷蝶：「そんだけのために？　あそこに行くのはウチでもよかったはずやろ!?　現に深影はんも、そのほうが成功の可能性も高い言うたやんか！」

深影：「雷蝶さんこそ、どうして烈堂さんが行ったんじゃダメだったんです？」
雷蝶：「え……そ、それは……」
深影：くすりと笑って、「なんにせよ、刀は手に入った。それでいいじゃないですか」
雷蝶：（顔を赤くしながら）「う、うちは……ズルとか、イカサマとか、そういうのが嫌いなダケや！　ホンマに、それだけやからな！」
須波：（二人の会話は聞いていない）「あっ、烈堂さんが戻って来ますよ！」
烈堂：「よォ。戻って来たぜ」
須波：「血ッ……血まみれじゃないですか！」
烈堂：「おお。アイツの返り血さ。オレは大したケガァしてねェよ。それよか……」どっかと砂浜に剣を突き立てて、「こいつだ。若、オレよか地皇に向いてるだろうさ」鎖でべろべろになった左手を振りながら、そう言う。
雷蝶：背中に、「ダンナの……命よりも大事なモンって、その刀なのかい？」
烈堂：ちらりとそっちを向いて、「違げェよ」
雷蝶：「じゃあ……！」
烈堂：「大事なのは、オレが強いってことを確認することさ。そのためになら、命だってかけてやるね」
雷蝶：「……」

小さな別れ

夕刻。網元の家に戻った烈堂は、背よりも大きな刀を見せつつ網元に告げた。

烈堂：「てわけで、コイツが刺さったせいで、主様が暴れてたってんなら、網元……主様はもう、これ以上は暴れないだろうさ」

網元は大いに喜び、その晩はささやかながら酒宴が開かれた。最中、須波がとんとんと肩をたたかれ、振り向けばもじもじと下を向いた砂夜。

砂夜（GM）：「ちょっと……いい？」
須波：「はい？」よくわからないまま、ほいほいと行きます（笑）

二人は夜道を歩き、湖のほとりへと降りてくる。

砂夜（GM）：「本当に、主様は暴れなくなったのかな……」
須波：「うん。もう大丈夫。これからはね」
砂夜（GM）：「じゃあさ、主様が暴れたせいで死んじゃった人たちは、どうなっちゃうのかなぁ……」
須波：「これからはもう、そういうことも……」
砂夜（GM）：「もうないけど、もうないかもしれないけどさ！」
須波：「……ごめん。君のこと、考えないではしゃいでたかもしれない……」
砂夜（GM）：くるりと須波の方を向いて、「こんなこと話しても、しょうがないのにね、ごめん」
須波：「……いや、あの……」
砂夜（GM）：「あきらめるしか、ないんだよね。わかってる、ホントは」
須波：「……僕の父上と母上、いくさで亡くなったんだ。あきらめるのは簡単かもしれないけれど……あきらめちゃったら、父上や母上はむだ死にだから……だから、僕は……いくさのない国を作ろうと、そう、思ってるんだ」
砂夜（GM）：「そんなの……無理だよ」須波の脇をするりと抜けて、走っていっちゃいます。
須波：「あっ……」

そして、翌日。最後の刀のありかは、いまだわからずである。とりあえず一行は国に戻り、さらなる情報を得ようとした。

GM：と、いうわけで、出発前です。網元以下、数人の村人が見送ってくださっております。
須波：砂夜さんは？　その中にいます？
GM：いません。
烈堂：「さて、行くかね」
須波：「あ、あの……！」
雷蝶：「なんや？」
須波：「えーと……なんでもないです……」

一行は街道へと立ち戻り、須波の親戚筋である木槌の都への帰途へとついた。
十分ほど歩いたところであろうか。地皇のセンサーが、後ろから走ってくる人物の存在を感知。

須波：も、もしかして！　振り向いてみます！
GM：砂夜が息せき切って走ってくる。ちょっと離れたところで立ち止まって、口もとに両手を当てて、彼女は叫ぶ。「きのう……ごめんね！　あたし、八つ当たりしてた！」
須波：振り向いて、接合を解いて顔を出します。
砂夜（GM）：「いくさのない国……信じてるから……だから、頑張って!!」と言って大きく手を振るのが見える。
須波：一回大きく手を振って、再び接合。振り向いて、街道を進みます。

その心の中に秘めた決意を口にすることで、須波はまた一歩、大きくなれたのかもしれない。
いくさのない国、人の命がはかなく散ることのない国――須波ははたして、そこにたどりつくことができるのだろうか。
街道は長く続き、その先の答は簡単には見えてはこない。

次回、天羅戦国伝**「領主」**を括目して待て！

GM回想録「海妖」のころ

「夏場だし、涼しげなお話にしよう」というまことに安直な発想から、湖のお話ということに決まった（笑）
シナリオは「湖の主様に刀が刺さっていて、そのせいで暴れている」と言うもの。どうやってそれを抜くかは全然考えていない（笑）
全六回のキャンペーンの三回目に「五本の刀を集めろ」という指令を受けるというコトは、どう考えても１シナリオに１本では計算が合わないと言うことにこの辺でようやく気がつき、あわてる（笑）
今回のテーマは「須波君の淡いラブ」だったのだが、その辺、うまく出せただろうか。
ちなみに、主様の能力値は、"妖作成ルール（118ページ参照）"によって"荒魂級"として作られている。その場で即興で作ったため、デタラメに強くて（堅くて）内心ヒヤヒヤだった。
また、このシナリオから、本誌掲載時の形態が前後編から前中後編になる。３回に分かれるというコトは、３回見せ場を用意しなくてはならないというコトで、ずいぶんと苦労したのを覚えている。

天羅万象リプレイ

天羅戦国伝 領主

第6章

帰還

宝刀を五本集める、そのために旅をしていた須波たち四人だが、そのうちの四本までを集めた時点で、手がかりを失ってしまった。

とりあえずここまで、ということで、彼らは進路を東に転じ、木槌領へと戻ろうと考える。

何かしらの新しい手がかりはないかと思ったのである。

GM：久しぶりの木槌の都は、何だか結構にぎわっている感じだ。
雷螺：「なんやにぎやかやなぁ。祭かい？　それとも、市でも立つんかい？」
烈堂：「かもな。ま、何にせよ、まずは……」
雷螺：「まずは？」
烈堂：「そこいらでひと休みといこうじゃあねぇの」と言って、傍らの飲み屋に勝手に入っていっちゃう（笑）
雷螺：「あ、ちょっと……ったく！」しゃあないんで、うちもあとについていくわ。

どっかと腰を下ろした烈堂は、注文を聞きに来た店の親父に、ついでに尋ねる。

烈堂：「なあ、以前に来たときよりもにぎやかしい感じだが……何かあるのかい？」
店主（GM）：煮物を置きながら、「はは あ、木槌の殿様が、何でもここいら一帯を治める名代になりなさるそうで、そのために神来より宮司を招いたり何やらと、まあここしばらくはいつもの倍、都がにぎわっとります。おかげでわしらも繁盛して、まあありがたいことですわな」
雷螺：親父が行ってから、小声で「なあ、うちらが四本の刀を集めて戻ってきたってこと、どうしてバレとるんや？」
深影：「今までずっと見張られていたか、都に近づくのをどこかで見つけられていたか……どちらにせよ、そんなことよりも気になることは……」
烈堂：「そうだ。残りの一本、見つけ出したヤツがいる。この城に持ってきたヤツがいる、ってことか……」

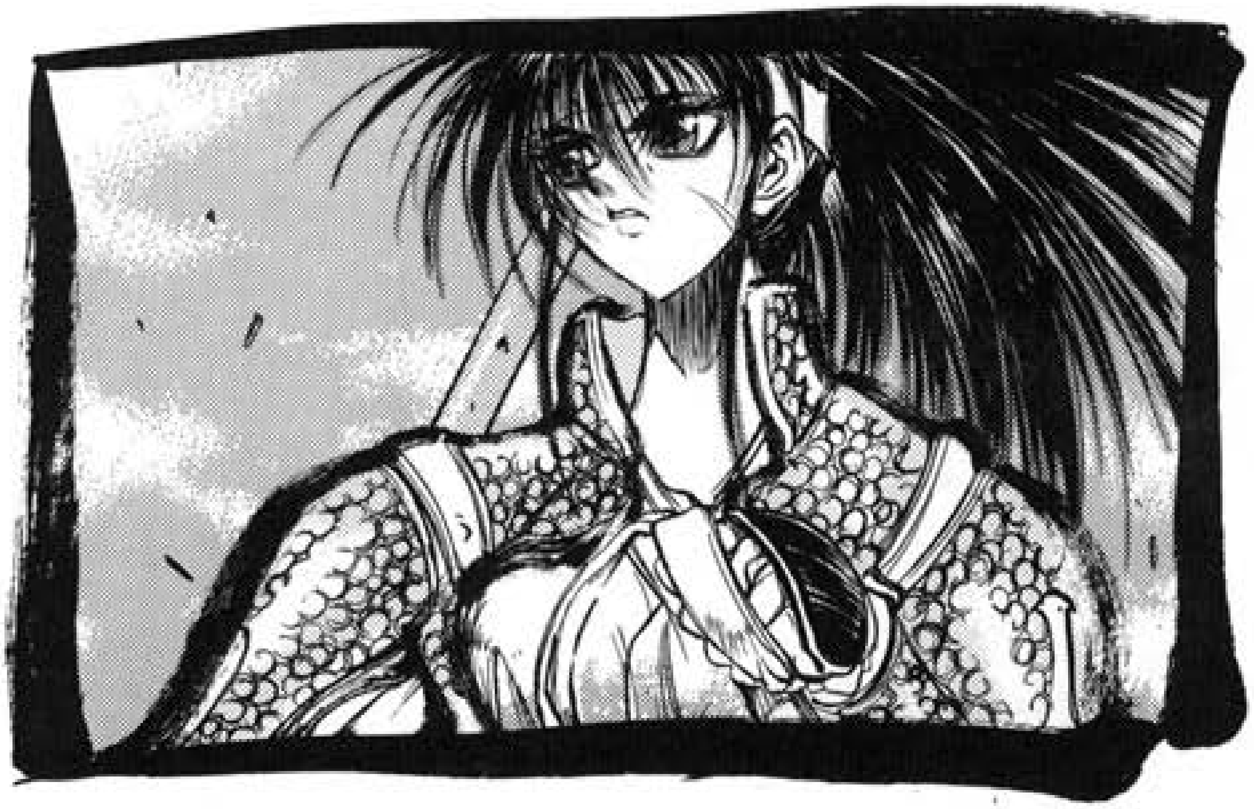
くいっと、杯を飲み干してから、烈堂はにやりと笑う。

烈堂：「おもしれェじゃねえか。こいつあ、のんびりしてる暇じゃねぇかァ……？」

五振りの刀

門前で名を名のり、四人は城内へと招き入れられた。衛兵の数もいつもより多く、警戒も厳重な城の中を通され、四人は領主、崎村木槌守に目通りするために、廊下を進んでいた。

深影：「どうやら、国内の各地から、人を招いているようですね」
須波：「え？」
烈堂：「ああ。着てるモンを見りゃあわかる。木槌の紋所じゃねぇのがやたらとうろついてやがるぜ」
GM：さて、そうこうしていると、きらびやかな装飾を施された襖の前で、案内は立ち止まります。ひざを突いて襖を開き、「虎堂白沼守殿のご子息、虎堂須波様。御成り～ィ！」と高らかに声を上げたのち、彼は君たちを中へと招く。
須波：いちおう途中で裃に着替えているということで。
GM：はいはい。中には、この木槌の地を治める領主、崎村木槌守階蔵がその家臣やら、いろんな人たちと一緒に、君を……というか、君が持ってくるものを待っていたわけだ。須波の顔を見て、彼は一度、「うむ」とあごを引く。
須波：正面へ行き、ひざを突きます。「叔父上様に置かれましてはますますご健勝のこと、まことに喜ばしき所存にてございます。さて、この度の宝刀探索の儀、滞りなく進みましては、今のところ四本までを手中に収め、ここにそのことを報告に参った次第でございます」と。深影さんに教えてもらったとおりに言います（笑）
崎村（GM）：「うむ。そのことはすでに聞き及んでおる。まことにご苦労であった」
雷螺：小声で、「ち、やっぱ見張られとったんかい……気に入らンなぁ……」
崎村（GM）：「ささ、手に入れてきた刀を、こちらに見せてもらおうではないか」
烈堂：小声で、「おい、雷螺。気づいたか。まわりに座ってるヤツラ……このあたりの領主クラスの連中だぜ。ありゃあ」
雷螺：「え！　じゃ、まわりの領主たちを呼びつけたっちゅうンかい？」



深影：「でしょうね。名代になる条件を満たしたのですから、そのことを国中に喧伝する必要があります。そのためでしょう」
雷蝶：「じゃあ、あれもそれも……ん？　なぁ、向こうの隅っこに座っとる、けったいな面をかぶったヤツラ……あれも領主なんか？」
深影：「あれは……神宮の宮司！」

神宮家

天羅の中心、神来山の麓の大都、神来を治め、引いては天羅のすべてを治めている、名代よりももう一つ上位の存在。それが、神宮家である。
八百万神を奉る、天羅各地の神社を拠点とする彼らは、名代の任命、戦の調停などを行ない、ヨロイや金剛機の頭脳となる明鏡を下賜する、天羅の真の支配者たちである。
明確な上下の存在する彼らの身分制度の中で、ある一定以上の者たちは常に仮面を身に着けて過ごすことになる。仮面は、神宮家の一員の証であり、その偽物を作れば（一般社会にはほとんど干渉しない彼らには珍しく）厳しく罰せられることにもなる。

須波：ところで、にっくき逆代も来ているんですか？
GM：じゃ、【知力】の＜事情通＞で判定して……烈堂と深影は知ってるね。向こうの端の方に無表情で座ってる男、アイツだ。印象はそうだな、カエルみたいな男。
烈堂：「ふうん……そうそうたる……ってトコか」
雷蝶：「しっかし、気の早い話やなァ。まだ刀は一本足らんちゅうのに」
崎村（GM）：で、その辺で、領主は声高に話し始めます。「さて！　このように、ここに至って五振りの刀のすべてがこの場にそろい！」
雷蝶：「え」（笑）
須波：「お、叔父上。五本目の刀は、すでに叔父上のもとにあるのでございますか!?」
崎村（GM）：「うむ。刀を手に、城を訪れた者がおってな……しかし、これもお前がそれ以外の四本を集めてきてくれてこそ。礼を言うぞ、須波よ」
須波：平伏。
GM：領主がことばを続ける。「さて、先代の扇牙司殿が神宮より賜りし五振りの宝刀は、ついにこの地に集まるに至った。かねてよりの盟約のとおり、これでこのわし、崎村木槌守階蔵が名代として認めらるることになり申す。ついては、一両日中に日取りの良い日を選び、神来よりおいで願った祭司殿に祭事を執り行うてもらいたいと思うておりまする。皆様方には、祭事の見届け役を勤めていただきたく、この城までおいで願ったわけでござるゆえ、もう数日この城に足を留めておいていただきたい。異存はござらぬな？」

もはや名代であるかのごとく、崎村階蔵は声高らかに宣言した。

二　前夜まで

やはり堅苦しい座は苦手か、退出したとたんに烈堂は首や肩を回して伸びをした。

烈堂：「さてさて、崎村殿が名代になるってェ日までは、オレたちァ暇だってわけだ」
雷蝶：「女でも買いに行くかい？」
烈堂：「へへ、それもいいかもな」
雷蝶：「……嫌味の通じんやっちゃなぁ」
深影：「さてさて、このまま無事にすべてが済めば良いのですけれど、ね」

結局、四日後の大安日まではとりたててやることもなく、誰もが自由な時間を得ることになった。烈堂は「ちょっくら釣りでもするかね」などと言いながら堀へとぶらぶら歩いて行き、深影はしばらく手を掛けていなかった地皇の様子を見るためヨロイ倉へ行くといった風に、皆、久しぶりに得た自由な時間を満喫していた。

須波：烈堂さんがお堀でさおを垂らしているところに行って、話しかけます。「どうです、釣れますか？」
烈堂：「……いや」魚篭の中はボウズ（笑）
須波：「やっぱりお堀じゃあ魚もいないんですかね……？」
GM：今、向こうの方でちゃぽんと魚が跳ねました（笑）
須波：「……」
烈堂：「……で、どうするよ？」
須波：「え？　どうするって……？」
烈堂：「叔父上が名代になり、お前ェさんが領地を頂いて、領主になるってェ約束もほぼ決まりさ」
須波：「ええ、これで僕の理想の国造りに一歩近づきました」
烈堂：「ふぅん……」
須波：「今までどうも、ありがとうございました。これからも、どうか僕を手助けしてください」
烈堂：「お前ェがそれでいいンなら、ね」
須波：「僕は……烈堂さんの強さ……剣の腕だけじゃありません、胆力や、いろいろ……ずっとあこがれてるんです。だから……」
烈堂：「まぁ……危なくなったら助けてやるさね……」

どこか暗い笑みを浮かべながら、静かにそうつぶやく烈堂。
さおに手ごたえを感じ、持ち上げるが、えさを取られた針のみが糸の先にむなしくきらめいた。

深影：「この間は水をかぶったりいろいろありましたから、本当なら全部ばらしてから、といきたいところですけれど、設備も限られてますし……」

同時刻。独り言をつぶやきながら、深影がヨロイ倉の中に座した地皇へと歩み寄る。

GM：ひざの裏の装甲板を外すと、そこにはフジツボがびっしりと！
深影：「きゃあああ」（笑）　いや、気を取り直して……深呼吸をしてから、フジツボを小刀で削り落としていきます。がりがりがりがり。

雷蝶：ヒマなんで、深影はんの様子を見に行くことにするで。
GM：深影はヨロイ倉で、地皇の脚に取り付いてなんかやってる。
雷蝶：なんや？　肩越しにのぞいてみるで。
深影：がりがりがりがり。
雷蝶：「ひええ」（笑）
深影：雷蝶の悲鳴に気がついて振り向きます。「なんだ、雷蝶さん。どうしたんですか？」
雷蝶：「いや……須波、領主になれるンかなあ、ってな……」
深影：「なれるんじゃないですか？　もっとも、なったあとにどうなるか、までは知りませんけれどね」
雷蝶：「そうやなぁ。味方ッちゅうたら、うちらだけやし……」
深影：「何よりも、逆代が納得するか……そうなれば先の戦はまるでむだということになりますからね」
雷蝶：「ふうん、じゃあ、刺客でも送り込むかい？　須波を殺すために」
深影：「かもしれませんね……かもしれませんけれど、ほおっておいても自滅すると考えるかもしれません。何も能力のない、何もできない子供の領主……領民たちの心が離れるのは、思いのほか早いと考えるかもしれませんし、それからゆっくりと、もう一度領地をかすめ取ろうと考えるのかもしれません」
雷蝶：「なんや、かもしれんばっかしやなぁ」
深影：「結局、未来のことですからね……今の状況からではどうなるかはわかりませんよ」

領主、虎堂白沼守須波の誕生

結局、大した事件もなく四日後の大安日。城内の中庭に、城主やその家臣、近隣の領地よりやって来た扇牙国各地の領主たち、それに、神宮家よりやってきた祭司と巫女が集まった。
須波の叔父、崎村氏がついに名代となるのである。
厳粛な儀式ののち、神宮に納めるための、名前を書いた小さな札を祭司に渡して、すべてが完了した。
長らく名代不在であった龍鱗州扇牙国を治める新しい名代の誕生である。

GM：酒宴を前にして、須波君たち一同は、新名代、崎村扇牙司に呼ばれます。
須波：はいはい。叔父上の前に出て、畳に両のこぶしをつき、「このたびは、まことにおめでとうございます」
崎村（GM）：「おう、来たか、須波よ。お前の言うておった、父の国を再興したいという気持ち、忘れてはおらぬぞ。お前に、白沼の地一帯を任せようと思うておる」
須波：白沼って……
崎村（GM）：「そのとおり。お前の父親がかつては治めていた土地だ」
須波：「はは、ありがとうございます……！」
雷蝶：脇で聞いていたけれど、たまらず口を挟むで。「ちょい待ち、それは……！」
須波：「？」
雷蝶：「まッ、前にいた……そのまんまのところやんか！」
須波：「ええ。白沼は父が、引いては先祖代々わが家が治めてきた土地。その地に戻れるのであれば、まったく異存はございません」
深影：「しかし、今は逆代勢が治める土地のはず。彼らが首を縦に振りますでしょうか？」
崎村（GM）：「振らせるよ。縦にな」そう言ってから、手もとの猪口を干して、「さて、皆々様がたには、須波を今まで補佐していただき、まことに感謝しておりまする。これから先も、須波のためにも、そのそばにいてやってほしい。まだ須波は若い。これから、国一つを治めるにふさわしい人物になるまでには時間が必要だ。できうるならば、それまで須波が正道を外れぬように、その力となってほしいのだ」
雷蝶：「そらあ、かまわへんけど……なあ、ダンナもそうやろ？」
烈堂：「申し訳ありませんが……その件につきましては、固く辞退させていただきたく存じ上げる」
須波：「……え？」
雷蝶：「!!」
烈堂：「もともとそれがしは風来の身。一つところは似合い申さぬ、ということでございます。これより先は、おい殿……白沼守殿とは別の道を歩もうかと」

乱心

しん、と座が静まり返る。
崎村階蔵が名代となったことを祝う酒宴を控えた夕刻の木槌城の一室である。
崎村とその家臣、須波や深影、雷蝶、全員が烈堂に視線を向ける。
名代の頼みに烈堂は首肯せず、須波とはこれ以上共に行かぬと宣言したのだった。

須波：「……そッ、そんな、どうして！」
烈堂：（無視して）「崎村どの、このたびは名代になられましたこと、まことにおめでとうございます。つきましてはこの烈堂より、一つはなむけをと思い……」
崎村（GM）：「はなむけ、とな」
烈堂：「ええ。後事の憂い、絶っておくが吉かと」
須波：「烈堂……さん？」
烈堂：「では……失礼！」言い放ちながら刀を抜き、名代の方へ、名代の後ろに飾られている宝刀に向かって、ダッシュ！

烈堂、乱心か⁉　驚き立ち上がった深影がそれを止めようとするが、烈堂の勢いに負け、弾き飛ばされてしまう！
そして、刀を振り上げ、短い気合とともに……
烈堂は、五振りの宝刀を一気にたたき折っ

た!!

GM：全員がことばを失っていたわけだけれど、ようやく誰かが腰に手をやりつつ叫ぶ。「貴様ッ！　白沼守どののの家臣であると言えばこそ、非礼な態度も見逃しておったが……！」

烈堂：無視して、退出しようとする。

深影：呼び止めます。「烈堂さん！　……それが、あなたがやりたかったことなんですか？」

烈堂：「まぁ、な。一つところに刀が集まりさえすれば、ぶち壊すのもたやすい」

GM：家臣が叫ぶ。「おのれい！　いずれの差し金かは知らぬが、許してはおけぬ！」

雷蝶：「ダンナッ！　ダンナは……裏切ったんや！　ウチらを……須波をッ!!」

烈堂：「……裏切り。そうかい？」須波をちらりと見ると……

須波：すがり付く小犬のような瞳で見上げながら（笑）「ぼ、僕たちが今まで何のために……」

烈堂：「何のために？　オレァ最初っからこのつもりだったさ。お前ェは……どういうつもりだったんだい？」

須波：「それは……もちろん、理想の国を創るために決まってるじゃないですか！」

烈堂：「理想。理想か……だが、オレは言ったはずだぜ。虎堂の国を復興するために、オレは手伝ってるわけじゃあねェってな……ほかに言うことはあるか？」

須波：「……これから……どうするつもりなんです？」

烈堂：「さァな。好きに生きるさ……最後に、一つだけ言ってやる。須波、お前ェさんの言う戦のない国なんざ、無理さ……戦は起きる。どうあってもな。戦い、殺し合うは人の本質。戦いのない国を創りたいなら、何も食わずに死ぬしかねェ。戦いのない国を創るために戦うのであれば……ソイツは矛盾だ。矛盾しているよなァ……？」

須波：「そんなコト、やってみなくては……！」

烈堂：「そうかい？　だがな、お前ェさんは宝刀を集めるために、刀を振るいはしなかったっけかい？　……そういうコトさ」

須波：そ、それを言われると言い返せなくなってしまいますね。「あ、う……」

家臣（GM）：「御託を並べてごまかそうと言う腹かッ？　なんにせよ、すでに貴様の逃げ場はありはせぬぞッ!!」

確かに、十重二十重に烈堂は囲まれつつあった。しかし、彼は小さくにやりと笑い……刀を一閃！　自らの足場を切り刻み、彼はその場から消えるのである。

破壊された床を見つめながら、須波が小さくつぶやく。

須波：「僕の、理想の……国は……無理？　無理なんですか、烈堂さん……？」

六　後見人

刀が折られてしまったことをひた隠しにしつつ、酒宴は開かれる。

宴もたけなわというころあい。新名代は須波を呼び、居並ぶ諸侯に呼び掛けた。

崎村（GM）：「皆様方。これにおりますはわが甥、虎堂須波でござりまする」

須波：一礼。

崎村（GM）：「さて、東の鈴鳴山より西に伊狩川までに挟まれました白沼の地、かつてはわが甥の父、詰まるところはわが義兄にして領主、虎堂白沼守宗親によって治むるところでございましたが、不違な事故によりてその主を失い、現在は代理として松谷守（逆代）どのが治めていると記憶しておりまする……一時は、絶えてしもうたと思われておりました虎堂の血筋が、ここにこうして途絶えていないと明らかになった今、逆

代どのには須波を白沼守として任じ、白沼の地を与えることをご快諾願いたいと思うておりまするが……ご返答やいかに」

新名代のことばの意味が伝わるにつれ、座がざわめきだす。当然だろう。名代のことばは、詰まるところ無理矢理に逆代松谷守大蔵の土地を奪うと意味なのだから。

「そのようなことを……」
「崎村どのは戦を始められるおつもりか？」
「唯々諾々と飲んでおっては、逆代様の顔が立ちませぬでしょうに……」

ひそひそ声の飛び交う中、しかし逆代はあくまで恭しく返答した。

逆代(GM)：「虎堂……白沼守様には、このたびの儀、まことにおめでたきことであると存じ上げます」
須波：「う……うむ」
逆代(GM)：「かの地はもともとお父上の治める地、かの城はもともと虎堂家の持ち城でございますれば、一度は失われていたと思われた白沼守の血筋、再び現れた今日この日、白沼守どのに返還いたすが当然、かと」

ほう、と周囲よりため息が漏れる。名代のことばを受け、逆代も「領主のいない土地を便宜上預かっていただけ」という態度をとるようだ。

逆代(GM)：「して、扇牙司どの。白沼守どのはこう申しては失礼ではございますが、いまだ若輩。その後を預かる者が必要ではありませぬでしょうか。僭越ながら、この私の弟、逆代兵衛を白沼守どのの後見人として推すものでございます。いかがか」
須波：「え？　え？　え？」
崎村(GM)：ちょっと考えたのちに、「なるほど、逆代どのの懸念まことにごもっとも。逆代どのの弟君といえば、主なき白沼城を今日まで守っていてくださった御方。そのような方が後見してくださるとあれば、わが甥としても異存はござりませぬでしょう……須波よ」
須波：「は、はいッ！」
崎村(GM)：「ぬしは今日この時より領主となるわけだが、いまだ若輩、国一つ治める器には程遠いということは自身でもわかっておるな？」
須波：「は……」うー、答えたくないなぁ(笑)「……はい」
崎村(GM)：「そこで、ぬしが一人前になるまで、こちらの逆代どのの弟君、兵衛どのにぬしを後見していただくことになる。異存は……ないな？」

拒否は許されなかった。助けを求めて辺りを見回してみるが、深影の席は遠く、雷蝶は宴に出席してはいない。そして、烈堂の姿を思わず探してから、もう彼はいないのだと思い出す。
須波は、下を向いたまま、小さな声で「……はい」と答えた。

七　酒を交わす

各国の領主たちが集まる宴など不釣り合いと、雷蝶は都に出ていた。
そんな場所にいるよりは、たとえ無駄でも烈堂を探して歩いていたほうがよい——そう思ったのだ。

雷蝶：「ッて言うたかてなぁ……まだ都にいるわけなんかあらへんし……」とりあえず、ダンナの行きそうな酒場あたりをしらみつぶしてみるわ。まずは、前に都に来た時にダンナが行った酒場……
GM：烈堂よ、今、どのへんにいる？
烈堂：都の、前に来た酒場(笑)

雷蝶：ぎゃ（笑）　ま〜だ都にいたんかい、アンタは！（笑）　「ダッ……（小声で）ダンナっ……！　こんなトコでなにしとんのやッ!!」
烈堂：別段驚きもしないで、雷蝶にいちべつくれてから、猪口を傾ける。「結構な数、斬ったからな。そういうときは酒で業を落とすのさ」
雷蝶：「そーゆー問題やないやろォ……（泣）」ダンナの向かいに座って、「……どーゆーつもりや？　あないなコトして……ウチらを裏切っといて、よく酒なんて……！」
烈堂：酒を注いでやる。「飲むだろ？」
雷蝶：しばらくにらみつけたあと、くいッと飲み干して、「ダンナは……ダンナかて、須波のために今まで頑張ってきたんやなかったんか？」
烈堂：「……いいや。違うね」
雷蝶：「須波のことを信じて、今まで一緒してきたんやなかったんか!?」
烈堂：「ふぅん、そいつぁ……買いかぶりってェモンだ。前にも言ったか？　オレァ須波の理想のために働いてたわけじゃあねぇ。確かに、須波にゃあいろいろなことを教えられずじまいだったさ。だからせめて……」にやりと笑って、「助けてやろうと思ってな……」
雷蝶：「だから……だからあんなコトしたって言うンか？　須波はまだまだ子供で、みんなで助けてやらんといかんのに……！」
烈堂：「関係ねェよ。あいつも数えで十四だろ。おい、雷蝶。お前ェ、十四の歳には何をやってた？」

烈堂の問いかけに、一瞬雷蝶がほおを染めたように見えたのは、酒が回ってきたためか、それとも。

雷蝶：「……忘れたわ、ンな大昔のこと」
烈堂：「そうかい。じゃあ、お前ェが十四のころ……子供だからって助けてくれる親切なヤツは……いたかい？」
雷蝶：烈堂の手から徳利を奪い取って、手酌で飲み干して、「ウチは……まわりのせいで、無理矢理大人にされたんや。だから……だから、須波には同じ思いはしてほしくない。だから……！」
烈堂：「ゆっくり、いつの間にか大人になるヤツなんざいやしねぇよ。誰だってある日唐突に大人になるのさ。十四の歳……オレはそのころには、もう人を殺してたぜ」
雷蝶：「そのころ……まわりにいい大人が……優しい人がおったなら、今とは違うようになっとったとは思わへんか？」
烈堂：「思わないね。オレの親父は坊主だった。お前ェの言う『優しい大人』ってヤツだったさ。だがね、親父のおかげで得をしたことなんざ、ありゃあしねぇ。ありゃあ……しねェよ」
雷蝶：「ダンナはいつも……そーやって自分勝手な理屈で……」言いながら、その場に突っ伏してうとうと始めちゃうわけやね、ウチは。

深夜になって、ひどく酔っぱらった雷蝶はふらふらと城に戻ってきた。
烈堂と会って、話をしたのは現実のことだったのか？　それすらも、雷蝶にははっきりとわからなくなってしまっているのであった。
結局、都に烈堂は発見されず、さらに追っ手がかけられることになる。

兵を借りる

そして——その深夜。
深影は名代、崎村扇牙司への面会を申し出、城内の一室にて相対していた。

崎村（GM）：「さて、何用ですかな」
深影：「甥どの——白沼守どのは一両日中に白沼へと向かうことになるわけですが……その際、兵をお借りしたい」
崎村（GM）：「ほう」
深影：「白沼は復興成ったと言えば聞こえはよいかもしれませぬが、実状は新生の国と変わりませぬ。城には後見人とやらの兵もいるようですが、つまりは白沼守どのの兵ではありません……白沼守どのが使える兵が必要です」

白沼の城にとどまる兵が後見人、つまり逆代家の者だけであれば、有事に対応することは不可能である。それ故、深影は彼方の兵を押さえるだけの力を名代に要求しているのである。

深影：「今現在、逆代兵衛どのの指揮下、白沼の城や城下にとどまり続けている兵、おおよそ三千。これに対するために、少なくとも四千、お貸しいただきたい」

あごに手をあて、名代は静かに考えを巡らせる。白沼で再び戦が起きる分にはかまわない。しかし、負けることは許されない。白沼で須波が戦に負ければ、木槌の城までの街道が無防備になるという物理的な危険だけではなく、名代自ら新領主として任命し、領地まで与えたという面子が立たず、ほかの諸領主の信頼までも失う危険があるからである。
なれば……

崎村（GM）：「わかり申した。ただし、今現在この城に詰めておる者たちの数には限りがござる。その中から、少々無理をして……二千。二千の兵をとりあえず、須波と共に白沼へと向かわせ申そう。陰陽師どのがあと二千必要というのなら、そちらもすぐにそろえさせるとしよう。残りの半分は、手がそろいしだい追って白沼へと送る……ということで、いかがかな？」
深影：「……了承いたしました。後半の二千、できうるかぎり急ぎお願いいたします。扇牙司様が名代になられましてはいまだ日も浅く、事あるとすれば恐らく、かなり早い時期でございましょう」

とりあえず兵を借り受ける約束は取り付けられたと、深影は席を立つ。その背中に名代の声が投げつけられた。

崎村（GM）：「陰陽師どのが軍師であれば、須波も心強い。須波の後ろ盾、お頼み申したぞ」
深影：「もちろん」短く答えてから、聞こえないように、「少なくとも、あなたが生き延びるために須波が死ぬようなことは、わたしがいるかぎりありませんよ」と。ああ、退出する前に、一つだけ聞いておかなくちゃ。「扇牙司様」
崎村（GM）：「何か？」
深影：「あの人は、もう片づいたのですか？」
崎村（GM）：「子飼いのシノビを放っておる。あの男、もはや明日の朝日を拝むことはできん」
深影：「そう……ですか」そーゆーコトを言ってうまくいった試しはないんだよね（笑）
烈堂：まんまと逃げおおせたオレは、逆代の殿様に会いに行くわけだ。へへ。
雷蝶：うー、やっぱさっき斬っとくべきやったか……？
GM：なんにせよ、それから数日たってほかの領主たちが自分の城へと戻ったあと、須波と君たち二人は名代様より借り受けた二千の兵と共に、白沼城——須波の生まれ育った城へと向かうわけです
須波：ついに……帰れるんだ！

成長

城に入って以来、深影は毎日情報集めと裏工作に奔走していた。宝刀はすでになく、崎村が名代である理由は失われてしまっている。そこに持ってきて須波の無理矢理の国取りである。逆代が軍を動かすのも時間の問題と思われた。
ならば、それまでに、できうるかぎり有利に事が運ぶようにしようと考えていたのである。

須波：「深影さん……いいですか？」
深影：おや。「……どうぞ」
GM：深影は夜遅くだというのになにやら書きつけている。

須波：夜遅くまでご苦労なことです（笑）
深影：うー、誰のためだと（笑）　……気を取り直して（笑）「どうしました？」
須波：「烈堂さんが行ってしまう前に言ったことばを考えていたら……眠れなくて」

烈堂：「お前ェさんの言う戦のない国なんざ、無理さ……戦は起きる。どうあってもな。戦い、殺し合うは人の本質。戦いのない国を作りたいのなら、何も食わずに死ぬしかねェ。戦いのない国を創るために戦うのであれば、……ソイツは矛盾だ。矛盾しているよなァ……？」

深影：「ああ」
須波：「やっぱり……矛盾なんでしょうか？」
深影：「そう……思いますか？」
須波：「だって、僕には否定できなかった……人が死なない国のために人を殺すのであれば、それは……」
深影：「間違い、ですか？」
須波：「……」
深影：「戦のない国……誰かが創ろうと思わないかぎり、戦は必ず起きるものです。そうでしょう？　どうせ起こる戦争であれば……せめて、戦いのない国を創る、そんな目標のためであってほしいと……そうは、思いませんか？」
須波：「……！」
深影：「平和な国……民が平和に暮らして行ける国を創るためには、外敵に攻められないような国でなければなりません。おわかりですか？」
須波：「はい……」
深影：「加えて、他国に攻め込もうなどという野心を持たない自制心。他国の民を守ってやろうと考える心……それこそが領主に求められるものなのです」
須波：「そうか……ほかの国に攻め込まれないほどに強く、そして正道をゆく国……そうでなくてはならないんだ……」
深影：「あなたの『戦のない国を創るための戦』は、すでに始まっている。いまさらやめるつもりですか……？」
須波：「……」
深影：「ここでやめたら、あなたの戦いは『ただの戦争』になってしまう……そうするおつもりか？」
須波：「それは……」
深影：「誰のために戦をしているのか……そのことを今一度お考えなさい」

しばらくの沈黙。やがて決然と顔を上げた波は、深影に向かって一つ礼をして言った。

須波：「ありがとうございます。もやもやしていたものが吹っ切れたような……そんな気がします」

須波が退出して、深影が作業を再開しようと文机に振り返ったその時、暗がりから声がかけられる。

影（GM）：「軍師様」
深影：「……なにか」
影（GM）：「東の国境の関所、逆代の軍勢が突破したとの事でございます」
深影：げ、早い。「……数は？」
影（GM）：「おおよそ二千五百。ヨロイ、金剛機の類の姿は見えませぬ」
深影：「……白沼まではどれくらいかかる？」
影（GM）：「あの調子であれば……恐らく一両日中には」

深影：「扇牙司殿の元へと向かえ。逆代勢が動いたことを伝えるのだ」

は、と小さく声が聞こえて、暗がりから気配が消える。しんと静まり返った部屋の中、深影がひとりごちる。

深影：「須波さん、戦のない国を創るための戦い……いよいよ始まりますよ」

十 始まり

翌日の朝早くから、深影はあちらこちらに忙しく動いていた。
敵兵が来るまでの残された数日、できるだけ有利に事を運ぶことができるように、である。
そして、その中の作戦の一つとして……

深影：後見人を暗殺します。そうですね。死体は《式》に食わせて、簡単に事が発覚しないようにしましょう。これで都の敵兵の指揮系統を破壊できれば……

しかし、深影も気が付いていないことが一つあった。軍の指揮系統は二つあり、逆代より送られてきていた陰陽師がもう一人の頭であったのだ。

GM：夜になってしばらくしたところで、どたばたと騒がしい足音を立てて、見張りの兵が深影のもとへと駆けてくる。
深影：「どうした!?」
兵(GM)：「じょ、城下で……火事が！　それも一か所ではありません、いくつもの場所で同時に火の手が!!」
深影：「なにッ、早い！」
兵(GM)：「しッ、しかも、火を付けたは逆代の兵であるとのうわさもあり……！」
深影：「くッ……！」外へと向かいます！
兵(GM)：「ど、どちらへッ!?」
深影：「逆代の兵の詰め所へ向かう！」

十一 合流と分離

兵の詰め所へ肩を怒らせてやって来た深影は、入るなりに叫んだ。

深影：「軍師殿か将軍はおられるか！　白沼守様の軍師であるッ！」
GM：程なく、逆代の将軍が現れる。
深影：「どう言うことかッ！　お答えなされよッ！」
GM(将軍)：「それはこちらのセリフ。軍師殿よ、兵衛様をいずこへ連れてゆかれた？」
深影：うーん、言えない(笑)　「知りませんね」と(笑)
雷蝶：自分が食ってもうたクセに(笑)
深影：食ったのはわたしじゃなくて《式》です。人聞きの悪いコトを(笑)
将軍(GM)：「知らぬ、とおっしゃるか。しかし、われらが軍師はすでにすべてを見通しておる」刀を抜いて……！　「兵衛様の敵。お命、ちょうだいつかまつる……！」

振りかぶられた刀を避けようとしたその時！

須波：“気合”を1点使って「割り込み」！　壁を破って地皇が現れますッ!!

どおんと轟音と共に、地皇が壁もろとも将軍を押しつぶす！

須波：「深影さんッ！　無事ですかッ!?」
深影：「ええ……どうやらこちらの見込み違いだったようですね……彼らが動くのがこんなに早いとは……」

詰め所を出た深影は、首を巡らせて都の混乱を見る。あちらこちらで上がった火の手で、夜空が紅に染まっていた。

雷蝶：っと、二人のところに走ってくるで。「須波、深影はん!?　いったい何がどうなっとるんや!?」
深影：「逆代の兵が動きました！　援軍が来てからかとも思ったのですが……雷蝶さん、須波さんと一緒に、逃げ遅れた人たちを助けていてください！」
須波：「深影さんはどうするんですか？」
深影：「逆代の軍師を探して……殺します。指揮系統が失われれば兵もむやみには動けなくなるはず」そう言って《式》を打ち、宙に舞い上がっていきます。
雷蝶：深影はんを見送ってから、須波に、「行くで！　逆代の兵隊どもを止めなあかん！」

十二 再会

その男は都に駐留する逆代軍の傭兵だった。
金が必要なのではない。金なら、この軍の軍師にちょっとした情報を与えたときにもらった小判で事足りている。
彼には、この都でやることがあったのだ。
彼の前方に見えるは、巨大な影——ヨロイ。
戦火の中、男はまわりの兵たちに向かって、叫んだ！

烈堂：「見えるか！　あいつが白沼守のヨロイだ！　倒して三百、領主の首を取ったヤツにゃあさらに百両ッ!!　行くぜえッ、龍砲、用意!!」

烈堂のかけ声に応じて、巨大な大砲を抱えた数人の兵が前に出る。
対ヨロイ効果も高い珠砲『龍砲』だ。

GM：ひゅるひゅるひゅるひゅる……
須波：「ああッ、雷蝶さん、危ないッ!!」
雷蝶：え、うちのほうかあッ!?(笑)
GM：どうやらそうらしいので、回避してください(笑)
雷蝶：ちぃぃぃぃっ(笑)　【敏捷】の<回避>で……3成功ッ！
GM：龍砲のダメージは9。君の<回避>の成功度が3だったんで、足りない分、つまり6点のダメージを受ける。ちなみに、まわりにいた避難中の人たちも爆発に巻き込まれて、あしたのお夕飯のオカズみたいな状態。
雷蝶：「くうッ、来たかあッ!!」すぐに立ち上がって敵の方を向くッ!!

すでに十人近くの兵が、ヨロイに向かって駆け出している！　そして、その向こうにゆらりと立つ大男の姿。それは！　その姿は！

須波：「烈堂さん!?　ど、どうしてッ!?」
烈堂：無視。「オラあッ！　かかるぜえッ!!」

烈堂、それに数名がサムライ化し、ヨロイに突っ込む！

須波：「くうッ、早いッ！」
GM：侍の一人の攻撃っ！　成功度は3！
須波：切り返しますッ！　【敏捷】の<接合>で、8成功！
一人目が真横に腹を薙がれて地に転がる！
それを見て、ほかの兵たちの動きも止まった。
その中で、烈堂だけがずいと前に進み出る。

須波：「ひどいことを……都の民には何の罪もないのにッ！」そう言って、烈堂さんをにらみます。
烈堂：「悪いな。これが本当のオレさ」
須波：「烈堂さん……烈堂さんが以前に言っていたことばの答……ようやく、僕は得ることができました」
烈堂：「そうかい、そりゃあ良かった。だがな、須波……遅かった。もう……遅い」
須波：「烈堂さん、刀を収めてください。あなたが僕の前に立つというのなら、僕は……あなたを斬らねばならない……」

烈堂：「できるか？」
須波：「やります」
烈堂：「いい返事だ、須波！　いい……返事だッ!!」
須波：攻撃、しますッ!!
烈堂：【知覚】を使って“ねらい撃ち”ッ！　ねらうは地皇の右手指ッ!!
須波：「うああああッ!!」
烈堂：「どりゃああッ!!」

二人とも能力値、技能は同程度。勝負はギリギリの差でつくと思われた。

しかし！　卓上の神は、今は烈堂の「時」だとささやく。烈堂の9成功に対して、なんと須波の成功数はわずかに「3」！

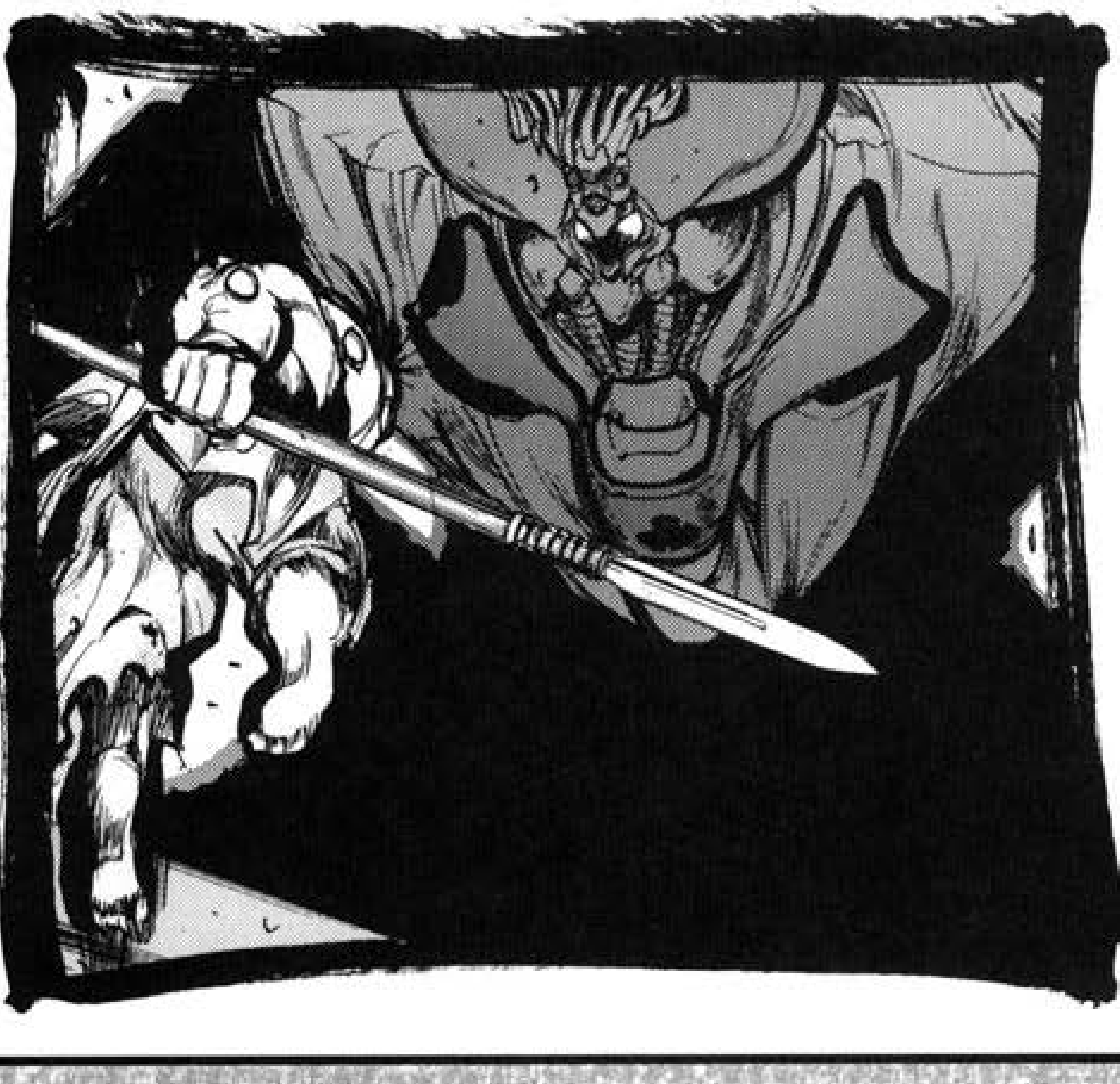
さらに烈堂が《珠》を使ったことにより、地皇は14点ものダメージを受けてしまう。

《珠》の爆発力により地皇の右手が粉砕され、握った刀が転がり落ちる……！

烈堂：さらにオレの攻撃いッ!!　今度は地皇の左脚をねらうぜえッ!!
須波：「疾走輪」を使って後ろにダッシュ！

今度の須波は神に見捨てられはせずに(笑)、烈堂の攻撃をわずか1個差でギリギリ避ける。

ひざに当たった烈堂の刀が、炎の照り返しよりもまぶしい火花をあげる！



烈堂：「そうさ、そうでなきゃあいけねぇ」
須波：「くッ……！」立ち上がります！
烈堂：「だがな須波、お前ェは甘い。この期に及んでまぁだ迷っていやがる……」
須波：「そ、そんなことはないッ！」
烈堂：「見ろよ！　この町、この炎を！　お前ェの弱さが、お前ェの迷いが呼んだ炎だ。お前ェの弱さはまわりのヤツを不幸にするのさ！」
須波：「そう！　だから僕は強くならなきゃならないッ！　強く、みんなを守れるほどに、強くッ!!」
烈堂：「遅かったよ、須波！　お前ェが気づく前に戦は始まっちまった！　代償はいつだって死だ。お前は罪を償わなきゃならねぇ！」
須波：「だからこそ！　償わなければならないからこそ、僕はこんなところで死ぬことはできないッ!!」……もう右手は使いものになりませんね……左手でつかみかかります！
烈堂：計算どおり！　武器がなければ食らってもそれほどじゃねぇッ！
須波：甘いです、烈堂さんっ！　地皇の左手には「白熱掌」が装備されてます！
烈堂：な、何ィ(笑)　計算、ミース！(笑)

白熱掌

ヨロイ、金剛機用の装備。霊力を手のひらに蓄積することにより、ヒイロ金の装甲を超加熱、敵に多大なダメージを与える格闘専用武器。

須波：9成功！
烈堂：10成功！　切り返したあッ!!
須波：くうッ、足りないッ!?　“気合”を6点使って、成功数を2つ上昇！　これでえッ!!
烈堂：食らってたまるかよっ！　こっちも“気合”を3点使って成功数を1個上げればッ！
GM：双方とも最終的な成功数は11！　地皇の左手は、烈堂の刀でがっきと押さえられる！

続く列堂の攻撃！　しかし、地皇の蹴り上げる足をまともに食らってしまい、派手に吹っ飛んでしまう。

烈堂：ぺっ、と血混じりの唾を吐いて、「け、しぶとい野郎だぜ」と言いながら立ち上がる。「やるじゃねぇか」
須波：「僕だってただ座していたわけではないんです。確かに、気が付くのが遅かったかもしれない。でも、だからこそ、僕は溝を埋めなければならないッ！」
烈堂：「お前が白沼の領主になる前であれば、まだやりようもあったろうが……残念だぜ、須波ィ!!」

須波の攻撃をかわして懐に潜り込んだ烈堂が、地皇に強烈無比な一撃を加える！

ダメージはなんと12点！　致命傷を受け、活力も残り2点になってしまった地皇。残りの活動可能時間はあと2分！

雷蝶：「ダンナあッ！　そらあ……やりすぎやでえッ!!」
烈堂：「オレぁ須波を助けに来たんだ。そのためにゃあ……地皇は邪魔なのさ」
須波：「負けるわけにはいかないんです！　烈堂さん、覚悟おッ!!」
烈堂：「来おおおおいッ!!」
須波：成功数は……11！
烈堂：……こっちは……13!!　勝ちだ！

地皇のダメージはもはや限界。さらに戦闘を続けるためには“死亡”にダメージを入れるしかないという状況！

しかし、須波はここで、活力をマイナスにまで落として戦闘不能になることを選択。

地皇が停止し、接合していた明鏡から須波の魂がはじき出される。

須波：「じッ……地皇ッ!!　くそッ、こんな時に……！」
烈堂：「結局こういうコトだ……しょせん、てめェの足で地面に立ってねェやつにわかるわけなんざねェのさ」
須波：……地皇から出ます。致命傷にダメ

ージが入って、活力も残り5ですから、5分後には気絶しちゃいますけど。
烈堂：「どうする？　武家の息子らしく、腹でもお召しになりますか、若？」
須波：「……」
烈堂：「自分の兄貴までをも手に掛けた結果がこれだ。これからこの国は荒れる。戦場あさりや野伏せりどもの闊歩するようになるのさ。お前の大事なものを根こそぎ持っていくためにな。そうさ、これがお前の選んだ結果よ」
須波：「まだ……負けたわけじゃないッ!!」
烈堂：「あきらめねェかよ」
須波：「負けられないんです。今日ここで負けてしまえば、今までのことがすべて無意味になってしまう！　僕はあなたに勝たなきゃならないッ!!」刀を握って突きかかるッ！

須波の気迫か、烈堂の油断か、須波の一撃は烈堂を捕らえる！
喜色が須波の顔に浮かぶが、打撃はさほどの効果がないと知り、血の気が引いてゆく。

烈堂：「やるね。なかなか……痛かったぜ」最後の一撃だ。……あばよッ！
雷蝶：「待ちぃッ!!」"気合"を1点使って「割り込み」や！
GM：須波をかばうように間に割り込んだ雷蝶が、烈堂の刀を代わりに受ける！
烈堂：「なんだよ、いたのか」
雷蝶：「もう……十分やろ！　それ以上やったら死んでまう！」
烈堂：「言ったろ、オレァ須波を殺しに来た。罪を償いに……来たってな」
雷蝶：「須波に手ェ貸したのが罪かいッ!?」
烈堂：「そうさ。もっと言うなら、須波に教えきれなかったのがオレの罪。弱さは罪、須波が弱いばかりに、このザマだ。もはや虎堂白沼守は死ぬしかねェ。オレがやらなくてもほかの誰かがやるだろうさあ！」
雷蝶：「だからといって……目の前で須波を殺させるわけにはいかんのや！」
烈堂：「どけよ。嬢ちゃん」
雷蝶：「どけない……絶対に！　死んでも、守って見せるッ!!」
烈堂：「お優しいことで。気づけよ、その優しさが、弱さが町を焼く！　そうさ、弱さは罪なんだよ。だからオレは……罪を償いに来た。ここでオレの弱さを斬って、オレはまた強くなる！」

烈堂が仕掛けた！　雷蝶が八連斬甲刀を持ち上げて受け止めようとするが、それも間に合わずに血しぶきを上げる！

雷蝶：くうッ、これ以上食らうとキツいッ!!　「止めたるうッ!!」"気合"を10点使ってサイコロを10個増やして……15成功!!
烈堂：ンだあ!?　それァ避けられねえよッ！　こっちゃ11成功……痛ってェ！

一発当たると非常に痛い八連斬甲刀を食らい、烈堂が派手に血を散らす。
次ラウンド、時間切れでサムライが切れた烈堂は再びサムライ化。

烈堂：さらに！　"気合"を1点使って追加行動して、＜法術＞の《気弾攻撃》！
雷蝶：それは……避ける！　避けたうえで、こっちの攻撃！
烈堂：「遅いンだよッ!!」切り返しは……武器をねらって……成功ッ！
雷蝶：「ああッ！」
烈堂：そのまま、その首筋に刀を突きつける！「終わりだ」
雷蝶：「まだ……終わりじゃないッ！」懐に手を入れて、珠手榴弾を……
深影：「待ちなさい」

宙から声がした。皆が振り仰げば、夜空を《式》に運ばれて飛び来る深影の姿！

須波：「み、深影さん……」地べたにはいつくばったまま、その名前を呼びます。
深影：着地して、烈堂をにらむ。「あなたは……いったい何をしに来たのです」
烈堂：「須波を救ってやりに来たのさ。そして……オレの罪を、償いに」
深影：「須波さんを救いに？　はっ、笑わせる。須波さんを殺して救われるのは、須波さんではない。それはあなたでしょう。あなたは自分が須波さんよりも強くあるために、須波さんを殺しに来たんです」
烈堂：「ふン、須波が強いみてェな言い分じゃねえか」
深影：「そんなことはありません。第一、須波さんに必要な強さはあなたの求めている強さとは違う」
烈堂：「……」
深影：「あなたは今のうちに――そう、あなたの剣が届くうちに須波さんを殺したかったのでしょう？　そうしなければ、須波さんはあなたとは違う強さを得てしまう。あなたよりも強くなってしまう」

さらに深影の追及は続く。

深影：「以前あなたに聞きましたね。なぜ、強くなるのか、と。あのとき、あなたは答えなかった。いや、答えられなかった。烈堂さん、あなたはどうして強さを求めるのです？」
烈堂：「……誰にも侵されないために、さ」
深影：「そのために人を殺す？　だったらあなたに須波さんをどうこう言う資格はない」
烈堂：にらむ。「オレが……弱いってェのか？」
深影：「ええ……そのとおり」
須波：「今までずっと一緒にいて……僕は今まで、あなたの強さに憧れてました。あなたみたいに強くなりたい、そう思ってたんです。でも、あなたの求める強さと僕に必要な強さは違う。あなたの求める強さは剣の腕。だけど、僕に必要なのは領主としての強さなんです。領民を思い、政（まつりごと）を取りまとめ、名君となることができる強さ。僕に必要なのはまさにそれなんです」
烈堂：「残念だぜ、須波……気づいたのが今

じゃあ、遅い」
須波：「そんなことはありません！　まだ……これからなんです！」

沈黙。

深影：「どうする……つもりです？　烈堂さん」
雷蝶：「な、ダンナ！　刀ァ降ろせばええ！　剣を引くんや！」
烈堂：「残念だな、オレにもプライドがある。そういうわけにゃあいかねぇさ」
須波：「雷蝶さん……ダメです。僕がここで烈堂さんを受け入れてしまえば……それは……ダメなんです！」
深影：「なれば……白沼守様の命により、逆賊、烈堂を……討ちます」
烈堂：「その細腕で、かい？」
深影：「そう……あなたと須波さんの求める強さが違うように、わたしとあなたの持っている強さもまた違うもの」
烈堂：「そうかい、試してやるよ！」
深影：懐から取りだした刀に手をかざして……《式》を打ちます！　全身全霊を込めた、わたしに打てる最強の《式》!!　刀のダメージを極限まで高めて……迎え撃つ！
烈堂：自力で劣るそっちの刀、当たるかよッ!!「陰陽師風情がかなうと思うかあッ!!」
御影：“気合”使うに決まってるでしょう！

ここが正念場、双方ともため込んだ“気合”を一気に注ぎ込む！
実に烈堂の振るサイコロの数は20個、深影の振るサイコロは15個！
深影はこの後のために“気合”を残しておかなければ烈堂には勝てない。「どこまでダメージを受けられるか」を計算して、ギリギリの成功度に賭けたのだ。

深影：成功数は……11！
烈堂：14！　ダメージは11点!!
深影：やられた！　負傷度が全部埋まって……何とか生きているって状態です……ね。

刀が宙高く舞う。深影の……右腕と共に。
どさりと地に落ちた右腕は、砕けた人形の手。
しかし、これも深影の計算のうち。今度は深影が仕掛ける！
残りの“気合”を突っ込んで、振るサイコロの数は18！
迎え撃つ烈堂も“気合”を使い、18個のサイコロを振る。
まったく同じ状況。負けたほうが……倒れる！

烈堂：15おッ!!
深影：……10……負けた！　しかたありませんね、死ぬ場所でもない。気絶……します。

“致命傷”にダメージが入った状態での気絶は、すなわち「昏睡状態」。しかるべき処置なしでは起きあがることはない。
しかし深影は、自分一人がこれ以上戦う場所ではないと考え、気絶を選択した。
片腕を失い、無惨な姿の深影が、ゆっくりと倒れる。

須波：「みッ、深影さあんッ!!」叫んでから……きッと前を見据えて立ち上がり、深影さんの刀を拾いますッ！
烈堂：血糊を払って、「……いいんだな」
須波：「自分のまいた種です。僕が……決着を着ける！」
烈堂：「良く吼(ほ)えた！　現実ってヤツを教えてやるぜえッ!!」
須波：行きますッ!!　戦闘オプションは“必殺の一撃”！

必殺の一撃

自分の命を顧みず、敵に多大なダメージを与える戦闘オプション。敵の強烈な打撃を、まず先に受け切らねばならない。
当然須波には烈堂の一撃に耐え切るだけの体力はない。そう、“死亡”を覚悟する以外には……！

烈堂：「死ぬ気か！　それもいい！」ダメージは……15点!!

烈堂が須波の命を刈り取るその瞬間、間に入り、烈堂の刀を代わりに受けたものがいた！

雷蝶：“気合”を1点使って「割り込み」ッ!!須波の代わりにダメージを全部受けたるッ!!
烈堂：「ぬうッ！」
雷蝶：「アンタに憧れてたのは……須波だけやなかった。須波だけや……ない」倒れる……！
須波：「深影さんッ!?」叫びながら、烈堂さんにぶつかっていきますッ！
烈堂：くうッ……今度こそ、耐え切れねえッ！……しかしあいにく死ぬ気はねェンでね。ダメージは全部“活力”に入れて気絶させてもらう。口から血を吐きながら、「なるほど……これがお前の強さかよ……」
須波：ラウンドの終了とともに、“致命傷”が入っていて活力が1の僕も気絶してしまいます……

十三　別離

“致命傷”が入っていない状態で気絶したキャラクターは、1分につき1点ずつ“活力”が回復してゆき、“活力”が1以上になった時点で覚醒する。
息を吹き返したのは烈堂が最初だった。
血の固まりを吐き出してむっくりと立ち上がり、あたりを見回す。
傍らにはかつての仲間たち――雷蝶、御影、そして、須波――が倒れている。命を奪おうとすれば、いとも簡単にできるだろう。
しかし……

烈堂：「……ふン、こういった強さ、ねぇ……ま、いいさ」

焼ける町を背に、烈堂はその場を去る。
彼がなにを思い、どこへ行くのか、それを知るものはいない。

十四　未来

気絶していたのはほんの10分ほどだったろうか、雷蝶は体中の痛みに耐えかねて目が覚めた。
ちなみに、須波、御影ともに“致命傷”を受けている。つまり、しかるべき治療なくしては二度と起きあがることができないのである。

雷蝶：「ダンナは……おらんのか……」2人をかついで、医師に診せにいかんと……

2人を抱えて城へ向かう雷蝶の口もとに、安堵ともあきらめともつかない笑みが浮かぶ。

雷蝶：「そうか……ダンナは……行ってもうたのか……」

後見人、その軍師と、敵軍の二頭を深影が倒していたことにより、混乱はしだいに収まっていった。
迅速な連絡によって木槌よりの援軍も間に合い、多大な被害を出したものの白沼の都は再び落ち着くのである。
混乱を収めたとして、今までその能力を疑問視されていた若き領主の手腕も見直されつつあり、彼にとって前途は波乱に満ちたものではあろうが、決して暗いものではないだろう。
虎堂白沼守須波の国造りは、今、始まったばかりなのだ。

天羅戦国伝　終

GM回想録「領主」のころ

最終回というコトで、いままでのイロイロを精算しなくてはならない。そう考えた結果、詰め込みすぎているなあと我ながら思う。
残り一本の刀は、他の人物が持ってきたことにせざるをえなかった。この辺、スマートでないなあと反省。
「須波が領主になり、他国の侵略が起きる」という点だけがシナリオで決まっていたこと。あとは相も変わらずPCの動きに合わせたアドリブである。
烈堂は「須波が宝刀の力で領主になるのなら、その元を去ろう」とずいぶん前から考えていたらしい。
PCどうしの対立は、双方ともが“気合”を使用できるため、自然と派手になる。PC対立はプレイヤーの対立ではない、と全員が理解しているのなら、場を盛り上げるいい手法だといえるだろう。
RPGの主役はPCであるというのなら、PCが直接行動をしなくなる戦闘終了以後は完全な余談となる。そう考えて、戦闘が終わった時点でシナリオを終了させた。

第2部

天羅創成

天羅万象資料

TENRA BAN-SHOW PLAY-SOURCE

《天羅万象》の制作と並行してRPGマガジンに連載した『天羅創成』およびそれに対応するショートストーリー『天羅幻視秘抄』。若干表現に『天羅万象ビジュアルブック』と異なる例や、連載時の次号予告などもあるが、あえて連載時のまま掲載した。
なお第1回「《紗》と陰陽道」、第2回「神宮家　天羅誰の支配者」、第11回「ガンスリンガー－流浪の異邦人」は平均的な天羅人の知識からは掛け離れているため、本書では収録を見送った。ご了承いただきたい。
　なお、《妖》に関する部分、またサムライの『秘抄』は書き下ろしである。

サムライ、ヨロイ乗り 78
金剛機、陰陽師 84
傀儡、蟲使い 90
鬼、法師 96
珠、妖 104

天羅創成

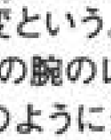
『天羅創成』とはハイパーオリエンタル時代劇RPG“天羅万象”の発売前サポートおよび、読者との意見交換のためにRPGM内に創られたスペースである。　文・イラスト：井上純弌

サムライ
～人を捨てし者ども～

天羅の世界のサムライはわれわれの世界でいう侍（サムライ）とはちょっとわけが違う。天羅の世界の《サムライ》は己を超えるため《式》を体内に埋め込むことを選んだ（選ばされた？）武芸者たちの総称である。戦うため、生き抜かんがために人を捨てた──修羅の者たちの呼び名である。

サムライの《式》は発動する際、大なり小なり肉体の変化を引き起こす。これをサムライ変（へんげ）という。その変化は埋め込む《式》の種類や量、埋め込んだ陰陽師の腕のレベルなどで、百人百様なのである。このサムライ《弧焔》のように全身が変化するものや、傷が浮き出るものまで──ただ肉体の変容は隠せたとしても、体じゅうに埋め込まれた《珠》によってサムライは一目でそれとわかってしまう。

──そう、ひとたびサムライとなったら、それを捨てることは一生できない。いつ何時であろうと、サムライである自分と向かい合って生きていかねばならないのである。



《珠（オウジュ）》
《気》をためたり増幅したりできる不思議なレアメタル。
サムライはこれを体じゅうに埋め込んで、式の発動の補助に使っている。
（サムライ化したときの気力の消費を抑えられる）
なお、《珠》はためた気ごと一瞬で爆発させることも可能であり、火薬のない天羅世界で火薬の代わりになっていたりもする（ただし高価）。

サムライになる上で、もう一つの重要な点は遺伝子が変質してしまうため、子供がつくれなくなってしまうことである。
男はいわゆる無精子症になってしまうし、女性も妊娠できない体になってしまう。
まれに受精して子供が出来ることもあるが、それは──

男であって男でなく、女であって女でない。
それがサムライの世界である。

彼らにとって戦は日常だ。死はありふれている。無限に続く修羅への道の中でいったい彼らは何を想うのだろう。
人を捨てたがゆえ、人間として生きる彼ら──サムライを君ならどう演じる?

天羅創成

文・イラスト：井上純弌

鎧乗り

～戦の華～

天羅は四百年続く戦国の世である。サムライが跋扈し、歴戦の猛者どもが血を流し合う戦場。その中で絶対の装甲と無敵の火力で屹立する戦略兵器――ヨロイ。そして、その鋼の重機を駆る少年少女たち――ヨロイ乗りを今回は紹介しよう。

ヨロイは明鏡によって制御されている。その明鏡に接合（意識を同調させる）できるのは業の浅い者に限られる。
必然的にヨロイ乗りになれるのは年端もゆかぬ子供ということになる。

心珠

琥珀色の握りこぶし大の球体でヨロイや金剛機の動力源として使用されている。霊力（気の根源）をほぼ無限に放出し続ける不思議な球体。これがあると《式》を永続化させることが可能になる。陰陽師垂涎のアイテムなのだが、とある事情により非常に希少。

ヨロイは名門の「家」に対して与えられる。家を継ぐ長男が、戦場のしかも最前線に出るわけにはいかない。その結果、次男、三男や政略結婚の種にされるしかない女の子がヨロイ乗りの大半を占めている。

だが、彼ら（彼女ら）はそんなコトを悔やんだり憂いたりしない。彼ら（彼女ら）は勇んで戦に出て行くのだ。
子供だから――自分が子供であるから本当に理解してはいないから。

明鏡に接合している間、五感すべてはヨロイを通じて流れ込んでくる。
それは夢を見ている状態に近いという。
夢の中の戦場で夢の中の兵たちと戦う少年少女たち。
ヨロイを脱ぐときは安全な本陣の中で、戦うときには必ず接合していて戦場の真の陰惨さを味わうことはない。

戦は彼ら彼女らにはゲームと同じだ。おもちゃの兵隊を無慈悲にちぎる幼子の姿がそこにある。ちぎられる兵の叫びも苦痛の表情も夢の中の景色でしかない。
だが、彼ら彼女らはそうやって戦を理解する。戦とはそういうものだと――殺し合いとはそういうものだと。

しかし、いずれ無理が出る。
戦いを、戦場を、人間が死ぬということを理解するときがいずれ来る。己と向き合い越えねばならない時がいずれ来る。

人はいつまでも少年少女ではいられないから・・・・・

業を背負い、ヨロイを降りるときに、彼ら彼女らを待つのは何だろう？
過去の遺恨か？ 自分を陥れた家への恨みか？ それともこの戦国の世へのやりきれない怒りか？ どのような業に身を焦がそうとも彼ら彼女らは感じるだろう――今、まさに自分は両の足で大地に立っていると。

あなたがヨロイ乗りをプレイするとしたら、それは成長の物語となる。
仲間と敵と試練があなたを成長させるだろう。しかし、語り、戦い、成し遂げていくことが、無敵の装甲、ヨロイとの別れの日を早めることになる。
だが、忘れないでほしい。

ヨロイを脱いだとき、初めて彼ら彼女らの人生が始まるということを！

万

象

天羅 幻視秘抄 SAMURAI

「帰郷」

文：渡辺ヒロシ　イラスト：小川雅史

どうしておれはサムライになったのだっけ？

二の腕に埋まった《珠》を爪でひっかきながら、おれはぼんやりと考える。

確か——強く、ありたかったのだ。

なぜ、強くなりたかった？

認めて、ほしかったのだ。

何をやっても要領が悪いと、おれのことを邪険に扱うお母ちゃんに。

だから、ご領主様の戦に足軽としてついていった。あれは、五年が前だったか？

剣の才がないことはあっと言う間に骨身にしみたので、その分だけ体を鍛えようと、そう思った。

戦場で、サムライというものがあることを知った。小便を垂れ流しながらへたりこんだおれの目の前で、サムライは本当に強かった。

だから、おれもサムライになってやろうと、そう思ったのだったっけ。

そうすれば、お母ちゃんもきっとおれを認めてくれると、そう思ったのだったっけ。

五年だ。

サムライにしてもらうだけの金を貯めるのに、五年、かかった。

サムライを刻む間の死ぬほどの苦しさも、お母ちゃんにほめてもらう瞬間のことを想像して堪えた。

傷がふさがったらすぐに、おれは故郷へと戻った。懐かしい丘を越えて、小川を渡ると、五年前と変わらない村が見えてきた。

おれのうちの前に、人だかりができていた。その中の一人がおれをみつけて、五年もの間、なにしてやがったと言った。

傭兵崩れの野盗が、おれのうちに押し入って、お母ちゃんを人質に立てこもっているのだと、そう言った。

かあッと、頭に血が上った。槍の穂先に引っかけてあった風呂敷包みを振り落とし、おれは走った。走りながらサムライ化。誰かがおれを見て悲鳴を上げたが、気にはならなかった。

サムライによって研ぎ澄まされた感覚で、家の中の人間の場所が手に取るようにわかった。お母ちゃんと、二人の人間。家に向かって走りながら、おれは、手に持った槍を振りかぶって、投げた。

壁を突き破って、槍はお母ちゃんに小刀を突きつけていた男の頭を砕いた。男は横っ飛びにぶっ倒れて動かなくなった。

すげえ、とおれは思った。サムライを入れてから人を殺したのは、初めてだった。

窓から家の中に飛び込んだ。目を丸くして仲間の死骸を見ていた男が振り向いた。

なんだか叫びながら、男は刀をこっちに向けた——向けようとした。

男に迫ったおれは、刀を握るそいつの手をつかんで、ぐるりとひねった。ばきり、と、骨の折れる音が手を伝って聞こえてきた。かまわず、刀をそいつの首に当てて、ぐい、と押した。

男の首は、まるで土人形か何かみたいに抵抗なく切ることができた。首なしの男が倒れた。お母ちゃんを守ることができた、そう考えるとうれしくてたまらなかったおれは、座り込んでいたお母ちゃんの方を振り向いてにっこり笑った。お母ちゃん、おれだよ、帰ってきたんだよ。そう言った。

お母ちゃんは、おかえり、と言う代わりに、ただひと言、

「……化け物」

と、言った。

瞬間、目の前が真っ赤になった！

——気がつくと、おれは血まみれの家の中に一人だった。目の前にお母ちゃんはいない。男たちの死骸に折り重なるように、元・お母ちゃんだったモノが転がっている。

どうしておれはサムライになったのだっけ？

二の腕に埋まった《珠》を爪でひっかきながら、おれはぼんやりと考えた。

確か——

天羅 幻視秘抄 YOROI-NORI

「帰還」

「……来る。」
僕のヨロイ、持国の明鏡が、そいつを感知した。
こちらにまっすぐ進んで来るその影の大きさからするに、そいつは確かにヨロイだった。

影がしだいに大きくなり、ヨロイの特徴が判じられるようになって来て、僕は息をのんだ。喉がからからに干上がってゆく。
「……双角。小夜香姉様の……ヨロイ……。」
半月前の戦 で行方知れずとなった小夜香姉様が、ヨロイと共に生還したのだ！
近づいて来るうちに双角の損傷のひどさがはっきり見えてきた。天を突く一対の角のうち、右のものは途中で折れてしまっているし、胸の装甲板、ヨロイ乗りを内部に入れるための扉がひしゃげて、内側に食い込んでいる。
それでも、双角は動いている。それはつまり、中の者が生きている証だと言えた。
「姉様、よく無事で………」
伸ばした僕ー持国の指先が今まさに双角に触れようとした。双角の手刀が、無防備だった持国の左目に突き入れられた。
「ね、姉様ッ！」
双角が持国の頭の内側でこぶしをつくるのが感じられる。双角の右手が持国の顔面から引き抜かれる。開いた手の内から、血と肉が薄くからんだからくりの塊がずるりと落ちる。
双角の両手が今度は持国の頭そのものを握りつぶそうと言うのか、ゆっくり襲いかかって来る。なぜだかもわからないままに、身を護ろうと両手を前に出し、ぶつかり合った双角の両手と持国の両手が、がっちりと組み合う。
「姉様？　中にいるのは姉様なんでしょ？
ねぇ、返事してよ姉様あッ！」
明鏡の接合を拡張して、双角の明鏡と接触しようとするけれども、広大な明鏡空間のどこにも姉様の魂は見つからない。
それがどういう意味なのか、無理矢理に僕は無視しようとした。
「うそだッ！　姉様はその中にいるんだ！」
さらに力を込める。みしり、と嫌な音がした。どうやらどちらかの、あるいは双方の指がつぶれたらしい。腕を血が伝い、ひじのあたりから地面に雫を落としてゆく。
双角が両手を持国と組んだまま、上半身を右にひねった。金属のちぎれるような音がして、持国の左腕が肩から引き抜かれる。
一瞬にかけて、僕は右脚を双角の左膝に当てた。そのまま、右脚の力を込める。
「ああああああぁあああぁぁぁあぁぁぁあっ！」
双角の膝が砕ける。片足で自身の重量を支え切れないヨロイが倒れてゆく。双角をまたぐようにして、持国が両腕の付け根を踏みつぶすと、砕けた両の腕が地に落ちた。
「姉様……今……助けるからね……。」
右腕を伸ばし、かろうじて使い物になる指をひしゃげた双角の前面装甲にかけ、ゆっくりと力を込めてゆくと、やがて装甲はきしみながらはがれていった。にちゃりとねばつく感触に、背筋が寒々しく感じる。
「……姉様……。」
装甲板を横に捨て、中をのぞいた僕はそのまま動くことを忘れて、目を見開いた。
内壁が乾いた血と臓物にまみれて、赤黒く染まっていた。戦で被った、鎧をゆがめるほどの衝撃は、とうに内部の搭乗者を押しつぶしていたのだった。
それでも家を目指して歩いて来たのは、ヨロイの背負った業の深さがなしたわざなのか。
泣くこともできずに僕は、ただその真紅の花を見つめていた。いつまでも、いつまでも。

天羅創成

金剛機

～深遠(しんえん)なる業を背負いし 無敵の刃(やいば)～

言ってしまえば身もふたもないが天羅最強の存在はこの《金剛機》である。鋼鉄の肉体、心珠の霊力エネルギーと明鏡とが可能にする超高機動!! そして人の何十倍もの筋力!! 普通の人間ならばその動きを目で捕らえることすら不可能であろう。

だが、金剛機を最強たらしめているのは、何より明鏡に封じられた《業に焼かれ狂った魂》がゆえである。

人それを修羅と呼ぶ。

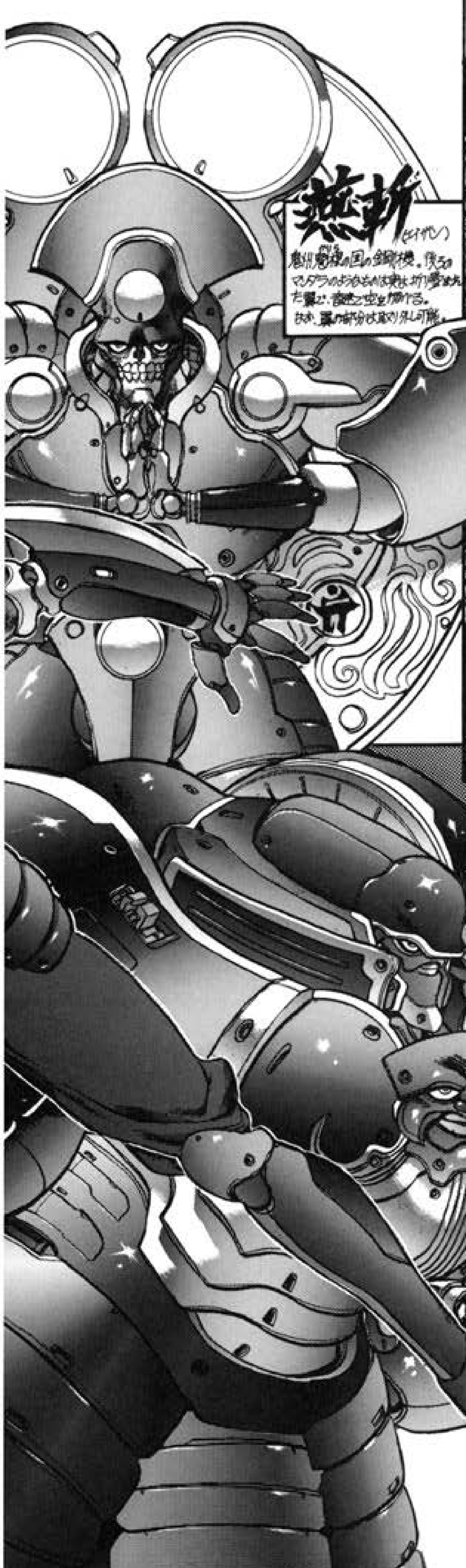
金剛機の構造はヨロイのそれとほとんど変わらない。心珠と動力筒とそれを制御する明鏡ーーだが金剛機は接合する人間を必要としない。

金剛機の明鏡には、修羅の魂が封じられているのだ。暗く、濁りきり、狂ったーーそれがゆえに強力な業を背負った魂、明鏡を力で支配できるほど強い魂、修羅の魂が。

修羅の魂は、高等な法師の法力により奈落迦(ならか)の淵より呼び出され、明鏡に封じられる。次に法師と陰陽師の力によって、その狂気の原因《因縁》を記憶の底に封じ込む。そして《条件付け》を行なうのだ。

人の想いを、狂気を力でねじふせる。純粋な狂気と無垢な魂、金剛機の誕生である。

文・イラスト：井上純弌

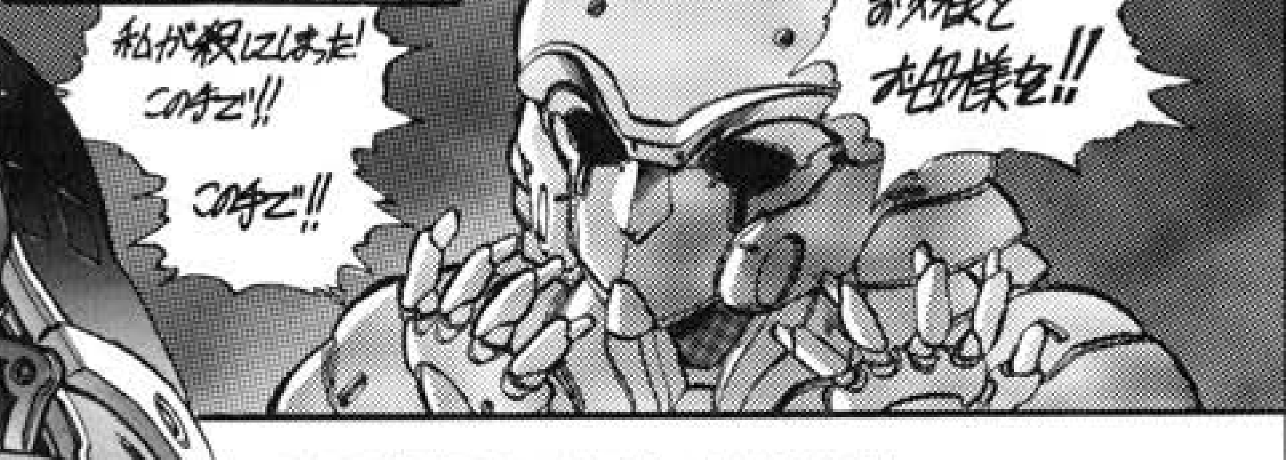


金剛機は天羅の世界でも最先端技術の結晶である。それは陰陽師と法師とヨロイ鍛冶の三身一体があってこその技術なのだ。特に魂の明鏡封じや、因縁操作は、いまだ未完成の分野であり、金剛機開発より100年過ぎた現在でも、決め手は存在しない。

そのため金剛機が狂い出すことがまれにある。狂った場合は、明鏡を取り出し、魂を浄化してしまえばよい。
もちろん、多数の犠牲の上にでも最強の機神を取り押えられたら――の話ではあるが……

金剛機製作図

いまだ骨格の段階。ヨロイ鍛冶とは、すなわち陰陽師の一派であり、《式札》を使って《紗》で金属を加工するのだ。
なお動力筒も同じく《式》の一種である。



あなたが金剛機をプレイするなら、それは失われた記憶と因縁、そして迫り来る狂気との戦いの物語となる。
殺戮の衝動と過去との因縁に苦しみ、のたうつことになる。
微妙な狂気のバランス、永遠の深淵はすぐそこにある。
因縁を昇華し存在を保つか？　衝動に負け、
修羅と落ちるか？
鋼鉄の肉体の狂気
人としての狂気

金剛機の物語はすでに始まっているのだ。

天羅創成

陰陽師 ～美と真実の狭間に～

文・イラスト：井上純弌

『日本の戦国時代はまた芸術の時代であった。地方領主が乱立し、次々と美しく豪壮な殿邸が建てられた。絵画の分野においても、狩野派を中心とした巨大な障屏画がもてはやされ、隆盛を極めた。漢画様式の力強い線と大和絵の華麗な色彩のぶつかり合いは大画面の障屏を飾るにふさわしいものであった――』

――天羅の陰陽道とは学問であり、哲学であり、機械工学であり、職人芸であるわけだが、それのどれよりもまず芸術として存在する。
今回は芸術を駆使する戦国のアーティスト――陰陽師について語っていこう。

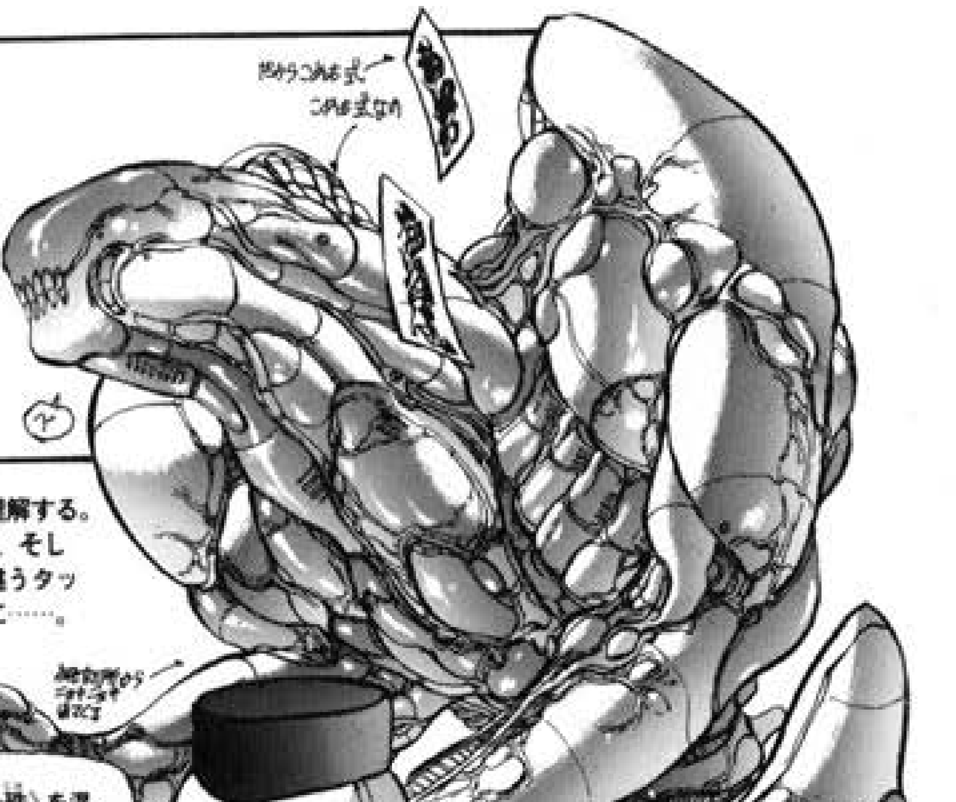
陰陽道でできることはただ一つ、〈式〉を打ち〈紗〉（天羅にあふれている10のマイナス16乗分の1㎜の微細な疑似生命体、詳しくは連載第1回参照）をコントロールすること、ただそれだけである。
しかしながら、その〈紗〉の作動にはこれといった法則性はない。
なぜか？　その場にいる人間全員が無意識のうちに〈紗〉に何らかの影響を与えている（思考しない人間が存在するか？）からだ。

〈紗〉は常に変化し続ける。いや、〈紗〉の法則性などというものは存在しないのかもしれない。

常に変化し、とらえどころのないものを追い続け、それを体現せんがために生きる。
その姿は美などというあやふやなものを追い求める芸術家の姿に似てはいないか？

式とはなにか

陰陽師が《紗》をコントロールするために用いる文字のようなもの。
《紗》のプログラム。霊力をエネルギー源として発動し、まわりの《紗》から異形の疑似生命体が形作られる。
ややこしいのは、《式》とは《紗》が働いている状態をさす言葉であり、発動プログラム自身の名であり、それによって創られる物質の名称でもある点だ。



陰陽師はそれぞれがそれぞれの方法で世界を――陰陽道を理解する。《式》の打ち方など陰陽師一人一人により違うのだ。強烈な、そして強固な個性がそれを可能にする。ちょうど画家一人一人違うタッチと画材で、しかし確実に美の世界に切り込んでいくように……。

ヨロイ鍛冶

巴 トモエ

《紗》は強く完結した意志に引かれる。目に見えないものを信じ（彼らは紗を確認することなど不可能なのだ！）うつつ世に具現化させる――その精神力、己が力に対する自信はいかばかりのものだろう！それは常人の限界を超えた天才にのみ初めて与えられる力なのかもしれない。

忍 シノビ

以前サムライの一種としてシノビを紹介したが、彼らは同時に陰陽師の一派でもある。つまり彼らシノビとは、自分に埋め込まれた《式》を駆使する陰陽師なのである。

彼らはまず最初に《式》（《暗式》という特殊な《式》）を埋め込み、それからそれを使う術（忍術）を学ぶという、通常の陰陽師とちょうど逆の手順を踏む。

あなたが陰陽師をプレイするなら、それは完全なる自信に満ちあふれた芸術家となる。ほかの人間には感じられないものこそが、あなたの追い求めるすべてだ。術の探求のために生き、そしてそのために死ぬ。ためらう必要がどこにある？　世界の真理はすぐそこにあるのだ。

力を駆使せよ。戦いを越え、見て、考え、理解せよ。至高への門は眼前に開かれているのだ！

ゼロから《式》を組むのに比べ多様性は失われるが、早く、多くの人間が陰陽道を使えるようになる。頭太付きの諜略集団に適した進化を遂った陰陽道と考えてもらいたい。

▼この傀儡師もまた陰陽師の一派である

天羅 幻視秘抄

KON GOHKI

「記憶」

文：渡辺ヒロシ　イラスト：小川雅史

……雨が降っている。
お前の目に映る雨の雫は、お前の体に冷たさを感じさせることがない。
……当然だ。お前の名は風喰丸。篠嶽国の名代、東陸昇に仕えて戦に参じている金剛機なのだから。
違う！　お前の魂が叫ぶ。
「オレは共永十三。巴流剣術三代目宗家!!」
今まさにお前がこの機械の腕でやったように、あまたの人間をあやめた剣鬼!!
眼前に立つ足軽を映しているはずの瞳の奥に、かつてお前が見た景色が見える。
そこは道場。目の前にはお前の弟子の一人が立っている……。
「先生、この私に何か御用でしょうか？」
「オレの剣を極めるため……死んでほしい」
まぶたの裏側にお前が弟子を斬った瞬間が映し出される。その景色に合わせて、お前が握った刀が、目の前の足軽を切り裂く。
剣の道を追い求めるあまりに修羅道に堕ち、門弟百人あまりと、そして、自らの妻と娘までをも斬り殺したお前の、狩りの始まり。
夢と同じように、お前の機械の腕は近くの人間を手当たりしだいに斬り伏せてゆく。
夢の中のお前が吠えた。
「そうだ！　刀を血に濡らすほどに、オレは強くなってゆく！　オレの愛したものを刃にかけるほどに、オレは剣を極めることができる！」
共永十三という名のお前がへっぴり腰の武士を斬り、風喰丸という名のお前が目の前のサムライを斬る。
誰かが「風喰丸が狂った！」と叫ぶ。当然だ、とお前は思う。金剛機というものは、みな、狂っているものなのだから……。
目の前にサムライ。お前を待っていたのか、その姿を見て奴はにやりと笑った。
お前が刀を握りなおした。男が刀を抜いた。お前は奴に飛びかかった。
奴は抜き身を右手でぶら下げたまま、微動だにしなかった。斬った、と思った。
首を半ば斬り取られたお前の血が、宙にしぶいた。目の前の景色がぐらりと傾いた。
体を貫く灼熱感。お前は負けたのだ。
視界にゆっくりと霧が降りていった。
次の瞬間、お前は道場にいた。再びお前は門弟を斬り、妻子を斬った。
悪夢はやむことがなく、永遠に続くかのようだった。
お前の魂が悲鳴をあげる。
夢の中のお前に合わせてお前は目の前の兵を斬る。何度目かの血しぶきが上がる。
雨はいつしか血のように赤く染まっている。
動く者の一人もまわりにいなくなり、ようやくお前は百度の悪夢から覚める。
柔らかな肉の感触が足もとに伝わる。お前は自身が殺した屍の山の上に立っているのだ。
唐突に、本当に唐突にお前はこの悪夢を抜け出すことのできる、恐らくはたった一つの方法に気づく。もし可能だったのならば、お前は安堵のため息さえ吐いただろう。
右手に握った刀を地に落とす。もうこれも必要ない、と。
そして、一度だけ天を振り仰いだお前は、自らの胸に、右手を突き込む!!
金剛機の命である《心珠》の感触をつかんだお前は、そのまま右手を引き抜き、高く掲げた心珠を握りつぶす。
急速に意識が薄れてゆく、その最後の瞬間に、表情を作れぬ金剛機の仮面の奥で、確かにお前はにやりと笑う。
もう夢も見ずに……

「いい月ね……」
見上げれば満月。湯煙の中、頭上にぼんやりと浮かんでいる。
長い髪を手ぬぐいでまとめ、女が一人、岩の合間に湧いた湯につかっていた。
月明かりが、女の白い肌をいっそう白く見せる。十歩ほど離れた岩の合間に組まれた松明の明かりが揺らめいて、精巧な作り物のように美しい女の顔に赤い波を映す。
ふと、女は軽く眉を寄せた。岩の向こうに誰かが動いたような気がしたのだ。
「誰かいるのですか、そこに？」
気配の方を向いて立ち上がり、女は湯煙の奥に誰何の声を上げた。
にわかに風が湯面をさらい、湯煙がかき消える。その向こう、松明の脇に一人の男の姿が浮かび上がった。
「陰陽師、砂鏡千早殿とお見受けいたすが？」
裸身を隠す事もせずに、女は毅然としてこの場の静寂を破った不粋な闖入者を睨みつけつつ、答えた。
「いかにもそのとおりではありますが、湯浴みをしている女の前にそのような物騒ないでたちで現れたる、その言い訳はしていだけるのでございましょうな？」
男が刀を握り直した。男の持った刀が松明の光を受けてきらめく。
「我が名は大木修次郎と申す。兄、大木善一郎の仇、お覚悟！」
修次郎が湯に飛び込み、刀を振り降ろす。白刃が千早の額をかすめる。
「ふん、陰陽師など、素ッ裸をねらえばたやすいものよな。動くことさえできぬか。」
髪をまとめた手ぬぐいがはらりと湯の上に落ち、解き放たれた黒髪が千早の裸身を覆った。一瞬遅れて、千早の額に一筋の鮮血が伝う。細い頸の先にまで流れた血は頸の先で雫となり、湯に映った満月の上で渦を巻く。
刀を引いた修次郎が、ちらりと松明の下に置かれた千早の着物を見てから言った。
「墨壷も筆も持たずば、式を打つこともできまい。貴様はそうやって丸腰で死ぬのだ。貴様が、オレの兄にしたのと同じようにな。今のは脅しであったが、次は……斬る」
千早がそっとまぶたを伏せたそれを、修次郎は覚悟を決めたと解釈した。
「現世との別れは済んだか？　では……覚悟」
修次郎が再度刀を振り上げる。裂帛の気合。
千早が目を開いた。
刀を振り降ろすことはできなかった。体が動かないのだ。
「ば……馬鹿なッ！」
慌てて修次郎はまわりを見回し、愕然とした。湯の上に落ちた千早の血が、自分のまわりで《式》を形作っている！
「筆や墨壷はそれをやりやすくするための道具でしかない。別に他の物でもかまわないのよ。そう、例えば……血と、水面でも」
修次郎は千早の顔を見つめた。千早の哀れむような瞳が、修次郎の見た最後のものだった。
「さよなら」
千早が呟いたのと同時に、修次郎の足もとの《式》が具現し、巨大な顎となり、修次郎を飲み込んだ。何も残らなかった。
水面が静寂を取り戻すと、千早は再び湯の中に体を沈めて、最初からやり直そう、といったような風情で天を眺めつつ、言った。
「いい月ね……」
見上げれば満月。湯煙の中、頭上にぼんやりと浮かんでいる。

天羅 幻視秘抄 ONMYOJI

「名月」

天羅創成

傀儡 ～人造の美、人造の魂～

文／イラスト●井上純弌（協力／久保田悠羅）

究極の芸術とは何だろう？ 究極の美を創り出すだけなら、それは音楽や絵画や[illegible]あるだろう。
しかし、天羅の世界には[illegible]を超える「芸術」が存在する。[illegible]“究極の美”を[illegible]である。
傀儡術――木の人形に魂を吹き込む究極の芸術。人間により近く！ より自然に！ [illegible]を備えた理想の美男美女を創り出す術。[illegible]人間とほとんど変わらない。
ただ一点、その肉体が木であることを除いて……

[illegible]と表記される。「九具」とは、頭、右腕、左腕、[illegible]、そして魂のことを意味する。その名[illegible]から削り出される。それに御神木[illegible]埋め込み、幻術を施したのが傀儡である。[illegible]（明鏡）システム[illegible]ないため、創られたばかりの傀儡[illegible]に純真な存在――[illegible]ただの人形なの[illegible]の腕が問われることに[illegible]

最高級の傀儡師になると、傀儡に《自我》を持たせることができる。木の人形に生じた《自我》——それが本当に自我なのか……判断できる“人間”がいるだろうか？　彼女らは泣き、笑い、怒っているように見えるだけではないのか？　しかし、彼女らは自分たちが感じていると主張する。または自分を人間だと思い込む。「わたしは人間。だって鼓動の音もする。血も流れてる……」それが幻術のなせる技であることを、自分が人形であることを知ったとき、彼女らの心に何が宿るだろう……。

そして、いかに人間に近づこうとも(超えようとも？)、彼女らはしょせん“モノ”でしかない。領主の間で謀略の道具として、高級な茶器のようにやり取りされ、重要人物の影武者として借りそめの生を生きる存在なのだ。

十二月姫 第六作 水無月

伝説の傀儡師“翔雲”は、二百歳を越えながら、絶世の美女貌だというが、確かめた人間はいない。十二月姫は現在葉月まで完成している。

ＰＣの傀儡は最高級品、自我を持った傀儡である。人間以上であり、そして人間には絶対になれない存在。

わたしは人形。わたしは人間。

自分とは何か？　傀儡はいつでも問い続ける。人間とは何か、生きるとは何か。自分自身は何者なのか？　自分の居場所はどこにある？　傀儡は常に問い求め続ける。

わたしは人間。わたしは人形。

そして傀儡は旅立つのだ。

自分自身を見つけるために。

戦闘用傀儡 — 時雨(しぐれ)

特殊な訓練を受け、暗殺や謀略に使用される傀儡を戦闘用傀儡という。この時雨についてはルールブック冒頭カラー漫画で重装金剛機《羅糸》とともに一暴れしてもらうつもり。乞御期待。

天羅創成

文・イラスト：井上純弌

蟲使い ～寄りて生きるは蟲（むし）か？人か？～

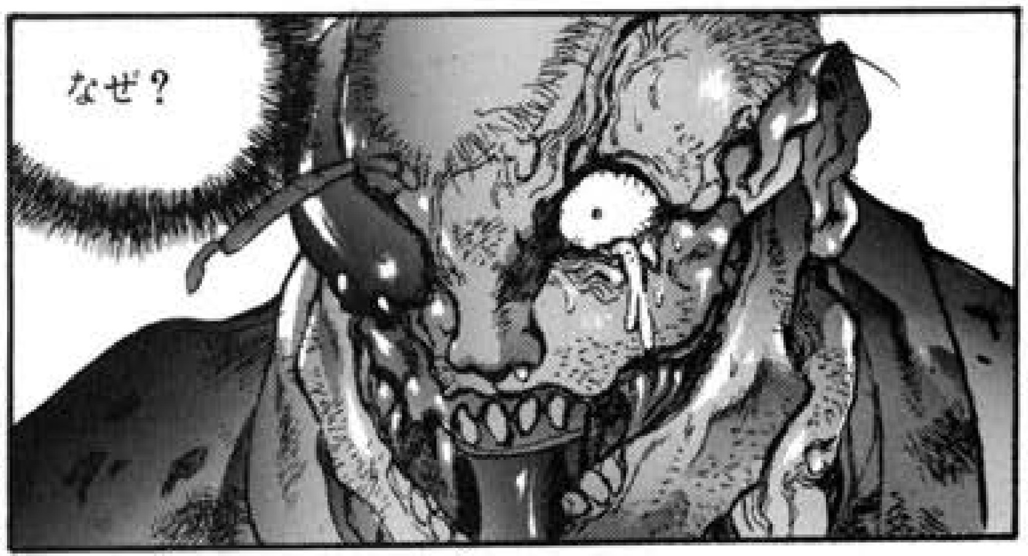
天羅世界の生態系は《紗》によって歪められている。その代表が特殊な寄生虫《蟲（むし）》と、それを利用し人体を改変していく術、《蟲術（こじゅつ）》である。

《蟲》を入れることで、人は人を超えてゆく。しかも、上限の見えたサムライ（式に式は打てない、残念ながら）にとっては、己の技量を越える有効な術（すべ）だ。

天羅の医術は拙（つたな）い。それは日本の戦国時代程度に御粗末だ。病気やけがの治療は、祈祷や、民間医療の域を出ない薬術などによってなされている。よって、人間の身体と蟲を知り尽くしている《蟲使い》は貴重な存在だ。

しかし、蟲などという気色の悪いモノを扱う彼らは、露骨に差別されている（日本人というのは外見程度で本当によく差別をする。彼らがどんなに大事な人間であったとしても！）

よって彼らは一ところに留まらず諸国を巡ったり、人里離れた森の中で生活したりしている。



蟲とに生きる

蟲を(多くは自分の体内で)飼うのは非常に難しい。それは特殊な知識と、いくばくかの才能と、適性が必要だ。よって蟲使い(特に腕のいいそれは)非常に希少だ。

蟲使いは寄生している蟲達のために、自分の生活の多くを割かねばならない。食事の規制に完全な睡眠、それは蟲たちのために考え、生きることだ。蟲の心に近づいていくことだ。蟲……本能だけの存在、我々とは違う意識体形………蟲の気持ちに“なる”とはどういうことだろう？

蟲使いは徐々に、その人間としての“なにか”を失っていく。失った瞬間からソレが——失ったものがなんだったか、彼らにはわからなくなる。憎しみか？喜びか？愛か？しかし彼らは“悲しんだり(？)”しない。

そうだ。蟲は悲しまない。
そこにいるだけ……。存在しているだけ……。

はたして彼らは——蟲使いは、蟲を使っているのだろうか？蟲に使われているのだろうか？

よりて生きるは、人か、蟲か。

それが彼らの業、蟲使い全員の逃れられぬ業。彼らは戦いの中、治療の途中、考える。考える。考え抜く。自らを人間としている想いを、意識を、業を……。そして、彼らは知っている。

自らを支えるものがない者は、いずれ蟲に“食われる”と

天羅 幻視秘抄

KUGUTSU

「悪夢」

文：渡辺ヒロシ
イラスト：小川雅史

　あやめはあたしが産まれたときに造られた、あたしそっくりの傀儡(くぐつ)。木から造られ、魂を込められ、あたしそっくりになるよう幻術(めくらまし)を施されて、十五年間、あたしたちはまるで双子のように育ってきた。

　どこへ行くにもあたしたちは一緒だった。かくれんぼや、草摘みや、そういったこと。

　とりわけあたしたちのお気に入りは、あたしたちがとりかえごっこと名づけた遊びだった。

　あたしがあやめを「かえで」と呼び、あやめがあたしを「あやめ」と呼んで、役割を入れ替えて遊ぶのだ。誰も二人が入れ替わっていることに気がつかないのがおもしろくて、あたしたちは何度も何度もそうやって遊んだ。

　よそにはあやめが傀儡であることは知らせずにいたから、あたしたちは本当の双子のように比べられてきた。

　子供のころは何でもあたしのほうがよくできた。誉められるのもいつもあたしのほうだった。

　いつからだろう、あやめのほうが何もかもをうまくこなせるようになってしまったのは？

　でも、そんなことは関係なかった。どっちが上手に琴を奏でることができようと、あたしはあやめを愛していたし、あやめもまた、同じ気持ちだったに違いない。

　年ごろの娘がみなそうであるように、あたしもまた、思いを寄せる男性がいた。わが家に訪れる、父の友人の息子であるその人は、辰之進(たつのしん)と言って、あたしたちの三つ年上だった。

　「あたしの旦那様になってくださいませね」

　そう言って無邪気に笑うあたしに、辰之進様は困ったように笑いながら、頭を掻くだけだったけれども、あたしはそんな彼が大好きだった。愛していた。

　今日、あたしとあやめはいつもよくやるように、裏山に花を摘みにやって来ていた。

　背を向けて花を摘みながら、あやめは照れたように、辰之進様と祝言を上げることになったと言った。

　あたしは足もとをすくわれたような気分だった。震える声を必死で隠しつつ、返事をするので精一杯だった。

　あやめはそんなあたしに気づかずに、辰之進様のことを自分がどれだけ思っているか、祝言のことを聞かされたとき、何と返事をしたか、なんてことを話していた。

　あたしの心の中に暗い炎が翻(ひるがえ)るのを、確かにあたしはそのとき感じていた。

　「あやめはあたしの物を全部取り上げる……いつでも、いつでも！」

　あたしは足もとの草むらに隠れていた石を手に取った。思ったよりも重いそれが、ずしりと現実感を手のひらから伝えてくれる。

　夫婦になってからの夢を語るあやめの姿を見て、あたしの心が悲鳴を上げる。

　「あやめがいなければ、あたしが！」

　下を向いたままのあやめの頭上に、両手で抱えた石を振り上げる。

　「傀儡のくせに!!」

　生卵を壁にぶつけたような音がして、あやめは前のめりに倒れた。声一つ上げなかった。

　荒い息を吐くと、頬や胸に飛んだ血に気がついた。両手に抱えた石がずるりと落ちる。

　後頭部に開いたざくろのような傷口を除けば、あやめはまるで花畑で寝ているみたい。

　木偶人形(でくにんぎょう)に戻るはずのあやめの姿は、しかしいつまでも変わることがなかった。

　「どうしてなの？　あやめは傀儡なのに！」

　ふと頭にある思いがよぎる。とりかえごっこは、まだ続いていたのだろうか、と。

ことの起こりは、いつものとおり玄太だった。村外れに住んでる、村にはめったに来ないのに、たまにやって来ては産まれたばかりの子牛や子馬を買っていくおじさんが、「きっとヨウカイヘンゲの仲間でさぁ、夜中に殺して頭から食っちゃったりしてんだぜ、あの小屋の中でよう」と、ある日言い出したのだ。

確かに大きな人だし、なんか恐い感じもするから、そんなこともあるかもな、なんてふうに僕もちょっぴり思ったけれど、僕の横で玄太の言うことを聞いていた千代ちゃんは、腰に手を当てて玄太にこう言った。

「そんなわけないじゃない」

このひと言から長い長い口げんかが始まった。

天羅

幻視秘抄

そのうちにいつの間にか、次におじさんが来たら三人であとを着けて確かめに行くことになってしまった。僕の意見も聞かずに。

「着いたぞ、見えて来た……」

玄太がささやいた。

もうすっかり暗くなった森の奥に明かりの漏れる戸口が、まるでそこだけ別の世界みたいに闇を切り出している。

「ほんとにオバケだったらどうするの？」

ここに来て少しは不安になったのか、千代ちゃんがそんなことを玄太にたずねる。

「決まってるだろ、オレたちで退治するのさ」

自信たっぷりに答える玄太。そおっと戸板の影から内側をのぞこうとする。僕たちも頭を出して見るけれど、玄太が邪魔でよく見えない。

僕が「玄太、よく見えないよ、どいてよ」と言おうとした瞬間、玄太が悲鳴をあげた！

「うひゃおあああああああぁぁぁぁぁ……！」

そのまま後ろに向かって走り出した玄太は、あっというまに森の中へと消えて行った。悲鳴が長く尾を引く。

玄太がいなくなったので、僕と千代ちゃんはまっすぐ小屋の中が見えるようになった。

小屋の中ではおじさんが、子馬の首筋にかぶりついて、その生き血をものすごい形相ですすっていたのだ。

とにかく逃げなきゃ、そう思った僕は千代ちゃんの肩をつかんできびすを返した。

「あッ！」

なんてこと、千代ちゃんがつまづいた。手を引っ張って起こそうとすると「痛い！」って悲鳴。膝をすりむいてしまっている。

おじさんはもう戸口の所まで来てしまっている。僕は意を決して、千代ちゃんとおじさんのあいだに割り込んで、両手を広げた。

「よ、妖怪め！　千代ちゃんには指一本触れさせるもんか！」

僕たちをにらんだおじさんが、大きく口を開けて、次に太い牙をむくかと思ったら……

「オレが妖怪か！　こりゃおかしい！　わあっはっはあ！」

腹を抱えて笑い出したのだった。

MUSHI-TSUKAI

……結局、おじさんは「蟲使い」と呼ばれる人で、普通では治らないような深いけがなんかを治す人なんだそうだ（千代ちゃんの膝小僧もあっというまに治してくれた）。

僕たち二人は勘違いを謝って、家に帰った。

あの日以来玄太はなんだか前より気弱になったみたいだ。きっと真っ先に悲鳴をあげて逃げ出したことを気にしてるんだと思う。

千代ちゃんはなんだか僕に優しくなったような気がする。気のせいかもしれないけれど。

僕はといえば、たまにおじさんの所に遊びに行くようになった。いつか僕も蟲使いになって、けがや病気で苦しんでる人を助けてあげられるようになるかもしれない。

「冒険」

天羅創成 鬼

～滅びゆく種族～

文・イラスト：井上純弌

天羅の世界の鬼は妖怪変化の類ではなく、独自の文化を持つ亜人種である。彼らは人間に非常に良く似た生物で、人との混血が可能なほどである。
鬼と人間との決定的な違いは、その角と胸にある"無限の霊力を生みだす器官"の存在である。そのため鬼たちは非常に長命であり(250歳から長命なのは1000歳まで生きる)、また神通力という超能力の一種を使うことができる。

鬼たちの宗教

天羅の鬼たちは独自の宗教を持っている。鬼たちは自分たちを《管理者》と呼ぶ。彼らはすべてを創った《イ・イル》という存在に、この世界を「管理するように命じられた」というのだ。《イ・イル》は、鬼たちに《大地の源》と《天と地の力》と《大地の意志》を与え、虚空へと旅だっていったのだそうである。彼らはいまだその帰りを待ち続けているのだ──。

鬼たちに言わせれば人間こそが闖入者であり、彼らの管理すべき大地を奪った悪しき者なのだろう。

滅びゆく種族

鬼たちは差別され、迫害され、狩られる。その多くは誤解からきている。天羅の大多数の人間は、鬼を災厄をもたらす妖怪だと堅く信じている（恐らくは修羅と混同されているのだ）し、鬼たちを理解しようともしない。鬼は忌まわしく、不潔で、理解できない存在……。「だって奴らは人間ですらないんだぜ!?」

鬼たちも迫害される過程で変化せざるをえない。なぜ、いつまでも戻らぬ主を待つ必要がある？　なぜ《大地の意志》に耳を傾ける必要がある？　それらは結局何もしてくれなかったではないか!!

鬼たちは変化していく。それは若い鬼たちに顕著だ。角を折れば（それは想像を越える激痛だが）外見上は人間に近くなる。

《天》の力（心話の能力）を失い、《大地の意志》の声聞こえず、限られた命しか生きられなくなったとしても。

自分が《鬼》でなくなったとしても。

鬼たちは《天と地の力》——神通力が使える。それは鬼の胸に眠る「霊力を無限に生みだす」器官によるものだ。その能力は、精神感応から、金剛機のように超高速機動を行なうものまでさまざまである。

鬼は強い。それが逆に彼らを滅ぼす一端になっている。強いがゆえに、天羅を愛するがゆえに、家族、一族を愛するがゆえに死を選ぶ。優しいがゆえに滅び行く種族。それが天羅の鬼である。

狩られ、追われ、村を燃され、家族を殺され……しかし、それでも彼らは執拗に《鬼》であることにこだわり続ける。なぜ信仰を捨ない？　自分本意に生きていけない？

《鬼》であり続けることより、ずっとずっと簡単だろうに!!

彼らには《声》が聞こえるのだ。大地の声、同族の声、人間たちによって歪められていく世界の声が。

強いことが、人間より優れていることこそが彼らを滅びに導いていく。だから戦ってしまう。だから殺し合ってしまう。《鬼》であることが、《鬼》として生きて行くことが彼らの滅びの宿命、そのものなのだ。

永遠に神を待ち続ける、誇り高き種族。

恐らく鬼は滅び去るだろう。誇り高き種族ゆえに、心優しき種族ゆえに……。

天羅創成 法師

文・イラスト：井上純弌

～法は仏の道なり、業は人の道なり～

実は天羅万象のテストプレイで、もっとも人気がないのが、この法師という存在だ。だいたい、ＲＰＧの主プレイヤーたる中高校生の多くは、宗教を嫌ってるとすらいえる。理由は各々に違うだろうが、実は今に始まった傾向ではない。

古来より日本人にとっての宗教とは、集団で心酔し盲目的に崇拝するか、まったくいいかげんか(お盆には帰郷し、正月には神社にお参りする)どちらか両極端でしかなかった。日本人とは基本的に、宗教などどうでもいい人種なのだなと、僕自身は解釈している。

例えば、お教を哲学書として(実はそうなんだけど) 研究するとか、ブッダの生き方を考えようとかいう僧侶は、いないわけではないが、日本では極端に少ない。みんな哲学書や説話の“一部分”だけを、意味も考えずありがたがって唱えてるだけだ。

むろん、物事には必ず例外がある。

人間が生きるとはなにか？、人の業とはなにか？それを仏法という側面でとらえようとする人間こそ、プレイヤー演じるところの天羅世界の法師なのだ。

天羅には三つの宗教がある。神宮家を中心とする神道、鬼たちの信じるイ・イル、そして仏教。仏教も大きく分けて三つの宗派によって成っている。

まず一つ目は、天羅史上最古であり最大の宗派“鳳凰宗”である。

鳳凰宗は天羅の各地に多くの寺院を持つ、権威主義の政治色の強い宗派である。天羅影の支配者“神宮家”とも深く結びついているとも噂され、その神宮家の本拠地神楽の国の隣、奉加の国に総本山を構えている。奉加の国は僧兵で武装し、ヨロイ、金剛機まで備えている、完全な宗教独立国家である。代々大僧正によって統治されており、現在の大僧正は藻生堂按という。

もう一つは墨仙宗と呼ばれる宗派である。アウトサイダー的な宗派で、僧は基本的に寺を持つことはない。

教義はただ一つ、己の解脱である。方法は自由、解脱を目指す以外は戒律もない。かなり特殊な宗派である。

現世にも来世にも仏から“与えられる”救いなどはなく、あるのは己の生き方だけ、というストイックな考え方は民衆には非常に受けが悪い。己を鍛える者が多く、武闘派の僧が多いのも特徴だ。

最後は最新の宗派、 明蓮宗。新興の宗派であり、「南無明蓮護奉」とお題目を唱えることによって死後の救済が約束されるというのが教義である。そのわかりやすさゆえ庶民を中心に広く受け入れられている。

以上三つの宗派のほかに小さい宗派は無数に存在する。

墨仙宗にとって肉体は“器”でしかない。よって墨仙の僧の世界は天羅唯一、差別意識のない世界だ。女も子供も鬼や金剛機ですら“解脱を目指す”なら墨仙の僧になれる。よって女性も尼ではなく法師と呼ばれる。服装にも男女の間に違いはない。傀儡や鬼が身を隠すために墨仙の僧になる(仮装する？)のは、よくある話だろう。彼ら墨仙の僧にとって輪廻よりの解脱に比べればそんなことは些細なことなのだ。

また、僧の一部は修業により“法術”という法力を行使できるようになる。けがや病気の治療をしたり、《珠》に気を封じたり、死者の念を《明鏡》に封じたり……摩訶不思議なその力はこの戦乱の世天羅に、御仏の実在を具体的に示せる唯一の手段である。

しかし、強力な法術を駆使しても、世には“力”では切れぬものがあることを法師たちはみな知っている。力ではどうにもできないもの、金だろうが、権力だろうが、武力だろうが“力”では動かせえぬもの。　己の心のうちにあるもの。

………己の業

墨は何千年でもその色を失わない。洗えど洗えど、その色をますます意識するようになるだけ。業もまた然り。墨仙宗とは皮肉なことはだ。

しかし、解脱が悠久の時の向こうにあろうとも、歩まねば悟れぬ。実感はできぬ。己が大海に浮かぶ木の葉とて、動くしかない。さまようしかない。命尽きるかぎり。

そしてある日、気づくのかも知れない。

それが法だと。

天羅 幻視秘抄 ONI

「運命」

文：渡辺ヒロシ
イラスト：見城鍵也

炎はますます燃え上がり、集落全体を包んでゆく。そこで望まぬ死を迎えさせられた鬼たちと共に。

炎の中立つは男。異形の体が彼をサムライだと知らせる。

男が紅に光る刀を一振りする。刃は血に濡れているのでも、炎を映しているのでもなく、刀身それ自体が淡く光を放っている。

対峙するは鬼。けがをしているのか、左の肩を押さえながら、男に向かって叫ぶ。

「貴様……よくも！　よくもやってくれた！　このようなことが平気で行なえる、貴様こそ鬼と呼ばれるにふさわしい！」

鬼の叫びに男はにやりと、そして高笑いを上げる。心の底から、楽しそうに。

「おうよ！　それこそがオレの二つ名！　一つ目の戦鬼、独眼鬼の砕九郎たぁオレのことさ！」

鬼が一瞬体を沈みこませたかと思うと、砕九郎へ向かって突進して来る。尋常では考えられぬその速さは、鬼の神通力ゆえに可能な動きである。

何者にも捕らえることは無理かと思うほどのその速度に、しかしサムライは反応した。鬼の拳を体を反らして避けつつ、刃をたたきこもうとする。鬼の方も紙一重で刀をかわし、身を沈める。身を沈めたその姿勢から、刈るように出された鬼の蹴りを、砕九郎が後ろへ飛びすさって避け、刀を振り降ろすと、鬼がその刀身を掌底で脇へ流す。

双方距離を取り、にらみ合う一瞬。

「やるじゃあねぇか……」

「貴様を葬るまでは倒れん、死んで行った仲間のためにもな」

「安心して死にな、お前ェらの骸は無駄にゃしねぇさ」

さらに数合の打ち合い、ついに鬼の掌打が、サムライの顎を捕らえた！　渾身の力を込め、手のひらに自らの神通力のすべてを乗せる。

「ぬがあああっ！」

砕九郎が吹き飛び、燃え盛る家の中へとたたきこまれる。木の爆ぜる音と共に、家屋が崩れてゆく。

鬼は膝をつき、何かを詰まらせたような声を立てて血の塊を吐く。神通力ゆえに可能であった尋常を越えた動きは、確実に彼の体に傷を刻みこんでいた。

「みな……かたきは……」

言いつつ、崩れた家の方へと上げた顔が驚愕を写す。炎をまとい、男が矢のような勢いで飛び出して来たのだ！

「手前ェ！　良くやったあっ!!」

どこか楽しげな叫びを上げながら突きかかって来る男を迎えようと立ち上がったが、ほんの少しだけ間に合わなかった。サムライが体ごとぶつかって来る。真紅の刀身が鬼の腹へと食い込み、背中へ抜ける。そのまま砕九郎は両手に力を込め、刀を斜め下に振り降ろした。脇腹が裂かれ、どさりと血混じりのはらわたが足もとへ落ちる。

自らのはらわたの上に膝を突き、両手を落とす鬼。ゆっくりと顔を上げると、サムライと目が合うが、景色は急速に薄れてゆく。

「なにゆえ……われわれが……狩られ、殺されねばならぬというのだ……たかが、鬼だと言うだけで……ッ！」

「けッ、決まってンじゃねェか」

折れた奥歯を吐き捨て、刀の血を振り落として、独眼鬼の砕九郎は物言わぬ骸に成り果てた鬼へと答えた。

「手前ェらが、人じゃあねぇからさ」

「成仏」

総本山より高瀬国へ出向く途中、一つの峠を越えたところで、彼はその光景にであった。

野盗にでも襲われたのであろうその村は、いまだ傷痕生々しく、屍はそこかしこに無残に横たわり、家々も細く煙を立ち昇らせている。女の姿が屍の中にあまり見受けられないのは、野盗どもの戦利品としてかどわかされていったからであろうか。

「むごいことよ。経を唱えるくらいしか、してやれることはないが……せめて、成仏召されよ」

仏に仕える身の性か、自然と数珠を握った彼の手は胸の前に掲げられ、目を閉じれば口からは骨の髄まで刻み込まれた経文が滑らかに流れ出す。

仁王立ちになり、一心に念仏を唱えている彼の僧衣の裾を引く者があった。不意に祈りの世界から現実へと引き戻された彼が首を巡らせれば、そこに立つのは年のころ五、六歳ほどの少年。煙に巻かれたらしく、陽に焼けた肌も、もともとあまりきれいではなさそうな衣もすすで真っ黒に汚れている。

子供は小首を傾げるようにして僧の顔を見つめていたが、ついにおずおずと口を開いた。

「お坊さん、人は死んだらどこに行くの？」

子供の真摯な眼差しに捕らえられ、僧は一瞬考え込む。

「そうだなあ、昔、私が師匠の双月様に同じことを尋ねた折りには、双月様はこう言っておられたよ」

前置いてから、僧は言葉を選びつつ、答を返す。

「生前に功徳を積み、業のすべてを落とすれば、人は大悟し、死んだのちには仏様となって、苦しみのない新しい生を送ることになる。もしも悪行を重ね、業深い生であったのならば、再び人として転生し、大悟することを目指して新しい命を生きることになる」

やはり子供には難しいのか、「ふうん」と気のない相槌を打ってから、さらに問いかける。

「あのね、おいらのお父ちゃんも、お母ちゃんも、怖いおじさんたちに殺されちゃったんだ。いつかまた、お父ちゃんやお母ちゃんに会えるのかなあ？」

やはり考えてから、僧は答える。

「君のご両親も、君も、功徳を積んでいたのなら天上で共に、安らかに暮らせるのであろうなあ。もしもそうでなかったとしても、数限りない輪廻転生の中、いつしか再びあいまみえることもあるのだろうよ」

話し終えてから、申し訳なさそうに付け加える。

「しかし、そのときには前世のことなど何一つおぼえてはおらぬのが道理。はたして出会えたとして、親だ子だとわかり合えるかどうかは定かではないがな」

僧のことばはやはり子供にはわかりにくかったらしく、しばらく宙に視線を泳がせながらいろいろと考えていた風だったが、やがて納得がいったように大きく一回うなずいてから、僧に向けてこう答えた。

「おじさんの言っていることは難しくって良くわかんなかったけどさ……とにかく、お父ちゃんとも、お母ちゃんとも、またいつか会えるんでしょ!? それなら良かった！　ありがとう、おじちゃん!!」

にっこりと子供は満面の笑みを浮かべたかと思うと、その姿はかき消すようにして消えてゆく。

最後の一魂が成仏し、焼け跡となった村に静寂が戻る。

天羅創成

おうじゅとう 珠刀 ～力の象徴～

文・イラスト：井上純弌

珠 オウジュ

天羅世界のイラストに多く描かれる、引き金のついたつかを持つ奇妙な刀。これは《珠刀》という天羅特有の刀である。気の力を封入することのできる貴金属《珠》、この《珠》を爆発させ、気の力を刀身に流すことによって、致命的なダメージを敵に与える……まさしく必殺の兵器なのだが、刀身や機械部分の多くを占める《ヒイロ金》という金属が非常に希少なのと、《珠》そのものが高価であるため、誰でも手にできるというわけではない。

　しかし、それゆえに《珠刀》は常に力の象徴としてある。そしてそれを握る者には、相応の敬意と称賛、嫉妬と羨望のドラマが付きまとうことになる。

《ヒイロ金》は鉄などの日本刀に使用されてきたどの金属より《気》の伝導性にすぐれている。
また強度にもすぐれ、折れず、曲がらず、よく斬れるという、刀には理想的な金属なのだが、いかんせん希少な金属なので、新しい《珠刀》ほどほかの金属の占める割合が多い。
　刀に限らず《ヒイロ金》はヨロイや金剛機などの神経系や装甲に使用されたり、その用途は幅広い。特に最近は、長引く戦乱のため、常にその絶対量が不足しており、《ヒイロ金》の鉱脈を巡って戦乱が起こるという、本末転倒なことも頻繁に起きている。
《ヒイロ金》と《珠》はこの戦国の世で国力を決める、重要な要素となっているのだ。

気を封入された《珠》は、簡単な刻印によって爆発させることができる。火薬のない天羅世界において、大砲から小銃に至るまで（爆発する《式》を除いて）、すべての火器はこの《珠》の爆発力をを利用したものだ。しかしながら《珠》も《ヒイロ金》と同じ希少な貴金属である。ゆえに《珠》を使用した兵器を任せられる兵士たちは、天羅の世界では選ばれた存在なのだ。
戦国日本における鉄砲足軽のことを、天羅では《珠兵》という。彼らは身分的には足軽であるが、武士に次ぐ身分となっている（遠くから狙うのは卑怯という武士特有の矜持があるため、銃で戦う武士は“いないことになっている”）。
　いちおうその身分は世襲制とはなっているものの、銃さえ持っていれば平民からの下剋上が可能な世界……《珠兵》には特別な誇りがある。純粋に技量追及によって成り立つ、苛酷な世界で今日まで生きてきたという、“事実”が語る誇りである。

天羅の世界における特殊な武装は、その使い手自身を語る。戦乱の世であるがゆえに、他人と違う兵器を持つことは、そのことこそが生き様であり、死に様につながる。《珠》や《ヒイロ金》は高価であろうが、刃の上に乗せて戦うのはたった一つの己の命。それを支えるのは、尽き果てぬ己の矜持か？　断っても切れぬ因縁か？
　戦うなら己の納得のいく手段で、死ぬのなら己の力量の際で。

　得物はその使い手自身を語る。

　そして、たとえ同じ刀鍛冶が打ったとて、同じ刀が二本と出来ようはずはないのだ。

妖 天羅創成

あやかし

～存在せぬ存在～

妖とは、人には理解できないもの、実態がわからない"なにか"の総称である。つまり"なにか"の実態がわかった時点で、それは妖でなくなる。

しかし、天羅万象はあくまでTRPGであるから、その"なにか"にまで論理的な説明を付けねばならない。よって便宜上、天羅の妖は、以下の四つに分類する。

変化は生物が長く生き、別な"なにか"に変わったもの。

憑喪神は無生物が"なにか"に変わってしまったもの。

妖怪は怨念や霊が"なにか"の形をなしたもの。

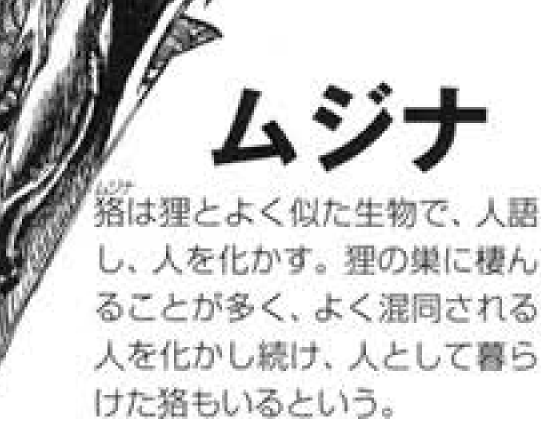
荒霊は以上みっつのどれにも当てはまらない"なにか"である。

何度もいうがこの分類は便宜上のものにすぎない。"なにか"の正体がわかれば、それは妖ではないのだ。

変化
へんげ

ムジナ

狢は狸とよく似た生物で、人語を解し、人を化かす。狸の巣に棲んでいることが多く、よく混同される。村人を化かし続け、人として暮らし続けた狢もいるという。



憑喪神

つくもがみ

妖刀“火車”は、東州美草の国、真田家のヨロイ太刀“罔象”であった。戦の最中にヨロイ“魂込”が美都姫ともども発狂、父の真田圭太を惨殺、出奔した。以後刀だけが亡霊のように戦場に現れ、その刀身は明鏡の魂を喰うといわれる。

妖怪

妖怪“鬼道”は鬼たちの霊の集合体のようなものである。人間に滅ぼされた鬼の集落付近に現れる。

鬼道は通りかかる人間たちに夢を見させる。夢の中でその人間が他人から迫害され、追われた記憶を呼び覚ますのだ。その背負った業の悲しみに負けたものは、また鬼道の一部になってしまう。

鬼道は道がゆえに、その場所を離れても逃れることはできない。その夢は金剛機や傀儡すら、捕えるという。

あらたま

荒霊

「殺愛（ころしあい）」

文：渡辺ヒロシ
イラスト：見城健也

ここに来るまでに、八年かかった。

剣の腕を磨き、普通の女としての生き方を捨ててサムライを体に打ち、さらに珠刀を造ることのできる刀鍛冶を求めて諸国を旅した。

すべてはあの娘を殺すために選んだこと。修羅道に落ちたあたしの妹、桂山の名代、桂美咲。父と母の、かたき。

八年ぶりの再会は、世の姉と妹のようにはいかなかった。

「美月お姉様、まさか生きていらしたとは思いませんでしたわ。あたしの前に戻って来ようともね」

「でも、八年かかったわ。ここに来ることができるだけの力を手に入れるまでにね」

言いながらも、「身裂きの舞い」と名高いその動きをあたしは体を振ってかわす。美咲は甲蟲の糸を操る。熟練した蟲使いが手を加えたその糸は、軽く、しなやかでいて強固。

使い手が繰れば触れるものすべてを両断する恐ろしい武器となるのだ。

逃げながら打ち込んだ短刀は、ほんの少しだけ翻された右手の動きに合わせて、美咲のはるか手前でまっぷたつに落ちる。

「お姉様、逃げてばかりではあたしに傷を負わせることなんてできませんわよ」

あたしはその瞬間、心底ぞっとした。あの子は口の端に笑みを浮かべている！　その表情を見てあたしは本当に理解したのだ。妹は修羅だということ、美咲はもうあたしの愛した美咲ではなく、その魂は業深きゆえに砕けてしまっていること、彼女を救うためには、その命を断つ以外ないことを。

「……美咲、あたしが甘かったのね」

動きを止めてゆっくりと珠刀を抜くあたしのまわりを、美咲の糸が踊る。

髪のひと房を宙に飛ばし、頬を薄く削り、着物をはぎ取ってゆく。

あの子はあたしをいたぶるつもりなのだ。

息を整え、サムライ化する。美咲がくすくすと楽しそうな声を上げる。

「ああら、お姉様ったら、サムライなんか入れてらしたのね。女を捨ててまで、力が欲しかったのかしら？」

「お父様とお母様のかたきを討つためだけに、生き延びてきたのよ。あなたを殺すためだけにね。それができるのなら……修羅にだってなってやる……！」

《式》によって高められた動きで、あたしは一歩前に踏み込んだ。その勢いに合わせて、右手に握った珠刀を振るう。

「ごめんなさい、まだあたしのほうが疾いわ、お姉様！」

美咲の動きは、あたしのサムライを凌駕していた。その右手が円を描くと、糸はあたしの刀と、右手に巻き付いた。そのまま彼女が腕を引き抜くと、刀と、右肘から先が、ぶつ切りの断片となって地に落ちた。

あたしの計画のとおりだった。もとより無傷で済むとは思っていない。残った左腕を振り、鉄甲をはめたこぶしを美咲の脇腹に押し当てる。

「殺った！」

あたしがこぶしに力を込めると、手甲に組み込まれた八つの《珠》が同時に砕けた！

最後の瞬間、美咲は避けなかった。

倒れてゆく美咲は、あのころのほほ笑みを見せながら、死んだ。

苦労して左手だけで彼女を担ぐと、あたしは天守を降りることにした。いつまでもつかはわからないけれど、死ぬ時までは、あたしたちは昔のようにいられるはずだから。

天羅 幻視秘抄

「封印」

「開けちゃいけないよ」
半ば壊れたほこらの扉に手をかけると、背中にそんな声が投げつけられた。
振り向くと、いつからいたのだろう。道祖神の頭に腰掛けて、足をぶらぶらと振っている少女が一人、こちらを見つめている。
「なぜだい？」
彼は努めて冷静に、そう問いかける。少女がいたずらっぽいくすくす笑いをしながら、彼に返答する。
「あのねえ、そこは、あやしのもののすみかなんだって。里のみんなが言ってるわ。あなた、知らないの？」
「へえ、そうだったのか。そいつは初耳だ。で、どんな化け物が中に棲んでるんだい？」

彼が大げさに驚いたふうの顔をしながらそう言うと、少女は信じられない、といった感じで天を仰いだ。
「あなた、運がいいわ。知らずにそこの扉を開けていたら、頭から丸かじりよ。その中にいるあやかしは、数百年を経て魂を得た狐神で、人間の生き血が大好物。さらわれた子供の生首やらどくろやら、そのほこらの奥にたんと転がってるって、そういううわさなんだから！　それにそれに……」
ほおっておけばいくらでもでてくる気配の「ほこらの化け物のうわさ」に苦笑しながら、彼は少女に向かって、こう言った。
「尻尾」
「え？」
予想外のことばだったらしく、少女が大きな目をぱちくりさせた。ぶらぶらさせていた足の動きが止まる。
頭をかきながら、彼がもう一度言い直す。
「だから、尻尾。見えてるぜ」
少女の顔からざっと血の気が引いた。「うそ!?」と言って、少女が自分のおしりに振り返る。
ふさふさの毛並み。
沈黙。
ばねでも付いているかのように勢い良く、少女が着物のおしりからちょこんとはみ出した尻尾を引き寄せる。そうして、おそるおそる彼の方を向き、ぼそりと、
「……いつから？」
ひと言。
「……最初ッから」
みるみるうちに少女の顔が赤くなってゆく。飛び跳ねるようにして道祖神の上に立ち、少女がわめいた。
「あたしを……あたしをバカにしてたっていうのね！　ううう一、許さないからね！」
別にそんなつもりはないんだけどなぁ、と思いながら、彼はそのことを口にはしない。

「今日のトコロはあたしの負けのようね！　だけどね、おぼえてらっしゃい。いつか必ず、仕返ししてやるからねッ！」
少女はそう吐き捨てると、後ろの茂みに飛び込んだ。
一拍おいて、がさがさ、と茂みの中から子狐が飛び出してくる。
すっ飛んでいく子狐の尻尾を見ながら、彼はもう一度苦笑して、頭をくしゃくしゃと掻いた。
「いたずら子狐をちょいと脅かしてくれという話だったが……はて、これでいいのかね……」
つぶやきながら村へと戻る彼は、これから数か月にわたって彼女のいたずらに悩まされることになるのだが、今はまだ、そのことを知らない。

TENRA BAN-SHOW

天羅万象

システムからのアプローチ;

復活の雄叫び編 妖とその活用(第22回*)

遠藤卓司(以下、遠藤):「復活だよ」
神宮家のラン(以下、ラン):「復活だね」
遠藤:「妖もな」
ラン:「妖もだね」
遠藤:「さて、『天羅創成』RPGマガジン掲載時からの読者には、お久しぶり。ここで初めてみるあなたには、初めまして。システムデザイン担当の遠藤卓司です」
ラン:「天羅のアイドル、ランちゃんでっす」
遠藤:「アイドル? この幼児体型が?」(SE:ゴバァ)
遠藤:「ぐはっ、お、おにーさんは、明鏡をそんな風に使うのは感心しないな」
ラン:「ふんっ、最近はやりなんだぞ」
遠藤:「どこでだ。マイナー系か?」
ラン:「本題いくぞっ、本題」
遠藤:「ああ、そうしよう。今回は、妖だ。実はビジュアルブックに掲載される予定のルールであった」
ラン:「ふぅん、そうなんだ」
遠藤:「間に合わなかったので、掲載されなかったのだが、それがこのように陽の目を見る日がこようとは、至福の限りというものだ」
ラン:「支持してくれるファンのみんなに感謝だね」
遠藤:「そだな」
ラン:「しっかし、あれだね。あいかわらず、バランス考えてないね。妖作成ルール。ちょっと強くなりすぎない?」
遠藤:「うむ。考えていないし、強いな」
ラン:「なして」
遠藤:「めんどくさいから……もとい、妖は殺されるためのモンスターじゃないからだ」
ラン:「殺されるためじゃない? でも殺せるよ」
遠藤:「殺されるじゃ駄目なんだよ。滅ぼさなきゃいけないんだ。そうしなきゃ、妖はホントに死なない」
ラン:「死亡ゲージうまりゃ死ぬじゃん」
遠藤:「そういう問題じゃない!」(SE:ドン)
ラン:「な、なによぉ。おこんなくてもいいじゃない」
遠藤:「あ、ああ。すまない。……確かに死亡ゲージが埋まれば死ぬ。しょうがない、そういうルールだからね。だが、NPC(人間)が、死亡ゲージを埋めるには、それなりの理由があるように、妖の死亡ゲージもそれなりの理由を持って埋めてもらわなければならない」
ラン:「そりゃま、そうだけど」
遠藤:「わかるか? PCを殺すためとか、苦しませるために、死亡ゲージを埋める妖はいないんだよ」
ラン:「ほへ〜。じゃ、妖は絶対に死なないんだ」
遠藤:「だから、滅ぼすって、さっきからいってるじゃんか」
ラン:「じゃさ、じゃさ。どういう時に、妖の死亡ゲージは埋まるの?」
遠藤:「それは、各マスターにお任せしよう」
ラン:「オイオイ。そんなで、さっきみたいなこと言うか〜」
遠藤:「だって、妖の設定によるんだよ。死亡ゲージ埋めるタイミングなんてのは」
ラン:「でもさぁ」
遠藤:「ん〜〜、わかった。言い直そう。妖が滅びるのは、NPCの死亡と一緒で、妖を表現するための手段と捕らえてほしい。ここで死んだほうがかっこいいから、というような理由なら滅んでしまってかまわないが、もう少しがんばってほしいとか、PCを追いつめたいとか、そういう理由では滅んでもらいたくない」
ラン:「まだよくわかんないなぁ。結局、妖を使って妖怪退治物のシナリオは造れるわけ?」
遠藤:「造れるとは思うよ。ただ、ファンタジーRPGのモンスター退治物のように、見つけて殺してチャンチャンってシナリオは造れないね」
ラン:「ほほう」
遠藤:「妖を単純に殺すだけではだめなんだ。そうやって殺した妖は、いつか復活してくる」
ラン:「いつかっていつよ」
遠藤:「いつかさ、1、2日かもしれないし、十年、百年かもしれない。シナリオとしてはそこで終わりかもしれないが、復活してくる。必ずね」
ラン:「あれが、最後の一匹とは思えない」
遠藤:「うむ。あなたが、明日見る太陽は、あの妖かもしれないのですって感じだ」
ラン:「ふっる〜〜ウ○ト○Q?」
遠藤:「よく知ってるな」
ラン:「有名じゃん」
遠藤:「そうか? ま、とにかく妖退治物のシナリオを組むときは、殺しておしまいのエンディングは、ハッピーエンドだが、トゥルーエンドじゃない。そういうシナリオを組んでもらいたいものだね」
ラン:「また、無茶なことを言う。そんなだから、シナリオ造りにくいって言われるんだぞ」
遠藤:「ぐっ。い、言い返せん。まぁ、とにかく、妖はシナリオの中間地点に登場するんじゃなくて、その全体を支配するんだってことだ。ここさえ押さえてくれればいいのさ」
ラン:「ん、わかった」
遠藤:「よし。んじゃ、まとめに入るか」
ラン:「ま、とにかく最初のサプリメントが出たねぇ」
遠藤:「うむ。めでたいことだ。今回は、連載に使用したものをまとめて+αしたわけだが、次回はぜひ書き下ろしていきたいものだね」
ラン:「ネタあるんかい」
遠藤:「そだな〜。宗内州の国紹介サプリとか名代総覧とか考えてるんだけどね」
ラン:「ま、これの売り上げしだいやね」
遠藤:「そ、そうだね。ハハ(また言いにくいことを)、こういうのが見たいとか、ここはどうなってるんだとかの読者さまのリアクション待ちということだ」
ラン:「ご意見、ご希望、お待ちしてます。ってとこね」
遠藤:「うむ。それではサラバ」
ラン:「サラバなんて縁起が悪いわね。せめて、またネぐらいにしときさいよ」
遠藤:「ん、ではまた、遠藤卓司でした」
ラン:「ランちゃんでした。またネ」

***編注;** RPGマガジンでは《天羅》の各項目ごとにシステムデザイナーの遠藤氏に、コンセプトの解説をお願いしていた。今回、追加ルールである妖を収録するにあたって、対応する「システムからのアプローチ」を作ってみた次第。

第3部 妖

天羅万象サプリメント

TENRA BAN-SHOW SUPPLEMENT

“天羅万象RPG”は基本的に人と人のぶつかりあいのゲームである。『天羅万象ビジュアルブック』では主に紙幅の都合で、モンスター的な存在や野獣のたぐいは紹介されることはなかった。

《妖》は一見ほかのRPGに見られるモンスターのようではあるが、《天羅》ならではの独特の背景を持ち、また特別な扱いが必要な存在である。

また、追加データとして各種“薬物”のデータ、そして“ルールサマリー”の最新版（VER.2.1）、質問への回答集、正誤表などを収録した。

妖 110

妖作成ルール 118

天羅万象基本システム 121

天羅万象質問箱 124

天羅万象正誤表 126

薬物 127

妖 AYAKASHI

「突いたって、斬ったって死な

妖（あやかし）とは？

妖とは、大自然の霊気と大量の怨念が、闇の中に練り集まって生じたモノです。妖は種族などのある生物ではなく、偶然と悲しみと憎しみを織り集めたモノなのです。

本項では、便宜上の分類として、変化、憑喪神（九十九神）、妖怪、そして荒霊の4つに妖を分けています。この分類は、性質や等級などによるものではなく、発生の状況やもとになったのモノなどによる分類です。

変化（へんげ）

変化とは、長く生きすぎて妖となった生物のことです。例えば、猫が百年も生きることはありません。もし、百年もの間、生きている猫がいたとしたら、それは猫ではないのです。

もっとも、長く生きることだけが、変化を産む原因ではありません。

妖狐（ようこ）

霊力の強い孤が、数百年の間、月光や人々の祈りにさらされて、妖力を得るに至ったのが、妖狐だ。荼枳尼天（だきにてん）の使いであるとされ、お稲荷さまと親しまれる神である。人を喰らうことより、化かして驚かすことを好んでおり、化かした時の人の慌てぶりを見るのが無上の楽しみである。

体：5　敏：7　覚：6　知：6　心：7
共：4
<観察>初級<追跡>初級<白兵戦闘>中級
【妖力】読心：4　幻覚：5　変身：4
【弱点】《禁忌：楽しみを交えずに殺すこと（中級）》《苦手：犬（上級）》《目的：人を化かすこと（中級）》

猫又（ねこまた）

長く生きた猫は、尾が二股に分かれ、怪異を為し、人に災いをもたらすという。また老婆に化けるとか、とりつくとかいうお話もよく聞かれる。猫又がどのような妖にせよ、猫は恨みを忘れないので、気を付けることだ。

体：2　敏：5　覚：7　知：8　心：4
共：6
<運動>中級<事情通>中級
<追跡>初級<白兵戦闘>中級
【妖力】憑依：3　変身：3
【弱点】《禁忌：遊ばないこと（中級）》《目的：恨みを晴らす（上級）》

ねぇ！　妖ってのはな……死ねねぇんだよ」

大妖　雷獣夜

土蜘蛛

年月を経た蜘蛛の変化である。見てのとおりの巨大さで、虫では足りなくなり、牛馬や人間を襲うようになったというわけだ。この巨大な妖は、いったん現れると猛烈な勢いで食事を取るため、大変目立ち、すぐに始末のための軍隊が編成されることになる。なお、子供は単なる蜘蛛で土蜘蛛ではない。踏み潰さぬように注意すること。

体：8　敏：11　覚：7　知：2　心：4
共：0
＜追跡＞中級＜白兵戦闘＞上級
【妖力】変身：3　生体武器：5　投射（継続）：3（毒）
【弱点】《目的：飢えを満たす（上級）》《禁忌：子供を失う（上級）》《苦手：火（初級）》

巨蟒（おろち）

巨大な蛇の変化である。蛇の不気味さ（異論のある方もいるだろうが）については、説明する必要はあるまい。それが単純に巨大なのである。地域によっては逆に神聖視され、夜刀（やと）の神と呼ばれ人々の信仰を集めている。夜刀の神は、いわゆる祟り神であり、その領域を侵すと取り殺されるという。無知な旅人などが、夜刀の神の領域を犯さぬように、夜刀の神の住む山には、結界が張ってある。

体：15　敏：8　覚：4　知：2　心：3　共：0
＜運動＞中級＜隠身＞中級＜格闘戦闘＞上級
＜観察＞中級
【妖力】畏怖：5　再生：5　生体武器：5
【弱点】《苦手：たばこのヤニ（上級）》
《目的：酒を飲む（中級）》
《目的：住みかを守る（上級）》

野槌

野槌は、蟲に取りつかれ、蟲と化した蟲使いのれの果てと言われている。人の亡骸に潜り込んで自在に動かすと言われる。

体：3　敏：4　覚：6　知：1　心：5
共：0
＜運動＞中級＜隠身＞初級
＜格闘戦闘＞中級＜観察＞中級
【妖力】再生：10　生体武器（爪）：6
生体武器（爪2）：4　投射（瞬間）：4（雷）
投射（継続）：2（酸）　憑依：6

憑喪神

つくもがみ

古の書によると捨てられた道具が100年を経ると精霊が宿り、憑喪神(九十九神)と呼ばれる妖になるという。つまり、無生物の変化である。人々は、憑喪神が生まれないように、さまざまな道具供養を行なう。言うまでもないことだが、古いと憑喪神となるわけではない。常にそれなりの理由があるのだ。

大太法師(ダイダラボッチ)

ヨロイの憑喪神である。長い時間を経たせいか、ヨロイそれ自体はボロボロである。しかし、それを補うように生体部分が成長し、すでに筋肉や顔のような物まで生まれようとしている。
単純なバケモノではないらしく、治水工事を手伝った、人々が越えるのを難儀していた山を削り取って道を開いた、といった善行も各地の伝承に残されている。妖と化したヨロイでも、明 鏡内にはヨロイ乗りが生存しているのだろうか?

体:11　敏:11　覚:9　知:0　心:1　共:3
<格闘戦闘>中級<白兵戦闘>上級
【装備】半ばで折れたヨロイ太刀(+5)
【妖力】再生:5
【弱点】《目的:ヨロイ乗りを守る(上級)》
《禁忌:ヨロイ乗りを失う(特級)》

鵺(ぬえ)

鵺とは、なんだかよくわからないことの比喩表現として使われる。そう、鵺とはなんだかよくわからない妖の代名詞でもあるのだ。ここでは、一例として永劫化した《式》の鵺を紹介する。《式》は元来、陰陽師のイメージによって作られるものであるから、現住生物に似ているようで、どこか似ていないよくわからないモノ、まさしく鵺的なモノになるわけだ。この鵺は、永劫化した《式》である。永劫化は、《心珠》に《式》を打つことで行われるが、《式》の能力が低いと逆に《心珠》に乗っ取られ、妖の仲間入りを果たすことになる。

まほろばの村

体：0　敏：0　覚：0　知：11
心：11　共：8
＜事情通＞初級
【妖力】幻覚：10
【弱点】
《目的：少女の夢を守る（上級）》

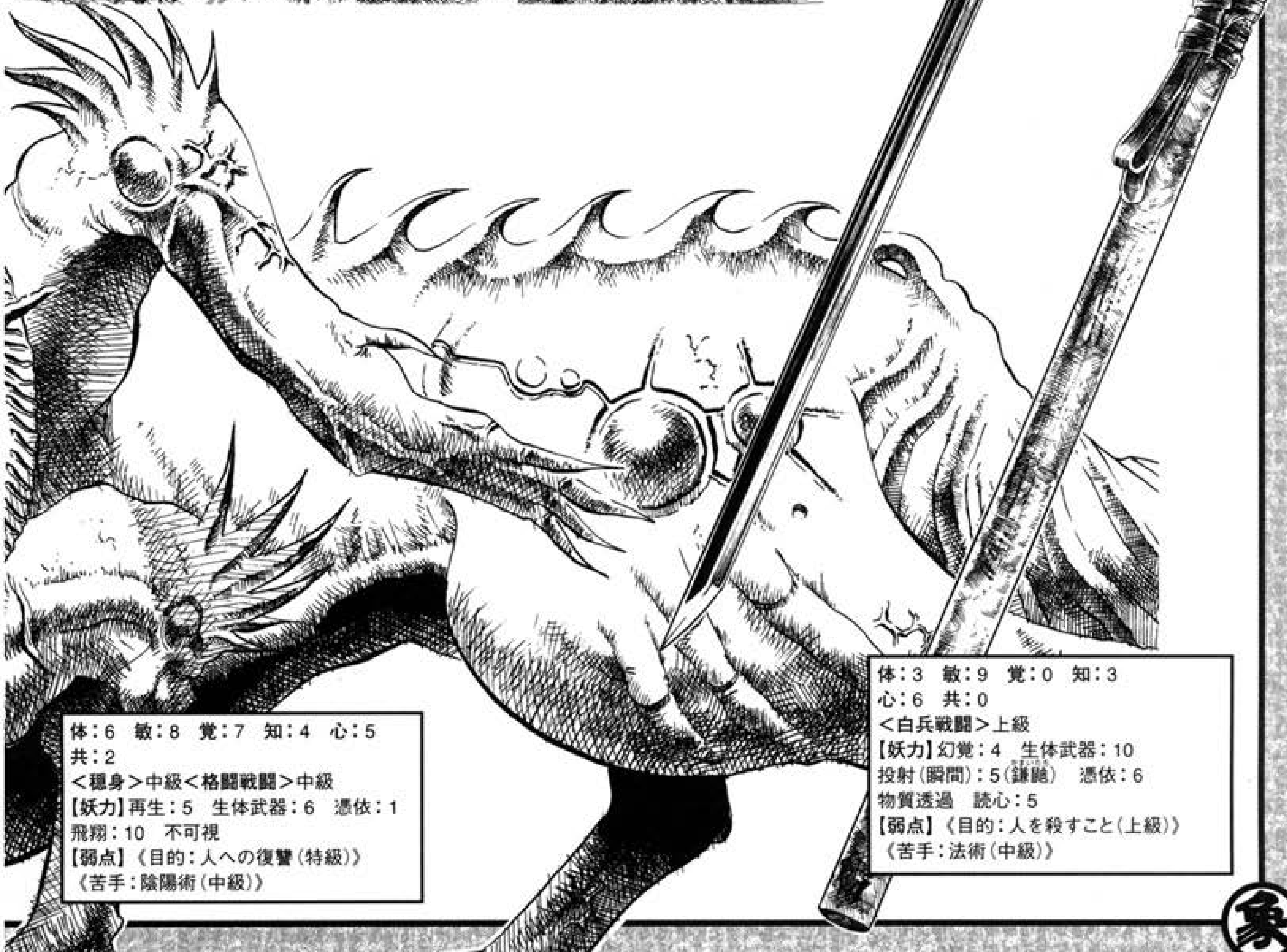
まほろばの村。それは、この地獄のような天羅にあるといわれる理想境である。そこでは、時は常に留まり、遠い昔に失ったいとしい人と共に暮らすことができるという。……それは、遠い昔に死んだ一人の少女の描いた夢の世界である。「みんな一緒で平和に生きることにできる世界」少女の望んだこの世の地獄は、今日も新しい住人を待っている。

妖刀鎌風

若くして名手と呼ばれた刀鍛冶が、恨みの念を込めて打ち上げた刀。それが『鎌風』と呼ばれる妖刀である。その切れ味は、風を斬るといわれ、実際に三間先の人間を両断したこともあるという。また壁を斬らずに壁の向こうを斬ったなどその逸話は多い。

名工と呼ばれる人々の刀には、殺しの道具以上の何かがある。それは、研ぎ澄まされた機能美なのかもしれないが、それだけではないのだ。

もし、人を斬ることだけが、刀の目的であるとするなら、『鎌風』こそ真の刀なのだろう。



体：6　敏：8　覚：7　知：4　心：5
共：2
＜穏身＞中級＜格闘戦闘＞中級
【妖力】再生：5　生体武器：6　憑依：1
飛翔：10　不可視
【弱点】《目的：人への復讐（特級）》
《苦手：陰陽術（中級）》

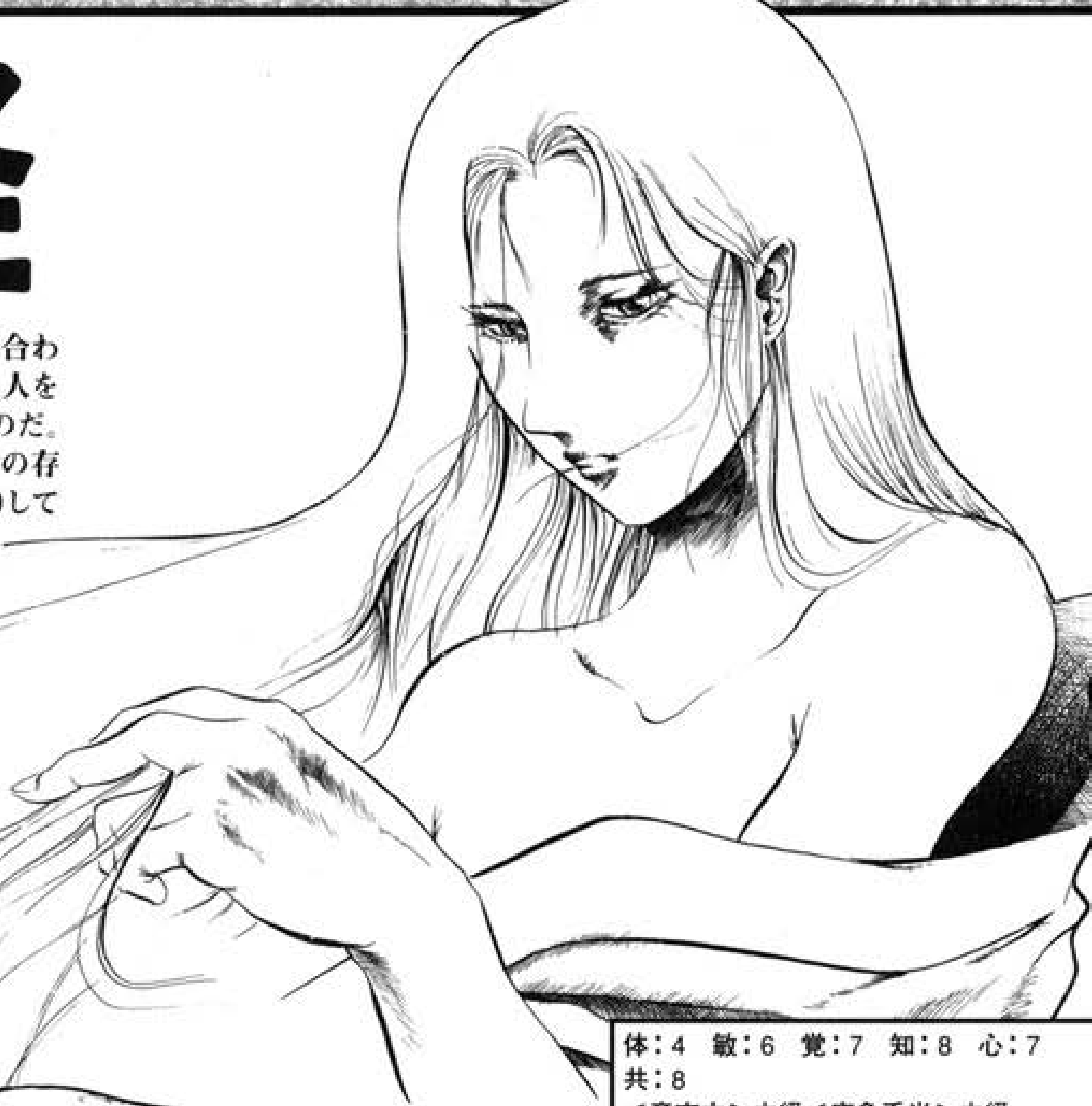
体：3　敏：9　覚：0　知：3
心：6　共：0
＜白兵戦闘＞上級
【妖力】幻覚：4　生体武器：10
投射（瞬間）：5（鎌鼬）　憑依：6
物質透過　読心：5
【弱点】《目的：人を殺すこと（上級）》
《苦手：法術（中級）》

天

妖怪

妖怪とは、自然の霊気と怨念が寄り合わさって生じるモノである。世界を呪い、人を喰らうために生まれてくる人間の敵なのだ。

総じて、妖怪は強力な妖であり、その存在理由や目的と言ったものもしっかりしていることが多い。



雪女

雪深い地方において、雪の美しさと恐怖を体現するのが、この雪女である。山の神に見初められ、雪に覆われて死んだ霊が雪女になるという。その姿形は、透き通るような白い肌の美しい女というのが通説である。また、雪女は人と交わりを持ち、子を為すこともある。この婚姻は最終的に約束を夫が破ることで破綻する。このような点などで天女（羽衣）伝説との一致が見られて興味深い。

体：4　敏：6　覚：7　知：8　心：7
共：8
＜意志力＞中級＜応急手当＞中級
【妖力】畏怖：4　飛翔：8
投射（瞬間）：8（冷気）　魅了：4
【弱点】《目的：山野を雪で包む（特級）》
《苦手：火（上級）》

獏（ばく）

獏は、悪夢を食うと言われている妖である。人々は、悪夢を見ないように獏の絵を枕の下に引いたり、箱枕に獏の絵を描いたりしている。蛇足だが、獏が食うのは悪夢とは限らない。獏に食べられた夢は、永遠に失われるのだから。

体：4　敏：3　覚：3　知：6　心：12
共：6　＜意志力＞上級
【妖力】畏怖：6　幻覚：5　飛翔：2　憑依：4　不可視　物質透過
【弱点】《目的：夢を食う（上級）》
《目的：自分の夢を見る（中級）》
《苦手：やかましい音（初級）》

羅

鬼火

鬼火は、誰もいないのにぽっかりと空に浮かぶ妖(あやし)の火である。それは恨みを飲んで死んだ亡者だとか、地獄を照らす業火の火花だとか言われている。

鬼火の炎を浴びても何ともないが、数日中に熱病で死亡するという。

体：0　敏：0　覚：6　知：0　心：20
共：4　＜意志力＞上級
【妖力】幻覚：10　飛翔：5　憑依：3
身：4　投射（継続）：3（炎／熱病）
点】《苦手：法術（上級）》

姑獲鳥(うぶめ)

妊婦が、子を産む直前に死亡してしまい、胎児が生きている場合、わが子いとしさ、悲しさによってその魂魄は、妖怪に変化するという。そんな悲しい妖、それが姑獲鳥である。姑獲鳥は、夜になると鳥の羽を脱ぎ捨て人となり、道の四辻や橋のたもと、あるいは海辺に現れる。そして通る人に抱いた赤子を差し出して「この子を抱いてくれませんか」と頼むという。この赤子を抱いてやっていると、赤子はだんだん重くなり、やがてつぶされてしまう。逆に、この重さに耐え切ると姑獲鳥は成仏し、すさまじい怪力を授かるという。

体：4　敏：3　覚：4　知：7　心：8
共：8
＜話術＞上級
【妖力】幻覚：6　飛翔：12　変身：8
【弱点】《苦手：法術（上級）》
《目的：成仏する（初級）》
《目的：赤子を守る（初級）》

犬蠱(いぬこ)

犬蠱(いぬこ)とは、蠱毒の一種である。また、それによって作られる妖のことでもある。　蠱毒とは、様々な毒を持つ動物を集め、飢えさせ、食い合わせることで妖に落とし、その極限の飢餓を利用して呪いを行うという邪法である。ただし、飢えと生命力を利用する他の蠱毒と違い、魂魄を用いる犬蠱は、一時的な呪いに止(とど)まらない。永遠に憑いてまわるのである。

犬蠱は、普段は細工箱の中に潜んでいる。そして、憑いた相手を狂死させたり、その牙で引き裂いていく。そうやって、恨みを吸い込み、強大になった犬蠱は、最後には、自分を使う人間を食い殺す。

体：8　敏：11　覚：6　知：2　心：3
共：0
＜格闘戦闘＞上級＜観察＞上級
【妖力】幻覚：4　生体武器：8　飛翔：10
憑依：6　分身：2
【弱点】《苦手：法術（中級）》
《目的：飢えを満たす（上級）》

荒霊（あらたま）

荒霊とは、神の悪心が具現化したものであるとされている。つまり、神のような強大な力で荒れ狂う強大な妖のことを荒霊というのだ。

荒霊は、土地の人間にしてみれば神と同等の存在である。祟りしか与えないことを考えると神よりも性質が悪いと言えよう。

神狼（ウォルク）

龍が海に棲む荒霊であるならば、神狼は、地に棲む荒霊である。龍と同様に、めったに見られるものではない。もっとも見た者は、まず確実に殺されるため、目撃者がでることもない。

神狼は、オニたちの伝承の中に見られる妖であり、オニのようにイ・イルに使命を与えられているという。

龍

海辺に現れる荒霊である。龍は海の守護神であり、漁師たちの命を奪う、自然そのものの化身である。

龍は、無限の寿命を持っていると信じられており、龍の血を飲めば龍同様の神通力を得られる。

伝承によれば、龍の幼生体は、人の姿をしているという。そのため、龍は子供を殺せないそうである。

体：14　敏：8　覚：10　知：8　心：11
共：4
格闘戦闘（上級）　意志力（上級）
【妖力】畏怖：3　再生：6　生体武器：10
読心：4　飛翔：14　変身：3
【弱点】《苦手：子供（上級）》
《目的：人の存在価値を知る（中級）》
《禁忌：自然のバランスを損なう（特級）》
《目的：天羅の管理（特級）》

天狗

異界である天羅の山を守護する妖。神来山魔王尊と呼ばれる大天狗を筆頭に、125万5千余もの天狗が天羅には潜んでいるという。

彼らは、いずれも名の通った法力者が、魔道である天狗道に転生したものと考えられている。その中でも、徳の高い者が大天狗になり、低い者が子天狗(鴉天狗)になるという。

体:8　敏:12　覚:9　知:6　心:7
共:5
<白兵戦闘>上級<意志力>中級
<事情通>中級<法術>上級<神通力>初級<神術>初級
【妖力】幻覚:5　飛行能力:25　憑依:4
分身:3　読心:3
【弱点】《禁忌:秘密をしゃべる(特級)》
《目的:天羅に住む人々の監視(上級)》
《目的:英雄を育てる(上級)》
《目的:戦争を起こす(初級)》

体:10　敏:15　覚:14　知:6　心:7
共:2
<格闘戦闘>上級<意志力>中級
<運動>中級<回避>中級<追跡>中級
【妖力】畏怖:6　再生:6　生体武器:15
【弱点】《禁忌:強いものを殺す(中級)》
《目的:もっとも強い種族を食らう(中級)》
《禁忌:自然のバランスを損なう(特級)》
《目的:天羅の管理(特級)》

妖作成ルール

0. 妖の作成

妖の作成は、キャラクターの作成同様に、分類によって基本の作成点が与えられます。その作成点を消費して、能力値、技能、妖力を取ります。作成点は、弱点を取得することで上昇させることもできます。

分類	初期作成点
変　化	350点
憑喪神	300点
妖　怪	400点
荒　霊	500点

1. 妖の初期設定

作成の前に最低の設定を行なってください。トータルイメージをもって作成しなければ、妖の個性がぼけてしまいます。

●変化
・元になった生物は何か?
例)犬、猫、狸、狐、人
・年齢は?
・特徴的な外見は?
例)炎をまとった尻尾
・なぜ変化となったのか?
例)愛するものを失って

●憑喪神
・元になったものは何か?
例)針、鍋、刀、ヨロイ、明鏡
・どれくらい前に作られたのか?
・特徴的な外見は?
例)細い手足、あやしく光る刃
・なぜ憑喪神となったのか?
例)晴らせぬ思いを晴らすため

●妖怪
・なぜ生まれたのか?
・何をしようとするのか?
・特徴的な外見は?

●荒霊
・なんなのか?
例)超小型の金剛機
・何の目的があるのか?
例)人々の監視
・何をするのか?
例)定期報告

2. 妖の能力値

妖もPCと同様に6つの能力値を持ちます。ただし、バケモノですので、PCに存在したような制限が存在しません。妖は、0の能力値や10を超える能力値を持つこともあります。

例えば、蜘蛛の変化に【共感】があるとは思えませんし、実体を持たない妖ならば、【体力】は必要ないのかもしれません。

能力値:1点ごとに作成点を10点消費する。

3. 妖の副能力値

妖もPCと同様に、活力、霊力、負傷ゲージなどを持ちます。算出方法もまったく
同じです。

活力:【体力】×2
霊力:(【知力】+【心力】)×2
負傷ゲージ:
　軽傷:【体力】と同じ
　重傷:【体力】÷2
　致命:【体力】÷4
　死亡:1つ

4. 妖の技能

妖は、高等な知能や、その能力の表現として技能を持っていることがあります。技能は、段階によって消費する作成点が違います。

初級: 5点
中級:15点
上級:35点
特級:70点

特級の技能を持つ妖はひどくまれな存在です。よく考えて設定してください。

5. 妖力

妖の妖たる部分、それが妖力です。妖は、作成点が許すかぎり、さまざまな妖力を持つことができます。ですが、イメージに合わない妖力は、持たせないようにしてください。

GMは、好きなように妖力を追加してもかまいません。

畏怖:強度1ごとに作成点を3点消費
妖を見るものに圧倒的な恐怖をたたき付け、動きを封じる妖力。
畏怖に抵抗するには、強度を難易度にした【心力】<意志力>の判定に成功する必要があります。判定に失敗した犠牲者は、ダメージを

「妖は殺すのではない、滅するのだ」
妖斬りの丹恵

受けるといった状況の変化が起こるまで、能動的な行動を取ることができません。

幻覚：強度1ごとに作成点を3点消費

妖のイメージを犠牲者に投影する能力です。この幻覚にだまされないためには、強度を難易度にした【心力】＜意志力＞の判定に成功する必要があります。

再生：強度1ごとに作成点を2点消費

1分（ラウンド）につき強度分の活力を回復させます。再生の強度が5以上ある場合は、負傷ゲージも再生することができます。戦闘などで、時間をラウンドではかっている場合、ラウンドの終わりに再生は行なわれます。

生体武器：強度1ごとに作成点を2点消費

生まれつき持っている、爪や牙といった物の武器修正となる妖力です。憑喪神であれば、肉体そのものということもあります。

生体武器の武器修正は、強度と同じです。

耐性：強度1ごとに作成点を10点消費

耐性をもつ妖は、あらゆるダメージを耐性の強度分下げることができます。

耐性による減少は、最終的なダメージが算出されたあとで行なわれます。

読心：強度1ごとに作成点を5点消費

相手の心を読みとる妖力です。犠牲者は、心を読みとらせないために、強度を難易度とした【心力】＜意志力＞の判定に成功する必要があります。

飛翔：強度1ごとに作成点を1点消費

妖に空を飛ぶ能力を与えます。飛翔の際には、（強度×10）kgまでの重量を問題なく運搬できます。

飛行速度は、分速（強度×200）mとなります。重量が（強度×10）kgを超過した場合は、以下のように飛行速度が落ちてしまいます。

強度×10kgまで……………………………………分速（強度×200）m
強度×20kgまで……………………………………分速（強度×100）m
強度×30kgまで……………………………………分速（強度×　50）m

憑依：強度1ごとに作成点を5点消費

生物や無機物内に潜む能力。犠牲者は、体を乗っ取られないために、強度を難易度とした【心力】＜意志力＞の判定に成功する必要があります。

不可視：作成点を10点消費

この能力を持った妖は、目に見えなくなることができます。ただし、この能力を使用したラウンドには、ほかの行為を行なえません。

物質透過：作成点を15点消費

この能力を持った妖は、3点の霊力を消費することで、1ラウンドの間だけ、固体をすり抜けることができます。

分身：強度ごとに作成点を5点消費

この能力を持った妖は、作成する分身の数と同じだけの霊力を消費して、妖自身を分身させることができます。

分身には、本体と同じ事ができますが、霊力を消費することはできません。

また、分身は、ダメージを1点でも受けると消えてしまいます。分身は、一度に強度と同じ数まで作り出すことができます。分身と本体を見分けるためには、強度を難易度とした【知覚】＜観察＞などに成功する必要があります。

妖は、分身を行なったラウンドには、ほかの行為を行なえません。

変身：強度ごとに作成点を5点消費

この能力を持った妖は、一度見たものに変身することができます。この変身を見破るためには、強度を難易度とした【知覚】＜観察＞などに成功する必要があります。

投射（瞬間）：強度ごとに作成点を5点消費

稲妻、火炎、氷の吐息などといった瞬間的にダメージを与える物を投射する能力です。射程距離とダメージは強度に等しくなります。

犠牲者は、強度を難易度とした＜回避＞判定に成功すれば、投射を回避したことになります。また、失敗しても成功数分をダメージから引くことができます。

投射（継続）：強度ごとに作成点を10点消費

毒や酸といった継続的にダメージを与え続ける物を投射する能力です。射程距離とダメージは強度に等しくなります。

犠牲者は、強度を難易度とした＜回避＞判定に成功すれば、投射を回避したことになります。また、失敗しても成功数分をダメージから引くことができます。

その後も犠牲者は、強度ラウンドの間、強度を難易度として【体力】＜耐性＞判定を行ないます。この判定で、足りなかった成功数分だけ、ダメージを受けることになります。

魅了：強度1ごとに作成点を5点消費

この妖力を持つ妖は、何とも言えない魅力をもっており、人を引き付けます。魅了の強度を難易度とした【心力】＜意志力＞による判定を行なってください。

この判定に失敗してしまうと、犠牲者は妖の魅力に取り込まれ、フラフラと近づいてしまいます。

■コンセプト：

妖力は、かなり直接的な力を持ち、その効果も強力である。正直なところ、能力の効果とコストが、折り合っていないと感じる方もいるだろう。なぜそこまで強力なのか？　それは妖を単なるモンスターにする気がなかったというのが本音である。

6. 弱点

妖は、その強力さもさることながら不可解な行動を行なうことがあります。特定の条件に合致する者だけを殺したり、逆に見逃したりすることもあるのです。

また、ある種の武器に弱い、ある種の現象に弱いこともあります。

妖は、自分に弱点や目的を設定することで追加の作成点を得ることができます。

GMは、妖に設定に合った弱点を必ず付けるようにしてください。そして、弱点についてPCが知る機会を、シナリオ中に必ず設けるようにしてください。

弱点は、その強度によって技能同様に、初級、中級、上級そして特級に分かれています。段階は、妖にとってどのくらい危険なものかを示しているのです。

初級が苦手、中級が負傷にかかわる、上級が致命的な、特級に至っては生死にかかわる弱点といえます。弱点は因縁のようなタイプで分けられていて、段階によって受け取れる作成点が、変わってきます。

弱点の段階	得られる作成点
初級	5点
中級	15点
上級	35点
特級	75点

6.1. 禁 忌

禁忌は、その妖にできないことを意味します。基本的に妖は、禁忌に触れるようなことを行ないません。逃げられるなら逃げてしまいます。

段階	禁忌を破った際の効果
初級	活力に5ダメージが入る。
中級	負傷ゲージに3ダメージが入る。
上級	負傷ゲージに5ダメージが入る。
特級	死亡ゲージにダメージが入る。

6.2. 苦 手

苦手は、その妖が苦手とするものです。苦手とする物や方法によって与えられたダメージは、通常のダメージより、大きな効果を妖に与えます。また、妖力の耐性および再生は、苦手な物からのダメージに対して効果をもちません。

段階	苦手なものから受ける追加効果
初級	ダメージを＋3
中級	ダメージを2倍
上級	ダメージを3倍
特級	死亡ゲージを埋める。その後は上級と同じ。

6.3. 目 的

目的は、その妖の存在理由です。目的をもった妖は、目的を果たすための行為でなければ、消極的になります。特に段階が高いと目的の方が、自分の生死より重要なことになってしまいます。そして目的を果たしたその時が、妖の滅びの瞬間となるのです。

段階	目的以外の行為をどのように行なうか
初級	消極的。
中級	興味を示さない。
上級	行なわない。
特級	反することを行なうと死ぬ。

■コンセプト：

妖を造るのなら、キャラクターを造るようにトータルイメージを大事にしてほしい。

単純に強いだけ、といった「つまらない」妖を産んでほしくはない。PCを殺すために、妖を組むのは、実に簡単なのだ。

妖は死なない。特に、目的を持った妖は、殺せない。滅ぼすしかないのだ。

妖を造るなら、殺す方法ではなく、滅ぼす方法を設定してもらいたい。

天羅万象
基本システム ver.2.1

キャラクターの準備

●アーキタイプを選択し、キャラクターシート（本書カバー裏を参照）に書き写す。
●技能は段階さえ変えなければ、別のものに変更してもかまわない。
●装備は、変更してもかまわない。
●種族の変更は基本的にしないこと。したい場合は、"天羅万象RPG"を参照。

0. 基本中の基本ルール

●カッコイイかどうか、それが重要なことだ
●端数は切り上げ
●【】内は、能力値、＜＞内は技能名
●能力値の意味
【体力】：肉体の力（筋力、耐久力）
【敏捷】：肉体のスピード（器用、反応）
【知覚】：五感（パーセプション）
【知力】：知識、理性の強度（インテリジェンス、知性）
【心力】：根性、第6感（POW、WIL）
【共感】：思いやり、感情の多彩さ（シンパシィ）

●文中などで行為判定に難易度が設定されていない時は難易度0である
●副能力値の算出
活力の上限：【体力】×2
霊力の上限：（【知力】＋【心力】）×2
業の上限　：108
宿業の上限：【心力】×10
負傷ゲージの算出：
　軽傷：【体力】と同じ
　重傷：【体力】÷2
　致命：【体力】÷4
　死亡：1

1. 行為判定

●天羅では、6面体サイコロを使用する
●判定に使用する能力値と技能を選び、能力値の数だけサイコロを振り、技能段階によって決まる成功値以下の目が出たサイコロが成功である

技能段階：成功値
なし：1　初級：2　中級：3
上級：4　特級：5

●成功値とは、その目以下のサイコロが成功となる数値のこと
●行為判定には、行為の難しさを示す難易度が、設定されることがある。難易度とは成功がキャンセルされる数である

難易度表
難易度0～2　：初級以上の技能なら成功する
難易度3～4　：中級以上の技能なら成功する
難易度5以上：上級以上の技能なら成功する

●難易度を上回った成功数のことを成功度と呼ぶ
●成功度が1以上なら行為は成功となる
例：難易度3の【敏捷】＜運動＞判定で、成功数が4だった。成功度は1で行為は成功である。
●通常は、難易度を設定せずに成功度によって結果をみるほうがよい

成功度表
成功度1：ギリギリ
成功度2：普通
成功度3：まぁまぁよい
成功度4：良い
成功度5：すばらしい
成功度6：驚異的

●サイコロはなるべく一度で振ろう

1.1. 対抗判定

●相手の成功数が難易度になる
能動側→相手に判定を要求した者
受動側→相手によって判定する必要が出た者
成功数が同数→両方失敗→受動側の成功
例：AがBを見つけようとして【知覚】＜観察＞の判定を行なう。成功数は4だった。Bは見つからないために【敏捷】＜穏身＞の判定で、4以上（Bは受動側なので同数でも成功となり、発見されない）の成功数を出す必要がある。

2. 戦闘ルール

●1ラウンドは、1分
●1ラウンドに以下のような行動を取れる
0.行動の宣言（ラウンド前に行なう）
1.移動（【敏捷】×10ｍ以内）
2.1回の攻撃／術の使用／サムライ化／ヨロイの起動
3.回避／突き返し／見切り
4.その他（1分以内でできる普通のこと）
●防御行動は1ラウンドに何回でも行なえる
●以下の処理は、次のラウンドまでの間に行なう
1.継続的なダメージ（毒や炎など）
2.《式》の活動開始／《式》の活動終了
3.《式》の再生能力による回復

2.1. 命中判定

●対抗判定で判定
●突き返しが存在するため、攻撃的な技能による命中判定では、成功した方がダメージを与える
●＜回避＞などの防御的技能では、ダメージを与えられない

2.2. 突き返し

●白兵戦、格闘などに対して攻撃的な技能（＜白兵戦闘＞、＜格闘戦闘＞など）を使用して防御を行なって防御側が成功した場合、突き返

しが発生する
●射撃、投撃などでは、突き返しは発生しない
●突き返しは、能動的な防御行動なので回数制限は存在しない
●つき返しがあるため、弱いヤツが勝算なく強いヤツに攻撃するのは自殺同然である

2.3. ダメージの算出
●ダメージ＝命中判定の成功度＋武器修正＋その他

2.4. ダメージの適用
●ダメージを受けた側が、好きなように負傷ゲージと活力に割りふること
●負傷ゲージとは、各PCにある軽傷、重傷などのマス目のこと
●もっとも重い負傷から負傷度が算出される。負傷度は、治療行為などの難易度になる

負　傷	負傷度
軽　傷	1
重　傷	2
致　命	3

2.5. ダメージの影響
●活力または霊力が、0以下になると気絶する
●一番重い負傷の影響のみを受ける
軽傷→何もなし
重傷→判定のサイコロを＋1個
致命→判定のサイコロを＋2個
ラウンドごとに活力に1ダメージ
死亡→判定のサイコロを＋3個
活力が全快するタイミングで、完全に死亡

2.6. ダメージの回復
●活力は1ラウンドの休息で、1点ずつ回復する。戦闘の終了時に全快する
●霊力は1時間に1点ずつ回復する
●でも、究極的にはGMの任意

2.7.戦闘オプション（必殺の一撃）
●【体力】で判定する
●射撃武器または手投げ武器ではできない
●普通の判定で、命中判定を行なう
相手も攻撃→両方にダメージ
相手は防御→いつもと同じように判定
●先に自分にダメージを適応する、このダメージで気絶したら必殺の一撃は無効となる

2.8. 戦闘オプション（ねらい撃ち）
●【知覚】で判定する
●ねらう部位を宣言すること
手足：四肢などの身体の末端部位
武器：武器や人体以外の部分（胴丸や服など）
急所：人体の急所
注）相手が人間でない場合はGMの判断
●ねらった部位で効果が違う
手足：ダメージで、まず重傷ゲージを埋める
武器：武器は、外れるまたは破壊される
急所：ダメージで、まず致命ゲージを埋める
●ヨロイに対するねらい撃ちには、＜陰陽術＞または＜接合＞によるサポートが必要

2.9. 戦闘オプション（見切り）
●【心力】で判定する
●防御のときにしか使用できない
●命中判定の失敗側の成功数を0とする

2.10. 戦闘オプション（フェイント）
●【知力】で判定する
●攻撃のときにしか使用できない
●命中判定の成功度を2倍にする

2.11. 飛び道具
●突き返しが発生しない
●飛び道具は、一度に武器の射率の分まで発射可能
●一つの目標に対して余分に撃つ一発ごとにダメージを一点増やす
●下記の条件を満たせば、複数目標へ同時に攻撃することも可能
1）目標人数以上の射率がある
2）目標がすべて自分の視界内にいる

2.12. 多刀流
●下記の条件を満たせば、1つの目標に対して余分に使用する武器ごとにダメージを1点増やす
1）同じ技能を使用する
2）飛び道具ではない

2.13. 不意討ち
●突き返しが発生しない
●命中判定の失敗側の成功数を0とする
●なにも隠れることだけが不意を討つことではない

2.14.《珠》の使用
●武器の射率の分まで一度に使用できる
●使った《珠》1つにつき1点ダメージを上昇させる

3. サムライ能力

●サムライ能力は、決められた数の霊力を消費することで発動する
●戦闘中の発動には、1回分の行動が必要で、能力は、そのラウンドから効果を発揮する
●サムライは【心力】ラウンドの間続く
●霊力が消費できれば、1日に何度でも発動可能

4. 金剛機高速機動

●体を使ったすべての判定で、“成功した”サイコロを振り直してさらに成功数を足す
●高速機動による再ロールは、判定1回に付き、1回のみ
●高速機動は、1日に【心力】回だけ可能
●高速機動は、【体力】ラウンドの間使用できる
●高速機動中は、“必殺の一撃”オプションは使用できない

5. その他のダメージ
（爆発物、毒物、落下etc.）

●強度（ダメージ）を難易度にして適当な防御技能で判定
●判定で、足りない成功数がダメージとなる

6. 気合の獲得

●GMは、PCがカッコ良かったら因縁ロールを行なわせて気合を取らせ

ること
●因縁ロールとは、因縁を技能とした難易度0の【心力】または【共感】判定である。この判定の成功数が、取得した気合の数となる

6.1. 気合の使い方

●1ポイントにつきサイコロの数を1つ増やす。ちなみに上限はない
●3ポイントにつき技能の段階を1つ上げる。最高で上級まで
●1ポイントにつき他人の行動に割り込んで追加行動を1回行なえる。複数の割り込みが同時に発生した場合は、もっとも多い気合を消費したものから順番に行動することができる
●3ポイントにつき成功数を1つ増やす
●上昇後の能力値の3倍で能力値が1つ増える
●技能の上昇
　なしから初級：専門技能の場合師匠が必要
　汎用技能：5ポイント
　専門技能：5ポイントで師匠が必要
　初級から中級：10ポイント
　中級から上級：20ポイント
　上級から特級：40ポイントで「何か」必要

6.2. 気合の初期値

　1）前のシナリオの残り
　2）全因縁で、気合い獲得ロールを行なった合計
　上記の多い方を初期値とする。

7. 業

●業は、使用した気合のポイント分だけ上昇する
●業の上限は、各キャラクター共通で108である
●業が上限を超えると修羅となり、NPCとなる
●因縁の獲得
　なしから初級：　5ポイント
　初級から中級：10ポイント
　中級から上級：20ポイント
　上級から特級：40ポイント
　因縁の獲得は、いつ行なってもかまわない
●能力値を一つ下げるごとに減少前の能力値の3倍の業が消費される
●シナリオ終了時にGMの任意により10～20の業が消費される

8. 宿業

●因縁の獲得に消費した業は宿業となる

8.1. 宿業の使い方

●因縁が消滅するまたは段階が減少するとその因縁または段階分の宿業が消費される
●因縁の減少
　特級から上級：－40ポイント
　上級から中級：－20ポイント
　中級から初級：－10ポイント
　初級からなし：－5ポイント
●因縁の消滅
　特級：－70ポイント
　上級：－35ポイント
　中級：－15ポイント
　初級：－5ポイント
●因縁の減少および消滅は、GMの許可があればいつ行なってもかまわない。GMは柔軟に対応すること
●宿業の上限は、心力の10倍
●宿業が上限を超えると超えた分だけ、業の上限が下がる
●業の上限の減少は、永久的なものであり、宿業が範囲内に戻っても減少が回復することはない。再び宿業が上限を超えれば、超えた分だけ下がる。

9. ヨロイ、金剛機の明鏡修正

●接合中に使用した気合は、業に落ちる代わりに明鏡の業になる
●金剛機では、自分の業になる
●明鏡の業は、肉体系の能力値（【体力】【敏捷】【知覚】）に修正値を与える

明鏡の業	修正値
～20	＋0
～40	＋1
～60	＋2
～80	＋3
～100	＋4
～108	＋5
109～	＋6

●負傷ゲージや活力は、修正前の能力値で算出する
●業が、108を超えたらその明鏡（ヨロイ／金剛機）は、修羅になる
●接合中のヨロイ乗りは明鏡の業を使用して因縁を作成することができる

9.1. ヨロイ、金剛機の負傷の回復

●【知力】<陰陽術>判定（難易度は負傷度）成功度分の負傷ゲージをクリアする

9.2. ヨロイ乗りの負傷

●ヨロイに接合中のヨロイ乗りは、ヨロイの受けたダメージを自分の負傷ゲージにも割りふることができる

10. 技能について

●技能とは、その分野における才能を意味する
●技能の名前から、使用が連想できるなら技能は使用できる
●技能と能力値は、対応していない。すべての技能は、すべての能力値で判定できる
●いろいろ使用法を考えてGMを困らせよう！
●技能についての詳しい情報は"天羅万象ビジュアルブック"を参照

天羅万象質問箱 FAQ

コンセプト:質問?

まれに、○○が××したら△△になりますか? というような質問がくるときがある。正直なところ、こういった質問には、たいへんに困ってしまう。

本音を言ってしまえば、あなたの"天羅万象"にのみ通用するイレギュラーケースとしてなら、何があったって別に問題はないのである。"天羅万象"は、あなたのゲームなのだから。

ただ、われわれ天羅チームが、こういった質問にYesと答えれば、それはイレギュラーケースではなくなってしまう。またNoと答えれば、それはイレギュラーケースとしてもありえなくなってしまう。それは問題なのだ。

よってこの手の質問に対しては、われわれはお茶を濁すような答えしか用意できない。今回の質問箱にも、そういった質問は掲載されていない。

繰り返しておこう。あなたの個人的な"天羅"でなら、何が行なわれても問題はない。ただ、それをわれわれに決定してもらったり、ほかの人間に認めさせるために、われわれの答えを利用してもらっては困るのである。

あなたには、われわれの『公式天羅世界』にこだわることなく、自由に"天羅万象"をプレイしてもらいたい。プレイヤーが、「オフィシャルではこうなっている」、「遠藤は、こういっていた」などと言っても無視してかまわない。

われわれは、あなたの想像力を狭めるために、質問を受け付けているわけではないのだから。

"天羅万象"は、あなたのものなのだ。

Q 最大活力と最大霊力はどのように決定されるのですか?
A 以下のとおりです。
活力の上限:【体力】×2
霊力の上限:(【知力】+【心力】)×2
詳しくは、P121からの天羅万象基本システムを参照してください。

Q "宿業"には限界値はないのですか?
A 以下のとおりです。

- "宿業"の上限は、心力の10倍
- "宿業"が上限を超えると超えた分だけ、"業"の上限が下がる
- "業"の上限の減少は、永久的なものであり、"宿業"が範囲内に戻っても減少が回復することはない。再び"宿業"が限界を超えれば、超えた分だけ下がる。

例:【心力】が6("宿業"の上限60)のキャラクターが、"宿業"を80点ためてしまったとする。この時に、彼または彼女の"業"の上限は、108から88に減少する。その後、彼または彼女の"宿業"が、60以下に減ったとしても、"業"の上限は88のままである。もし、"宿業"がもう一度60を超えるようなことがあれば、さらに"業"の上限は減少する。

詳しくは、P121からの天羅万象基本システムを参照してください。

Q 技能リスト("天羅万象RPG")の種別の後ろにある(特殊)ってなんですか?
A なぜその技能を取得しているか設定を行なう必要がある技能です。

Q 中級の技能と上級の技能の差が大きすぎるのではないでしょうか?
A 一流と二流の差は、天と地ほどもあるものなのです。

Q 若武者の"宿業"が「40/60」と、因縁の合計が合っていませんどうしたらいいんでしょうか? どうか教えてください。
A ……申し訳ありません。"宿業"を-5して"業"を+5してください。結果、若武者の"業"は51、"宿業"は35になります。

Q 因縁のロールって、"因縁"に対して否定的なものでもいいのでしょうか?
A かまいません。常に重要なのは、かっこいいかどうかです。

Q NPCも因縁ロールで"気合"を稼げるのでしょうか?
A できません。しかし、あなたがNPCを表現するために、因縁を設定するのは、まったく問題ありません。それどころか、そうなさることをお勧めします。ちなみに、因縁ロールが行なえない理由は、NPCのロールプレイを見て因縁ロールを指示する人がいないからです。
つまり、サブマスターなどを用意して、サブマスターにNPCをプレイしてもらう、というような場合は、"気合"を獲得してもかまいません。ただし、判断は公平に行なってください。

■オプションルール

NPCが"気合"を使う

1) GMは、シナリオ終了時に減らす"気合"の分だけ、NPCに"気合"を使わせることができます。

2) GMは、PC全員に与えられた"初期気合"の合計分だけ、NPCに"気合"を使わせることができます。

PCが天羅に慣れたら、どちらかを採用してみてください。

Q ビジュアルブックとRPGで不死蟲を寄生させたときの処理が違いますが、どちらが正しいのですか?
A ビジュアルブックです。申し訳ありません。
Q 蟲使いは他人を再生蟲で癒すときはどうしたらいいのでしょう?
A 自分の体内から取り出して使ってください。
Q 複数の蟲を同時に寄生させる場合の投与コストは、蟲ごとに計算するのですか?
A いいえ、投与コストを合計して計算してください。

Q 戦鬼蟲のその他の能力としてほかの蟲の能力を追加する場合、追加の投与コストは必要でしょうか?
A 必要です。その場合は、戦鬼蟲の拡張能力として扱いますので、その蟲の食物制限などは適用しなくてかまいません。ただし、以下の蟲は、戦鬼蟲を作成する際に、使用されていますので追加することはできません。

「とかくこの世はなぞだらけ…だねっ」

ラン

・鋼化結線蟲
・心眼蟲
・再生蟲
・甲蟲
・牙爪蟲

もちろん、戦鬼蟲とは別に蟲を投与する分には何の問題もありません。その場合は、その蟲の食物制限などが、適用されます。

Q 戦鬼蟲の能力にある「電撃」の射程と射率を教えてください。
A 射率2・射程18m程度です。

Q 人間型種族作成ルールで、特殊装備として手に入る傀儡の能力値や装備は、どのように決定するのでしょうか？
A PCの所持品の傀儡は、アーキタイプよりずっと劣るもので、判定を行なう場合は、一般の人間程度（能力値は多くて3、技能は初級）と考えてください。装備などは、所有者がすべて用意してください。
所持品となる傀儡は、人格などもいまいち薄く、独立した人間として生きることができません。人間大の美しいお人形です。
なお、傀儡を武器として使った場合の武器修正は0です。

Q 傀儡術で幻覚を見せることができるようですが、傀儡術を使って傀儡にかけるような半永久的で見たものすべてにかかる幻覚を作れますか？
A つくれません。
傀儡の体にかけられた幻術は、傀儡師の長い間の教育＝刷り込みによって最終的には傀儡自身が自分にかけるようになるマボロシです。
無意識下でまで、「自分は、このような姿をしている」と思い込む。
傀儡の幻術は、まさにそう言った手段で維持されているのです。

Q ヨロイ乗りは、自分の“気合”でヨロイを成長させることができますか？
A 可能です。なぜ性能が上がったのかは、プレイヤー、マスター間で設定してください。

Q ヨロイなどで戦闘中に、“気合”を使用して、
その“業”で明鏡修正が上がる場合、あがった明鏡修正は、その原因となった判定に適用できますか？
A できません。次の判定から適用してください。

Q 重装機など、明鏡が複数ある時に、得た業は任意でそれらに配分していいのですか？
A “気合”を消費した魂が、接合している明鏡の“業”が上昇します。

Q 式弾の能力は、どうやって決めればよいのですか？
A 《陰陽術》のルールにしたがって、《式札》として式弾を組んでください。作成ポイントは18～24程度が適当でしょう。

Q “気合”の技能のブーストで、＜陰陽術＞を一時的に上昇させ、強い《式》を打つことはできますか？
A できます。

Q 憑依型式、式破壊型式などを動く目標にかける場合、（《式》の能力値による）命中判定は必要ですか？
A 必要です。

Q 陰陽師の珠式銃のデータが武器表のものと違うのですが？
A あれは、陰陽師カスタムの武器だからです。珠武器は、大量生産のできるものではないため、このようにデータに差違が生じます。

Q サムライに式破壊の式をぶつけた場合はどうなりますか？
A ルール通りに式破壊能力の強度を難易度にした“式の能力値による”抵抗の処理（憑依能力による難易度の低下を忘れずに）を行ない、失敗すれば、サムライに埋め込まれた《式》は破壊されます。

Q 《式》の戦闘能力は、能力値を強度分上昇してくれますが、これは《式》が行なうすべてのロールを、この能力値で判定するということでしょうか？
A はい、そのとおりです。

Q 元素変換能力を持たせた《式》は使い捨てだそうですが、変換後も、ほかの能力は生きていますか？
A 生きていません。元素変換能力を使用すると、式ではなくなってしまうので、《式》のほかの能力も死んでしまいます。

“天羅万象”正誤表 ERRATA

「こんな所を読むくらいなら二版を待ったほうが…… ごめんなさい」

遠藤卓司

天羅万象ビジュアルブック正誤表'97.6.1

ページ数（場所）
　誤：間違い
　正：訂正

P2
　誤：一般
　正：汎用
　誤：～ヨロイ乗りは、ダメージを～
　正：～ヨロイ乗りは、ヨロイの受けたダメージを～
　誤：回避行動に～＋2
　正：回避行動に能力値＋2

P3
　誤：珠剣
　正：珠剣（ヨロイ乗り用）

P4
　誤：一般
　正：汎用

P40（香利の国　地図）
　正：地図右下にある久代を削除

P52（天羅の街道）
　誤：甲華
　正：鳥越

P58（天羅の戦13～14行目）
　誤：11万5千245
　正：12万5千245
　誤：300
　正：2000

P61（美桐執叉の正しいデータ）
能力値
体：9（12）　敏：8（11）　覚：7（10）
知：6　心：7　共：4
活力：18　霊力：26　成功値：4

P78（右上イラスト）
　誤：傀儡術
　正：傀儡師

P82（式の形態２行目）
　正：（作成～強調）を削除

P83（1段目5行目）
　誤：下法師
　正：外法師

P102（大呪式銃のコメント）
　誤：呪式長銃
　正：珠式長銃

P112（戸川蘭白の正しいデータ）
能力値
体：6　敏：5　覚：8
知：6　心：7　共：5
　活　力：12　霊力：26
成功値：4（上級）
主な蟲：再生蟲（6）／心眼蟲（3）

P116（蟲リストイラストのキャプション）
　誤：3．再生蟲
　正：女王再生蟲
　誤：女王再生蟲
　正：3．再生蟲

P121（護法童子法）
　誤：P135
　正：P127

P126（僧兵９行目）
　誤：P135
　正：P127

P127（2段目3行目）
　誤：武僧
　正：護法僧

P149（忍術の制限　5行目）
　誤：●使用段階に達していない術は使用できない。“気合”で一時的に上昇させても同様である。
　正：●<忍術>が、使用段階に達していない術は、使用できない。これは、“気合”で、一時的に上昇させても同様である。

P149（忍術の制限　10行目～12行目）
　誤：●サムライ、傀儡、金剛機は、自分にかける術を使用できない。
　正：●サムライ、傀儡、金剛機、ヨロイは、自分にかける術を使用できない。
　　12行目を全文削除。

P149（憑鬼の術）
　誤：丙・1・3（霊力、活力、能力値に＋2）
　正：丙・1・3（霊力、活力に＋2、能力値に＋1）

P173（現在までの帝）
　誤：和神帝
　正：今上帝
　　14行目の今上帝を削除

P202（式シート　霊力）
　誤：現代
　正：現在

P203（式シート　式の能力）
　誤：ガス化能力
　正：気体化能力

天羅万象RPGシステム・ブック正誤表　'97.6.1

ページ数（場所）
　誤：間違い
　正：訂正

P8（1．能力値）
　誤：【知覚】：精神活動
　正：【知覚】：肉体活動
　誤：【心力】：～気力の基本
　正：【心力】：～霊力の基本

P21（右上の図）
　誤：気合から因縁に矢印が伸びています。
　正：因縁から気合に矢印を伸ばしてください。

P32（1．忍術の使用　5行目～9行目）
　誤：・1度に1つの術しか使用できません。
　正：・自分にかける術を2つ以上、同時に使用することはできません。
　誤：・1つの術が効果を発揮している間にほかの術を使用することはできません。
　正：・術を途中で打ちきることはできません。
　誤：・サムライが忍術を使用することはできません。
　正：・サムライ、傀儡、金剛機、ヨロイは、自分にかける術を使用できません。
　9行目以降に以下を追加
　・<忍術>が、使用段階に達していない術は、使用できない。これは、“気合”で、一時的に上昇させても同様である。
　・使用者にかけるタイプの術を、他人にかけることはできない。

P32（無影分身の術）
　誤：無影分身の術／紙人形／0／中級
　正：無影分身の術／紙人形／甲2・乙1・丙0／中級

P40（射撃武器）

	名称	武器修正	射程	射率	装填数
誤：	棒手裏剣	＋2	10m	9	
正：	棒手裏剣	＋2	10m	6	
追加：	単筒	＋3	15m	4	4
誤：	珠式銃	＋5	50m	4	12
正：	珠式銃	＋5	50m	4	12

P46（不死蟲）
　誤：ゾロ目ではない→死亡
　　6ゾロ以外のゾロ目→出来損ない
　　6ゾロ→不死人
　正：ゾロ目ではない→出来損ない（狂気）
　　6ゾロ以外のゾロ目→出来損ない（正気）
　　6ゾロ→不死人

P54（2.2.腕の本数）

		【体力】	【敏捷】	【知覚】
誤：	三対	−2	＋3	
正：	三対	−2	＋3	−2

P56（大呪式銃のコメント）
　誤：呪式長銃
　正：珠式長銃

薬物 DRUGS

「あのな……薬ってのは毒だし、毒ってのは薬なんだよ。
そこんとこわかってんのか、お前(めえ)?」

薬蠱師(くすこし)　芭楼(バロウ)

天羅にも、傷や病を治すためのクスリは存在する。だが、ここでは、あえてそうした薬品については目をつぶろう。そんなものは、数値上の処理だけでかまわないからだ。ここではもっと奇妙(ユニーク)な効果の薬物に関して触れることとしよう。

●麻黄散(マオウサン)

価格:1包(約3回分)あたり1貫前後
俗称:黄色いの、速いの、アサ
使用法:加熱して蒸気を吸入。粉をじかに鼻孔から吸入。水溶して粘膜に塗布。経口摂取。
入手法:麻黄は砂地に自生。発見難易度3。
製造法:茎を乾燥させ、すりつぶして粉状にする。
効果:疲労、不安が消滅、陽気になる。皮膚感覚が敏感に。単純作業の能率上昇。咳を鎮める。
　摂取後6時間、"活力"と"霊力"に+2。
副作用:食欲減衰。不眠。衝動的に行動するため体力を消耗。効果消失後、無力感にさいなまれる。連用すると猜疑(さいぎ)心や攻撃性が増加、錯乱状態に。

●虎伽(コカ)

価格:1包(約2回分)あたり800文前後
俗称:白いの、雪、短いの、コナ
使用法:粉末を鼻孔から吸引。
入手法:虎伽葉は山林に自生。発見難易度4。
製造法:虎伽葉をすりつぶし、水溶したのち、数回ろ過。残った物を乾燥させる。
効果:麻黄散とほぼ同様だが、より陽気になる。
　摂取後30分間、"活力"と"霊力"に+4。
副作用:集中力の欠如。鼻からの出血。効果消失後に落ち込み。進行すると錯乱状態に。効果時間が短い分、反復使用に陥りやすい。

●阿片(アヘン)

価格:1包(約5回分)あたり1貫
俗称:あったかいの、吸うの、白(べい)けし粉
使用法:水溶して加熱、蒸気を吸う。経口摂取。
入手法:けしは山野に自生。発見難易度4。
製造法:けしの完熟前のさく果から採れる白い液体を集めた後に乾燥させ、粉末状に。
効果:苦痛の除去。幸福感に満たされる。
　摂取後2時間、負傷による修正がなくなる。<耐性>技能使用時に、能力値+2。
副作用:無気力。眠くなる。筋肉が弛緩し、連用すると排便が阻害される。効果消失後、不安感や恐怖などが押し寄せてくる。

●偏妻(ヘンロウ)

価格:1包(約3回分)あたり5両前後
俗称:女帝様、すごいの、真珠色、カミサン
使用法:阿片と同じ。鼻孔から吸入。
入手法:専門の陰陽師から。
製造法:特殊な《式》を用いて、阿片を再精製。
効果:苦痛の除去。幸福感は阿片よりも強い。
　摂取後4時間、負傷による修正がなくなる。<耐性>技能使用時、能力値+4。
副作用:阿片と同じ。効果持続中に他の薬物を使用する時は、強度8の判定。失敗するとひどい嘔吐感を覚える。薬物の効果は適用できない。

●妻寿(ルス)

価格:1包(1回分)あたり8両前後
俗称:カミ、曲がるの
使用法:経口摂取。
入手法:蟲使いから。
製造法:朧蟲(発見難易度10)の毒液を煮沸。冷却後、上澄み液を紙に塗布して1センチ四方
に裁断。約1週間で効力は消失。
効果:「音が見える」などの共感覚を伴う幻覚。
　摂取後3時間、式作成点+10。
副作用:不眠。興奮。発汗。

●紅天狗茸(ベニテングタケ)

価格:1個(1回分)あたり100文前後
俗称:キノコ、赤いの、曽摩(ソーマ)
使用法:収穫したものを乾燥させたのち、経口摂取。また、普通に調理(鍋物に)してもおいしい。
入手法:山野に自生。発見難易度2。
製造法:収穫したものをそのまま使用する。
効果:幻覚作用。色彩の変容など。
　摂取後1時間、式作成点に+3。
副作用:消化不良。嘔吐感。発汗。口内の渇き。虚脱感。興奮。不眠など。効果消失後に強度4の判定。失敗すると毒性にあたって腹を下す。

●曼陀羅華(マンダラゲ)

価格:1包(1回分)あたり300文前後
俗称:狗唸朝顔(コウテンアサガオ)、気狂い茄子、タネ
使用法:経口摂取。点眼。
入手法:山林に自生。発見難易度2。
製造法:種子をそのまま用いる。点眼液とする場合は、種子をすり潰して汁を抽出。
効果:瞳孔が拡大するため、暗いところでもよく見えるようになる。幻覚作用。
　摂取後1時間、夜間ならば【知覚】に+2。
副作用:せん妄(明確な思考ができなくなる)。口内の渇き。微熱。動悸。便秘。健忘症。

●麻菜(マナ)

価格:1包(約5回分)あたり300文前後
俗称:葉っぱ、クサ、煙管(キセル)、大麻
使用法:喫煙。
入手法:山野に自生。栽培も容易。発見難易度1。
製造法:麻菜の葉を乾燥させ、細かく裁断。
効果:幻覚、気分高揚、痛覚の鈍化など。
　摂取後30分間、"活力"と"気力"に+3、重傷までの負傷による修正を無効。<耐性>技能使用時に、能力値+1。
副作用:悪寒。異常な空腹感。嘔吐。

●鳥兜(トリカブト)

価格:1包(約10回分)あたり100文前後
俗称:
使用法:鏃に塗布、経口摂取など。
入手法:山野に自生。発見難易度2。
製造法:鳥兜の茎を搾り、液体を採取。または、塊根をすりおろしたのち、丸薬状にする。
効果:麻痺。唾液の過剰分泌。腹痛。
　摂取後1分おきに強度3の判定。
副作用:塊根の丸薬は解毒作用を持つ。

●水銀

価格:1瓶(約5回分)あたり2貫前後
俗称:丹砂(タンシャ)
使用法:経口摂取。
入手法:鉱山の鉱脈。発見難易度5。
製造法:なし。
効果:発熱。腹痛。嘔吐。
　摂取後1分おきに強度6の判定。
副作用:なし。

CREDITS

[TXT]
井上純弌(天羅創成)
遠藤卓司(妖)
秦野啓(毒)
渡辺ヒロシ(天羅戦国伝、天羅幻視秘抄)

[Cover]
井上純弌

[Archetype]
狭霧光明

[Illustration]
井上純弌(天羅創成、妖)
小川雅史(天羅戦国伝、天羅幻視秘抄)
山中官兵衛(妖)

[Figure]
山中官兵衛

[Design/Layout]
落合正道

[Edit]
武田敏裕

初出
天羅戦国伝
　RPGマガジン　Nr.68-82
天羅創成
　RPGマガジン　Nr.55-62,64
　(妖:書き下ろし)
天羅幻視秘抄(サムライ)
　RPGマガジン　Nr56-62,64
　(サムライ、妖:書き下ろし)

天羅万象ソースブック

天

HYPER ORIENTAL FANTASY

キャラクター名　：
性別　：
年齢　：
アーキタイプ　：
プレイヤー名　：

	能力値	状態
【体力】	________	(　　　　)
【敏捷】	________	(　　　　)
【知覚】	________	(　　　　)
【知力】	________	(　　　　)
【心力】	________	(　　　　)
【共感】	________	(　　　　)

軽傷：　：□□□□□□□□□□□□□□□□
重傷：　：□□□□□□□□□□：＋１
致命：　：□□□□：＋２（活力減少）
死亡：１：□：＋３

―肖像画、または家紋―

活力	霊力	気合	業	宿業
/	/		/	/

戦闘系	無初中上特
汎〈　回　避　〉	●○○○○
汎〈　格闘戦闘　〉	●○○○○
汎〈　射撃戦闘　〉	●○○○○
汎〈　白兵戦闘　〉	●○○○○
肉体系	**無初中上特**
汎〈　運　動　〉	●○○○○
汎〈　隠　身　〉	●○○○○
汎〈　観　察　〉	●○○○○
汎〈　騎　乗　〉	●○○○○
汎〈　耐　性　〉	●○○○○
汎〈　追　跡　〉	●○○○○
専〈　早　業　〉	○○○○○

精神系	無初中上特
汎〈　意志力　〉	●○○○○
専〈　接　合　〉	○○○○○
汎〈　枕　事　〉	●○○○○
汎〈　話　術　〉	●○○○○
術法系	**無初中上特**
専〈　陰陽術　〉	○○○○○
専〈　傀儡術　〉	○○○○○
専〈　蟲　術　〉	○○○○○
専〈　神通力　〉	○○○○○
専〈　操気術　〉	○○○○○
専〈　法　術　〉	○○○○○
専〈　忍　術　〉	○○○○○

知識系	無初中上特
汎〈　応急手当　〉	●○○○○
専〈　偽　造　〉	○○○○○
専〈　芸　事　〉	○○○○○
専〈　作　法　〉	○○○○○
汎〈　事情通　〉	●○○○○
専〈　帝王学　〉	○○○○○
その他	**無初中上特**
専〈　神　術　〉	○○○○○
〈　　　〉	○○○○○
〈　　　〉	○○○○○
〈　　　〉	○○○○○
〈　　　〉	○○○○○

	武器名	武器修正	射率	射程	装填数
□					
□					
□					
□					
□					

HYPER ORIENTAL FANTASY

羅

そはいかなるものか？（因縁・過去を記入せよ）

□ タイプ：　初中上特：
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□
□ ：●○○○○：
□

所持品

□
□
□
□
□
□
□
□

メモ

□
□
□
□
□
□
□
□

気合の使用法

サイコロのブースト（判定の前）
1ポイントにつき1個、判定に使用するサイコロを増やす。

技能のブースト　（判定の前）
3ポイントにつき1段階、技能の段階を上昇させる。最高は上級まで。

追加行動　（判定の前）
1ポイントで、誰かの行動に割り込む。

成功数のブースト　（判定の後）
3ポイントにつき1個､成功数を増やす。

能力値の上昇　（いつでも）
(現在の能力値＋1)　×3ポイント

技能/因縁の段階の上昇　（いつでも）
→初級：5ポイント/専門技能は要師匠
→中級：10ポイント
→上級：20ポイント
→特級：40ポイント/要“何か”

※因縁は業を消費して取得/段階上昇する。

9784894251571
1920076017148
ISBN4-89425-157-4 C0076 ¥1714E
定価 本体 1,714円 +税
[出版元] ホビージャパン

TENRA BAN-SHOW SOURCE BOOK